波志江中屋敷西遺跡

北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域
埋蔵文化財発掘報告第32集

2005

日本道路公団
伊勢崎市
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第 352 集

波志江中屋敷西遺跡

北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域
埋蔵文化財発掘報告第 32 集

2005

日本道路公団
伊勢崎市
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

B1-3号井戸建築材出土状況

B2-谷遺構全景（西より、手前側に堰跡らしき木材の出土が見られる）

序

北関東自動車道の高崎―伊勢崎間が供用開始となり五年の月日が過ぎました。伊勢崎インターチェンジに程近い当事業団の東毛調査事務所からも、当初予想を上回る交通量を目の当たりにすることができます。

さて、ここに平成10・11年度に発掘調査を実施した波志江中屋敷西遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書を発刊することとなりました。この報告書では当事業団が調査した成果と、伊勢崎市教育委員会が調査された成果を一冊にまとめております。波志江中屋敷西遺跡の調査区間は僅か200m余りと決して長いものではありませんでしたが、4ないし5面の調査面を対象に発掘調査が行われ、中世屋敷遺構や平安時代の集落や畠、古墳時代後期の水田、弥生時代以前の小穴など多くの遺構を確認し、出土遺物を取上げました。特に柱材を出土した中世中頃の屋敷や、大きな竪穴を伴い、平安時代の水路などが特徴的でした。今後、当該地域の歴史研究、調査に資するものと考えております。

最後になりますが、日本道路公団東京建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会文化課、伊勢崎市教育委員会文化財保護課、並びに関係者各位に厚く御礼申し上げる次第です。また整理業務に携わった関係者の労をねぎらい序とします。

平成17年3月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　小　野　宇三郎

例　　言

1．本書は北関東自動車道建設及び同自動車道側道の建設に伴い事前調査された波志江中屋敷西遺跡（遺跡略号「KT-220」「ハシエ中」）の発掘調査報告書である。

2．波志江中屋敷西遺跡は群馬県伊勢崎市波志江中屋敷西に所在する。

3．発掘調査は伊勢崎市教育委員会並びに日本道路公団の委託を受けた財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が行い、整理事業は日本道路公団及び伊勢崎市教育委員会の委託を受けた財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施したものであり、群馬県教育委員会がその調整を行った。

4．発掘調査の期間は次の通りである。

発掘調査　本線　平成10年2月1日～平成11年3月31日

側道　平成10年11月6日～平成11年2月17日・平成12年2月14日～平成12年3月2日

整理期間　平成16年2月1日～平成16年3月31日・平成16年5月1日～平成17年3月31日

5．発掘調査及び整理事業体制

伊勢崎市教育委員会

事務担当　田島國明、細谷清三、阿部　正、村田喜久夫

調査担当　早川隆弘、和久（旧姓塚脇）美緒、高木善行

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

事務担当　菅野　清、小野宇三郎、赤山容三、住谷永市、神保侑史、右島和夫、渡辺　健、萩原利通、矢崎俊夫、中東耕志、相京建史、坂本敏夫、植原恒夫、丸岡道雄、笠原秀樹、井上　剛、小山建夫、高橋房夫、竹内　宏、須田朋子、宮崎忠司、吉田有光、柳岡良宏、岡嶋伸昌、佐藤聖行、阿久沢玄洋、田中賢一、

大澤友治、今井もと子、内山佳子、若田　誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、松下次男、吉田　茂、

調査担当　相京建史、小林利夫、石守　晃、滝沢　匡

整理担当　斎藤幸男、石守　晃

6．本書作成の担当は次の通りである。

編　　集　石守　晃

執　　筆　第4章第1節：宮本長二郎、第2節：森　勇一、第3節：橋崎修一郎

上記以外：石守　晃

遺構写真撮影　各発掘調査担当及び株式会社パスコ（航空写真撮影）

遺物写真撮影　佐藤元彦

金属器処理　関　邦一、土橋まり子、小材浩一、高橋初美

木器管理等　大野容子

整理作業　小野寺仁子、戸神晴美、小渕トモ子、南雲繁子、萩原光枝

高橋優子、金子加代、高田栄子、小林町子、根井美智子、高野淑江

機械実測　田中精子、酒井史恵

7．① 石材鑑定については群馬県地質研究会の飯島静男先生に御協力戴いた。

② テフラ分析等は株式会社古環境研究所

③ 樹種・種子同定、14C年代測定、蛍光X線分析は株式会社パレオ・ラボに委託した。

8．出土遺物、遺構図面写真の保管については、伊勢崎市教育委員会調査分は伊勢崎市教育委員会に於いて保管される。また当事業団調査分のうち出土遺物は群馬県の所有に帰し、遺構実測図・遺構写真等は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の管理に於いて、共に群馬県埋蔵文化財調査センター内に収納される。

9．本書の作成に於いては以下の方々にご協力・ご指導戴いた。記して感謝の意を表します。

（敬称略）伊勢崎市教育委員会、小野義信、宮本長二郎、茂木　渉、森勇一、地元関係各位

凡　　例

1　挿図中に使用した方位は、座標北を表している。座標系は日本測地系平面直角座標系（所謂国家座標、旧座標）の第IX系を使用している。

2　遺構断面実測図、等高線に記した数値は標高を表し、単位は“m”を用いた。

3　遺構名称、遺構番号は区・調査面、遺構番号・遺構種別の順に「-」記号を入れて標記した。尚、遺構番号は調査段階のものをそのまま踏襲したが、調査段階で二重に付してしまった番号については番号の後ろにアルファベットを付して区別した。

4．本書に於けるテフラ（火山噴出物）の略号は以下の通り

As-A：浅間山噴出A軽石（天明3年／1783）　As-B：浅間山噴出B軽石・火山灰（天仁元年／1108）

As-C：浅間山噴出C軽石（3世紀末葉）　Hr-FA：榛名山二ツ岳噴出火山灰（6世紀初頭）

5．遺構実測図の縮尺は下記を基準としているが、例外としたものは各図に記載している。

竪穴住居・掘立柱建物　1／60　竈・炉　1／20　溝　1／100

土坑・ピット・井戸　1／60

6．遺物実測図の縮尺は下記を基準としている。

土器・陶磁器等　：　甕・壺・内耳鍋・擂鉢・鉢・火鉢・瓦等　1／4　碗・坏・高坏・皿等　1／3

土錘等　1／2

石器・石製品等　：　台石・礎石・板碑・多孔石・こもあみ石等　1／4　石臼　1／6

敲石・磨石・打製石斧・砥石（小型）・スクレーパー等　1／3

紡錘車・石製品模造品等　1／2　石鏃　4／5

木器・木製品　：　碗・曲物等　1／3　杭・建築材等　1／4

古銭・金属製品　：　銅銭等　4／5　きせる・釘等　1／2　刀子・鎌・包丁等　1／3

ガラス製品等　：　ピン（大型）　1／2　ピン（小型）・小型ガラス製品　4／5

7．土層注記中の土色には農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を参考に記載している。

目　　次

口絵
序
例言　凡例
目次……i
遺構番号別目次……iii
挿図目次……v
表目次……vii
写真図版目次……vii
遺構写真使用フィルム資料番号一覧……x

第1章　発掘調査の始まりとその経過……1
第1節　発掘調査に到る経過……1
第2節　発掘調査の経過……2
第3節　発掘調査の方法……3
第4節　基本層序……4
第2章　遺跡を取り巻く環境……6
第1節　地理的・地質的環境……6
第2節　歴史的環境……7
第3章　発見された遺構と遺物……9
第1節　A区1面……9
近代耕作痕跡　9　／　溝　9／井戸　13／　土坑　14／ピット　17／
中世疑似水田　17　／　遺構外の出土遺物　19
第2節　A区2面……20
竪穴住居　21　／　溝　27／土坑　37／ピット　39
第3節　A区3面……41
溝　41
第4節　A区4面……44
風倒木　44　／　土坑　46／ピット　47
第5節　A区5面……50
試掘調査　50
第6節　B区1面……52
近世以降耕作痕　53　／　溝　57　／　掘立柱建物　63　／　井戸　67　／
土壙墓　70　／　土坑　75　／　ピット　75
第6節の2　屋敷遺構……77
堀　94　／　溝　102　／　掘立柱建物　102　／　井戸　107　／　土壙墓　123／
土坑　135　／　ピット　145　／　B区1面の遺構外の遺物　153

第7節　B区2面 ……154
サク状遺構　154　／　竪穴住居　156　／　水路と谷地　167　／　溝　168　／
土坑　176
第8節　B区3面 ……170
水田址　180　／　土坑　182
第9節　B区4面 ……182
土坑　172　／　ピット　185
第10節　B区5面 ……186
試掘調査　186
第11節　その他の出土遺物 ……187
縄文時代の出土遺物　187　／　弥生時代の出土遺物　188　／
B区の遺構外出土遺物　188　／　2区の遺構外出土遺物　189　／
3区の遺構外出土遺物　190　／　D区の遺構外出土遺物　190　／
遺跡全体での遺構外出土遺物　190
第4章　分析と考察 ……193
第1節　群馬県中世屋敷跡の建築物考察　宮本長二郎 ……193
第2節　群馬県波志江中屋敷西遺跡から産出した昆虫化石　森　勇一 ……198
第3節　出土人骨　橋崎修一郎 ……201
付　編 ……209
自然科学分析 ……209

挿　図　目　次

第1図　波志江中屋敷西遺跡位置図 ……1
第2図　調査区と区の配置及びグリッド設定概要図 ……3
第3図　基本土層 ……5
第4図　周辺地域の地質分布図 ……6
第5図　周辺地域遺跡分布図 ……7
第6図　A区1面全体図 ……10
第7図　A1-1・2号溝と出土遺物 ……12
第8図　A1-1・2号井戸 ……13
第9図　A区1面の土坑群と出土遺物 ……14
第10図　A区1面のピット群 ……15
第11図　AS区1面のピット ……16
第12図　A区1面の中世水田址（その1） ……16・17
第13図　A区1面の中世水田址（その2） ……18
第14図　A区1面の遺構外の遺物 ……19
第15図　A区2面全体図 ……20・21
第16図　A2-1号住居と出土遺物 ……22
第17図　A2-1号住居掘り方 ……23
第18図　A2-1号住居と出土遺物 ……24・25
第19図　A区2面の調査（その1） ……26・27
第20図　A区2面の調査（その2） ……28・29
第21図　A区2面の調査（その3） ……30・31
第22図　A区2面の調査（その4） ……32・33
第23図　A区2面の調査（その5） ……34
第24図　A区2面の調査（その6） ……35
第25図　A区2面の調査（その7） ……36・37
第26図　A区2面の土坑群 ……38
第27図　A2-3号土坑出土遺物 ……39
第28図　A区2面のピット群分布図 ……39
第29図　A区2面のピット群 ……40
第30図　A区3面全体図 ……41
第31図　A3-1号溝 ……42
第32図　A3-2号溝 ……43
第33図　A区4面風倒木痕分布状況 ……44・45
第34図　A区4面の土坑・ピット分布図 ……46・47
第35図　A区4面の土坑群 ……48
第36図　A区4面の土ピット群（一部） ……49
第37図　A区5面試掘トレンチ設置位置 ……50
第38図　A区5面試掘トレンチ土層断面模式図 ……51
第39図　B区1面全体図 ……52・53
第40図　B区の溝群 ……54～56
第41図　B1-1・10号溝出土遺物 ……57
第42図　3-13・B1-3号溝と出土遺物 ……58
第43図　3-11号溝及びB1-4～6号溝と出土遺物 ……59
第44図　B1-8・2-4号溝と出土遺物 ……60・61
第45図　B1-16・20号溝と2-9・10号溝 ……62・63
第46図　B1-1号掘立柱建物 ……64
第47図　B1-6B・11・12号井戸と出土遺物 ……65
第48図　B1-13号井戸と出土遺物 ……66
第49図　2-1・2・3・4・5・6号井戸 ……67
第50図　BW1-1～6号井戸と出土遺物 ……68・69
第51図　B区1面屋敷外の墓壙と出土遺物 ……70・71
第52図　B区1面屋敷外の土坑及びピット群（その1）

と出土遺物……72・73
第53図 B区1面屋敷外のピット群（その2）……74
第54図 2区1面のピット群……76・77
第55図 B区1面屋敷遺構全体図（S＝1/300）……78
第56図 屋敷周堀と出土遺物（その1－東堀）……80～82
第57図 屋敷周堀の出土遺物（その2）……83
第58図 屋敷周堀と出土遺物（その3－北堀）……84・85
第59図 屋敷周堀と出土遺物（その4－西堀）……86～88
第60図 屋敷周堀の出土遺物（その5）……89
第61図 屋敷周堀の出土遺物（その6）……90
第62図 屋敷周堀の出土遺物（その7）……91
第63図 屋敷周堀の出土遺物（その8）……92
第64図 屋敷周堀の出土遺物（その9）……93
第65図 屋敷周堀（その10－南堀）……94・95
第66図 屋敷内堀と出土遺物（その1）……96～98
第67図 屋敷内堀の出土遺物（その2）……99
第68図 屋敷内堀と出土遺物（その3）……100・101
第69図 屋敷内堀（その4）……102
第70図 SB-01掘立柱建物……103
第71図 SB-02・03・04号掘立柱建物……104・105
第72図 SB-05・06号掘立柱建物……106・107
第73図 SB-07・08・09号掘立柱建物……108・109
第74図 SB-10・11・12・13号掘立柱建物……110・111
第75図 SB-14・15・16・17号掘立柱建物……112・113
第76図 B1-1・2・3号井戸と出土遺物（その1）……114・115
第77図 B1-3号井戸の出土遺物（その2）……116
第78図 B1-4号井戸と出土遺物（その1）……117
第79図 B1-4号井戸の出土遺物（その2）……118
第80図 B1-5A・5B・6A号井戸と出土遺物……118・119
第81図 B1-7・8号井戸
出土遺物とB1-10・14号井戸……120・121
第82図 B1-15号井戸と出土遺物……122
第83図 B1-17A・17B・18号井戸と
出土遺物（その1）……124・125
第84図 B1-18号井戸出土遺物
（その2）とB1-20・21号井戸……126・127
第85図 B1-2号墓域と出土遺物……127
第86図 B1-1・4・5号墓域と出土遺物……128・129
第87図 BE区1面屋敷遺構の土坑群と
出土遺物（その1）……130・131
第88図 BE区1面屋敷遺構の土坑群と
出土遺物（その2）……132・133
第89図 BE区1面屋敷遺構の土坑群と
出土遺物（その3）……134・135
第90図 BE区1面屋敷遺構の土坑群と
出土遺物（その4）……136・137
第91図 BE区1面屋敷遺構の土坑群と
出土遺物（その5）……138・139
第92図 BE区1面屋敷遺構の土坑群（その6）……140・141
第93図 BE区1面屋敷遺構の土坑群（その7）……142・143
第94図 BE区1面屋敷遺構の土坑群（その8）……144・145
第95図 BE区1面屋敷遺構のピット群（その1）……146・147
第96図 BE区1面屋敷遺構のピット群（その2）……148・149
第97図 BE区1面屋敷遺構のピット群（その3）……150・151
第98図 BE区1面屋敷遺構のピット群
（その4）及びB区1面の出土遺物……152・153
第99図 BE区2面全体図と畠……154・155
第100図 B2-1号住居と出土遺物……156・157
第101図 B2-2号住居と出土遺物……158・159
第102図 B2-3号住居……160
第103図 B2-4号住居と出土遺物……161
第104図 B2-4・3-1・2号住居と出土遺物……162・163
第105図 D-1号住居と出土遺物……164・165
第106図 D-2・3号住居と出土遺物……166・167
第107図 3-16・17・BW2-4・5号溝と谷遺構……168～170
第108図 谷遺構出土遺物（その1）……171
第109図 谷遺構出土遺物（その2）……172・173
第110図 谷遺構出土遺物（その3）……174・175
第111図 BE2-1・2号溝・2-1～3・B2-1
及びBW2-2・3号溝と出土遺物……176～178
第112図 B2-1号土坑とBE2-1～3号土坑……179
第113図 BE3面水田址とB3-149号土坑……180・181
第114図 BE4面の土坑・ピット群
全体図（その1）……182・183
第115図 BE4面の土坑・ピット群全体図（その2）と
土坑・ピット（抜粋）及びB区4面出土遺物……184・185
第116図 BE5面試掘トレンチ・グリッド
設定位置図と土層堆積概念図、
及び一部グリッド抽出図……186・187
第117図 A・B区及び1区出土縄文土器……188
第118図 A・B区出土石器（その1）……189
第119図 A・B区出土石器・石製品（その2）……190
第120図 BE・2区遺構外出土遺物……191
第121図 3区遺構外出土遺物及び
A・B区出土石製品（その3）……192

第1図 BE区1面屋敷遺構建物変遷図（その1）……194
第2図 BE区1面屋敷遺構建物変遷図（その2）……195

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表……8

第1表 掘立柱建物遺構分析表……196

表1 群馬県波志江中屋敷西遺跡から産出した昆虫化石……199
表2 B区館址出土昆虫保管一覧……199

表1 波志江中屋敷西遺跡出土人骨まとめ……207

遺物観察表……222

（A区1面 2面 3面 4面 その他）……222
（B区1面 2面 3面 4面 その他）……222
（2区1面 2面 その他）……234
（3区1面 2面 その他）……235
（D区 縄文時代遺物 遺跡全体）……236
第7表 土坑・ピット一覧……239
（A区 B区1面 2面 3面 4面）

写真図版目次

口 絵　B区1面屋敷遺構　B 1-3号井戸建築材出土状況
P L 1　試掘中央東トレンチ　試掘中央東トレンチ
試掘中央東トレンチ　試掘中央東トレンチ
試掘北トレンチ全景　試掘北トレンチ東部分
試掘(As-B下面)　試掘(As-C堀土下)
P L 2　A区1面(本線部)全景　AS区1面
A区1面南部中央部　A区1面南部全景
P L 3　雨壁セクション東端　雨壁セクション西端
A 1-1・2号溝北半部　A 1-1・3号溝全景
A 1-2号溝全景　A 1-2号溝杭列
A 1-1・2号　AS区　A 1-1・2号溝
P L 4　A 1-1号井戸全景　A 1-2号井戸全景
A 1-1号土坑全景　A 1-2号土坑全景
A 1-3号土坑全景　A 1-4号土坑全景
A区1面ピット群　A 1-8号ピット
P L 5　A 1-11号ピット土層断面(南東より)　A 1-11号ピット
A区1面中世水田　A区1面中世水田
A区1面中世水田　A区1面中世水田AS区
A区1面近現代耕作痕　A区1面近現代耕作溝
P L 6　A 1-1・2号溝、AS区、A 1-5号土坑、A区北トレンチ出土遺物
P L 7　A区2面　A区2面西端部
A区2面南西部　A区2面東南部
A区2面北東部
P L 8　AN区2面　AN区2面
A 2-1号住居全景　A 2-1号住居掘り方全景
A 2-1号住居竈全景　A 2-1号住居遺物出土状況
A 2-2号住居全景　A 2-2号住居掘り方全景
P L 9　A 2-2号住居竈全景　A 2-2号住居竈掘り方全景
A 2-1号溝　A 2-2・3・4号溝
A 2-5号溝　A 2-6号溝
A 2-10号溝　A 2-11号溝
P L 10　A 2-12号溝　A 2-13号溝
A 2-14号溝　A 2-15号溝
A 2-16号溝　A 2-17号溝
A 2-20号溝　A 2-21号溝
P L 11　A 2-22号溝　A 2-23号溝
A 2-24・25号溝　A 2-25号溝
A 2-26号溝　A 2-27号溝
A 2-28号溝　A 2-29号溝
P L 12　A 2-1号土坑土層断面　A 2-2号土坑土層断面
A 2-3号土坑遺物出土状況　A 2-3号土坑土層断面
A 2-4号土坑　A 2-1号ピット土層断面
A 2-8号ピット土層断面　A 2-10号ピット土層断面
P L 13　A 2-1・2号住居、A 2-3号土坑、A区北トレンチ出土遺物
P L 14　A区3面　A区3面
P L 15　A区3面　A区3面
A区3面　A区3面
A 3-1号溝　A 3-2号溝
A区3面遺物出土状況　A区3面遺物出土状況
P L 16　A区4面　A区4面
P L 17　AN区4面　4-2号土坑土層断面
4-4号土坑　4-6号土坑
4-50号ピット土層断面　4-72号ピット土層断面
4-81号ピット　4-99号ピット
P L 18　4-106号ピット　4-110号ピット
A区4面風倒木分布状況　4-14・15・16号風倒木確認状況
A 3-4号風倒木土層断面　A 3-17号風倒木土層断面
1号トレンチ附近深堀　A区4面トレンチ全景
P L 19　B区1面(本線部)　2区(上)・3区(下)
P L 20　B 1-1号溝　3-7号溝
B 1-2・10・11号溝　B 1-2・10号溝
3-14・15号溝　B 1-3・4・5・6号溝
3-11号溝　B 1-6～8号溝
P L 21　B 1-8号溝
B 1-9号溝セクション　2-4号溝
B-1-19・20号溝　BW 1-1号溝
BW 1-1・BW 2-2・3号溝　BW 2-2溝
P L 22　B 1-1号掘立柱建物　BW 1-1号井戸
BW 1-2号井戸　BW 1-3号井戸
BW 1-4号井戸　BW 1-5号井戸
BW 1-6号井戸　2-1号井戸
P L 23　2-2号井戸　2-4号井戸
2-5号井戸　2-1号土壙墓
2-2号井戸　2-3号土坑
2-5号井戸　2-6号土坑
P L 24　B区1面屋敷
P L 25　B区1面屋敷周堀東側
B区1面屋敷周堀東側遺物出土状況
2-5溝　2-5号溝遺物出土状況
東側周堀下駄出土状況
P L 26　B区1面屋敷周堀北東隅(南西より)B区1面屋敷周堀北側(東より)
B区1面屋敷周堀西側(北より)(南より)
屋敷周堀南西部全景(航空写真)
P L 27　2-7号溝(南側周堀)　2-8号溝(南側周堀)
2-8号溝障壁　2-8号溝障壁
B区1面屋敷北東部　B区1面屋敷北西部
P L 28　B区1面屋敷南東部　B区1面屋敷南西部
B 1-12号溝　B 1-13号溝
B 1-13号溝土橋部分断面　B 1-13号溝盛土土橋
2-6号溝　B 1-14号溝
P L 29　B 1-15号溝　B 1-18号溝
B 1-1井戸　B 1-2井戸
B 1-3井戸建築材出土状況　B 1-3井戸
B 1-4井戸瓶鋼・瓶出土状況　B 1-4井戸
P L 30　B 1-5A井戸　B 1-5B井戸
B 1-6A井戸　B 1-6B井戸
B 1-7井戸　B 1-8井戸遺物出土状況
B 1-8井戸　B 1-9井戸
P L 31　B 1-10井戸　B 1-11井戸土層断面
B 1-12井戸遺物出土状況　B 1-13井戸遺物出土状況
B 1-13井戸　B 1-14井戸土層断面
B 1-15井戸土層断面　B 1-16井戸
P L 32　B 1-17井戸遺物出土状況　B 1-18A井戸集石状況
B 1-18井戸木杭打設状況　B 1-20井戸
B 1-1号墓壙　B 1-2号墓壙
B 1-3号墓壙　B 1-4号墓壙
P L 33　B 1-5号墓壙　B 1-6号墓壙
B 1-7号墓壙　B 1-3号土坑
B 1-9号土坑断面　B 1-19号土坑
B 1-9号土坑　B 1-29・30号土坑
P L 34　B 1-32号土坑　B 1-42・43号土坑
B 1-58号土坑　B 1-73号土坑
B 1-77・53号土坑　B 1-83号土坑

B 1-91号土坑断面　B 1-113号土坑
P L35　B 1-114号土坑　B 1-118・119号土坑
B 1-125号土坑　B 1-139・140号土坑
B 1-20号ピット断面　B 1-60・61号ピット断面
B 1-20号ピット　B 1-60・61号ピット
P L36　B 1-70号ピット　B 1-177・298～300号ピット
B 1-232号ピット　B 1-304～306号ピット
B 1-376号ピット　B 1-481号ピット
3区ピット群　3区ピット群
P L37　B 1・1・3・8号溝
P L38　B 1-10・12・13・15号溝出土遺物
P L39　B 1-14・18号溝、2・8号溝出土遺物、B 1-周堀出土遺物(1)
P L40　B 1-周堀出土遺物(2)
P L41　B 1-周堀出土遺物(3)
P L42　B 1-周堀出土遺物(4)
P L43　B 1-周堀出土遺物(5)
P L44　B 1-周堀出土遺物(6)
P L45　B 1-周堀出土遺物(7)
P L46　B 1-周堀出土遺物(8)
P L47　B 1-周堀出土遺物(9)
P L48　B 1-1～3号井戸出土遺物
P L49　B 1-3～4号井戸出土遺物
P L50　B 1-4・5・6A号井戸出土遺物
P L51　B 1-6A・7・8・10・12・13号井戸出土遺物
P L52　B 1-13・15・17・18号井戸出土遺物
P L53　B 1-18号井戸、B 1-1・2・4号墓壙出土遺物
P L54　B 1-2・5～7号墓壙、B 1-1・32・137号土坑出土遺物
P L55　B 1-49・86・87・94・147号土坑、B 1-323号ピット、B 1-屋敷、B 1-サク状遺構、B区1面、B区表採出土遺物
P L56　BW 1-2号溝、2-5号溝、BW 1-2・6号井戸、BW 1面出土遺物
P L57　2-5・6・8号溝出土遺物
P L58　2-8・3-12号溝出土遺物
P L59　2-8、3-16号溝、2-1号墓壙、B 1-6号墓壙、B 1-15号井戸、B 1-15号溝、出土遺物
P L60　B区2面(本線部)　2区東部の遺構群
P L61　B 2-1号住居　B 2-1号住居掘り方
B 2-1号住居竈　B 2-1号住居竈掘り方
B 2-2号住居　B 2-2号住居掘り方
B 2-2号住居竈　B 2-2号住居竈掘り方
P L62　B 2-3号住居　B 2-3号住居掘り方
B 2-3号住居竈　B 2-3号住居貯蔵穴
B 2-4号住居　B 2-4号住居掘り方
3-1号住居　3-1号住居竈
P L63　3-1号住居遺物出土状況　3-2号住居
D-1号住居　D-1号住居竈
D-2号住居　D-2号住居竈
D-2号住居貯蔵穴　D-2号住居遺物出土状況
P L64　D-3号住居　D-3号住居貯蔵穴
2-1・2・3号溝　BW 1-5溝
BE 2-1号掘立　BW 2-3号溝遺物出土状態
BW 2-3号溝遺物出土状態　BW 2-4・5溝
P L65　B 2-4号溝と谷地　B区2面谷地
B区2面谷地　B区2面谷地中央部
B区2面谷地東部　B区2面谷地中央部木器等出土状況
B区2面谷地　B区2面谷地
P L66　B区2面谷地　B区2面谷地
2区旧河道　2区旧河道
B 2-1号土坑　B 2-2号土坑
B 2-2号ピット　B 2-5号ピット
P L67　B区2面サク状遺構　B区2面サク状遺構
B区2面サク状遺構　B区2面サク状遺構
B区2面サク状遺構　2区サク状遺構
BE区2面サク　B区2面サク状遺構土層断面
P L68　B 2-1・2・3号住居出土遺物
P L69　B 2-4号住居、3-1・2号住居、D-1号住居出土遺物
P L70　D 1～4号住居、BW 2-3号溝出土遺物
P L71　2-1号溝出土遺物、B 2-谷出土遺物(1)、BW 2-谷出土遺物
P L72　B 2-谷出土遺物(2)
P L73　B 2-谷出土遺物(3)
P L74　B 2-谷出土遺物(4)
P L75　B 2-谷出土遺物(5)
P L76　B 2-谷出土遺物(6)
P L77　B 2-谷出土遺物(7)、BW区2面出土遺物
P L78　B区3面As-C復旧水田
2-7号溝(南側周堀)　2-8号溝(南側周堀)
B区3面As-C復旧水田
2-7号溝(南側周堀)　2-8号溝(南側周堀)
P L79　3区As-C復旧水田
2-7号溝(南側周堀)　2-8号溝(南側周堀)
B区3面As-C復旧水田西部　B区3面As-C復旧水田西部　B区3面As-C復旧水田東部　B区3面As-C復旧水田北東隅部
P L80　BE区3面As-C復旧水田　BE区3面As-C復旧水田
2区As-C復旧水田　3区As-C復旧水田
3区As-C復旧水田　D区As-C復旧水田
D区As-C復旧水田　D区As-C復旧水田
P L81　B区3面As-C復旧水田水口　BE区3面土坑群
BE 3-2号土坑　BE区3面石敷出土状況
B区3面出土遺物
P L82　B区4面
2-7号溝(南側周堀)　2-8号溝(南側周堀)
B区4面西部　B区4面北部
B区4面中部　B区4面東部
P L83　B区4面南部　B 4-10号土坑
B 4-173号ピット土層断面　B 4-446号ピット
B区4面9号風倒木痕土層断面
B区4面出土遺物
P L84　B区5面試掘調査　B区5面試掘調査9号グリッド拡張部
B区5面試掘調査15号グリッド
B区5面試掘調査18号グリッド
2区K-130グリッド　3区K-140グリッド
D区C-110グリッド　側道での旧石器試掘調査
P L85　縄文時代の出土遺物(1)
P L86　縄文時代の出土遺物(2)
P L87　縄文時代の出土遺物(3)
P L88　縄文時代の出土遺物(4)、B区出土遺物
P L89　2区、3区出土遺物
P L90　見出遺体
P L91　木製品顕微鏡写真
P L92　木製品顕微鏡写真　植物化石

第１章　発掘調査のはじまりとその経過

第１節　発掘調査に至る経過

(1)　北関東自動車道建設計画と経過

群馬・栃木・茨城の北関東３県を結ぶ高速道路建設計画が明らかになったのは昭和43年10月の新しい首都圏整備計画策定によってであった。当時この高速道路は「北関東横断道路」と呼ばれ、計画調査を経た昭和40年代末には６車線道路という姿で描かれるようになっていた。

しかし計画が具体化するのは平成元年（1989）２月の国土開発幹線自動車国道法第５条第１項に基づく基本計画策定によってであり、平成３年12月、高速自動車国道法第５条の第１・２項の整備計画による施工命令が日本道路公団に下されて、北関東自動車道建設が始まったのである。

(2)　波志江中屋敷西遺跡発掘調査に至る経過

さてこの建設工事の具体化を受け、群馬県教育委員会スポーツ文化部文化財保護課（以下「保護課」とする）は平成６年度から日本道路公団、及び群馬県土木部道路建設課高速道路対策室と路線内の埋蔵文化財の取り扱いを協議し、本線部分の発掘調査を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下「事業団とする」）へ委託することが決したのである。

平成７年６月より事業団への委託事業が始まったが、その後保護課は伊勢崎市波志江地区への試掘調査を実施し、本遺跡は略号「KT220」、「波志江中屋敷西遺跡」の名称で登録され、事業団による本調査が実施される運びとなったのである。

一方、群馬県は北関東自動車道の側道を幹線道路と位置付け、当該地域の埋蔵文化財の発掘調査を地元の市町村教育委員会に付託した。これにより伊勢崎市教育委員会が本遺跡側道部分の発掘調査を実施することとなったのであるが、県教育委員会及び当事業団との協議に基づき、Ａ区の側道部分は当事業団が担当することとなったのである。

第１図　波志江中屋敷西遺跡位置図

第２節　発掘調査の経過

以下に波志江中屋敷西遺跡のおおまかな調査経過と特記事項を記す。

〔平成10(1998)年〕

1月　事業団　現地事務所設置

2月　事業団　２日、担当２名、調査班１個班着任。準備作業開始。４日、Ｂ区（当初は区名称なし）の表土除去、遺構確認作業に着手。17日、中世屋敷堀より遺構調査開始。27日、西側公道以西に遺構延伸の可能性が考慮されたためトレンチによる試掘調査開始。尚、この試掘調査結果に基づき当該地区の発掘調査の実施が決定。尚、公道西側区域をＡ区とし、既調査決定区域をＢ区とすることとした。

3月　事業団　31日、平成９年度作業完了、調査班解散。

4月　事業団　１日、担当２名、嘱託１名着任。13日、作業員召集、平成10年度作業開始。

5月　事業団　順調に推移

6月　事業団　順調に推移

7月　事業団　７日、伊勢崎市教委来跡。15日、創立20周年、現場作業休止。22日、現場事務所移転。27日、Ａ区表土掘削開始。

8月　事業団　４日、Ａ区１面遺構確認着手。６日、文化庁、宮本長二郎先生来跡。27日、Ｂ区東部２面遺構確認開始。

9月　事業団　16日、台風５号のため作業中止。19日、現地説明会開催（波志江中屋敷東遺跡と共催）。22日、埼玉県立博物館小野氏、前橋市教育委員会５名来跡。24日、Ａ区北部で２面調査開始。

10月　事業団　２日、Ｂ区全体で２面調査に着手。７日、鶴ヶ島市教育委員会来跡。15日、Ａ区全体で２面調査開始。20日、道路公団との工程会議開催。Ａ区南北側道の過半を調査することになる。21日、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団来跡。26日、Ａ区南側側道（ＡＳ区）調査開始。27日、26日、Ａ区北側側道（ＡＮ区）調査開始。

市教委　22日、側道部分杭確認。26日、２区調査開始。

11月　事業団　13日、Ａ区３面北半部調査着手。19日、Ａ区３面調査北半部完了、南半部開始。25日、清水伊勢崎市議来跡。26日、保護課との工程会議。27日、Ｂ区３面調査開始。

12月　事業団　１日、Ａ区西側２面調査開始（保護課飯塚・田口と岡屋敷遺跡班対応）。２日、Ａ区東部より４・５面調査開始。

市教委　２区（南側側道）調査（本線１・２面相当）。下旬より竪穴住居より３区の調査を開始。

〔平成11(1999)年〕

1月　事業団　６日、Ａ区調査完了。　７日、Ａ区引渡し。Ａ・Ｂ区間公道下（ＢＷ区）調査開始。12日、Ｂ区４面調査開始。19日、Ｂ区中世屋敷範囲５面調査開始。20日、ＢＷ区２面調査開始。

市教委　３区（北側側道）調査（本線１・２面相当）。後半、２区旧河道（本線２面）、２・３・Ｄ区水田（本線３面相当）調査。下旬、２区側より旧石器試掘開始。

2月　事業団　Ｂ区４面、ＢＷ区２面調査継続

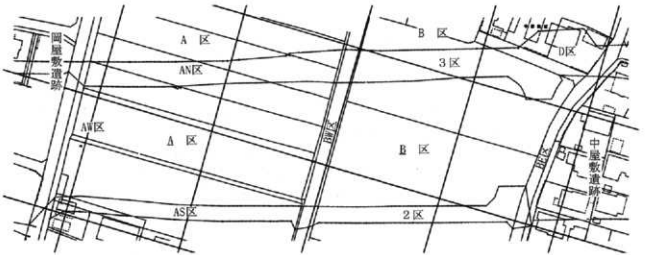
市教委　上旬、２区水田（本線３面相当）完了。３区調査継続（本線１・２面相当）。旧石器試掘継続。２月17日実質調査終了。

3月　事業団　３日、Ｂ区全体で５面調査開始。19日、Ｂ区調査終了、残務処理に入る。24日、撤収作業。作業員解散。31日、調査班解散。

〔平成12(2000)年〕

2月　市教委　Ｄ区調査着手、Ｄ区１面完了、２面着手

3月　市教委　Ｄ区２面調査完了



第２図　調査区と区の配置及びグリッド設定概要図

第３節　発掘調査の方法

1　区域の区分と設定

① 本遺跡の調査区は、「区」に区分され、更に「グリッド」により細分されている。尚、これらは事業団と伊勢崎市教育委員会（以下「市教委」とする）調査区域では統一された基準にはなく、それぞれに設定されている。

② 調査区のうち事業団調査区域に於いては、調査区中程の南北に走行する公道を境として大きく２区に区分され、公道西側の区域を「A区」とし、以東の区域を「B区」とした。

③ A区は第２節に述べたように上位面では４つ小区域毎に時間差で調査が進められたのであるが、これらの小区域は本線のうち西側の波志江岡屋敷遺跡に近い区域を「AW区」、それ以外の本線部分は「A区」（本書では「A区」と表記した）とし、側道部分のうち北側側道区域は「AN区」、南側側道区域は「AS区」と呼称した。

④ B区（本線部分）に於いては区の東西に在る南北走行の公道下が時間差を以って調査されたため、両公道に挟まれた本線部分をB区（本書では「B区」と表記した）、西側のA・B区の境に在る公道下区域をBW区、東側の波志江中屋敷遺跡との境に在る公道下の区域をBE区とした。

⑤ 一方、市教委の調査された（B区）側道部分のうち南側側道は２区、北側側道部分は３区、３区北東の北側側道拡幅部はD区と呼称している。（尚、市教委では中屋敷遺跡も調査としては波志江中屋敷西遺跡に含め、中屋敷遺跡北側側道区域は波志江中屋敷西遺跡１区として調査している。）

⑥ 事業団側のグリッドは平面直角座標系、所謂国家座標第IX系に基づく１m方眼により設定し、南東隅の座標値の下３桁を用い、「X値-Y値」の順でグリッド番号を表記した。

⑦ 市教委側のグリッドは10m（５m）方眼で設定され、南北方向はX値=39100.00をAとして

南方向に10m毎にB、Cとアルファベットの位置記号を記している。そしてこの10m位置の中間に当たる5m位置には直前の10m位置のアルファベット記号にダッシュを付して位置記号を記している(例　39105.00はA)。また東西方向はY値=-57610.00を0として西に向かって10m毎に10、20と記し、5m位置は15、25のように整数値の下2乃至3桁を以って記している。そして"K-130"のように「X値（アルファベット）-Y値（算用数字)」の順でグリッド番号を表記している。

2　遺跡略号と遺構番号

① 波志江中屋敷西遺跡の事業団部分の遺跡略号は「KT220」である。市教委部分の遺跡略号は「ハシエ中」である。

② 遺構番号は原則として区・面・遺構の種別毎に通し番号で付し、区・面、ハイフォン(-)、番号・遺構種別の順で表記した。

(例　A区1面1号溝　：　A1-1号溝、
　　2区2号溝　：　2-2号溝)

3　掘削と断面観察

① 表土及び調査面間の層の掘削は、調査の効率化を図るため掘削機械を使用した。

② 遺構や遺物包含層の掘削は原則として人力で行ったが、一部掘削機械を併用した。

③ 遺構断面の観察は適宜行った。

4　記　　録

① 遺構などの記録は、測量と写真撮影によって行った。

② このうち測量は航空写真測量と地上測量を併用し、適宜1/10、1/20、1/40、1/100、1/200縮尺の実測図を作成した。

③ 実測図には遺跡名・略号、実測図名称・縮率・実測者・レベル高等を併記した。

④ 写真撮影はプローニ及び35mmのモノクロ及びカラーフィルムを用いて適宜行い、空中写真撮影も委託により実施した。

5　出土遺物

① 出土遺物は出土位置を記録し、適宜写真撮影を行って取り上げ、遺構毎、種別毎に分別して収納ケースに保管した。

② 保管に当たって金属器はシリカゲルを挿入した袋に入れ、木器を含む木質については水浸けにした。

③ 遺物は機会を見て洗浄し、土器・石器等には注記を施し、木器を含む木質については中型以上のものは添え木をつけて補強し、マイラーベースに注記を施したものを縛りつけた。

第4節　基本層序

前述のように本遺跡の基盤層は後期洪積世の扇状地層である。本遺跡付近はこの扇状地が流水によって部分的な浸食を受け、谷地形が形成された後ローム等で埋没したものである。その堆積層は細かく見ると沖積層に於いても地点、地点により若干の異なりがあるのであるが、特に洪積層は位置によって相違が認められる。

次頁の第3図に示したのは標準的な堆積層である。①は伊勢崎市教育委員会による発掘調査のうち本線の中屋敷遺跡部分に当たるⅠ区の堆積層で、同調査で標準土層とされているもの。②はB区南壁西よりの堆積層で沖積層の標準土層とみなされるもの。③はA区5面の1号トレンチの堆積層（上下別位置の土層断面をⅦ層でつないだもので、付編に掲載したテフラ分析を行った地点のもの）である。

これらの堆積層を概観すると、表土層(現耕作土)

の下には圃場整備前の耕作土があり、その下位には下位層にAs-Bが含まれるものもあるグライ化した褐色系の土壌がある。そしてこの土壌の下には稀にAs-Bの堆積層があり、As-B層の下位は黒色系の土壌となり、所謂As-C混黒色土、更にAs-Cを含まない黒色粘質土が続く。ここまでの深さは地表面から40～60cmほどである。黒色粘質土の下層は徐々に暗褐色、褐色と変化する所謂ローム漸移層となっているが、B区に於いてはこのローム漸移層土中に浅間山起源のAs－D(縄文中期)テフラが確認されている。この下位層は功績層となるが、As-YPや八崎パミスも確認されている。尚、事業団側調査では多量に確認された土坑・ピットの注記の効率化を図るため、遺構覆土と地山堆積層を標準化し遺構埋土類型(埋土類型)と基本土層類型（地山類型）設定した。本書中の注記もこれによっているため、以下に記す。

遺構埋土類型（埋土類型）

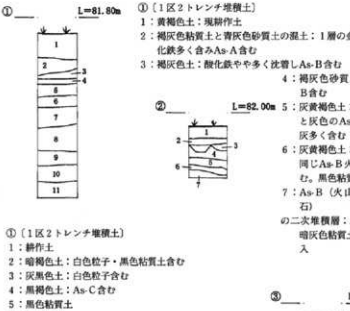
a：暗褐色土：鉄分混入。当初は現代の圃場整備による攪乱土として設定したが、調査の結果必ずしも現代に限定されるものではなく、中近世上位土層も含まれるものと判断している。

b：黒褐色土（10YR2/3）：径5㎜～2㎝の黒色土または褐色土のブロック含む。白色粒子少量含む。基本土層αに由来。

b′：bだが混入物なし、または非常に少ない。

c：暗褐色土（10YR3/3）：白色粒子を微量に含む。

d：黒褐色土（7.5YR3/2）：細砂が主体。白色粒子を微量に含む。



①〔1区2トレンチ堆積土〕
1：耕作土
2：暗褐色土：白色粒子・黒色粘質土含む
3：灰黒色土：白色粒子含む
4：黒褐色土：As-C含む
5：黒色粘質土
6：灰褐色土
7：明灰褐色土：6層土含む
8：褐色土：7層土とAs-YP（浅間板鼻黄色軽石）含む
9：暗褐色土
10：黄白色土：As-OP（浅間大窪沢、B.C.15000）含む
11：暗黄白色土：As-BP（浅間板鼻褐色軽石）か

①〔1区2トレンチ堆積土〕
1：黄褐色土：現耕作土
2：褐灰色粘質土と青灰色砂質土の混土：1層の金床。酸化鉄多く含みAs-A含む
3：褐灰色土：酸化鉄やや多く沈着しAs-B含む
4：褐灰色砂質土：As-B含む
5：灰黄褐色土：小豆色と灰色のAs-B火山灰多く含む
6：灰黄褐色土：5層と同じAs-B火山灰含む。黒色粘質土多し
7：As-B（火山灰・軽石）
の二次堆積層：As-C混暗灰色粘質土若干混入

③〔試掘トレンチ堆積層土〕
Ⅰ：褐灰色土から浅黄色土への漸移層
Ⅱ：浅黄色土：酸化鉄とⅠ層土入る
Ⅲ：川砂と浅黄色土の混土：酸化鉄多く入る
Ⅳ:灰色土から浅黄色土への漸移層
Ⅴ：褐灰色粘質土：軽石入る
Ⅵ：Ⅴ層土から黄灰色砂質土への漸移層
Ⅶ：As－YP軽石層：浅間板鼻黄色軽石（B.C.11500）灰白色
Ⅷ：明黄灰色ローム
Ⅸ2：灰白色土
Ⅸ：As－BP軽石層：浅間板鼻褐色軽石（B.C.16000～20000）
Ⅹ：灰黄色砂質土：明緑灰色砂質・褐灰色粘質土混入
Ⅺ：明オリーブ灰色粘質土
Ⅻ：黄灰色粘質土：XI層土部分的に混入
XIII：褐灰色粘質土：軽石やや多く混入しざらつく
XIV：明緑色粘質土
XV：青灰色砂質土

第3図　基本土層

基本土層類型（地山類型）

α：黒褐色土（10YR2/3）：白色粒子やや多い。1・2面段階の地山か。

β：黒色土：3面段階の地山か。

γ：暗褐色土：4面段階遺構の埋土

δ：褐色土（10YR4/4）：4面段階の地山

第２章　遺跡を取り巻く環境

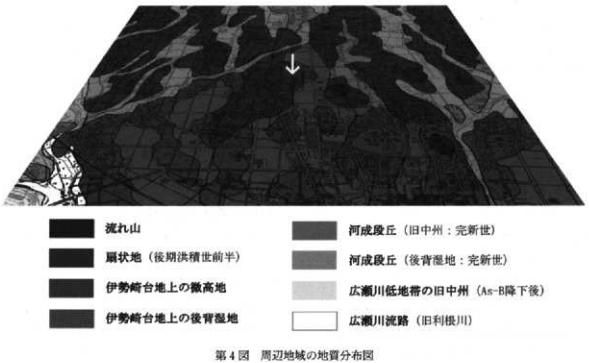
第１節　地理的・地質的環境

本遺跡は群馬県庁（前橋市）の東北東12.1km、群馬県中南部に在る伊勢崎市北端部の同市波志江町に位置する。伊勢崎市（平成17年１月に伊勢崎市、佐波郡赤堀町・東村・境町が合併した）は東は笠懸町、新田町、尾島町等の新田郡の各町に接し、西は佐波郡玉村町、西から北を前橋市と接し、南は利根川を挟んで埼玉県本庄市と接している。

市域の大半は前橋・伊勢崎台地上に位置するが、赤城山南面に在って北側から南側に向かって緩やかに傾斜しているものの、全体に平坦な印象を受ける。市西部には中世までの利根川流域であった桃木川や広瀬川が南方に流下し、台地上は洪積世から沖積世にかけての小河川が幾筋も南方向に流下して細かな谷地形を生み出しているが、本遺跡の北西500mにも神沢川が南東に流れている。尚、本遺跡は後期洪積世の扇状地上に在るとされるが、後述のように東西の微高地に挟まれた谷地形の埋没地でもある。

さて、本遺跡の位置する伊勢崎市波志江地区は農村地帯で、微高地に畑、谷地部に水田が耕作されている。こうした耕作地の中をつなぐように農業用水路が細かく敷設され、道路が縦横に走り、そして所々に集落が展開している。しかし近年、波志江地区北部を広域の幹線道である上武道路や、本遺跡地を含む波志江地区の中程を北関東自動車道が通り、交通量も増加している。こうした道路、即ち大きな土構造物による物理的断絶はあるものの、部分的な地域の景観には余り変化は無い。

こうした中、本遺跡は集落域に包まれるように在る耕作地に位置しており、西側300m程には以前からの地方幹線道である県道伊勢崎・大胡線が南北に走っている。また本遺跡の西側には上述のように上沢川の谷地形があり東側800m程にも谷地形があり北東600mには谷地を堰き止めて作られた波志江沼が造られている。



第４図　周辺地域の地質分布図

第2節　歴史的環境

本遺跡周辺の遺跡分布状況を概観すると、上武道路や北関東自動車道路線周辺に集中する傾向が見られる。しかしこの区域に発掘調査された遺跡が多く、また第5図は発掘調査の施された遺跡を中心に遺跡範囲の中央をプロットしているため視覚的に偏りが大きくなっているが、本遺跡南西の区域と、市街化が進んでいる本遺跡（中央、01）の南南東の区域にその分布は薄い傾向が認められる。

さて本遺跡周辺地域に於ける旧石器時代遺跡は、二之宮宮下西遺跡（02）等の神沢川西岸域や波志江西宿遺跡（39）等、本遺跡東方の波志江沼の在る谷地の東岸域に分布が見られ、本遺跡に西接する波志江岡屋敷遺跡（45）でも確認されている。

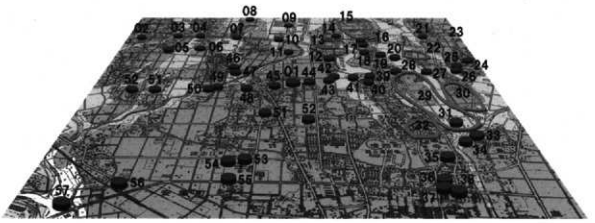
一方、縄文時代の遺跡は周辺地域では本遺跡以北の区域に分布しており、飯土井中央遺跡（07）等で早草創期の遺物が、波志江中屋敷遺跡（44）等で早期の遺構、遺物が確認されている。前期以降になると扇状地の湧水点近くに集落が営まれ、飯土井二本松遺跡（10）等で前期、波志江中野面遺跡（50）等で中期、荒砥二之堰遺跡（11）等で後期の遺構、遺物が確認されている。

これに対して弥生時代の遺跡は少なく、波志江沼の谷地の東岸域に五目牛新田遺跡（27）等3遺跡、広瀬・桃の木低地帯の微高地に在る西太田遺跡（57）の計4遺跡に確認されているに過ぎない。

古墳時代になるとその分布は濃密となる。古墳は波志江沼の在る谷地の東岸域に蟹沼東古墳群（29）等の群集墳が広く確認されているが、5世紀初頭の華蔵寺裏山古墳（35）や中葉のお富士山古墳（56）といった比較的大きな前方後円墳も見ることができる。また荒砥大日塚遺跡（09）等前期、上西根遺跡（34）等中期、八幡町遺跡（38）等後期の集落址が広く分布し、本遺跡等で耕作址も確認されている。この中で前期の粘土採掘坑の発見された波志江中宿遺跡（28）が特筆される。

律令期の遺跡も広範囲に分布しているが、則天文字の墨書土器の出土した二之宮宮下東遺跡（03）等多くの遺跡があり、波志江六反田遺跡（19）等、耕作址の確認された遺跡も7箇所あった。

中近世の遺構にあっては伊勢山遺跡（41）で墓地が調査される等集落関連遺跡は広範囲に確認されたが耕作址は確認されなかった。一方、城館址は広く分布が見られたが、この中には赤石城（46）等戦国期の小規模城郭はあるものの、多くは館跡であった。館跡は中・近世何れのものもあった。本遺跡に近接する区域では、中屋敷（44）で近世の回型の屋敷遺構が東に隣接し、僅かではあるが周堀から近世の陶磁器片が出土した岡屋敷（45）は副郭の本郭側に土塁の作られない中世期的な構造を持つ屋敷遺構であった。



第5図　周辺地域遺跡分布図

第１表　周辺遺跡一覧表

№	遺跡名	時代・遺構の種別											備考
		旧石器	縄文		弥生		古墳		古代		中近世		
			集落	その他	集落	その他	古墳	集落	田畑	集落	田畑	城館	集落	
01	波志江中屋敷遺跡			○				○	○	○	○			
02	二之宮宮下西遺跡	○		○				○	○	○	○	○		
03	二之宮宮下東遺跡			○				○		○		○		則天文字の墨書土器
04	二之宮宮東遺跡									○	○	○	○	近世個仰遺物
05	荒砥青柳遺跡									○				
06	荒砥天之宮遺跡							○		○	○			竪穴住居206軒。掘井４基
07	飯土井中央遺跡	○		○				○		○				縄文時代草創期土器
08	女淵													古代末の未完成の大用水路
09	荒砥大日塚遺跡							○		○				
10	飯土井二本松遺跡	○	○	○				○		○			○	
11	荒砥二之塚遺跡		○				○	○		○				７世紀後期の群集墳
12	宮貝戸下遺跡									○			○	
13	宮貝戸古墳群						○							
14	下触牛伏遺跡	○	○				○			○				
15	石山片田古墳群						○							
16	牛伏第１号墳						○							円墳。横穴石室
17	祝堂古墳						○							円墳。横穴式両袖型石室
18	波志江天神山遺跡			○									○	
19	波志江六反田遺跡	○		○						○	○			
20	波志江天神山遺跡			○									○	
21	鷹巣遺跡		○							○				
22	八幡林古墳群						○							洞山古墳他
23	洞山古墳群						○							横穴式無袖型古墳
24	寺跡古墳						○							横穴式無袖型古墳
25	五目牛南組遺跡(上武)		○			○	○						○	
26	五目牛南組遺跡(北関東)		○				○						○	
27	五目牛新田遺跡		○		○		○			○				
28	波志江中宿遺跡	○						△		○				古墳時代前期の粘土採掘坑
29	蟹沼東古墳群						○							55基
30	地蔵山古墳群						○							70基
31	関ノ山遺跡				○			○						方形周溝墓他
32	台所山古墳群						○							
33	三蔵院屋敷											○		
34	上西根遺跡							○		○				
35	華蔵寺裏山古墳						○							５世紀初頭の前方後円墳
36	八幡町遺跡							○						
37	八幡町遺跡(Ｂ地区)							○					○	
38	八幡町遺跡(Ｄ地区)							○						
39	波志江西宿遺跡	○						○						古墳時代前期の粘土採掘坑
40	波志江伊勢山古墳						○							横穴式両袖型石室の円墳
41	伊勢山遺跡	○											○	近世の墓塚
42	大沼下遺跡							○		○				
43	波志江中屋敷東遺跡			○					○		○			多量の古墳時代前期建築材
44	波志江中屋敷遺跡		○	○					○	○		○		建世屋敷
45	波志江関屋敷遺跡	○						○				○		近世に続く細井氏居館
46	赤石城											○		戦国期、赤石左衛門尉居城
47	赤石城（発掘）											○		薬研堀、柱穴列確認
48	波志江西屋敷遺跡						○					○		
49	黒野屋敷											○		戦国期、中野丹後守居城
50	波志江中野面遺跡		○				△	○		○	○			方形周溝墓17基含む
51	波志江館													波志江氏、細井氏居館
52	西相岡遺跡							△						溝遺構のみ
53	中組遺跡						○			○				
54	中組遺跡									○				
55	中組遺跡						△			○				方形周溝墓１基
56	好富土山古墳						○							墳丘長125m、長持型石棺
57	西太田遺跡				○			○		○				竪穴住居206軒

第3章　発見された遺構と遺物

第1節　A区1面

(1) A　　区

A区は東西両側寄りの区域は東側の本遺跡B区と西側の波志江岡屋敷遺跡（以下「岡屋敷遺跡」とする）に続く微高地となっているが、区の過半は東西両側の微高地に挟まれた低地部分が占めている。これは昭和23年撮影の航空写真で見られる地形と一致し、同写真によるとA区南端以南も微高地となっている。また、こうした地形に伴ってB区と岡屋敷遺跡に連なる遺構群も確認、調査されている。調査時点でA区は圃場整備を経た水田として整備され、南北2面の水田として土地利用されていた。

A区は前述のように本線部分をA区、北側側道部分をAN区、南側側道部分をAS区、岡屋敷遺跡との間の公道附近をAW区として発掘調査を行った。しかし本書に於いては遺構として細分の必要がないため一括A区と呼称し、細かい地区を示す場合は本線部分のA区は「A区」と表記することとする。

さてA区の調査は4面の確認面を以って調査を行ったが、第4面で下位面での試掘調査を行った。従ってこれらを加えた5面のものとして調査成果を以下に報告する。

(2) A区1面の概要

A区1面は上述の圃場整備による削平で北側の水田部分は削り取られていたため、後述のA1-1・2号溝が2面に於いて延長部分が確認できた以外は、A区南半からAS区とAN区北西隅部で調査できたに過ぎなかった。

A区1面は中・近世の遺構確認面である。確認された多くは近世後期以降の耕作痕であったが、A区中程には南北に長い溝2条があり、井戸2基が確認された。また東部にはピットが散漫に分布し、AW区には土坑4基があった。

(3) 近代以降の耕作痕（第6図）

概要・規模・構造　A区1面の調査範囲では広い範囲で耕作痕跡を確認することができた。この耕作痕は2種類あり、一方は長方形、或は短冊形を呈し、主軸が東西、南北方向を向くものが多く、接続して鉤形やロ字形を呈するものもある。その規模には大小があり最大5.9～3mを計り、深さは十数cmほどであった。分布範囲はA区中南と西南を中心に広く分布している。これに対してA区東部に分布するのはサク状遺構であり、幅26cm、深さ8cm程で、30cm間隔で掘削されている。その長さは場所によって異なるが、概ね7m以下である。

昭和23年米軍撮影の航空写真を元に作製した地形図によれば前者の分布は圃場整備前の水田の範囲と概ね一致し、後者は同じく畑と一致する。

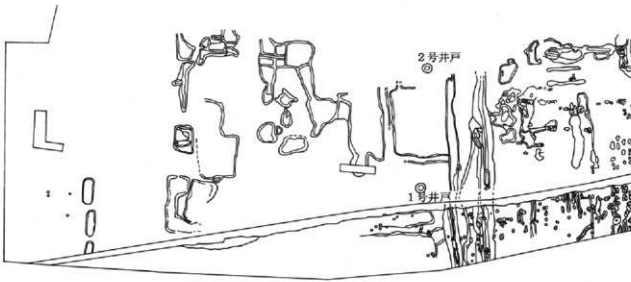
時期　以上の点と覆土の状況から、A区1面の耕作痕は昭和時代後期の圃場整備以前のもので、凡そ江戸時代後期以降の所産と判断されるものであった。尚、水田域に掘削される面積を有する掘削痕は開墾に伴う掘削と想定されるため、水田形成当初のものと認識される。

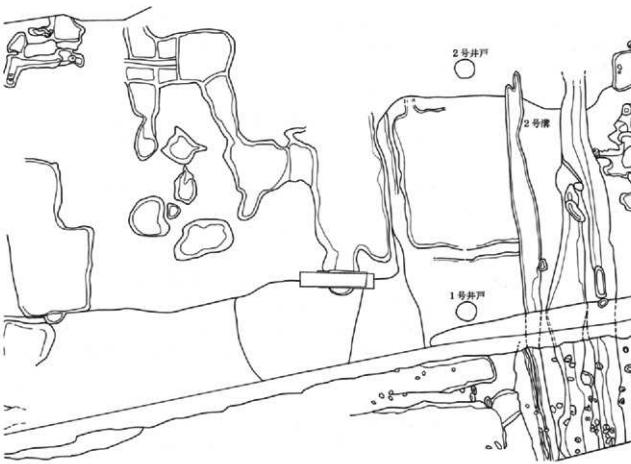
(4) A1-1・2号溝（第7・19図、PL3・6）

概要　A1-1・2号溝は区中程に位置し南北に調査区を横断する溝である。共に南半部は1面に調査されているが、北半部は2面の調査で底部付近が確認されている。

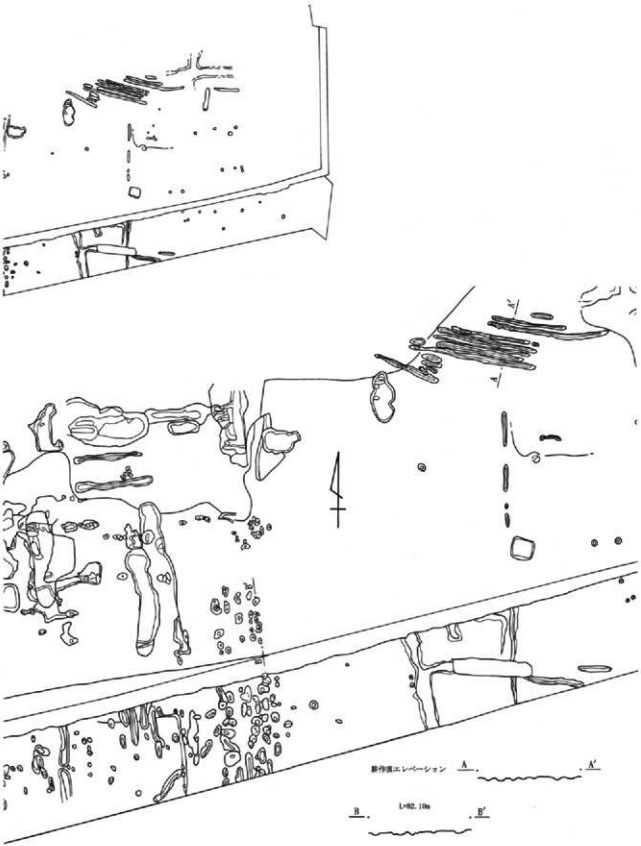
両溝は近接或は重複して位置しており、2号溝の方が新しく、1号溝の埋没に伴って2号溝を掘削し直したものと思慮される。

両溝は何れも水路と認識されるもので、昭和23年米軍撮影の航空写真に見られる農業用水の位置とほぼ一致している。特に2号溝では南部でアカマツ等

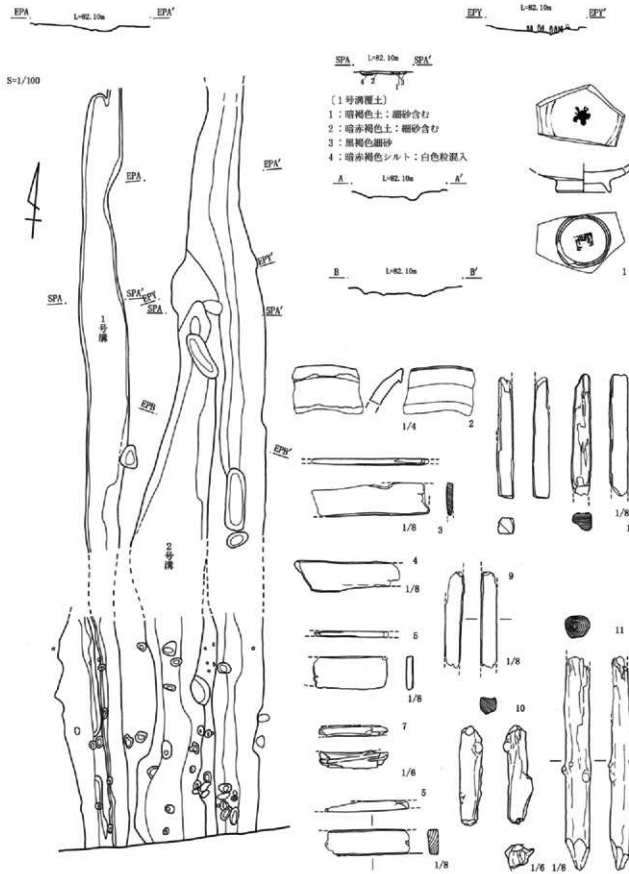




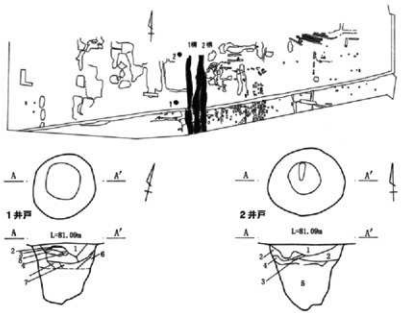
第6図の1　A区1面全体図（上：S＝1/400　下：S＝1/200）



第6図の2　A区1面全体図（上：S＝1/400　下：S＝1/200）



第7図　A1-1・2号溝と出土遺物



〔2号井戸覆土〕
1：黒褐色土：埋土類型b。細砂、褐色土少量含む
2：黒褐色土：埋土類型b。褐色土多く含み、黒色土（地山類型β）ブロックと鉄分含む
3：1層土のブロック
4：1層土に同じ
5：2層と同じだが、ブロックやや少ない

〔1号井戸覆土〕
1：黒褐色細砂：暗褐色粗砂ブロック混入
2：暗褐色土と暗褐色土粗砂ブロックの混土
3：1層に似るがブロック多し
4：暗褐色土細砂：暗褐色土と黒褐色土混入
5：4層土に黒褐色土混入
6：1層に似るがブロック少なく、鉄分混入の褐色土混入
7：6層に比しブロック大きく被い。黒褐色土混入

第8図　A1-1・2号井戸

を用いた杭を溝の走向に直交するように打設されているものが10本確認されている。分水のための堰跡と認識される。これは溝を堰止めて、水田に農業用水を分水するのに用いたものと判断される。

出土遺物　1・2号溝からは2号溝を中心に施釉陶器碗（1・2）、焼締陶器甕片（3）、薄板材（4・5）、厚板材（6～8）、杭（9・10他）が見られた。

時期　2号溝は下限を圃場整備段階とするが、上限は不明である。1号溝の上限は凡そ江戸時代後期と判断されるが。

規模　（1号溝）長さ：20.1m　幅：123cm　深さ：9cm

（2号溝）長さ：64.4m（南半：20m　北半：31.1m）　幅：351cm　深さ：38cm

構造　1・2号溝は共に北北西一南南東方向に走行を取る。概ね直線的であるが、幅員は多少の増減が見られる。

掘削形態は共に浅い箱堀状を呈し、壁面はやや開く。

(5)　井戸（第8図、PL4）

概要　A区1面ではA1-1・2号井戸の2基の井戸が確認、調査されている。1号井戸はA区中央部、2号井戸はA区中南部にあり、何れもA1-2号溝の西側2m付近に位置しているが、他遺構との重複は見られなかった。

何れの井戸も下半部の壁面が灰褐色砂層となっており、ここが湧水となっていたものと思慮される。尚、2号井戸に於いては調査時点に於いて、その最も低い位置に湧水が見られた。

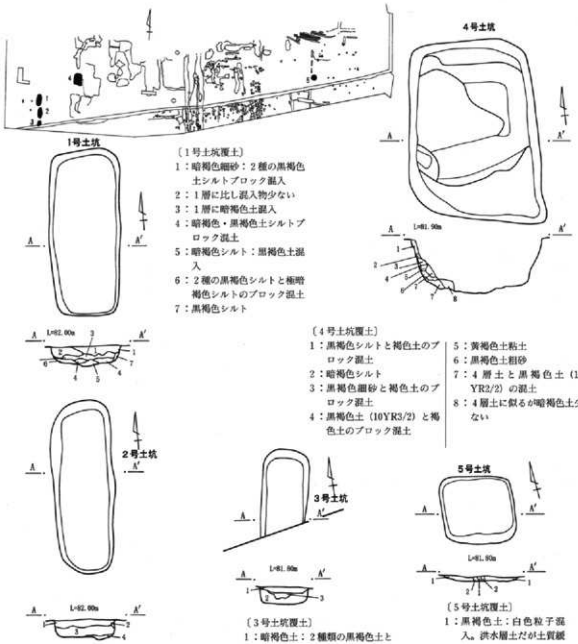
遺物　両井戸共に特段の出土遺物を見ることはできなかった。

時期　何れの井戸も覆土等の所見から中世以降、江戸時代中期以前の所産と認識できるだけで、時期の特定には至らなかった。

規模　（1号井戸）径：169×176cm 深さ：166cm

（2号井戸）径：208×188cm 深さ：177cm

構造　1・2号井戸ともに円形プランの井筒型を呈し、底面が若干窪んでいる。



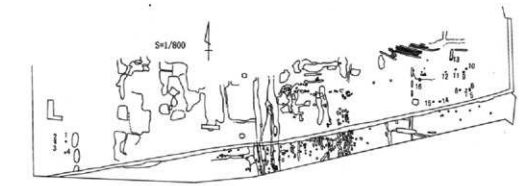
第9図　A区1面の土坑群と出土遺物

(6)　土坑（第9図、PL4）

概要　A区1面ではその南半にA1-1～5号土坑の5基の土坑を調査した。1～3号土坑はその西部に南北に連なり、3号土坑は南側が調査区外に出る。各土坑とも掘削目的は特定することはできなった。

遺物　若干の遺物が見られたが、この中には5号土坑出土の灰釉陶器皿（5坑-1）も見られた。

時期　1～4号土坑は形態的に中世の屋敷遺構に多く見られる土坑ではあったが、出土遺物も少なく、概ね中世以降の所産とできるだけで時期の特定には至らなかった。



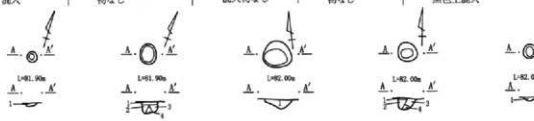
〔1号ピット〕
1：黒褐色土：より暗い黒褐色土と褐色土粒混入

〔2号ピット〕
1：暗褐色土：黒褐色土と明黄褐色土粒混入
2：1層に同じだが混入物なし

〔3号ピット〕
1：黒褐色土：細砂・白色粒子混入
2：1層に同じだが混入物なし

〔4号ピット〕
1：暗褐色土：褐色土粒混入
2：黒褐色土：混入物なし

〔5・6号ピット〕
1：暗褐色土：As-B混入
2：黒褐色シルト質土：黄橙色粒子混入
3：黒褐色土：白色・明黄褐色粒と地山黒色土混入



〔7号ピット〕
1：黒褐色土：白色粒子・明黄褐色粒子混入

〔8号ピット〕
1：黒褐色シルト：白色粒混入
2：黒褐色土：黒色土2種と暗褐色土混入
3：2層で黒色土1種混入なし
4：3層と同じ。暗褐色土多し

〔9号ピット〕
1：黒褐色土と暗褐色土の混土。白色粒子混入

〔10号ピット〕
1：As-C二次堆積層
2：黒褐色土：As-C混土か。黒褐色シルト混入
3：2層土で混入物なし
4：黒褐色シルト質土

〔11号ピット〕
1：暗褐色土：As-B混土か

〔12号ピット〕
1：黒褐色シルト：植物痕
2：暗褐色土：白色粒・鉄分混入

〔14号ピット〕
1：黒褐色シルト：橙色粒子混入

〔15号ピット〕
1：As-C二次堆積ブロック
2：黒褐色土：明黄褐色粒子混入
3：暗褐色土シルト

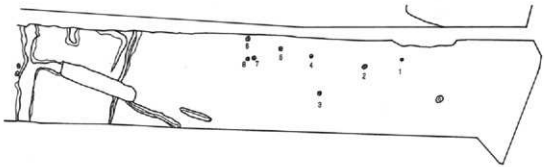
〔16号ピット〕
1：暗褐色土：褐色土（現耕作土）ブロックと白色粒子混入
2：暗褐色土：白色粒と酸化鉄混入
3：暗褐色シルト：白色粒子少量含む
4：黒褐色シルト：白色粒子混入
5：暗褐色土：白色粒子混入

第10図　A区1面のピット群

規模　巻末土坑・ピット一覧参照

構造　1～4号土坑は長方形のプランを呈するが、4号土坑は長短軸の比が小さい。5号土坑は正方形のプランを呈する。

掘削形態は何れも箱形を呈しており、底面は平らである。



〔１号ピット〕
１：暗褐色土：埋土類型a層

〔２号ピット〕
１：暗褐色粗砂：白色粒子混入

〔３号ピット〕
１：暗褐色シルト：鉄分少量混入
２：黒色土：地山類型β。植物腐蹄か

〔４号ピット〕
１：暗褐色シルト：黒色土（地山類型β）と少量の酸化鉄分混入

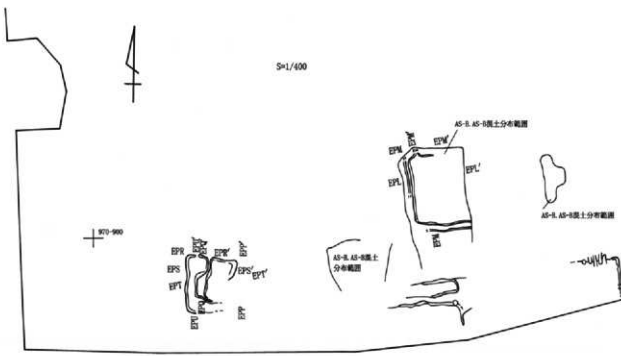
〔５号ピット〕
１：黒褐色土：酸化鉄分と地山類型β少量混入
２：暗褐色シルト：酸化鉄分と黒色土（地山類型β）少量混入
３：黒色土ブロック：地山類型β

〔６号ピット〕
１：黒褐色土：白色粒子混入
２：暗褐色土細砂ブロック

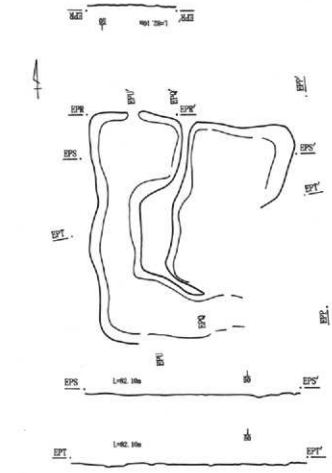
〔７号ピット〕
１：黒色土ブロック：地山類型β
２：暗褐色土シルト：白色粒子と鉄分混入
３：暗褐色土シルト：白色粒子と鉄分混入。２層より締まる

〔８号ピット〕
１：暗褐色土シルト：白色粒子混入

第11図　AS区１面のピット群



第12図の１　Ａ区１面中世水田址（その１）（S＝１/400）



(7)　小型ピット（第10図、PL 4）

概要　A区1面ではA 1-1～17号ピット及びAS区のAS-1～8号ピットの合わせて25基の小型ピット（以下「ピット」とする）を調査した。これらは区の東部に多く位置するが、その分布は散漫である。

掘削意図は特定できなかった。これらは形態的に柱穴の可能性があるが、建物等を復元することはできなかった。

尚、AS-5・7・8号ピットは覆土の観察所見から遺構でない可能性も考慮される。

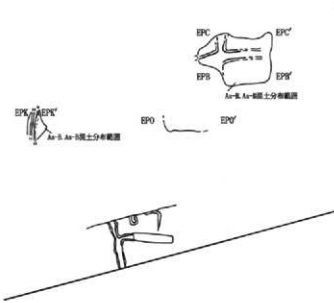
遺物　遺物の出土は見られなかった。

時期　これらは中世以降であり、細かい時期特定には至らなかった。

規模　巻末土坑・ピット一覧参照

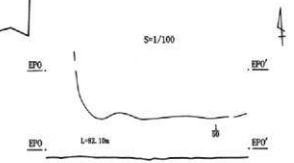
構造　各ピットのプランはA 1-17号ピットが隅丸三角形を呈する他は、円形か円に近い楕円形を呈する。

掘削底面はA 1-1・3・4・5・8・9・11・12号ピットとAS-1・5・6号ピットが丸そこを呈し、他のピットは平底を呈する。

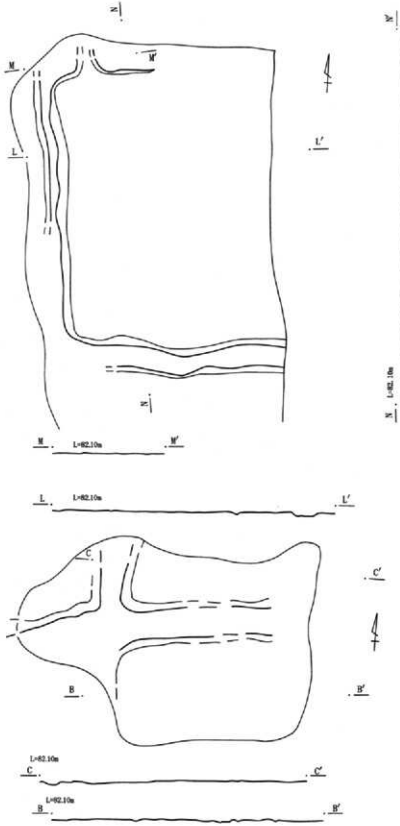


(8)　水田（第10・11図、PL 4）

概要　A区1面ではAs-Bを混入する土壌で覆われた、As-B混土下の所謂疑似畦畦が確認された。しかしこれらは部分的に散在するもので、残存部分を以って水田全体を復元することはできなかった。



第12図の2　A区1面中世水田址（その1）（全体図：S＝1400　部分図：S＝1/100）



第13図　Ａ区１面中世水田址（その２　Ｓ＝１/100）

遺物　若干の出土があったが、図示すべきものはなかった。

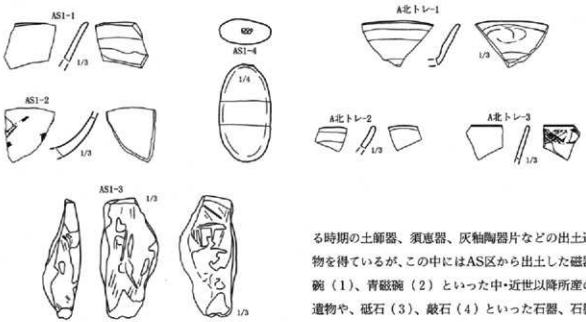
時期　水田址は覆土の状態等からAs-B降下後の所産であり、概ね中世以降の所産と認識される。しかし、As-Bの含有状況からAs-Bの降下後大きな時間経過が見込まれないことから中世の所産と認識され、或いはAs-B降下後の復旧水田に伴う12世紀段階のものである可能性も考慮される。

規模　確認範囲78×22m

畦幅：119cm　深さ：10cm

構造　遺存ヶ所が散漫で全容はつまびらかでない。また疑似畦畦であるため一部明瞭でない箇所もあるため、個々の水田面の状態も把握できなかったのであるが、仮に全体の水田面の区画が均質であるとするならば、東西４m、南北５mの区画を想定することができる。

尚、水口等は特定することができなかった。



第14図　A区1面遺構外の出土遺物

(9)　A区1面遺構外の遺物（第14図、PL6）

概要　A区1面では量としては余り多くは無かったが、古墳時代前期の土師器片や平安時代を中心とする時期の土師器、須恵器、灰釉陶器片などの出土遺物を得ているが、この中にはAS区から出土した磁器碗（1）、青磁碗（2）といった中・近世以降所産の遺物や、砥石（3）、敲石（4）といった石器、石製品なども見られた。

また、1面には限定されないが、試掘調査時のトレンチからも古墳時代前期の土師器片や平安時代を中心とする土師器、須恵器片、中世以降の陶器、磁器片などの遺物の出土を得た。この中には施釉陶器碗（1・2）や磁器（3）、鎹かと思われる鉄製品破片（4）といった遺物も見られた。

第2節　A区2面

A区2面は古代の遺構の確認面として調査した。各遺構は時期特定を明確できなかったものもあったが、一部古墳時代の遺構も含まれているものと認識される。

A区2面では竪穴住居、溝、土坑、小型ピットを調査した。このうちA区西部で調査したAW2-1号溝を境として微高地部と低地部とが区画されるようで、平安時代の住居2軒は何れも以西の微高地部分に確認され、掘屋敷遺跡の集落の一部と判断される。この他28条以上の溝遺構を調査したが、これらの多くはAW2-1号溝以東に在り、4基の土坑、22基のピットもAW2-1号溝以東地域に散在して確認された。尚、溝群では1面のA1-1・2号溝の延長部分（A2-1a号溝）を確認、調査している。

第15図の1　A区2面全体図（S＝1/400）

(1)　A2-1号住居（第16・17図、PL8・13）

概要　本住居はAW区南部（A区南西隅部）に位置する。他遺構との重複は認めらなかったが、A区の微高地と低地部を画すると想定されるA1-13号の4m西に在り、短軸の方向が13号溝のこの部分の走向の方向と一致する。

上位は削平され、床上部分の遺存状態は良好ではなかったが、床面も残されており、一定の情報を得ることができた。

遺物　土師器片等の若干量の出土が見られたが、図示すべき遺物には奈良時代の土師器坏（1～3）、磨石（4）があった。

時代　本住居は出土遺物から推して概ね8世紀前半期の所産と判断される。

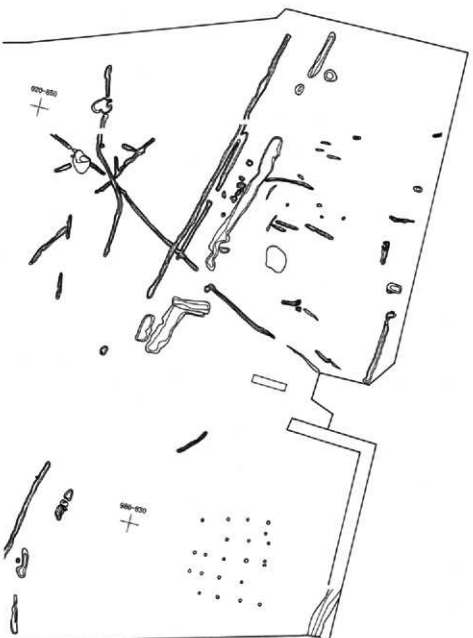
規模　径：414×329cm　高さ：21cm

〔竈〕幅：95cm以上　奥行：120cm

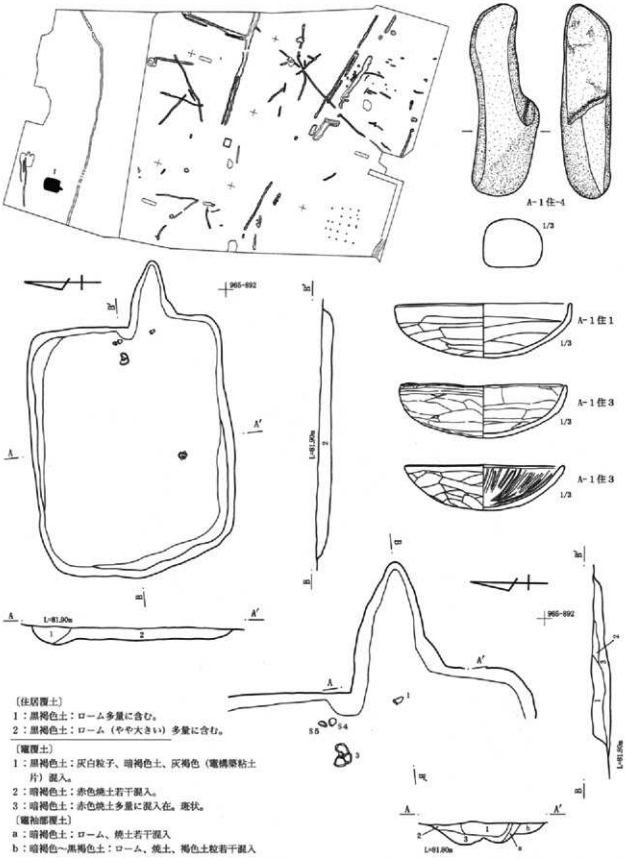
〔左袖〕幅：32cm　長さ：17cm

〔掘り方〕径：37×119cm　深さ：20cm

〔床下土坑〕径：69×105cm　深さ：25cm



第15図の2　A区2面全体図（S＝1/400）

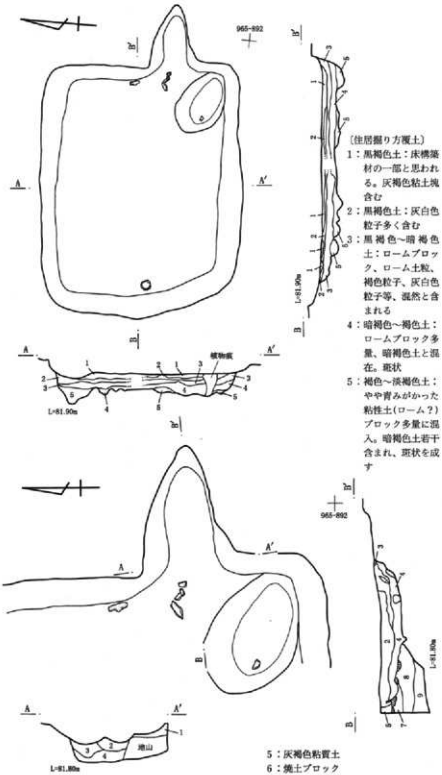


第16図　Ａ２-１号住居と出土遺物

構造　本住居は縦長の隅丸方形プランを呈するが、西壁南半がやや欠ける。掘り方を有しており、これを黒褐色土や暗褐色土等で埋め戻しているが、灰褐色粘土を含む黒褐色土で貼床を施している。またこの貼り床の下位にも黒色土褐色土を用いた古い段階の貼り床と思しき土層も認められる。

竈は東壁の南寄りに偏る位置に付設されている。壁を跨いで浅い掘り方を掘削し、これを焼土を含む灰色土等で埋め戻して燃焼面を作り出している。燃焼部の両側には焼土やロームを含む土壌を用いて短い袖を設けているが、袖材の有無は不詳。袖より上位の構造は詳かでない。

床面はほぼ平坦を呈している。尚、床面に於いても掘り片面に於いても貯蔵穴、柱穴などは確認されなかったが、掘り方の南東隅部に土坑状の掘削が見られた。

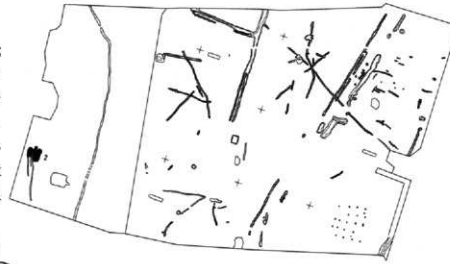


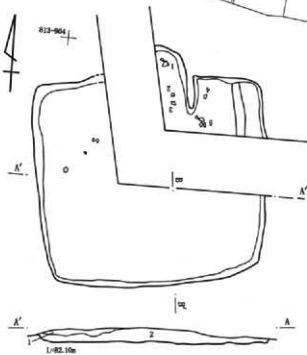
第17図　A2-1号住居掘り方

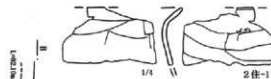
(3)　Ａ２-２号住居

（第18図、PL８・９・24・25）

概要　本竪穴住居はAW区南部（Ａ区南西隅部）に在り、Ａ１-１号住居の北西に近接して位置する。本住居は重複するAW２-Ａ・Ｂ・Ｃ号溝の埋没後に作られている。トレンチに切られ、更に上位も大きく削平されて遺存状況は良好とは言い難かった。







〔住居覆土〕
1：灰褐色土：As-Ｂ少量含む。
2：黒褐色土：As-Ｃ含む。

〔住居掘り方覆土〕
3：暗褐色土：As―Ｃ混入せず
4：灰褐色土：地山ブロックを混入

遺物　本住居からは土師器甕片（１）等僅かな遺物が出土したに過ぎなかった。

時期　本住居の時期は出土遺物から推して概ね９世紀の所産と思慮される。

規模　径：366×332cm　高さ：10cm

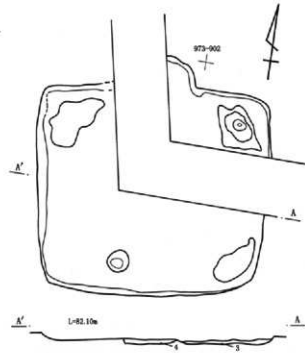
〔竈〕残幅：65cm　奥行：110cm

（右袖）幅：28cm　長さ：58cm

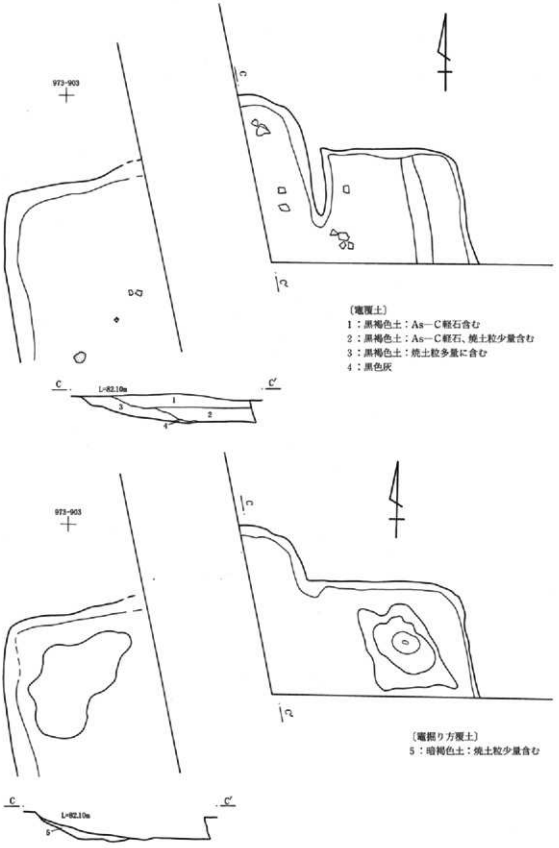
〔床下土坑１〕径：32×52cm　深さ：25cm

〔床下土坑２〕径：36×36cm　深さ：20cm

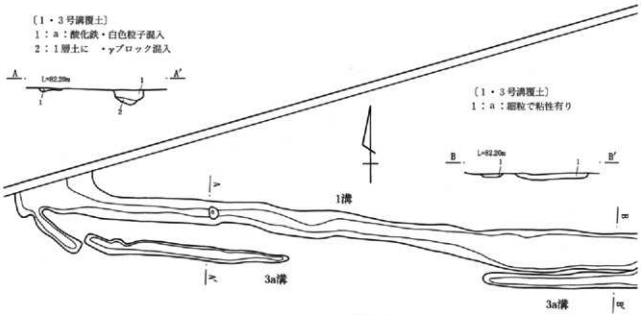
構造　本住居は正方形に近いプランを呈するが、南西隅部は隅丸形を呈する。

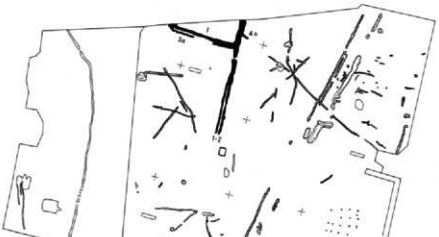


第18図の１　Ａ２-２号住居と出土遺物



第18図の２　Ａ２-２号住居と出土遺物





遺構埋土類型（埋土類型）
a：暗褐色土：鉄分混入
基本土層類型（地山類型）
α：黒褐色土：白色粒子やや多い
β：黒色土
γ：暗褐色土

第19図の１　Ａ区２面の溝群（その１）

壁から垂直に細長く伸びる右袖が確認されているが、構築材の記録を残せなかったため細かい構造は不詳。また上位構造も明らかにできなかった。

床面に於いては貯蔵穴も柱穴も確認することはできなかった。しかし掘り方面に於いて、柱穴状の土坑２基を確認した。

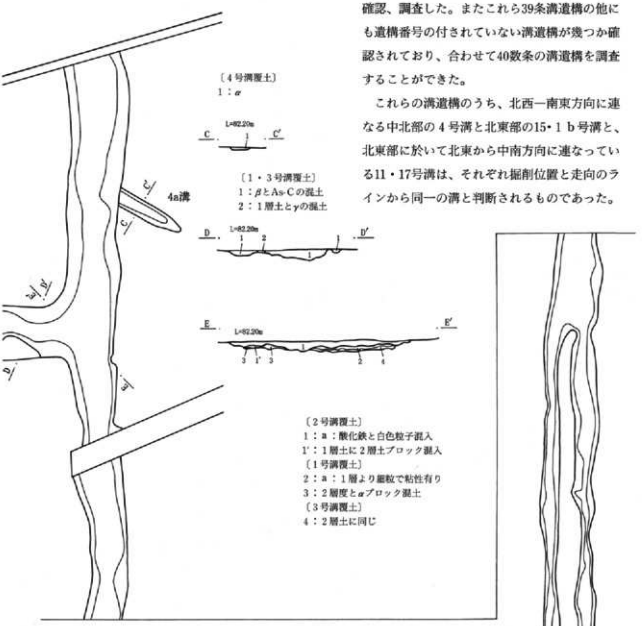
掘り方を有してはいるが、これを暗褐色土等で埋め戻してい箇所と共に地床部分もあった。また貼床等も見られなかった。

竈は東壁中央に壁を跨いで設置されているが、トレンチにその左半を削られているため全容を明らかにすることはできなかった。焼土粒を含む暗褐色土で埋め戻した掘り方が遺存するが、詳細は不明。

このうち床下土坑２は本住居に関連するものか否かを特定することはできなかったが、住居南西隅部に在る床下土坑１は位置的に貯蔵穴の可能性があるものの、土坑周囲に窪みがあり、同様の窪みが南西、北東隅にも認められることから柱穴の可能性が大きいものと思慮される。従って掘り方を掘って柱穴とし、柱設置後に床を貼る形式の柱であったものと判断される。

確認、調査した。またこれら39条溝遺構の他にも遺構番号の付されていない溝遺構が幾つか確認されており、合わせて40数条の溝遺構を調査することができた。

これらの溝遺構のうち、北西一南東方向に連なる中北部の4号溝と北東部の15・1b号溝と、北東部に於いて北東から中南方向に連なっている11・17号溝は、それぞれ掘削位置と走向のラインから同一の溝と判断されるものであった。

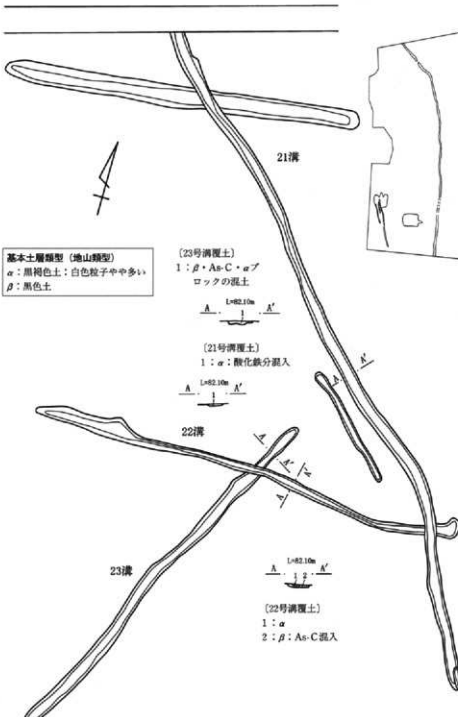


第19図の2　A区2面の溝群（その1）

(3)　A区2面の溝（第19～25図、PL9～11）

概要　A区2面に於いて最も目に付いた遺構は溝遺構であった。A区2面の溝遺構はA区のほぼ全面に分布していた。溝遺構は中北部にA2－1・3・4a・21～23号溝と1面のA1－1・2号溝に繋がり1面に帰属するA2－1a号溝が在り、中南部にA2－1b・2・24～28号溝、北東部にA2-2・3b・4b・5・6・10～20号溝、南東部にA2－29号溝、そして東端部に7～9号溝が在ってこれらを調査し、西部のAW地域にAW2-1・a～c号溝の4条を（γ）

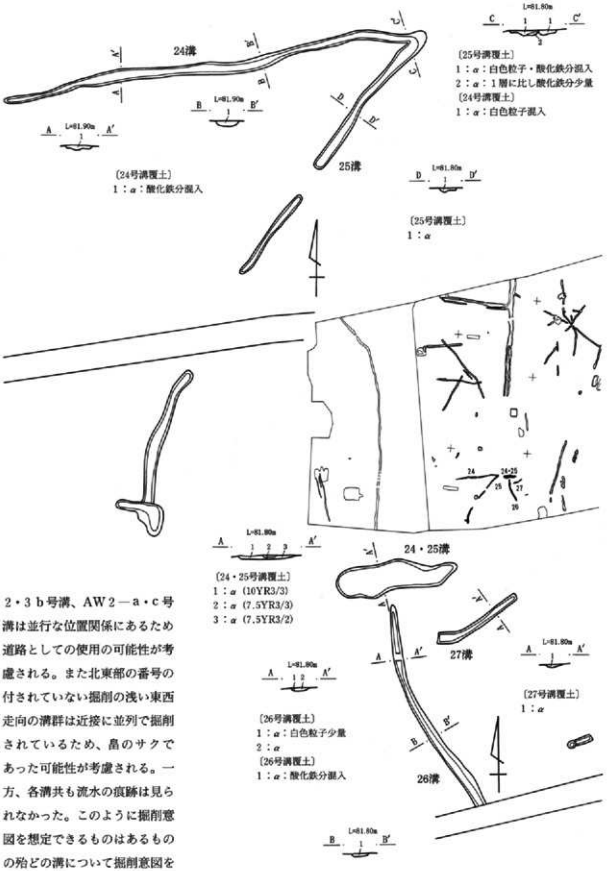
一方、中北部の1・3a号溝と北東部の2・3b号溝、西部のAW2－a・号溝はそれぞれ溝の中心で100cm、70cm、130cm程の間隔を以ってほぼ並行な位置関係に在るものであった。また中北部の21号溝と22号溝、中南部の24号溝と25号溝、北西部



第20図の１　Ａ区２面の溝群（その２）

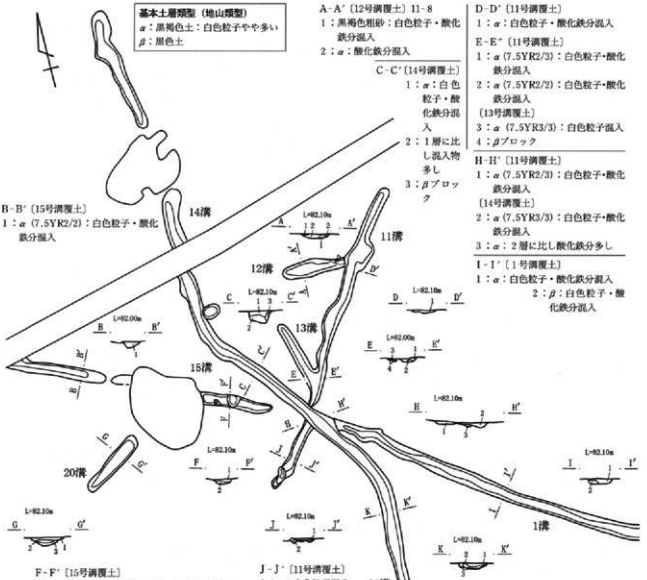
の12・13号溝と11号溝、１ｂ・11・14号溝、１ｂ号溝と２・３ｂ・４ｂ号溝が重複関係にあり、北東部の４ｂ号溝と10号溝、及び16号溝と17号溝も重複していたものと判断されるものであったが、25号溝が24号溝を、３ｂ号溝が１ｂ号溝を切ることが確認できた以外は、その新旧を特定することはできなかった。尚、西部のBW２－ａ～ｃ号溝はBW２－２号住居と重複するものであったが、これら３条の溝は同住居の建築前に埋没した、即ち２号住居に先行する溝遺構であった。

Ａ区２面の溝遺構のうち、西部のAW区域に在るAW２－１号溝は位置的に西側の微高地と低地部との境を画する溝と判断されるものであったが、片や１・３ａ号溝と



２・３ｂ号溝、ＡＷ２－ａ・ｃ号溝は並行な位置関係にあるため道路としての使用の可能性が考慮される。また北東部の番号の付されていない掘削の浅い東西走向の溝群は近接に並列で掘削されているため、畠のサクであった可能性が考慮される。一方、各溝共も流水の痕跡は見られなかった。このように掘削意図を想定できるものはあるものの殆どの溝について掘削意図を特定することはできなかった。

第20図の２　Ａ区２面の溝群（その２）



第21図の１　Ａ区２面の溝群（その３）

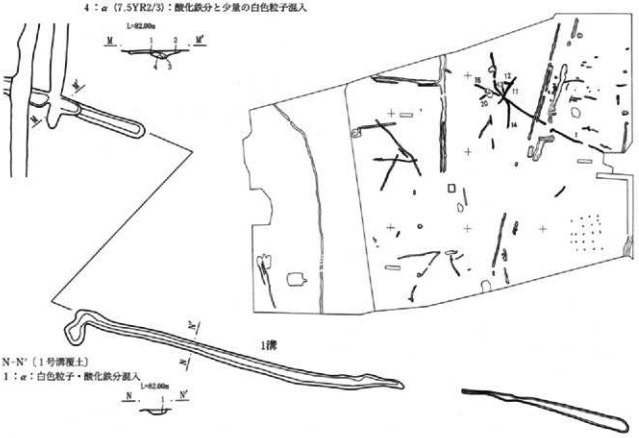
遺物　Ａ区２面の溝群からは土師器片等僅かな出土遺物は得られたものの、図示すべきものは見られなかった。

時期　本溝群のうちBW地域のBW２－ａ・ｂ・ｃ号溝は、重複する２号住居との関係から少なくも奈良時代以前の所産として把握されるものであった。しかし乍らＡ区２面で確認された各溝は共に出土遺物も少ないか全く見られず、或いは土層からも時期を特定するに足る所見を得ることができなかった。このため本溝群各溝の時期は、確認面との関係から概ね古墳時代後期以降、律令期までの所産として把握できるに過ぎず、細かい時期を特定するには至らなかった。

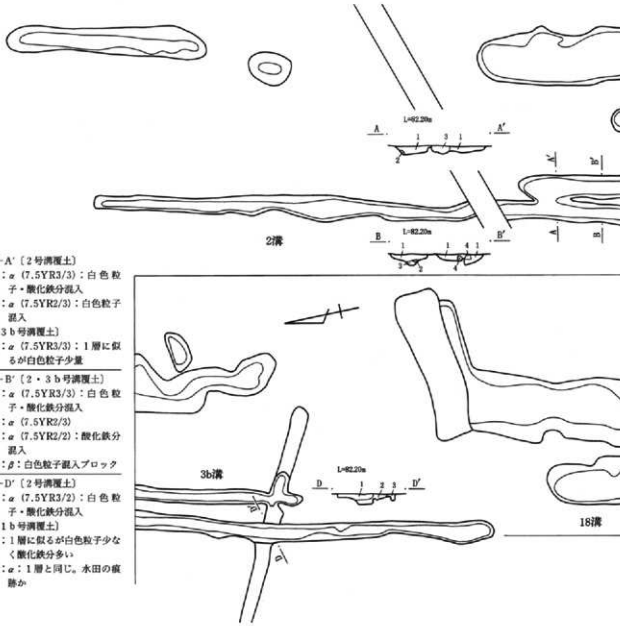
規模〔A・AN・AS区域〕

（1号溝）長さ：18.5m　幅：113cm　深さ：8cm
（1b号溝）全長：29.9m　幅：40cm　深さ：22cm
（2号溝）全長：68.9m　幅：74cm　深さ：26cm
（3号溝）長さ：7.0m　幅：40cm　深さ：36cm
（3b号溝）全長：15.4m　幅：64cm　深さ：25cm
（4号溝）長さ：1.9m　幅：48cm　深さ：8cm
（4b号溝）全長：26.8m　幅：143cm　深さ：(10)cm
（5号溝）長さ：3.2m　幅：35cm　深さ：8cm
（6号溝）長：4.5m　幅：32cm　深さ：23cm
（7号溝）長さ：2.5m　幅：61cm　深さ：9cm
（8号溝）長さ：2.6m　幅：30cm　深さ：25cm
（9号溝）長さ：0.9m　幅：24cm　深さ：15cm
（10号溝）長さ：5.3m　幅：31cm　深さ：4cm
（11号溝）長さ：8.5m　幅：41cm　深さ：10cm
（12号溝）長さ：1.8m　幅：48cm　深さ：13cm
（13号溝）長さ：2.0m　幅：33cm　深さ：9cm
（14号溝）全長：21.3m　幅：41cm　深さ：34cm
（15号溝）全長：7.2m　幅：37cm　深さ：17cm
（16号溝）長さ：2.5m　幅：42cm　深さ：—cm
（17号溝）長さ：5.5m　幅：53cm　深さ：—cm
（18号溝）長さ：3.2m　幅：129cm　深さ：(5)cm
（19号溝）長さ：2.9m　幅：36cm　深さ：—cm
（20号溝）長さ：1.9m　幅：42cm　深さ：22cm
（21号溝）長さ：19.4m　幅：34cm　深さ：9cm
（22号溝）長さ：11.7m　幅：50cm　深さ：8cm
（23号溝）長さ：1.4m　幅：28cm　深さ：5cm
（24号溝）全長：15.7m　幅：33cm　深さ：14cm
（25号溝）全長：19.8m　幅：36cm　深さ：13cm
（26号溝）長さ：6.1m　幅：36cm　深さ：5cm
（27号溝）長さ：2.5m　幅：25cm　深さ：8cm
（28号溝）全長：9.1m　幅：64cm　深さ：(25)cm
（29号溝）長さ：3.8m　幅：25cm　深さ：14cm

M-M'〔3a号溝覆土〕
1：α（7.5YR3/3）：白色粒子・酸化鉄分混入
〔1号溝覆土〕
2：β：白色粒子・酸化鉄分（ブロックか）混入
3：α（7.5YR3/2）：白色粒子・酸化鉄分混入
4：α（7.5YR2/3）：酸化鉄分と少量の白色粒子混入



第21図の2　A区2面の溝群（その3）



〔AW区域（AW2—）〕

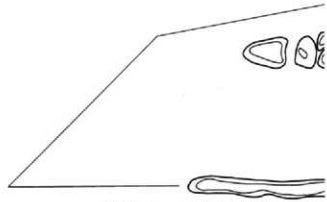
（1号溝）全長：49.2m　幅：66cm　深さ：11cm

（a号溝）長さ：5.3m　幅：22cm　深さ：18cm

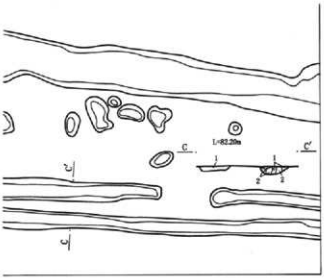
（b号溝）長さ：3.0m　幅：24cm　深さ：23cm

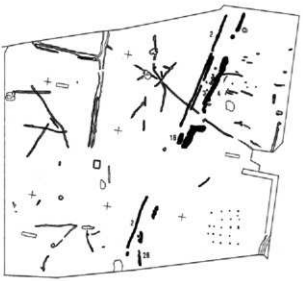
（c号溝）長さ：12.8m　幅：25cm　深さ：11cm

構造　本溝群各溝の軸線の方向は一定しないが大別すると凡そ30°毎に分けると、南—北方向を向くものが7号溝と14号溝南部、北北東—南南西方向2・3b・4b・18・23号溝、北東—南西方向が11・17・20・25・27・29号溝、東北東—西南西方向が9号溝、

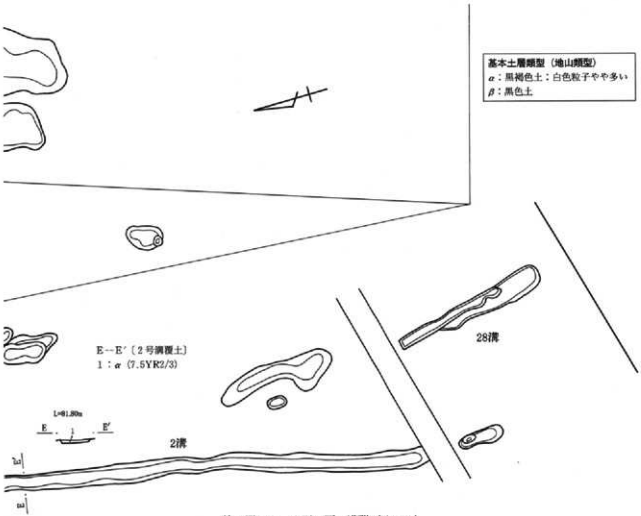


第22図の1　A区2面の溝群（その4）

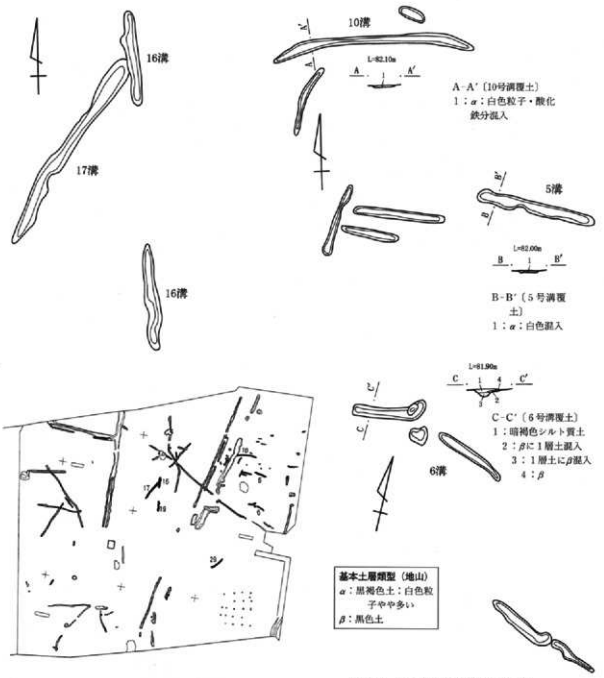




C—C'〔2・3号溝覆土〕
1：α（7.5YR3/3）：白色粒子・酸化鉄分混入
2：βブロック

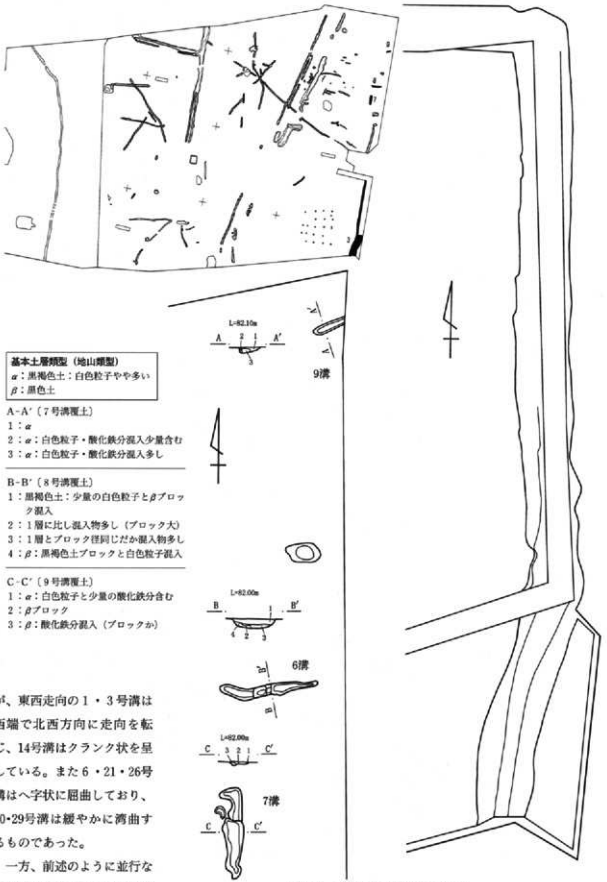


第22図の2　A区2面の溝群（その4）



第23図　Ａ区２面の溝群（その５）

東一西方向が西端部を除く１・３号溝と８・10・12・22・24号溝及び６号溝の西半、西北西一東南東方向が５号溝と６号溝の東半、北西一南東方向が１ｂ・４・15・21号溝と１・３号溝の西端、14号溝中程及び26号溝の南半、北北西一南南東方向が13・16・19・28号溝と14号溝北部及び26号溝北半であった。一方、その走向ラインは直線的なものが多かった



が、東西走向の1・3号溝は西端で北西方向に走向を転じ、14号溝はクランク状を呈している。また6・21・26号溝はへ字状に屈曲しており、10・29号溝は緩やかに湾曲するものであった。

一方、前述のように並行な位置関係にある1・3a号溝

第24図　A区2面の溝群（その6）

第25図の１　ＡＷ２－１号溝

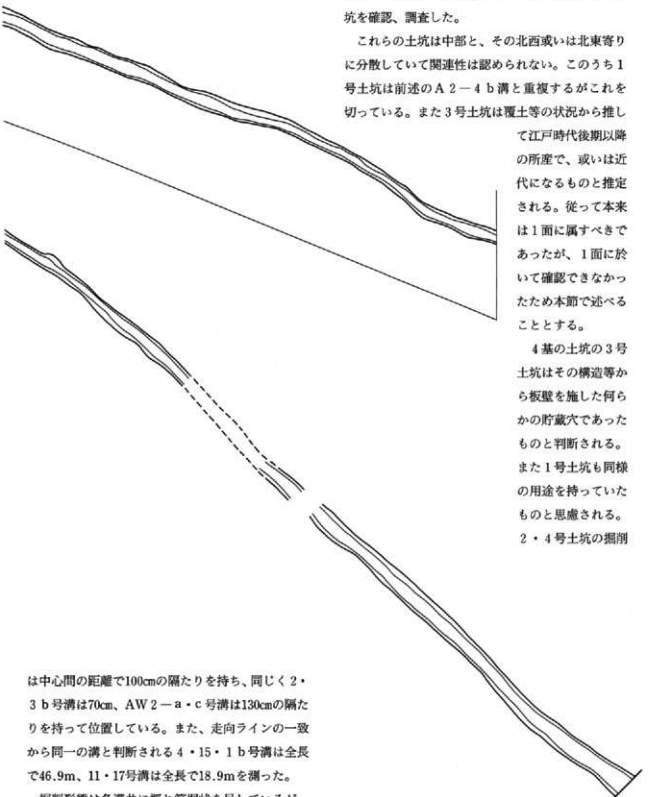
(4)　A区2面の土坑（第26・27図、PL12・13）

概要　A区2面ではA2－1～4号土坑の4基の土坑を確認、調査した。

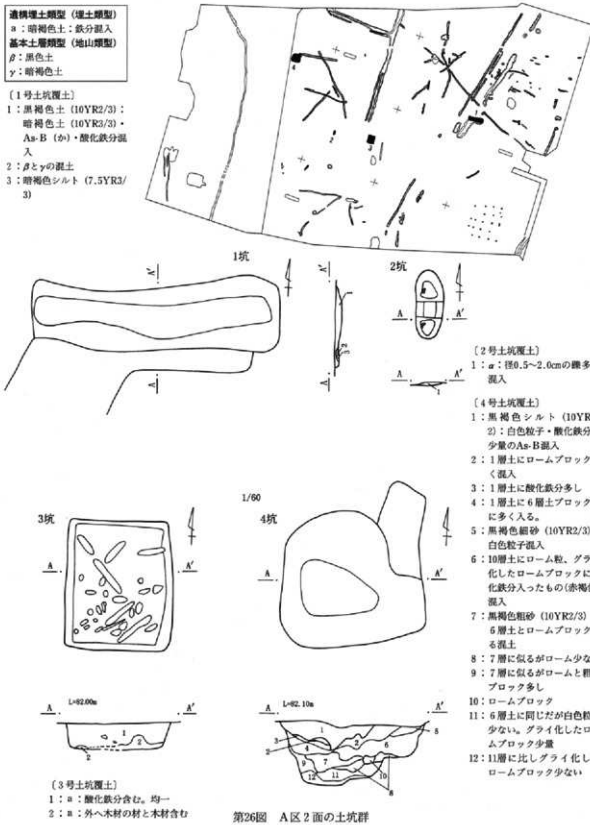
これらの土坑は中部と、その北西或いは北東寄りに分散していて関連性は認められない。このうち1号土坑は前述のA2－4b溝と重複するがこれを切っている。また3号土坑は覆土等の状況から推して江戸時代後期以降の所産で、或いは近代になるものと推定される。従って本来は1面に属すべきであったが、1面に於いて確認できなかったため本節で述べることとする。

4基の土坑の3号土坑はその構造等から板壁を施した何らかの貯蔵穴であったものと判断される。また1号土坑も同様の用途を持っていたものと思慮される。2・4号土坑の掘削は中心間の距離で100cmの隔たりを持ち、同じく2・3b号溝は70cm、AW2－a・c号溝は130cmの隔たりを持って位置している。また、走向ラインの一致から同一の溝と判断される4・15・1b号溝は全長で46.9m、11・17号溝は全長で18.9mを測った。

掘削形態は各溝共に概ね箱掘状を呈しているが、A2－8・11号溝とAW2－a～c号溝は横断面形が丸底状を呈するものであった。



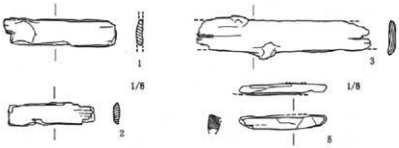
第25図の2　AW2－1号溝



第26図　Ａ区２面の土坑群

意図は確認できなかったが、４号土坑は覆土の状態から推して風倒木痕の可能性を有する。

遺物　３号土坑からは壁に用いたと思われる薄板材（１～３）や切断痕のある木材（４～７）など多数



第27図　A2-3号土坑出土遺物

の木材の出土が見られたが、他の土坑からの出土遺物は見られなかった。

規模　巻末土坑・ピット一覧参照

時期　上述のように3号土坑は覆土や木材の遺存状態から近世後期以降で近代の所産である可能性が高いと推察されるが、他の3期については古墳時代後期以降律令期までの所産とできるだけで、細かい土器の特定には至らなかった。

構造　1号土坑は短冊形のプランを呈し、箱状の掘削形態を成す。2号土坑は遺存状況が悪く全容は詳らかでないが、長軸の長い楕円形のプランを呈し、底面の横断面形はやや丸みを持つ。

3号土坑は縦横比の小さい長方形プランを呈し、箱形の掘削形態を呈す。出土材から推して壁は板を貼り付け、垂木を用いて屋根を葺いていたものと思われる。

4号土坑は隅丸台形のプランを呈し、底面が平らな擂鉢状の掘削形態で、北東部に一段高い短冊形プランの掘り込みが付属する。

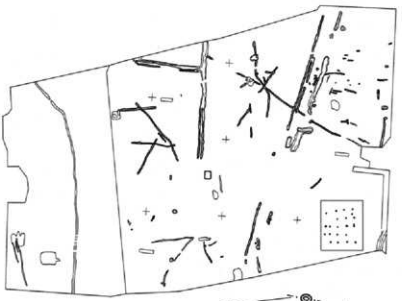
(5)　A区2面のピット

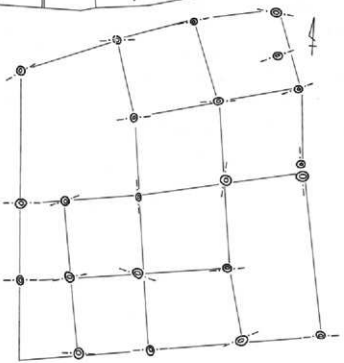
(第28・29図、PL12)

概要　A区2面では南東部にA区域でA2－1～18号ピットの18基、AS区域でAS2－1～4号ピットの4基の小型ピットを調査している。

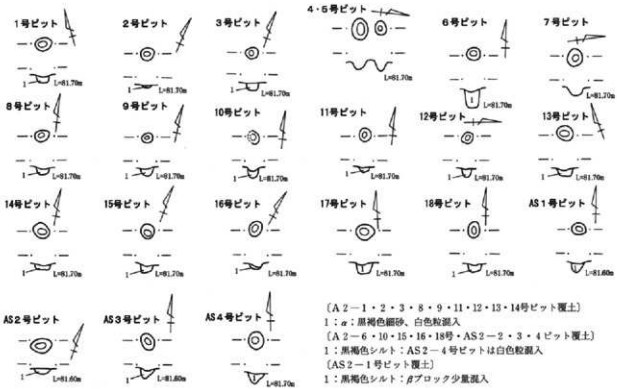
これらのピットはそれぞれ単独に在り、ピット同士の重複は見られなかった。

また、南側のA2－5～7・12～15・17・18号ピットとAS－1～4号ピット、A2－1・3・8・9・10・11・16号ピットは整然とした配列を見せる。





第28図　A区2面のピット群分布図



第29図　Ａ区２面のピット群

このうち前者は配列としては西側に庇を持つ掘立柱建物の可能性を有し、後者も１×３間以上の掘立柱建物である可能性を有する。しかし前後者共に２面、即ち古代以前の掘立柱建物とするには柱穴の規模が小さすぎること、後者が掘立柱建物としては彎曲した配列を見せていることを勘案すると、畠作に伴うピットである可能性も考慮される。

遺物　ピット群からの出土遺物は見られなかった。

規模　巻末土坑・ピット一覧参照

構造　各ピットは円形若しくは楕円形のプランを呈し、掘削底面は平底を成す。

前述北側のピット群はピット間の距離が2.1m程で１×３間の配列を成し、南西隅は欠ける。南側のピット群はやはりピット間の距離が２×３間の配列を成し、西側北寄りがピット間の距離で1.2mを測る張り出しを持つ。

第3節　A区3面

A区3面は凡そ古墳時代の前・中期の遺構の確認面であり、後述するB区3面のAs-C復旧水田の調査面に対応する調査面である。

A区3面の調査に於いてはB区の続きとなる水田遺構の表出を期待したが、上位面からの削平が著しいのか、中・西部に於いては全く遺構を確認することができず、遺構らしい遺構を殆ど確認することができず、僅かに東南部に於いて溝2条を確認できたに過ぎなかった。

尚、3面の調査に於いては最後に調査区域となった北東隅部に上位層のものと認識される溝群を一括調査し、後述するBW区2面の溝も図化していたが、前者は1面に属するものと判断して1面の全体図の箇所に掲載している。また、後者についてもB区2面に報告するため、全体図からは削除した。

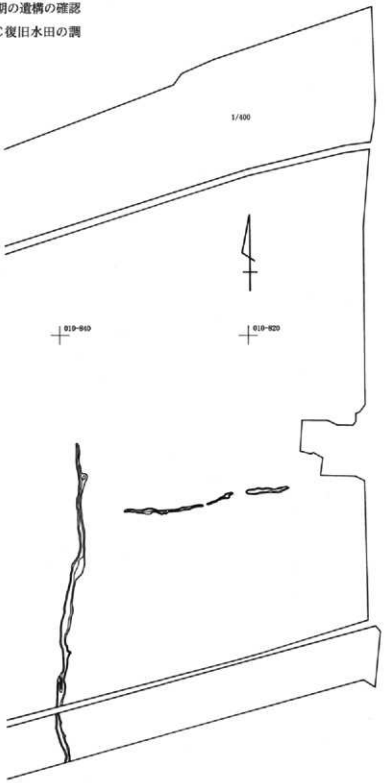
(1)　A3－1号溝

(第31図、PL15)

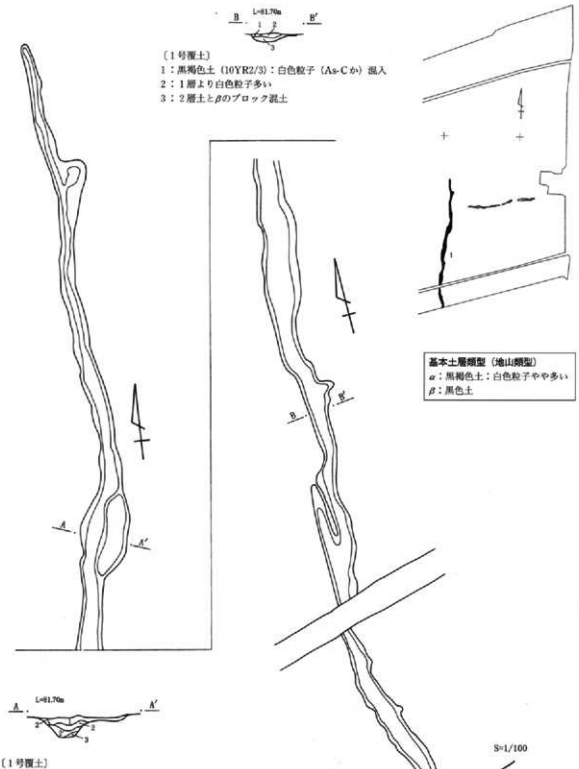
概要　本溝はA区南東部に位置している。他の遺構との重複は見られなかった。

本溝の掘削意図は特定できなかったが、A3－2号溝との位置関係から水田等の耕作に関連する可能性が考えられる。また一方で北寄りと南寄りの箇所で分岐する傾向が見られるため、降雨時等に通水する自然の流路であった可能性も考慮される。

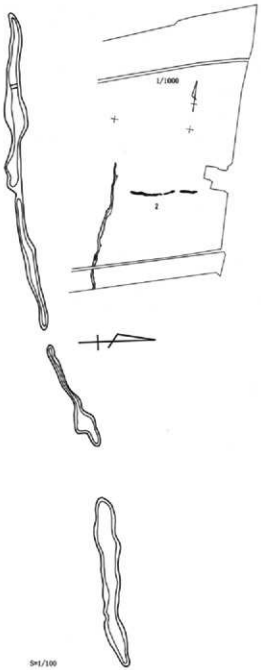
遺物　出土遺物は見られなかった。



第30図　A区3面全体図


B
L=81.70m
1
2
3
B'
〔１号覆土〕
１：黒褐色土（10YR2/3）：白色粒子（As-Cか）混入
２：１層より白色粒子多い
３：２層土とβのブロック混土
基本土層類型（地山類型）
α：黒褐色土：白色粒子やや多い
β：黒色土
A
A'
B
B'
A
L=81.70m
A'
2'
2
3
S=1/100
〔１号覆土〕
１：α（10YR2/3）：白色粒子（As-Cか）多く含み酸化鉄分混入
２：βとAs-Cの混土：白色粒子１層より少ない。暗褐色土ブロック少量混入
２'：２層に比し混入物少ないがブロック多い
３：βとAs-Cの混土：As-C非常に多い

第31図　Ａ３－１号溝



第32図　A3-2号溝

時期　確認面と覆土の観察所見から凡そ古墳時代前・中期の所産とできるだけで、細かい時期の特定には至らなかった。

規模　長さ：33.5m

幅：99cm

深さ：56cm

構造　本溝は南側が調査区外に出ているため全容は詳らかでない。

しかしその走向は凡そ南北方向に取り、緩やかに蛇行していて、北端近くと南寄りの2箇所にそれぞれ北北東、北北西に分岐するように見られる箇所がある。

掘削形態は箱堀状を呈している。

(2)　A3－2号溝（第32図、PL15）

概要　本溝もA区南東部に在り、A3－1号溝の北より部分の東側に位置しているが、重複はなかった。

本溝の掘削意図も特定できなかったが、A3－1号溝との位置関係から水田等の耕作に関連する可能性は考慮される。

遺物　本溝からの出土遺物は見られなかった。

時期　本溝は出土遺物も無く、確認面から推して凡そ古墳時代前・中期の所産とできるだけで、細かい時期を特定することはできなかった。

規模　前長：17.4m　幅：60cm

深さ：—cm

構造　本溝は溝の底部附近のみが確認されており、途中で確認できない箇所があり、3条の溝の集合体として確認される。

走向は西部に於いては東西を向き、中部では弧を描き乍ら走向を東北東に変じ、途絶えているため明確ではないが恐らくはへ字状に屈曲して走向を東に変じている。

掘削形態は箱堀状を呈している。

第４節　Ａ区４面

Ａ区４面は凡そ弥生・縄文時代の遺構を想定した遺構確認面である。

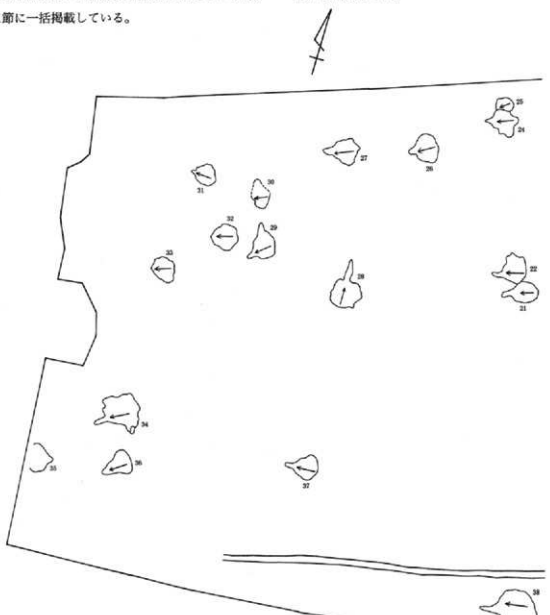
４面に於いては７基の土坑と168基の小型ピットを調査し、36基の風倒木痕を確認した。このうち風倒木痕は区全域で確認されたが、土坑と小型ピットは区の東部にほぼ限定して確認された。

尚、４面に於いては縄文土器片や上位層からの流入品も確認しているが、縄文時代の遺物については、第11節に一括掲載している。

(1)　風倒木痕（第33図）

概要　上述のようにＡ区４面の全域で36基の風倒木痕を確認した。風倒木痕については一部バックホーを用いて断面観察を行ったものもあるが、過半は確認面に於ける観察に止めている。

風倒木痕の分布は調査区北半部全体、南東部、南側西端部に集まる傾向にあり、中南部から西寄りにかけては薄かった。



第33図の１　Ａ区４面風倒木痕分布状況（Ｓ＝１/400）

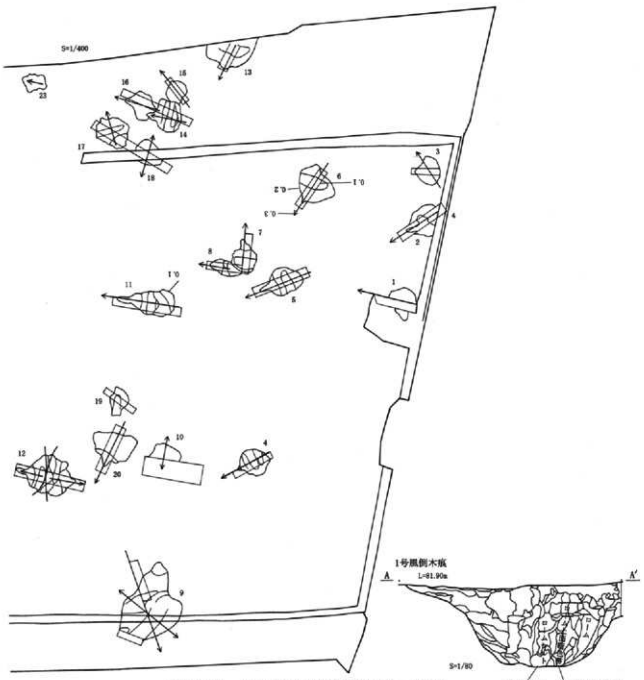
風倒木痕の倒木方向については、西側が10基、西南西が9基、南西が3基、南南西が2基、北西3基、北が2基、南が1基であり、全体的には西寄りに倒れるものが多く、東側に確実に倒れているものは認められなかった。こうした状況から、倒木の原因は台風によるものが多かったようである。

時期　5基は古墳時代以降の可能性があり、他は弥生時代以前のものと認識されるが、時期は特定できなかった。

規模　風倒木痕の大きさは様々だが、径4m程のものが多かった。

構造　方形や三角形プランを呈するものが多く、倒木方向に先端があるか、突出部を持つ傾向にあった。

また断面観察所見からすると風倒木痕一般に見られるように、縦断面の壁面の傾斜は倒木方向に緩く、根側にきつい傾向が見られた。



第33図の2　A区4面風倒木痕分布状況（S＝1/400）

(2)　A区4面の土坑（第34・35図、PL17）

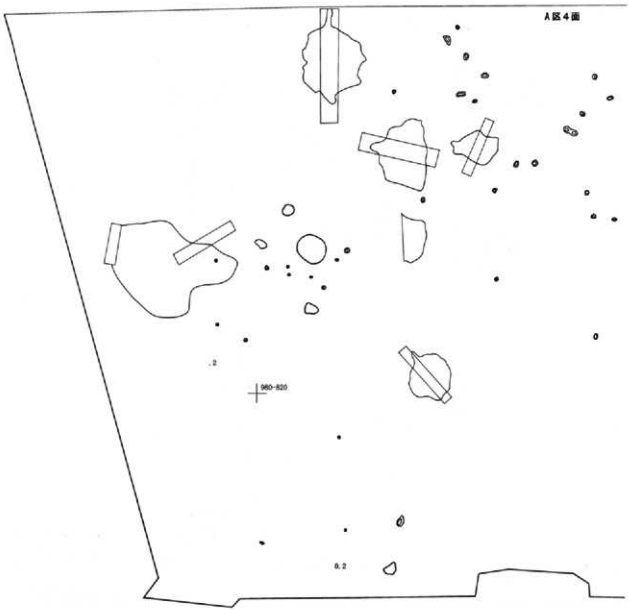
概要　A区4面では東部に於いてA4-1～8号土坑の8基の土坑を確認、調査している。このうち東部中の北部に6・7・8号土坑が、南部の中程に1・2・4・5号土坑がそれぞれまとまりを持って位置しており、その東方、調査区際に3号土坑が単独で位置している。

これらの土坑の周辺には後述する小型ピットが分布していたが、個々の土坑は単独にあり、それぞれ他遺構との重複関係は見られなかった。

これらの土坑の掘削意図を特定することはできなかったが、その形態から推して2号土坑には貯蔵穴の可能性が考えられ、4号土坑には柱穴の可能性が考えられる。また6号土坑には柱穴や貯蔵穴の可能性がある。尚、5号土坑は斜めに掘削されているため植物の根の痕跡であった可能性がある。

遺物　出土遺物は見られなかった。

時期　各土坑は概ね弥生時代以前の所産とできるだけであり、時期の特定には至らなかった。しかし、覆土の観察から1～4号土坑よりは、5～8号土坑



第34図の1　A区4面の土坑・ピット分布図（S＝1/200）

の方が古い段階のものである可能性が考えられる。

規模　巻末土坑・ピット一覧参照

構造　A区4面の土坑は相対的な規模の違いからのうち、2号土坑は大型であり、6号土坑は中型、他の7基は小型として分類できるものである。しかし後2者の規模の違いはあまり認められない。尚、各土坑共に掘削深度は浅く、遺存状態は良好とは言い難いものであった。

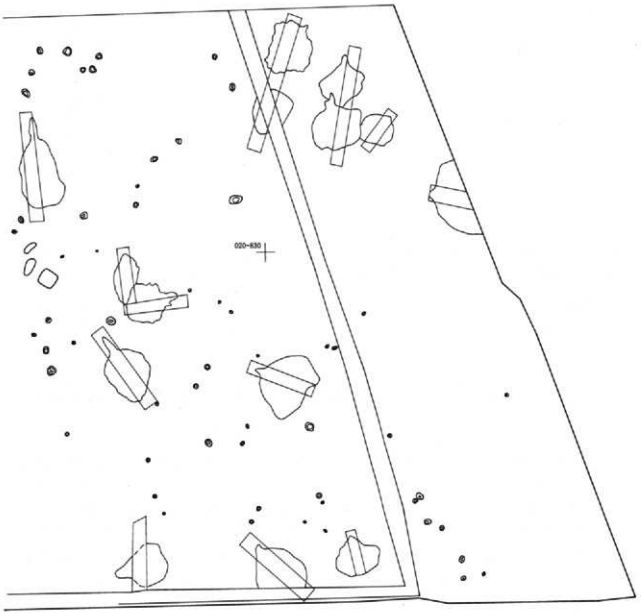
プランは1号土坑が三角形、2号土坑が円形に近い楕円形、3号土坑が半円形、4号土坑が隅丸方形、6号土坑が方形、5号土坑が細長い隅丸方形、7・8号土坑が細長い楕円形を呈している。

5号土坑が船底形を呈し、南壁がオーバーハングしているが、これ以外の土坑の底面は何れも平底で箱状の掘削形態を呈するものであった。

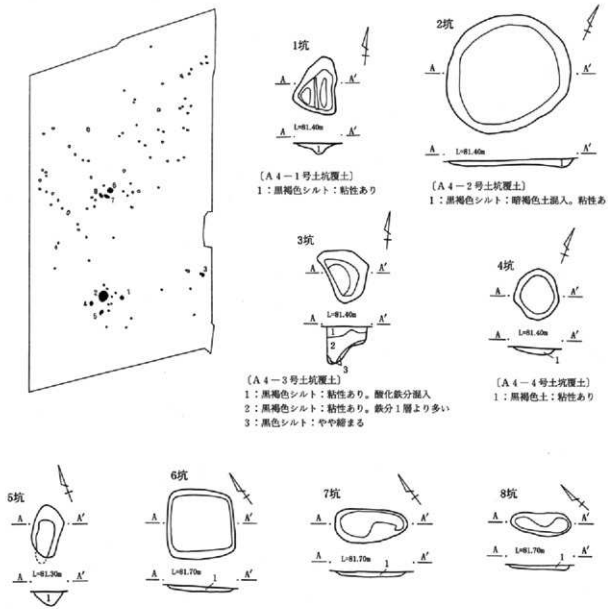
(2)　A区4面のピット（第34・36図、PL17・18）

概要　A区4面では東部を中心に168基の小型ピットを確認している。

これらのピットは後者が新しいA 4－28・29号



第34図の2　A区4面の土坑・ピット分布図（S＝1/200）

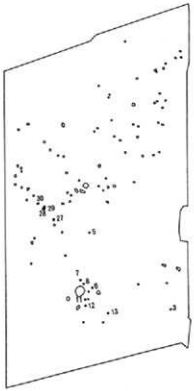


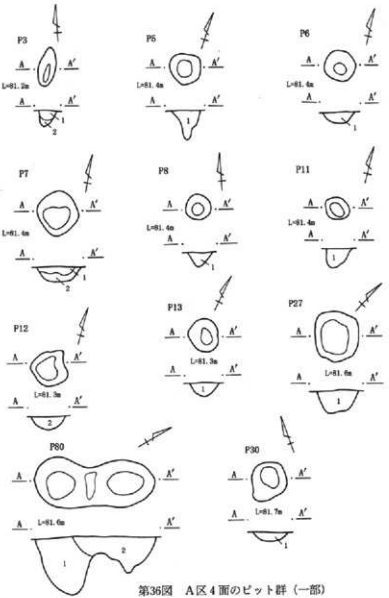
第35図　Ａ区４面の土坑群

ピットを除き重複関係はなく、それぞれ単独に位置している。Ａ区４面のピットの多くについては写真撮影、或いは土層断面の図化を行っているが、本書に於いては個々のピットの一部について掲載しているだけであることを付記しておく。

Ａ区４面のピットの分布は蛇行するものの北北西一南南東方向に線的に連続する状態がＡ区東部の西寄り見られ、弧を描くように分布するものも同北寄りに認められ、或いは２基のピットが近接して在るものも何箇所かで見られたが、明確に連続して柵等を構成する要素を認めることはできなかった。

これらのピットについては形態的に杭の打設痕であった可能性の高い尖底のものがあり、丸底のものについても杭の打設痕の可能性が考えられる。しかし乍ら、円形や方形のプランではない幾つかについては植物の根の痕跡である可能性も考えられた。





第36図　A区4面のピット群（一部）

〔A区4面のピット群〕
1：黒褐色土：細砂主体。白色粒子微量に含む。
　但し3号ピットは地山褐色土混入
2：暗褐色土：白色粒子微量に含む。
〔1号竪土〕
1：α（10YR2/3）：

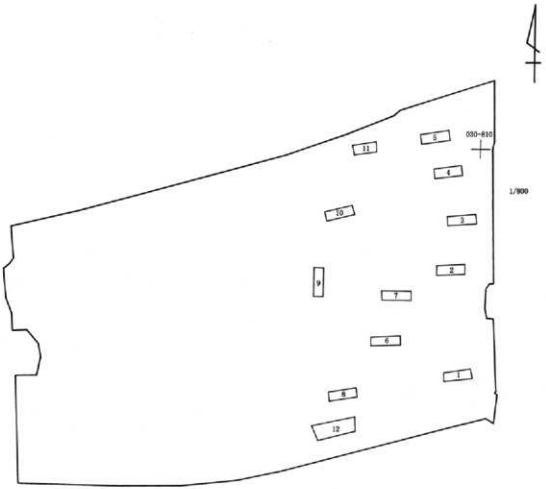
遺物　各ピットとも出土遺物はなかった。

規模　径10数cm～20数cmのものを中心とし、掘削深度は10数cm以下と浅いものが多い。

構造　プランは円形、方形、及び縦横比の小さい楕円形のものが殆ど占めているが、三角形、半円形、縦横比2：1程の楕円形若しくは隅丸方形を呈するものも見られた。

掘削底面は丸底を呈するものが多かったが、尖底を呈するものも少なくなかった。しかし平底を呈するものは殆ど見られなかった。

第5節　A区5面



第37図　A区5面試掘トレンチ配置図

A区5面は旧石器時代の遺物確認面であるが、実質的には4面からの試掘トレンチを掘削してだけで、以下にその所見を述べる。

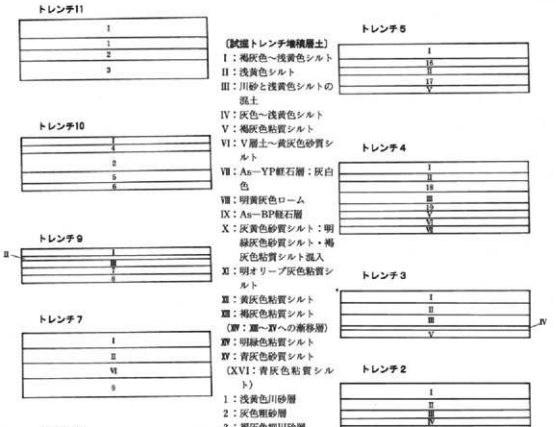
(1)　A区5面の試掘調査（第37・38図、PL17・18）

概要　A区4面の調査に並行して、東部に11本の試掘トレンチを設定し、掘削を行い、このうち東南の1号トレンチで深掘を行った。

また中、西部に於いては、記録を残せていないが、一部で掘削を行い、本線の上位面調査に伴って周囲の水田耕作時に側道との境に掘削した排水路の矢板撤去後の溝で観察を行っている。

これらのトレンチ調査の結果、A区に於いては旧石器時代の遺物を確認することはできなかった。また4面で確認された風倒木痕の土壌観察等も、行ったが旧石器時代の遺物は確認されなかった。

A区は本遺跡に於いても低地部に当る地域で、本遺跡自体が西側の岡屋敷遺跡と東側の波志江中屋敷遺跡遺跡（以下「中屋敷遺跡」とする）にとっては微高地間の谷地であることが確認された。後述のB区5面の所見と併せて、A区は更新世に於いては明瞭な谷地であったと判断され、堆積土壌も水成堆積のものが多く、旧石器時代の遺物が確認された岡屋敷遺跡とは全く異なった土壌の状態であった。



第38図　A区5面試掘トレンチ土層断面模式図

従って旧石器時代の遺跡は明確な微高地であるA区西側の岡屋敷遺跡に於いては確認されているが、本区以東ではA区には無く、本遺跡B区以東に可能性を残すものと判断した。尚、本遺跡東側の中屋敷遺跡に於いては、縄文時代早期の出土文化財を確認しているが、旧世紀時代の遺物は確認されず、もう一つ大きな谷を隔てた波志江西宿遺跡まで、当該期の遺物を確認することはできていない。

第６節　Ｂ区１面

(1) Ｂ　　区

Ｂ区は本遺跡に於いて微高地に当る部分である。西部はＡ区、即ち低地部に向かっており、東部は同じ微高地である波志江中屋敷遺跡遺跡（以下「中屋敷遺跡」とする）に続いている。広く見ると本遺跡は中屋敷遺跡と西側の岡屋敷遺跡に挟まれた低地部に当り、西に向かって徐々に低くなっているが、後述する屋敷遺構のある本区西部はその中にあって一端高まる部分に当る。一方、細かく見ると本遺跡Ｂ区の方が中屋敷遺跡よりは低く、中屋敷遺跡に近い東部は小さな低地部を形成し、近世以降は用水路が掘削されていた。昭和23年撮影の航空写真によるとＢ区は畠地であった。

Ｂ区の区域の呼称は本線部分をＢ区とし、東側の

第39図の１　Ｂ区１面全体図

中屋敷遺跡との境の公道下を調査した部分をBE区とした。また側道部分は伊勢崎市教育委員会によって調査され、北側側道部分を3区、南側側道部は2区とされ、3区北東部分をD区と呼称している。尚、これらは全体をB区と呼称し、細かい地区は2・3・D・BE・BW区の名称で、また本線部分のB区は「B区」とする。

第39図の2　B区1面全体図

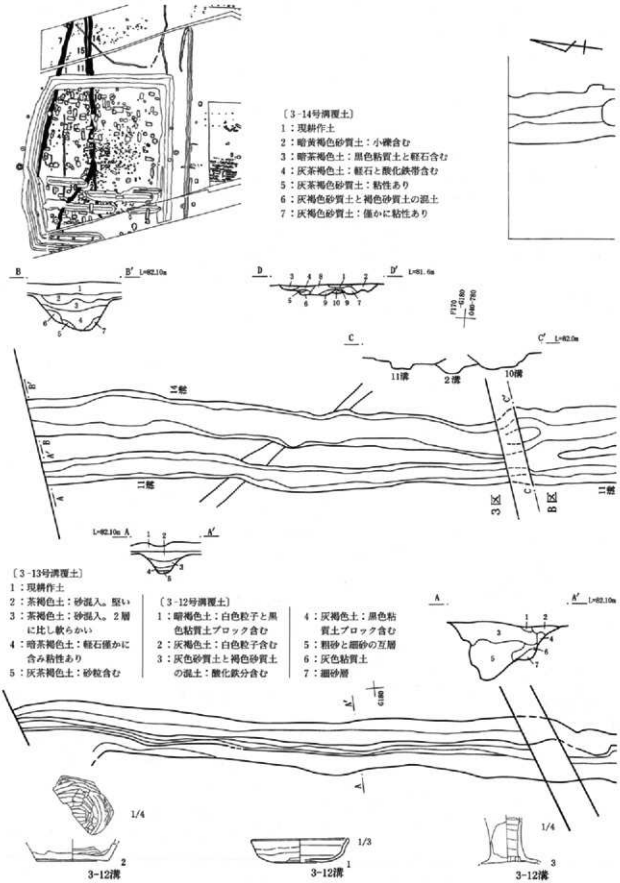
B区は4面の確認面を持つが、第4面で下位面への試掘調査を行っているので、これを加えた5面の調査成果を以下に報告する。尚、堆積層或いは調査期間との兼ね合いからBW・BE区と2・3・D区は（試掘を含み）2～3面の調査面を以って調査しているため、個々の遺構に照らして1～5面にそれぞれ分けているが、必ずしも正確に分類されていないことを付記する。

(2)　近代以降の耕作痕（第39図・PL19）

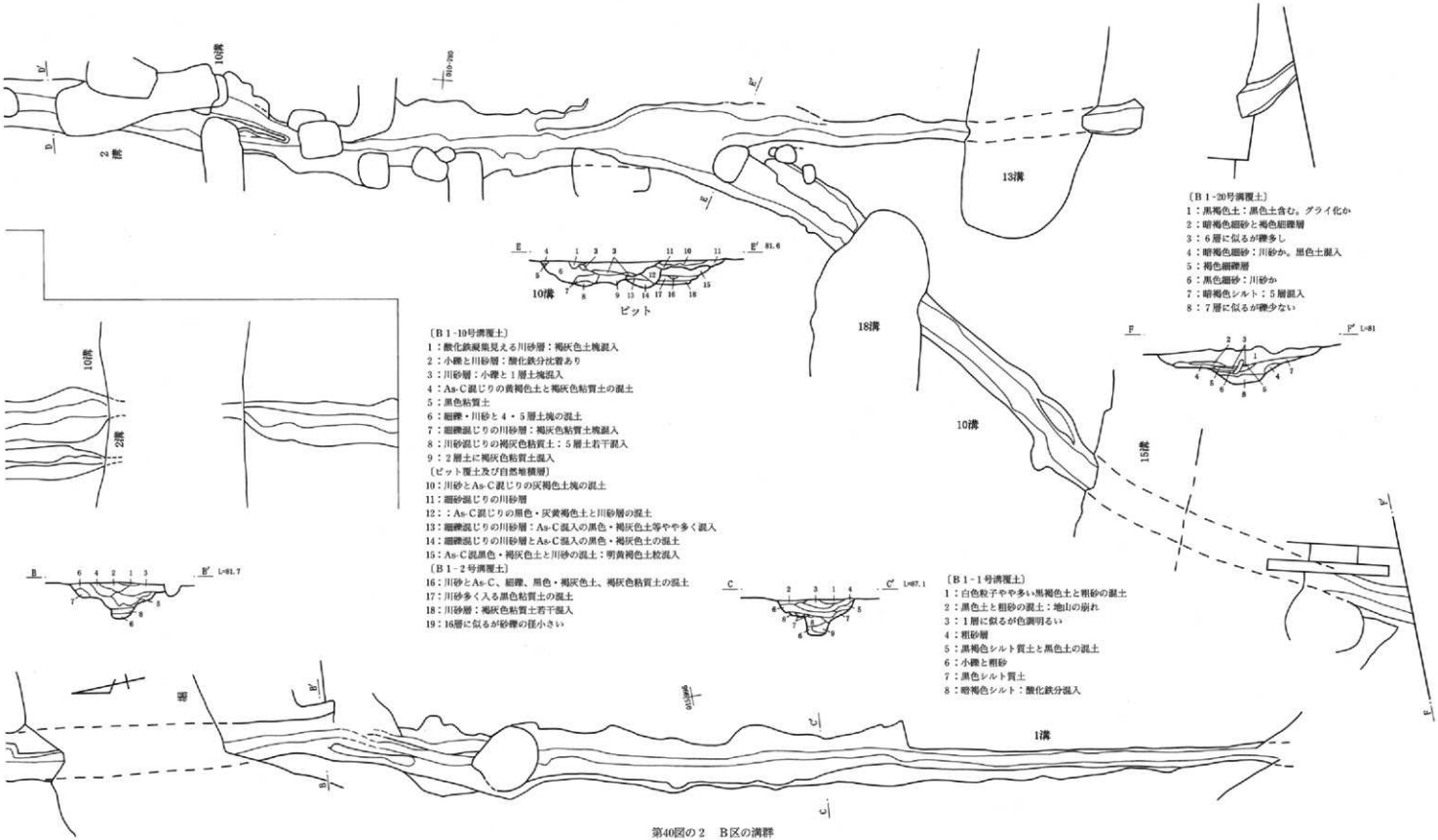
概要・規模・構造　B区1面では中世遺構の調査に伴ってB区南東部に耕作痕を確認した。これらは特に8×9m範囲に集中して見られた。不整形プランを呈するものが多いが、多くは東西方向に連なり、広く見ると溝様の連なりを呈するものであった。その規模は幅40cm以下、深さは凡そ10cm以下のものであり、連なりとして見た場合40～80cm間隔に掘削され、7～9mの長さで確認されている。

昭和23年米軍撮影の航空写真を元に作製した地形図によればその分布は畑と一致する。

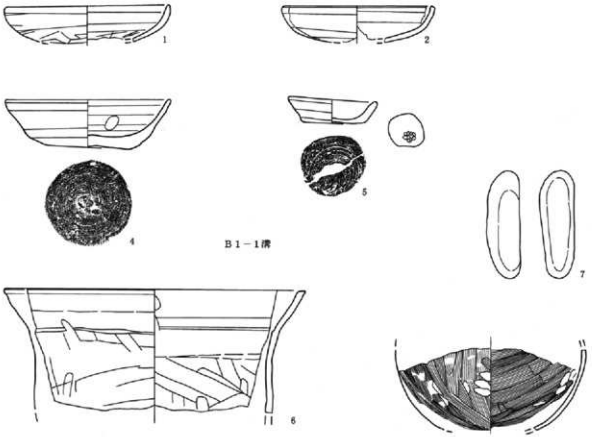
時期　これらの耕作痕は覆土の状況から昭和時代後期の圃場整備以前と判断されるもので、凡そ江戸時代後期以降の所産と認識される。



第40図の1　B区の溝群



第40図の２　Ｂ区の溝群



第41図　B1-1・10号溝出土遺物

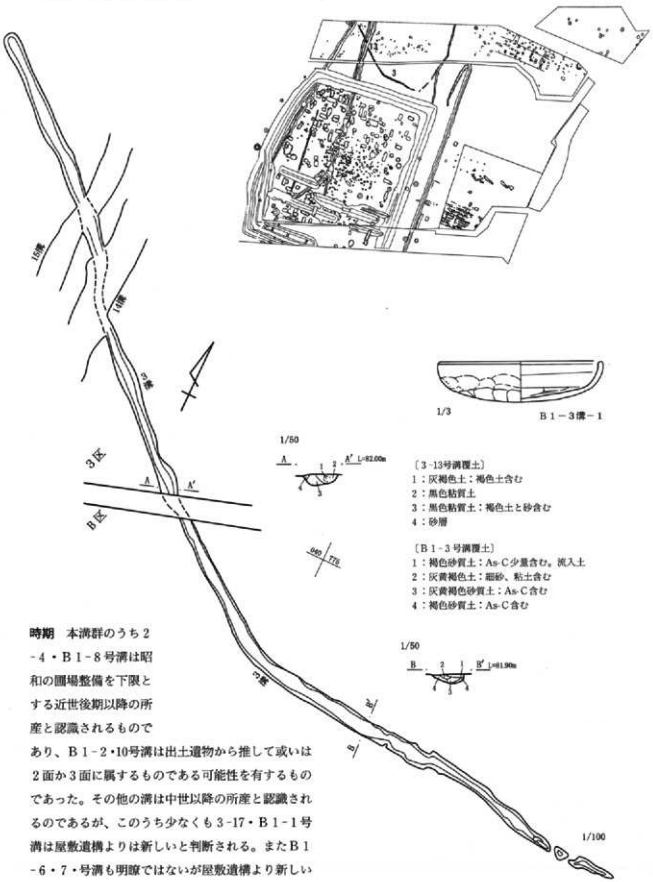
(3)　B区1面の溝群（第40～45図、PL20・21・37～39・57・59）

B区1面では20条余りの溝遺構を調査した。このうち本項では屋敷遺構に含まれないB区所在のB1－1～5・6a・6b・7・8・10・19・20号溝、2区所在の2-4号溝、3区所在の3－11・13～15・17号溝について述べることとする。

このうちB1－1号溝と3-17号溝、B1－2号溝内至10・20号溝・2-9号溝と3-14号溝、B1-11号溝と3-15号溝、B1-3号溝と3-13号溝、B1-4(・5)号溝と3-11号溝、B1-5号溝とB1-6号溝、B1-8号溝と2-4号溝、B1-16号溝と2-10号溝、B1-20号溝と2-9号溝は同一の溝である。またB1-2・10号溝とB1-11号溝、B1-10号溝とB1-2号溝、B1-5号溝とB1-4号溝は重複し何れも前者が新しく、新旧は特定できなかったがB1-6号溝と8号溝、B1-10号溝とB1-16号溝も重複している。

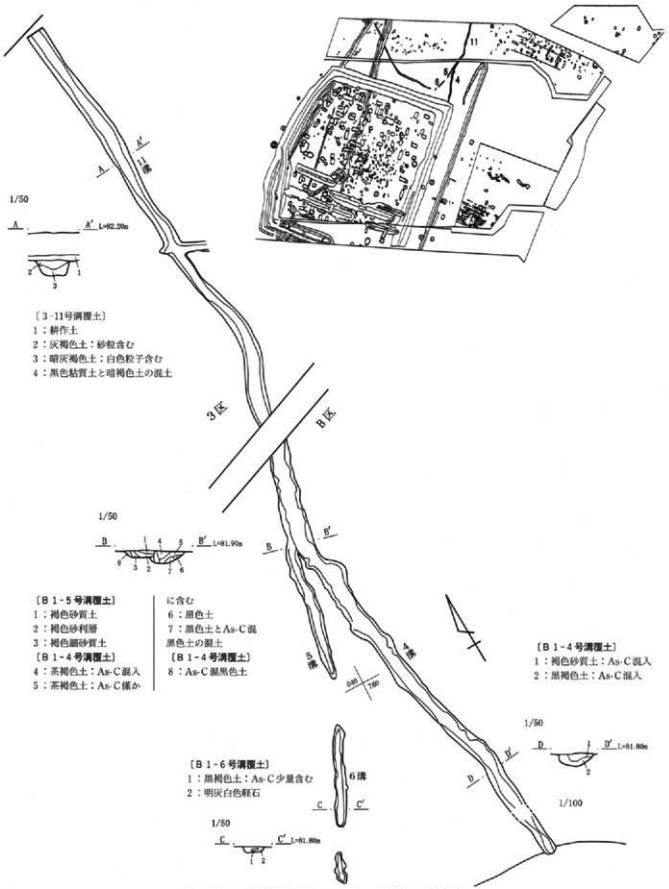
これらの溝のうちB1-8・2-4号溝は圃場整備に至るまで使用された農業用水路であった。これ以外の溝も覆土下位に川砂を混入するなど流水の痕跡の認められるものが多く、また走行が直線的で比較的長い距離を掘削しているものが多いことなどから、本溝群の各溝は一様に水路として使用されていたものと判断される。

遺物　本溝群の出土遺物はB1-1号溝では土師器坏(1・2)、須恵器坏(4)、かわらけ(5)、内耳鍋(6)、敲石(7)、こも編み石があり、B1-2号溝では古墳時代前期の土師器片が、B1-3号溝では土師器坏(1)、須恵器坏(2)、B1-6号溝では石塔の破片と思われるもの(3)の出土も見られた。また、B1-8号溝では軟質陶器鉢(1)や形象埴輪片(2)、B1-10号溝では古墳時代前期の土師器甕(1)、B1-11号溝では土師器坏(1)、B1-20号溝からは須恵器片の出土が見られた。



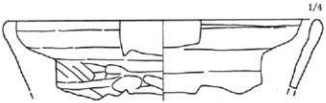
第42図　3-13・B1-3号溝と出土遺物

時期　本溝群のうち２-４・B１-８号溝は昭和の圃場整備を下限とする近世後期以降の所産と認識されるものであり、B１-２・10号溝は出土遺物から推して或いは２面か３面に属するものである可能性を有するものであった。その他の溝は中世以降の所産と認識されるのであるが、このうち少なくも３-17・B１-１号溝は屋敷遺構よりは新しいと判断される。またB１-６・７・号溝も明瞭ではないが屋敷遺構より新しい可能性を有している。

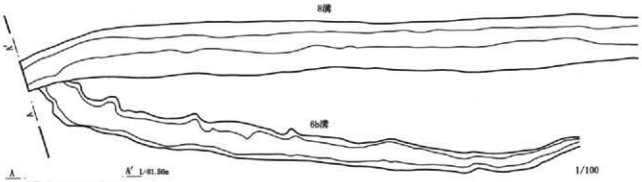


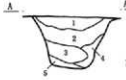
第43図　3-11号溝及びB1-4・5・6号溝と出土遺物

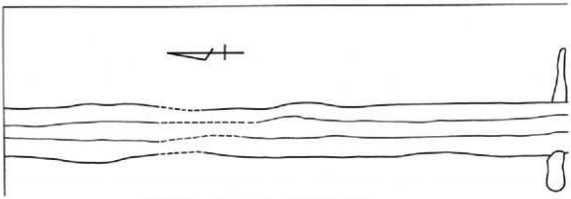
〔Ｂ１－８号溝覆土〕
１：黄灰色砂質土：As-A含む。近世以降耕土に近い
２：灰黄褐色土：As-C、川砂、酸化鉄と若干の３層土含む
３：灰黄褐色粘質土：２・４層土混入
４：褐灰色粘質土：黒褐色・にぶい黄褐色粘質土とAs-C混入
５：褐灰色粘質土と３層土の混土：明黄褐色・黒褐色粘質土粒混入



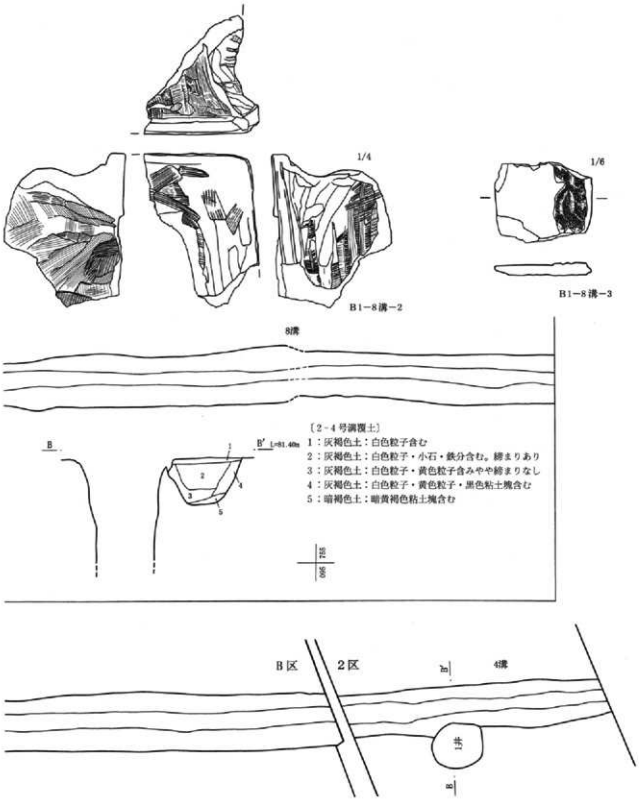
Ｂ１－８溝－１



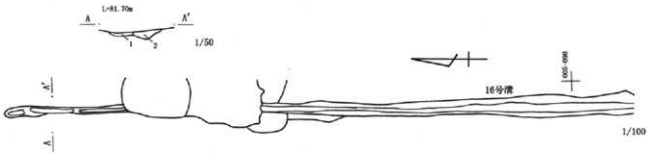




第44図の１　Ｂ１－８・２－４号溝と出土遺物



第44図の2　B1-8・2-4号溝と出土遺物



〔Ｂ１-16号溝覆土〕
１：暗褐色土：酸化鉄分多く混入
２：暗褐色土：酸化鉄分混入

第45図の１　Ｂ１-16・20号溝と２-９・10号溝

規模　(Ｂ１-１・３-17号溝)長さ：51.2m（１溝：38.0m、17溝：14.7m）　幅：163cm　深さ：80cm

（Ｂ１-２・３-14号溝）長さ：51.7m（２溝：38.2m、14溝：13.0m）　幅：100cm　深さ：31cm

（Ｂ１-３・３-13号溝）長さ：28.4m（３溝：16.3m、13溝：12.9m）　幅：48cm　深さ：15cm

（Ｂ１-４・３-11号溝）長さ：25.8m（４溝：13.3m、11溝：11.8m）　幅：54cm　深さ：16cm

（Ｂ１-５・６ａ号溝）長さ：9.4m（５溝：3.9m、６溝：4.2m）　幅：39cm　深さ：９cm

（Ｂ１-６ｂ号溝）長さ：14.6m　幅：104cm　深さ：15cm

（Ｂ１-８・２-４号溝）長さ：62.2m（８溝：54.9m、４溝：7.2m）　幅：159cm　深さ：70cm

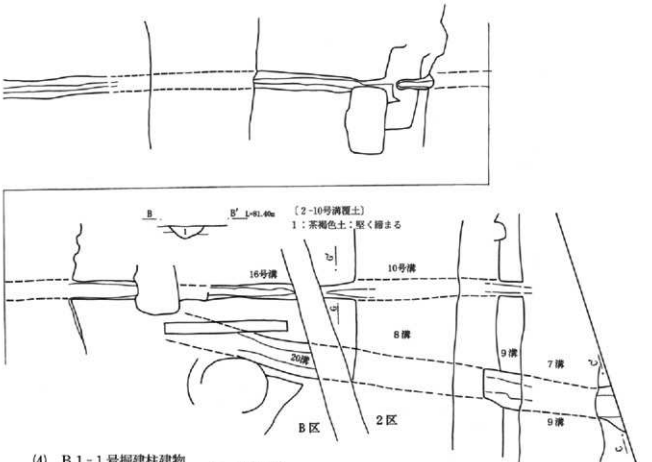
（Ｂ１-10・２-９・３-14号溝）長さ：59.4m（10溝：38.0m、14溝：13.0m、９号溝：3.7m）　幅：87cm　深さ：52cm

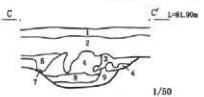
（Ｂ１-11・３-15号溝）長さ：18.9m（11溝：5.4m、15溝：12.9m）　幅：78cm　深さ：27cm

（Ｂ１-16・２-10号溝）長さ：42.9m（16溝：36.9m、10溝：5.4m）　幅：47cm　深さ：10cm

構造　Ｂ区１面の屋敷外所在溝のうちＢ１-１・３-17号溝は南南西方向に流下する直線的な走行を取るものであり、Ｂ１-２・10・11・20・２-９・３-14・15号溝は真南に近い南南西方向に走行を取ってやはり直線的に流下するが、このうち10・20号溝は、南寄りで西に4.5m程揺れる緩やかなクランク状を呈する折れを見せている。一方、３-13・Ｂ１-３号溝はく字状のプランを呈し、中位より西では北西-南東に走行を取っており、東部で屈曲して東に走行を変じている。また３-11・Ｂ１-４号溝は緩やかに蛇行しながら南方向に流下するものであり、これから分岐するように在るＢ１-５・６ａ号溝は緩やかな弧を描きながら南西方向に変じている。Ｂ１-６ｂ号溝はＢ１-８号溝から分岐するように北東方向から入って直ぐに南に変じておおむね直線的に流下し、Ｂ１-８・２-４号溝は南方向に直線的に流下するが、北端で西に傾いている。

掘削形態はＢ１-１・３-17号溝は薬研堀状を呈する以外は箱堀状を呈している。





〔2-9号溝覆土〕
1・2：耕作土
3：灰茶褐色土：細砂つまり堅く締まる
4・6・10：茶褐色土：細砂と細粒石混入
5：灰茶褐色土：細砂と細かいもの中心の粒石含む
7：黒茶褐色土：粘性ややり締まる。掘り過ぎか
8：暗灰褐色土：細砂と粘質土混入。堅く締まる
9：黒茶褐色土：粘性ややり。7層に同じか

第45図の2　B1-16・20号溝と2-9・10号溝

(4)　B1-1号掘建柱建物

(第46図、PL22)

概要　本建物はB1-350・351・353・367～376号ピットの13基のピットで構成される掘建柱建物であり、B区東半部中程、屋敷から10m程東に離れた箇所に位置している。

本建物は近代以降の耕作遺構と重複するものの、周囲に本建物と同時期と認識される遺構は認められなかった。

遺物　本建物から出土遺物を得ることはできなかった。

時期　本建物の時期を特定することはできなかったが、建物及び柱穴の規模、構造等から推して概ね室町時代以降の所産として認識されるものである。

規模　全体：930×435cm　建物規模：888×400cm

〔桁間〕：220.13±6.13cm（213～228）

〔梁間〕：199.25±4.27cm（194～204）

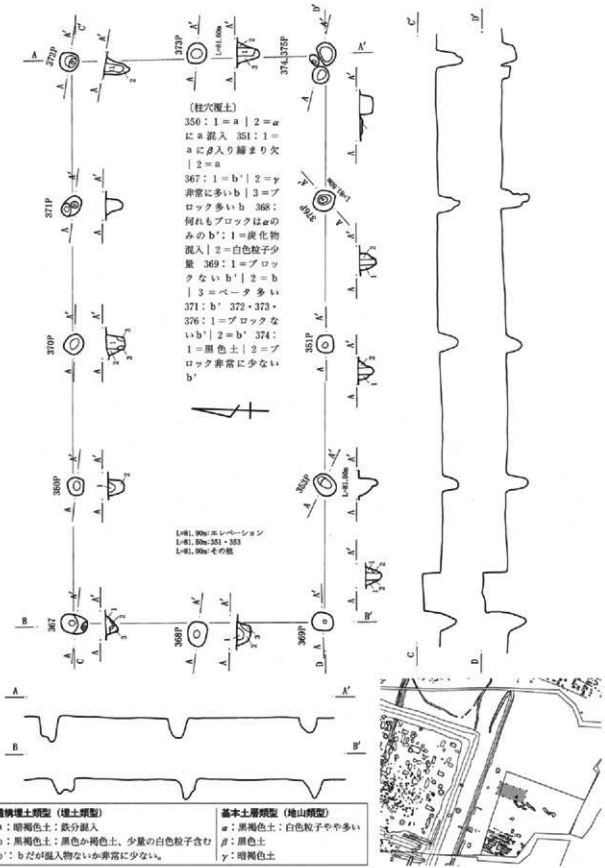
〔柱穴〕（個々の柱穴規模は巻末ピット一覧参照）

径：30.77±4.96cm　（24～42cm）

深さ：33.23±4.96cm　（23～62cm）

構造　本建物は東西方向に棟方向を持つ4×2間の掘立柱建物である。棟持柱を有するが、その建て位置は10～15cm程外側に出ている。また、南東隅部には374・375号ピットの2基の柱穴が東西に連なっていて前者が位置的に主柱穴と認識されるが、後者は副柱であった可能性を有するものである。

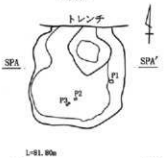
尚、柱の径は柱痕の断面観察から12cm程と想定されるものである。



遺構埋土類型（埋土類型）	基本土層類型（地山類型）
a：暗褐色土：鉄分混入	α：黒褐色土：白色粒子やや多い
b：黒褐色土：黒色か褐色土、少量の白色粒子含む	β：黒色土
b'：bだが混入物ないか非常に少ない。	γ：暗褐色土

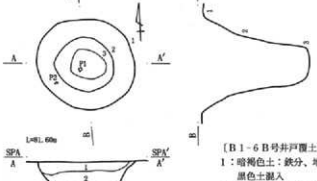
第46図　B１-１号掘立柱建物

11井戸

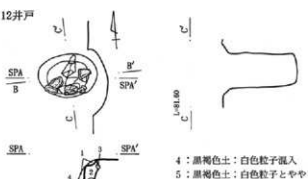


〔B1-11号井戸覆土〕
1：黒褐色土：暗褐色土含む。鉄分多く赤味掛かる
2：黒褐色土：鉄分多し
3：黒褐色土：鉄分等含む
（右下に続く）

6B井戸



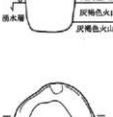
12井戸



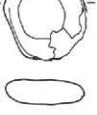
〔B1-6B号井戸覆土〕
1：暗褐色土：鉄分、地山黒色土混入
2：暗褐色土：1層に似るが1層より赤く黒色土少ない
3：暗褐色土：地山黒色土混入するが1層に比し少ない

4：黒褐色土：白色粒子混入
5：黒褐色土：白色粒子とやや少量の鉄分含む
6：暗褐色土：同上
7：黒褐色土：鉄分やや少量
8：黒褐色土：鉄分やや少量。As-B二次堆積か
9：黒褐色土：鉄分少ないが3・8層に比し粗粒
10：9層に似る
11：黒褐色土粘質土

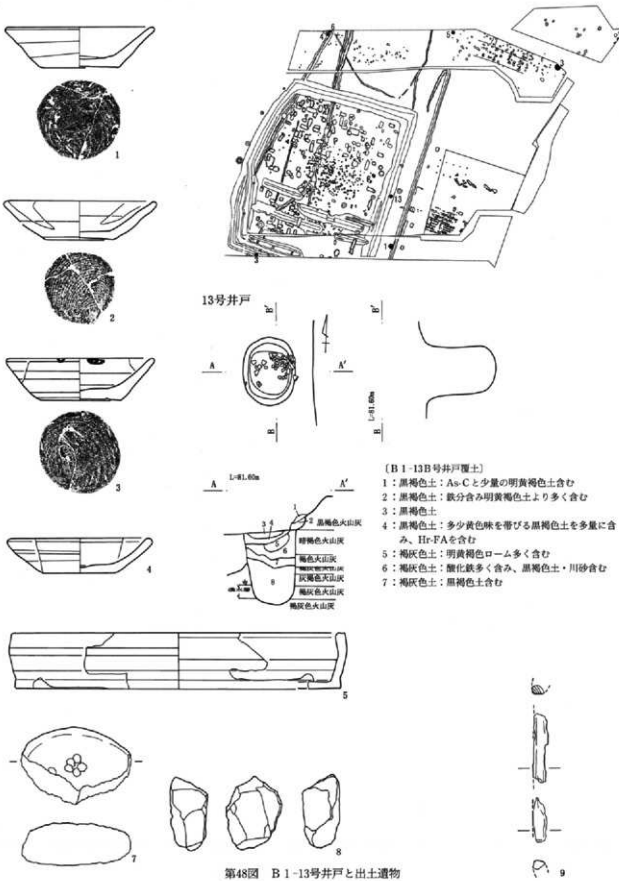
1：暗褐色土：鉄分含む
〔B1-12号井戸覆土〕
2：1層に似るが鉄分少ない
3：黒色土：褐色粒子混入
4：暗褐色土：鉄分含むが少量
5：黒褐色土：暗褐色土含む
6：黒褐色土：鉄分と少量の黒色土含む
7：黒褐色土：褐色土と鉄分含
8：黒褐色土：褐色土と鉄分含
9：暗褐色土：鉄分やや多い
10：暗褐色土：鉄分含む



12井-1

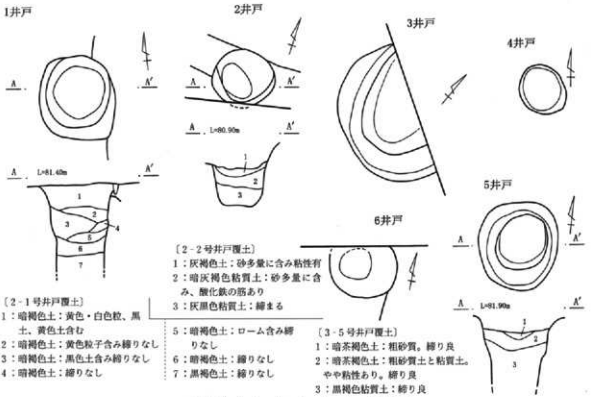


第47図　B1-6B・11・12号井戸と出土遺物



〔Ｂ１-13Ｂ号井戸覆土〕
１：黒褐色土：As-Cと少量の明黄褐色土含む
２：黒褐色土：鉄分含み明黄褐色土より多く含む
３：黒褐色土
４：黒褐色土：多少黄色味を帯びる黒褐色土を多量に含み、Hr-FAを含む
５：褐灰色土：明黄褐色ローム多く含む
６：褐灰色土：酸化鉄多く含み、黒褐色土・川砂含む
７：褐灰色土：黒褐色土含む

第48図　Ｂ１-13号井戸と出土遺物



第49図　2-1・2・3・4・5・6号井戸

(5) 井　　戸

(第47図、PL22・23・30・31・51・52・56)

概要　本項ではB・2・3・BW区1面で調査した井戸のうち、屋敷遺構に拘わらない可能性の考えられるB1-6B・11～13A・BW-1～6・2-1～2・3-3～6号井戸の16基について報告する。尚、BW-3・4号井戸は屋敷に伴う可能性も有する。

これらの井戸は屋敷の東側にB1-6B・12・13・2-1号井戸、南側に2-2号井戸、西側にBW-1～6号井戸、北側に3-3～5号井戸が在る。また、B1-6B・12・13・2-2・BW-3・4号井戸は屋敷周堀と重複するが、B1-12号井戸が堀に切られ、B1-13号井戸が堀を切るものの、4基については他新旧を特定することはできなかった。

また記録化が十分でないものもあったが、アグリの形成の認められたのはBW-2・3・5・6号井戸のみで、多くはその形成が認められず、短期間の使用であったものと判断することができる。

遺物　B1-6B号井戸からは五輪塔地輪片かと思われる不明石製品(1)、B1-11号井戸からは土師器・須恵器片、B1-12号井戸からは礎石(1)と枕(2)、b1-13号井戸からはかわらけ(1～3)・須恵器坏(4)・焙烙鍋(5)・石鉢(6)・敲石(7)・火打石(8)・木製角棒(9)やすだれ状の破片と思われる竹片が複数出土した。またBW-2号井戸からは台石(1)、BW-6号井戸からは砥石(1)と磨石(2)の出土が見られた。

時期　屋敷周堀との関係からB1-12号井戸は15世紀以前の所産として把握され、B1-13号井戸は15世紀以降の所産として把握されるが出土遺物からは15世紀前半以降という年代が与えられる。これ以外の井戸は何れも中世以降のものと把握されるものの、時期特定には至らなかった。

規模　(B1-6B号井戸) 径：157×144cm 深さ：172cm

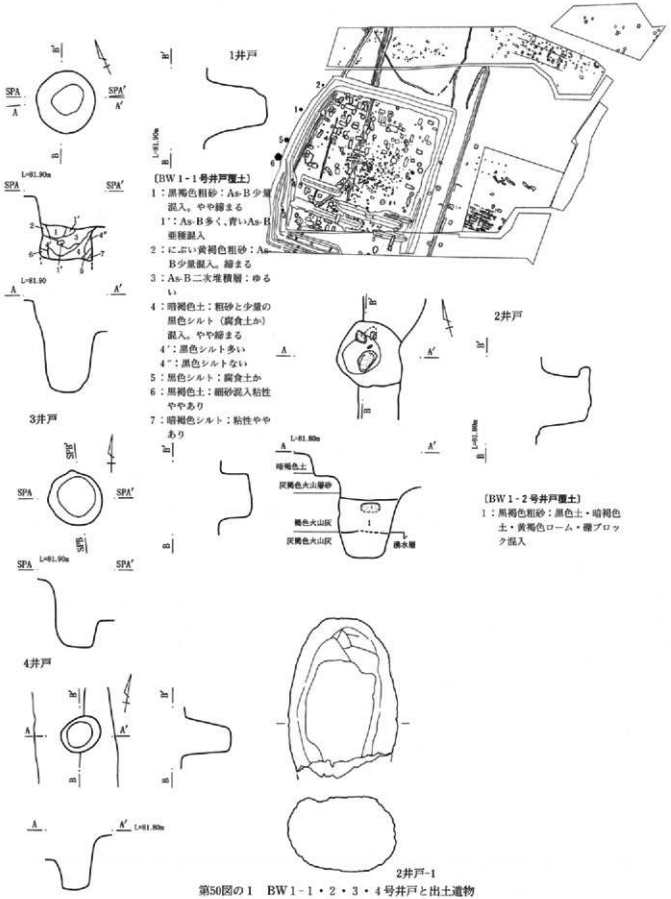
(B1-11号井戸) 径：152×163cm 深さ：47cm

(B1-12号井戸) 径：94×70cm 深さ：119cm

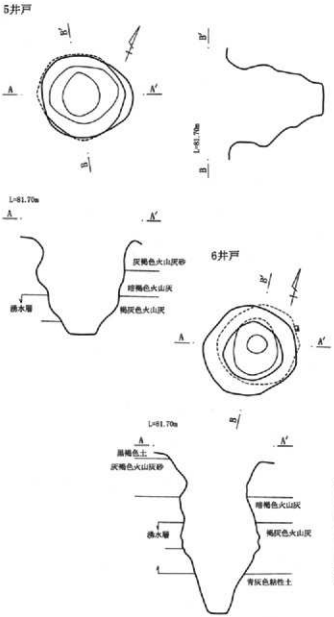
(B1-13号井戸) 径：83×108cm 深さ：120cm

(2-1号井戸) 径：122×136cm 深さ：(137)cm

(2-2号井戸) 径：100×(86)cm 深さ：102cm



第50図の1　BW 1 - 1・2・3・4号井戸と出土遺物



第50図の2　BW1-5・6号井戸と出土遺物

(3-3号井戸) 径：216×(121)cm 深さ：101cm
(3-4号井戸) 径：70×85cm 深さ：—cm
(B1-11号井戸) 径：152×163cm 深さ：47cm
(B1-12号井戸) 径：94×70cm 深さ：119cm
(3-5号井戸) 径：128×142cm 深さ：131cm
(3-6号井戸) 径：109×(86)cm 深さ：91cm
(BW1-1号井戸) 径：96×95cm 深さ：100cm
(BW1-2号井戸) 径：(100)×100cm 深さ：112cm
(BW1-3号井戸) 径：86×80cm 深さ：53cm
(BW1-4号井戸) 径：65×53cm 深さ：77cm
(BW1-5号井戸) 径：144×128cm 深さ：156cm
(BW1-6号井戸) 径：148×138cm 深さ：254cm

構造　B1-6B・3-5・BW-1号井戸は円形プラン、BW1-2・6号井戸は隅丸方形プラン、BW1-5号井戸は楕円形プランの朝顔型、B1-11号井戸は方形の箱型の溜井型、B1-12・13・BW-4号井戸は楕円形プラン、2-1・2・BW-3号井戸は隅丸方形プランの井筒型を呈している。

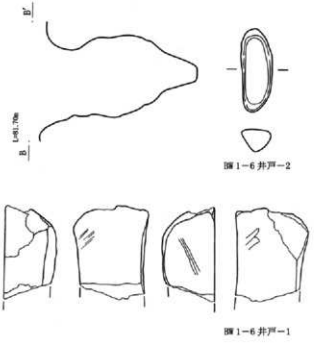
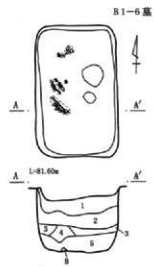


図1-6井戸-2

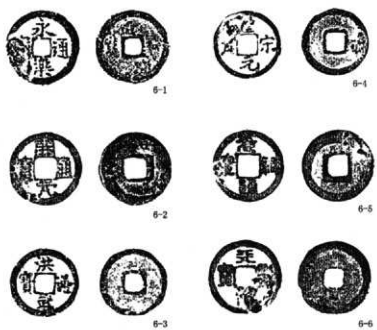
図1-6井戸-1

湧水箇所は底面からB1-6B号井戸で68cm、B1-12号井戸で47cm、BW1-2号井戸で44cm、BW1-2号井戸で44cmに、B1-13号井戸で底面から上9～21cm、BW1-5号井戸で同じく21～78cm、BW1-6号井戸で同じく63～66cmの間に確認されている。またBW-2号井戸は北東側に底面から18cmの間に奥行き15cm程の、BW-5号井戸で底面から75・93cm付近に高さ60cm、奥行き13cm以下、BW-6号井戸で底面から84・172cm付近に高さ60cm、奥行き10cm程のアグリが形成されている。

〔B1-3号墓壙覆土〕
1：黒褐色土：明黄褐色ロームを含むが、非常に少ない。植物痕か
2：暗褐色土：黒褐色土・黒色土を含むが少なく小さい
3：黒褐色土：黒色土含むが少ない。骨を含む



〔B1-6号墓壙覆土〕
1：黒褐色土：褐色土と少量の白色粒子含む
2：黒褐色土：鉄分混
3：黒褐色土：黒色土多く含む
4：黒褐色土：黒色土と少量の白色粒子含む。締りなし
5：黒褐色土：黒色土等混入物少ない



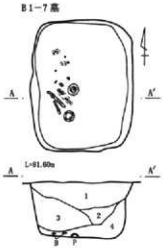
第51図の1　B区1面屋敷外の墓壙と出土遺物（4/5）

(6)　墓壙（第51図、PL32・33・54）

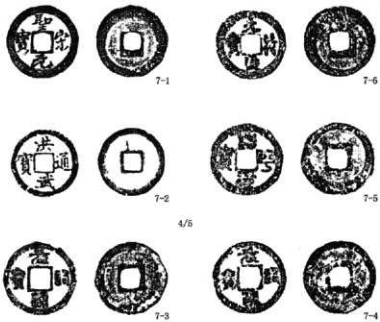
概要　本項ではB区1面の墓壙のうち屋敷外に在るB1-3・6・7・2-1号墓壙について記す。

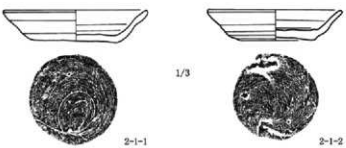
このうち人骨の出土したのはB1-3・6・7号墓壙の3基で、共に中世の土壙墓に典型的な北頭位西向横臥屈葬による埋葬であった。尚、人骨の鑑定所見については第4章第3節に掲載する。

これらの墓壙は何れも屋敷周堀の東肩より7.5m程の位置に掘削されており、屋敷外周に想定される緩衝地帯のような空白域の外縁、或いはその位置に布設されていた道路沿いに掘削されたものと思慮される。尚、B1-3・2-1号墓壙の時期は明瞭ではないが、・6・7号墓壙は屋敷廃絶後の掘削であるものと判断される。



〔B1−7号墓墳覆土〕
1：黒褐色土：黒色土、鉄分と少量の白色粒子混入
2：黒褐色土：1層に似るが混入土少ない
3：黒褐色土：黒褐色土・黒色土少ない
4：黒褐色土：2層に似るが黒色土少ない

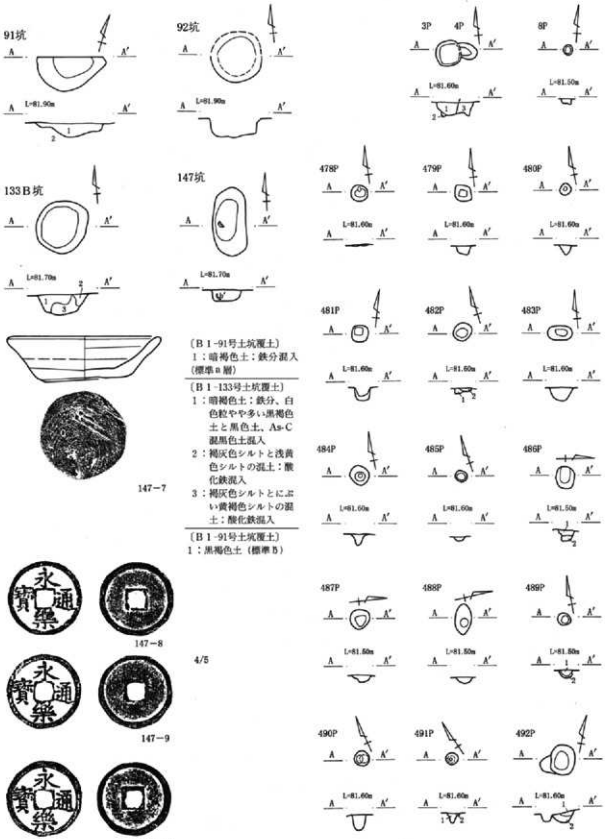




第51図の2　B区1面屋敷外の墓壙と出土遺物

遺物　出土遺物についてみると、かわらけは6号墓壙から1枚、7号墓壙から2枚（2壙−1、6壙−7、7壙−1・2）出土し、模鋳銭中心の渡来銭が6・7号墓壙から各6枚が出土し、6号墓壙からは永楽銭も出土した。尚、かわらけは2−2号墓壙では遺体の下肢部分に出土し、銭は胸部か腹部附近に出土する傾向が見られた。

時期　これらの墓壙の時期については出土遺物から推してB1−6号墓壙と2−1号墓壙は15世紀後半、B1−7号墓壙は16世紀に埋葬されたものと判断される。尚、B1−3号墓壙については出土遺物もなく時期の特定には至らなかったが、埋葬の状態から概ね中世の所産と判断され、少なくとも17世紀より下ることはない。

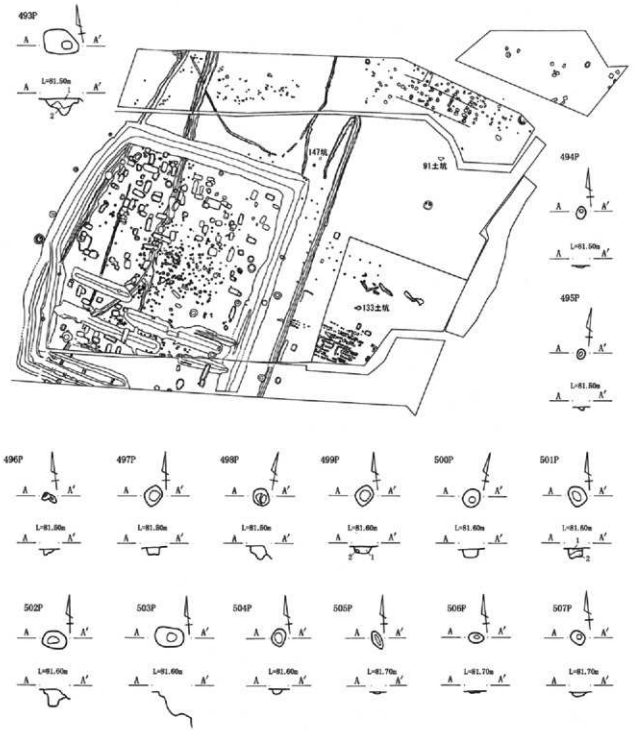


〔Ｂ１-91号土坑覆土〕
１：暗褐色土：鉄分混入（標準ａ層）

〔Ｂ１-133号土坑覆土〕
１：暗褐色土：鉄分、白色粒やや多い黒褐色土と黒色土、As-C混黒色土混入
２：褐灰色シルトと浅黄色シルトの混土：酸化鉄混入
３：褐灰色シルトとにぶい黄褐色シルトの混土：酸化鉄混入

〔Ｂ１-91号土坑覆土〕
１：黒褐色土（標準ｂ）

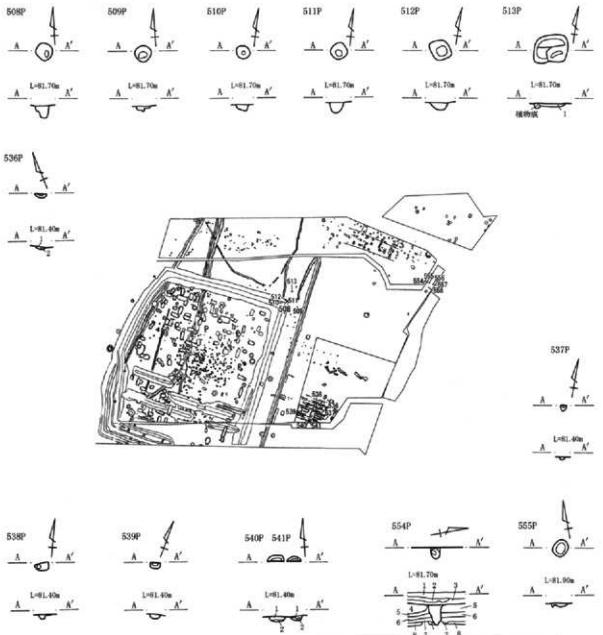
第52図の１　Ｂ区１面屋敷外の土坑及びピット群（その１）



遺構埋土類型（埋土類型）
a：暗褐色土：鉄分混入
b：黒褐色土：黒色土か褐色土、少量の白色粒子含む
b′：bだが混入物ないか非常に少ない
基本土層類型（地山類型）
α：黒褐色土：白色粒子やや多い
β：黒色土
γ：暗褐色土

〔B区1面屋敷外所在ピット覆土〕（太字はピット番号）
3：1＝b｜2＝γか｜3＝b、混入物少　8：β混入のa　478・483・484・485・498・500・502・505・506・507：b′　479・480：α混入のb　481・490：γ混入のb　482：：1＝α混入のb｜2＝α多いb　486：1＝混入物ないb′｜2＝b　487・488：b　489：1＝混入物ないb′｜2＝b′(10YR3/2)　491：1＝混入物ないb′｜2＝β・As−C混土　192：1＝a｜2＝混入物ないb′　493：1＝暗褐色粗砂｜3＝：b　494・495：黒褐色シルト　496：白色粒混入の黒褐色シルト　497：混入物非常に少ないb′　499：1＝b′｜2＝β塊　501：1＝b′｜2＝α多いb　504：α

第52図の2　B区1面屋敷外のピット群（その1）



遺構埋土類型（埋土類型）
a：暗褐色土：鉄分混入
b：黒褐色土：黒色土か褐色土、少量の白色粒子含む
b'：b だが混入物ないか非常に少ない
基本土層類型（地山類型）
α：黒褐色土：白色粒子やや多い
β：黒色土

〔B区１面屋敷外所在ピット覆土〕（太字はピット番号）
508・510・512・536：b'　509：白色粒多いb'　511・539：b　513：暗褐色b'　538：炭化物少量混入のb'　540・541：1＝b'｜2＝b　554：1＝現耕土｜2＝圃場整備客土｜3＝鉄分沈着の２層土｜4＝固いa｜5＝白色粒・鉄分多いa｜6＝白色粒・鉄分少量の黒褐色｜7＝白色粒混入のa｜8＝β・As－C混土　557：1＝現耕土｜2＝鉄分入るa｜3＝固いa｜4＝黒褐色α｜5＝4層より暗いα｜6＝β・As－C混土　558：β混入のa

第53図　B区１面屋敷外のピット群（その２）

規模　（B1-3号墓壙）径：56×83cm　深さ15cm
（B1-6号墓壙）径：87×137cm　深さ68cm
（B1-7号墓壙）径：109×140cm　深さ60cm
（2-1号墓壙）径：100×121cm　深さ40cm

構造　4基の墓壙のうちB1-3・7・2-1号墓壙は隅丸長方形、B1-6号墓壙は長方形のプランを呈する。

掘削形態は何れも箱形で底面は平底を呈する。

尚、土層断面に於いて棺の痕跡等を確認することはできなかった。

(7)　土坑（第52図、PL36・55）

概要　本項ではB区1面に確認された土坑のうち屋敷外に位置しているB1-91・92・133B・138・147号土坑の5基の土坑について述べることとする。

これらの土坑はB区南東部に分布しており、近現代の耕作遺構と絡む他は、中世を中心とする時期の遺構との重複関係は認められなかった。尚91号土坑は北半が切られていて、全容を確認することはできなかった。

また147号土坑は出土遺物とその出土状態から墓壙であった可能性が考慮されるものの、掘削意図を特定することはできなかった。他の土坑についても掘削意図を特定することはできなかった。

遺物　92号土坑から土師器甕片、147号土坑からはかわらけ(7)と永楽通寶(8～10)の出土が見られたが、91・133B・138号土坑からの遺物の出土は認められなかった。

時期　本土坑群の土坑のうち147号土坑は出土遺物から16世紀後半の所産と認識されるものであるが、他の土坑については中世以降、近世中期以前の所産と認識できるだけで細かい時期の特定に至ることはできなかった。

規模　（巻末土坑・ピット一覧参照）

構造　91号土坑は隅丸方形プランと推定されるもので、92号土坑は円形、133B号土坑は隅丸方形、147号土坑は長円形のプランを呈する。

掘削形態は何れも箱状を呈し、底面は平底状を呈する。

(8)　ピット（第52～54図、PL36）

概要　本項ではB区1面所在ピットのうち屋敷外に在るB1-3・8・478～492・494～513・536～541・554～558及び2-1～20号ピットについて述べる。

本ピット群のうちB区所在のピットは区南東部を中心に分布している。一方3区に於いては1面に属する可能性を有するピット様の遺構が区全体に見られたが、このうち明確な遺構として認識された遺構が3区東寄りに確認されている。これらのピットはB1-3号ピットがB1-4号ピットを切っている以外はピット同士の重複は認められなかった。

各ピットは形態的に柱穴、或いは小型のものは杭の打設痕の可能性を有する。特に2区のピット群にあっては掘立柱建物となる可能性のあるものもあったが、掘削意図を特定することはできなかった。

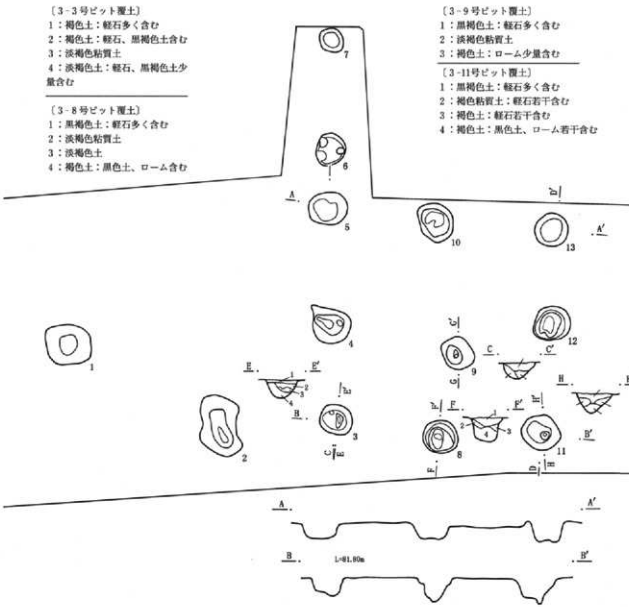
遺物　本ピット群各ピットからの遺物の出土は見られなかった。

時期　出土遺物もなく、各ピットの時期を特定することはできなかった。尚、覆土及びピットの規模から推してB区のピット群は概ね中世の所産と思慮される。また3区のピット群も中世の所産として取り扱ったが、これらはその規模から古代に遡るものである可能性を有するものである。

規模　巻末土坑・ピット一覧参照

構造　本ピット群のピットのプランはB1-3・479～482・484・492・494・497～499・503・504・507～509・511～513・538・539・555・556号ピット及び3-9・11・12・15・17～20号ピットは方形、B1-4・483・486・488・501・502・505・506・536・537・540・541号ピット及び3-4～6・10・14・16号ピットは楕円形、B1-8・478・485・489～491・495・500・510・554・557・558号ピット及び3-3・7・8・13号ピットは円形、B1-487・493号ピット及び3-1号ピットは台形、B1-496号ピットは不整形、3-2号ピットは台形を呈する。

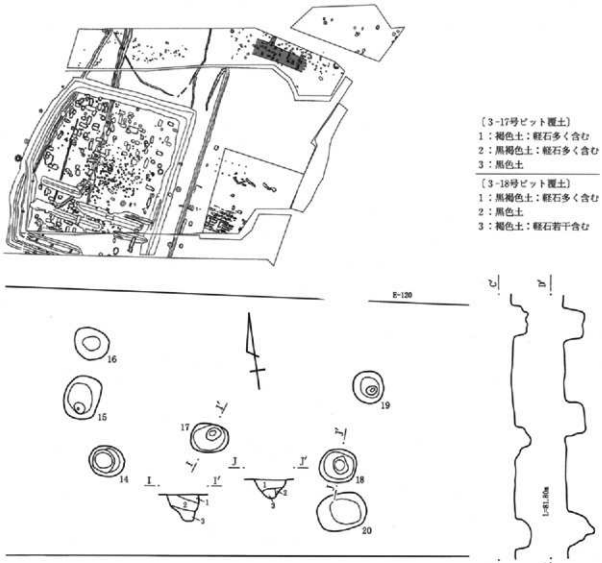
掘削形態は多様であったが、底面はB1-3・4・



第54図の１　２区１面のピット群

478・479・481・486・494・497・499～502・505・506・508・509・513540・541・557・558号ピット及び３-４・５・12・13号ピットは平底、Ｂ１-480・481・484・491・493・495・496・498・510・554・556号ピット及び３-10・11・17・18号ピットは尖底、Ｂ１-483・485・487～490・492・503・504・507・511・512・536～539・555号ピット及び３-３・10号ピットは丸底を呈する。

尚、３区のピット群のうち西寄りに所在する３-３・５・７・８・10・11・13号ピットは１棟の掘立柱建物となる可能性が考慮され、同様に３-１・４・６・12号ピットも掘立柱建物となる可能性が考慮される。



第54図の2　2区1面のピット群

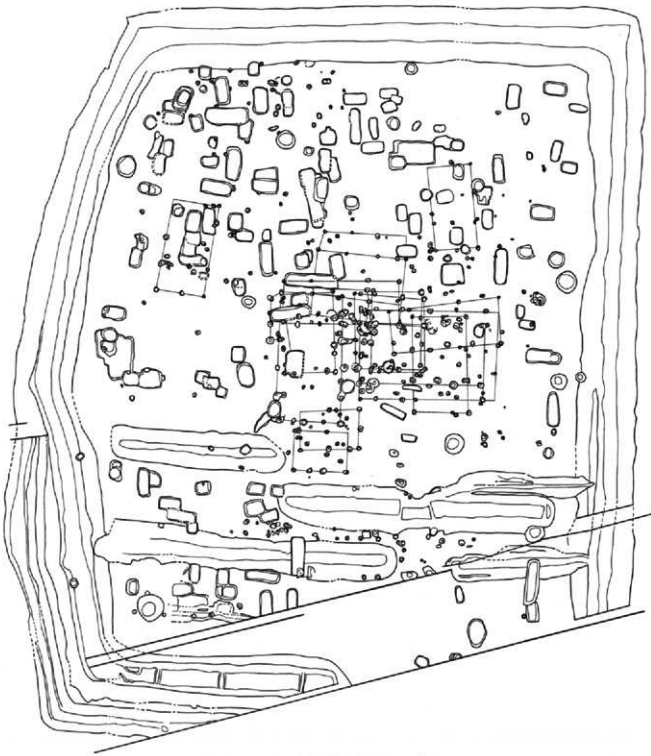
第6節の2　屋敷遺構

(1) 屋敷遺構の概要（第55図、PL24）

概要　B区1面では西寄りに屋敷遺構1ケ所を確認、調査した。この屋敷遺構は本遺跡に於ける東西両側の浅い谷地形に挟まれた微高地に当たる区域に造られていたもので、未周知のものであった。屋敷の規模は半町クラスに分類される小規模なものではあったが、北側の主郭と、その南に在る主郭に比べて南北方向に狭い副郭（以下「二郭」とする）の2つの郭から成るものであった。尚、本線及び南側側道の発掘調査を合わせた範囲の発掘調査によって、二郭の南東隅部を除く屋敷遺構の大半は調査できたものと認識している。

この屋敷遺構は、上述のように2つの郭で構成される遺構として確認されたのであるが、郭内に確認された堀の状況から推して、当初は0.7間幅規模であまり掘削深度の深くない薬研堀によって囲まれた単郭方形の屋敷（以下「1期とする」）として建設されたものと想定される。そして次の段階で南に拡張し、

概ね2間幅規模の箱堀に囲繞された単郭の屋敷遺構として整備され（以下「2期」とする）、更に南に拡張されて、堀によって南北に区画される2郭構成の屋敷遺構に（以下「3期」とする）造り変えられている。尚、第3期では基本的な構造は変わらないものの、南西隅の堀が一回り内側に掘り直されているため、早い段階のものを「3前期」、最終段階のものを「3後期」と表記する。



第55図　B区1面屋敷遺構全体図（S＝1/300）

このように主郭の規模は時期によって増減があるため、それに伴って郭内に於ける正確な位置は異なるのであるが、大きく見て主郭は中央部東寄りから南にかけての内区と、この東・北・西側を包み込むように在る外区に分けることができ、内区には柱穴群が集中しているものの、土坑等の掘削は少ないため、建物の分布域と認識される。尚、これらの柱穴群については宮本長二郎先生の御尽力で17棟の建物が確認(第4章第1節参照)されている。これに対して外区は土坑、井戸、墓壙が集中して柱穴の分布が薄いのであるが、このうち墓壙は出土遺物から推して時期の異なる可能性が考慮されるため、所謂屋敷墓となるものではなく屋敷廃絶後の土地利用の中で埋葬場所として選地されたものと考えられる。こうした点から外区は居住域に対する貯蔵区、或いは水場と使用されたものと認識されるものである。

一方、二郭には土坑、井戸は掘削されるものの建物はあまりないため、位置的に武者溜り的性格のものであったか、主郭の外区と同様に貯蔵域等の性格のあったことが想定される。

尚、郭の外周部に柵或いは塀の設置の痕跡は確認できなかった。また土塁の設置は遺構の分布状況から推して内堀の内側での設置の可能性が考慮されるが、外堀に面する土塁についてはその可能性は否定されないものの証左を得るには至らなかった。こうした状況から、本屋敷遺構は時期によっては生垣を廻らせていた可能性も考慮されるのである。

時期　出土遺物から推して、本屋敷遺構は概ね15世紀段階の所産と判断される。

尚、周堀の上述のように3時期に分け得る遺存状態と、第3期に於いて西堀南半とこれに続く南堀で新旧2条に分かれることを併せて4期、更に内堀の一つB1-13号溝の土橋の状態が3時期に分けられることを勘案すると、少なくも5期以上の相対的な時期区分が行えるのである。また、第5章に掲載した宮本長二郎先生による掘立柱建物の分析からは7期の時期区分がなされているため、長期間の存続が認識されるのである。

規模　全体　東西：47.9m　南北：57.8m

主郭　第1期：(39.6)×32.4m

第2期：(39.6)×38.1m

第3期：39.6×33.5m

外区　幅：5～18m

内区：約20×20m

二郭：36.0×14.8m

堀幅　1期：2.0m

2期：3.1m

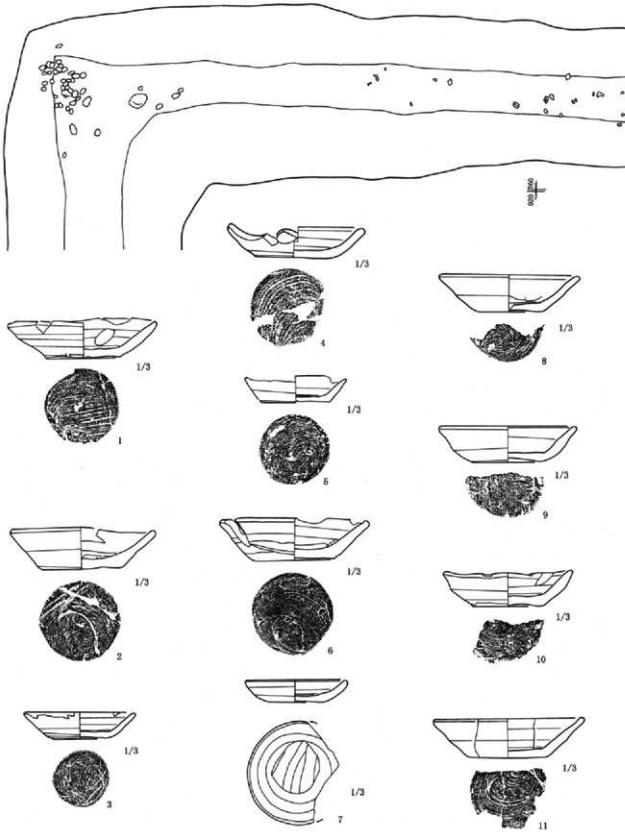
3期：3.5m

構造　本屋敷の全体的なプランは西縁が張り出す逆D字形を呈するものの、概ね縦横比の小さな方形様のプランを呈している。

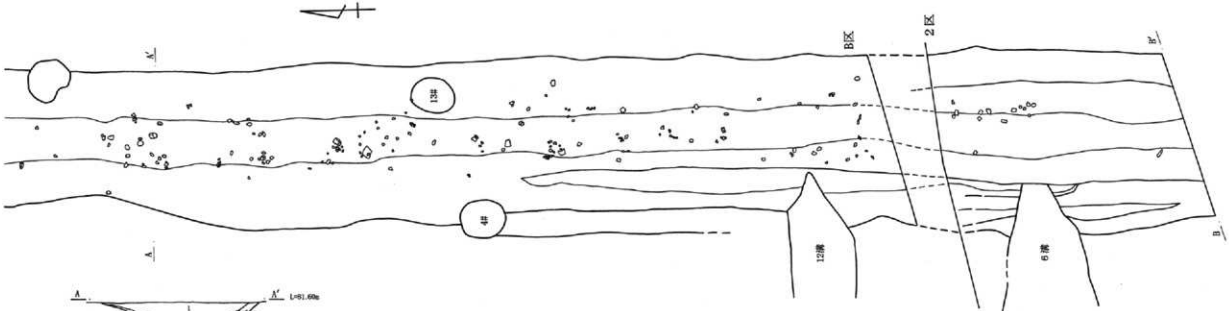
主郭の形状は時期によって異なるのであるが、1は方形、2期はやや縦長の方形、3期は東半部が南に張り出す靴型状のプランを呈している。また二郭は東西に長く南側が僅かに狭くなる逆台形様のプランであるが、主郭と噛み合わさるように西半部が北に張り出している。

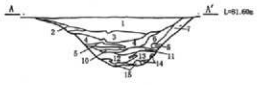
虎口は南側中央やや東寄りに設置され、主郭は各期共に平虎口である。二郭虎口は、確認された西側の周堀に対応する東側の周堀が調査範囲に確認されなかったため断定はできないが、西側堀の東端部の形状から二郭虎口は主郭虎口に直線的につながる中央やや東寄りに設けられていたものと判断される。尚、最終段階では東側の堀は南に寄る、即ち外郭ラインは折れを持っていたものと想定されるため、二郭虎口は順の喰い違い虎口であったものと判断される。一方、第3期に於いては西寄りの内堀が喰い違いとなっており、やや窮屈ではあるものの虎口になり得たものと判断される。内堀には東寄りに主たる虎口が設けられているが、この主たる虎口を埋門として西寄りの虎口は緊急時に虎口として使用したであったものと想定している。

繰り返しになるが、主郭に於いては(東寄りの)主たる虎口の正面に居住域が設定されその外周、特に西・北の区域が貯蔵や水場の区域となっていたものと認識される。

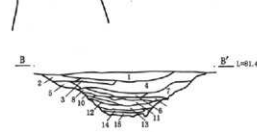


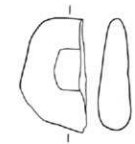
第56図の１　屋敷周堀と出土遺物（その１―東堀）

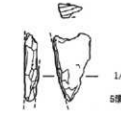




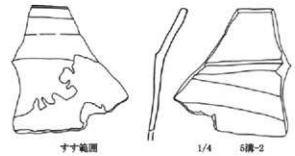
〔周堀覆土〕
1：にぶい黄褐色土：As-C・酸化鉄若干混入
2：褐色土とAs-C混じりの黒褐色土の混土
3：灰黄褐色土：ややグライ化見られ、As-C・酸化鉄混入
4：褐灰色粘質土：酸化鉄やや多く含み川砂入る。7層に比し暗い
5：酸化鉄凝縮層
6：黒褐色土：粘性あって川砂と酸化鉄含む
7：褐灰色粘質土：酸化鉄粒多く含み、明黄褐色土ローム粒混入
8：灰褐色粘質土：橙色ローム粒・酸化鉄混入
9：褐灰色粘質土：細砂入り酸化鉄沈着
10：褐灰色粘質土：淡黄色ロームと細砂を若干混入する
11：褐灰色砂質土：粘性あり。川砂入り酸化鉄沈着
12：褐灰色粘質土：植物遺体入り淡黄色ローム若干混入
13：褐灰色砂質土：粘性あり。淡黄色ローム混入
14：15層土に淡黄色ローム入る混土：酸化鉄目立つ
15：黒褐色粘質土：泥炭層。黄色ローム混入し植物繊維、昆虫遺体入る

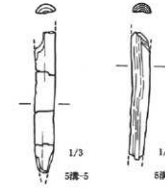


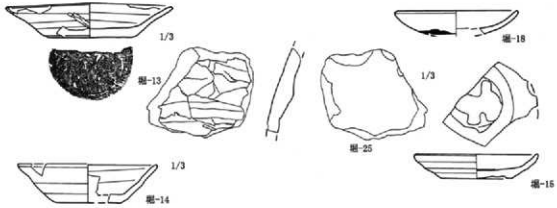


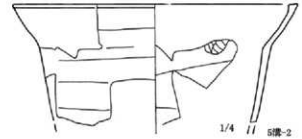


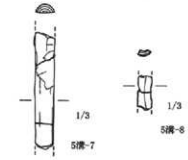
〔2-5号溝覆土〕
1：暗褐色土：白色粒子、小石含む
2：暗褐色土：白色粒子、褐色土、黒色土含む
3：暗褐色土：白色粒子、小石、黒色土、黄色粒子含む
4：暗褐色土：白色粒子、褐色土含む
5：黒褐色土：白色粒子、黒色土、褐色粘質土含む
6：灰褐色粘質土：白色粒子、黒色土、鉄分含む
7：灰褐色粘質土：白色粒子、黄色粒子含みやや粘性あり
8：灰色粘質土：8層より明るく褐色土含む
9：灰色粘質土：鉄分を帯状に含む
10：暗灰色粘質土：鉄分含む
11：暗灰色粘土：鉄分、砂粒含む
12：暗灰色粘土：褐色粘質土多量に含む
13：黒灰色粘質土：暗灰色粘土、褐色粘土含む
14：黒灰色粘質土：砂粒多く含む
15：黒色粘質土：黄白色粘土含む



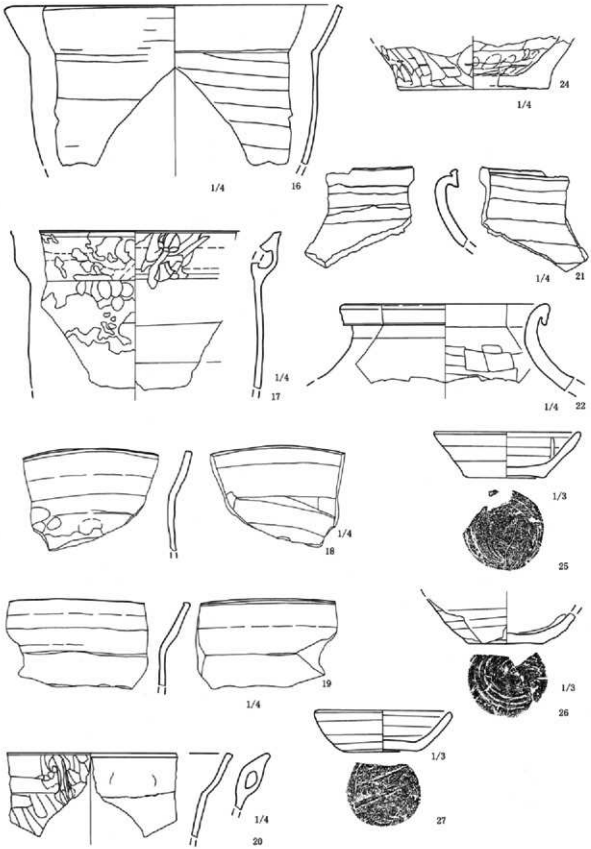




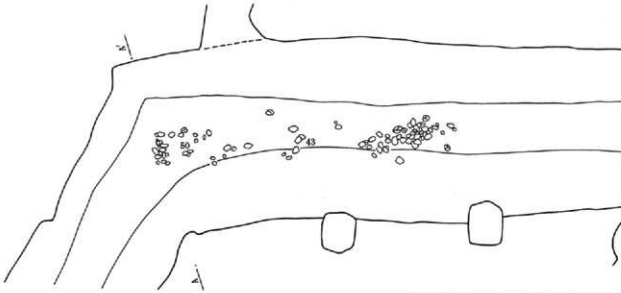




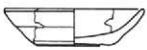
第56図の2　屋敷周堀と出土遺物（その1―東堀）



第57図　屋敷周堀の出土遺物（その２）

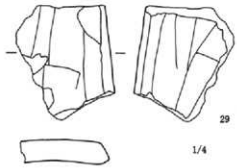


〔周堀（北西部）覆土〕
1：褐色砂質土：小粒含む
　1'：小礫均質含む
2：褐色砂質土：小礫、ローム小塊含む
　2'：ローム含まない
　2"：礫も含む。3層境に赤褐色塊（酸化鉄）含む
3：〔注記不備〕
4：灰褐色土：ローム、砂利含みさらさらしている
5：黒褐色粘質土：石臼・礫等多く投げ込まれる
　5'：流れ込み状を呈す
　5"：1'層土と5'層の混土
6：暗褐色粘質土：下部は砂質土。石臼・礫等多く投げ込まれる。拳大の礫含む（ピート混入）



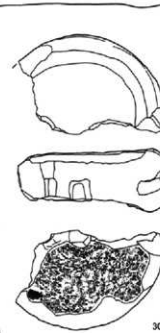
1/3

28



29

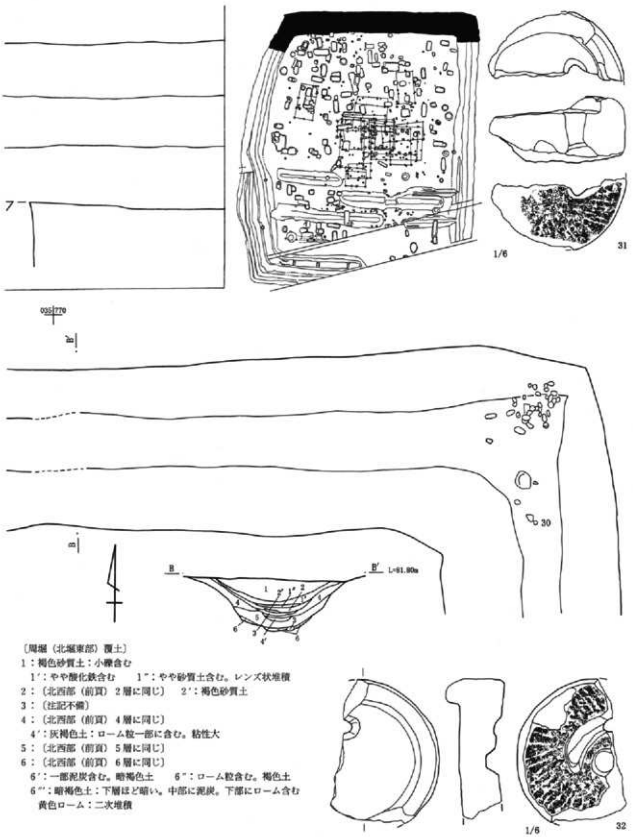
1/4



1/6

30

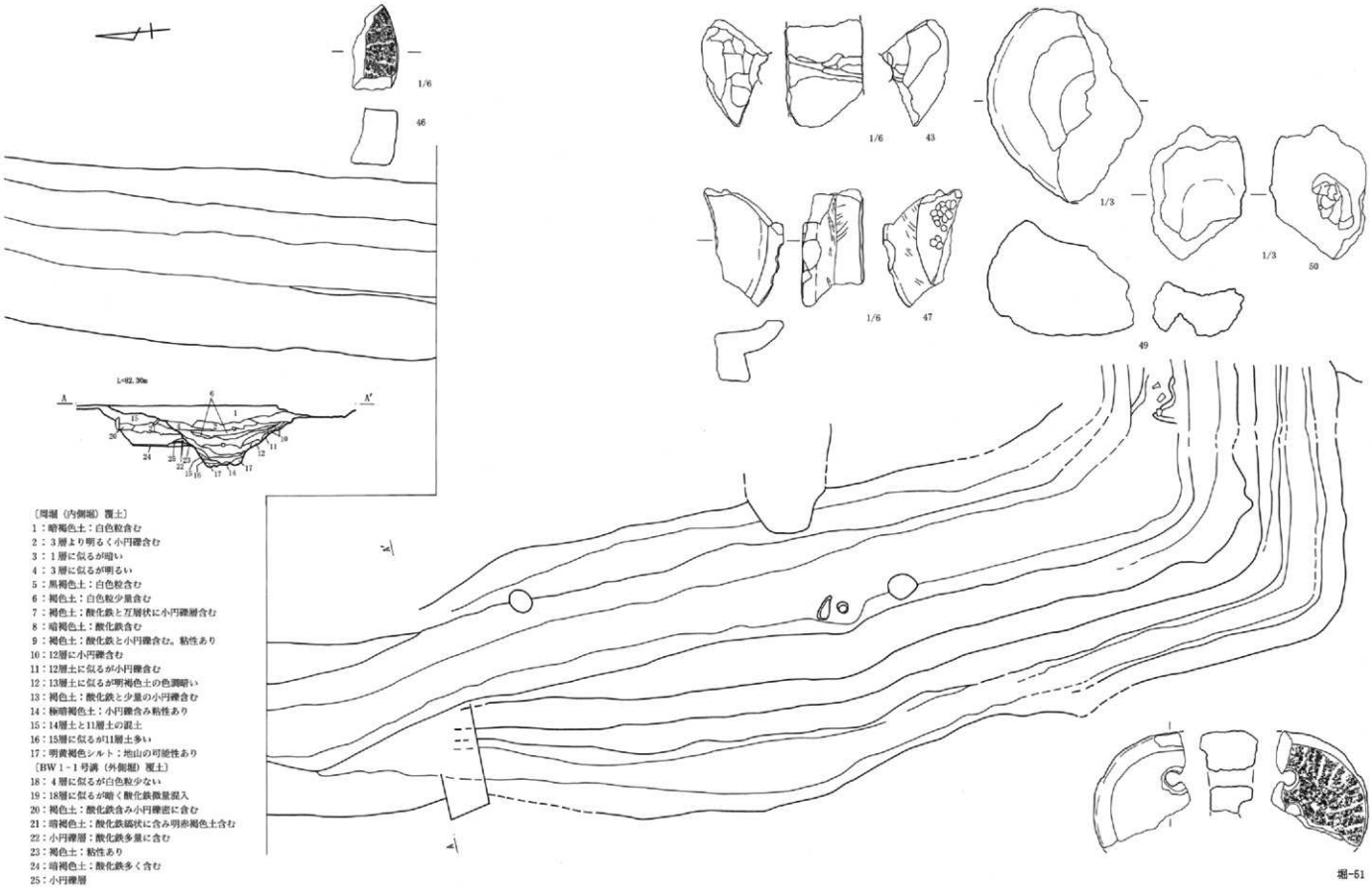
第58図の1　屋敷周堀と出土遺物（その3―北堀）



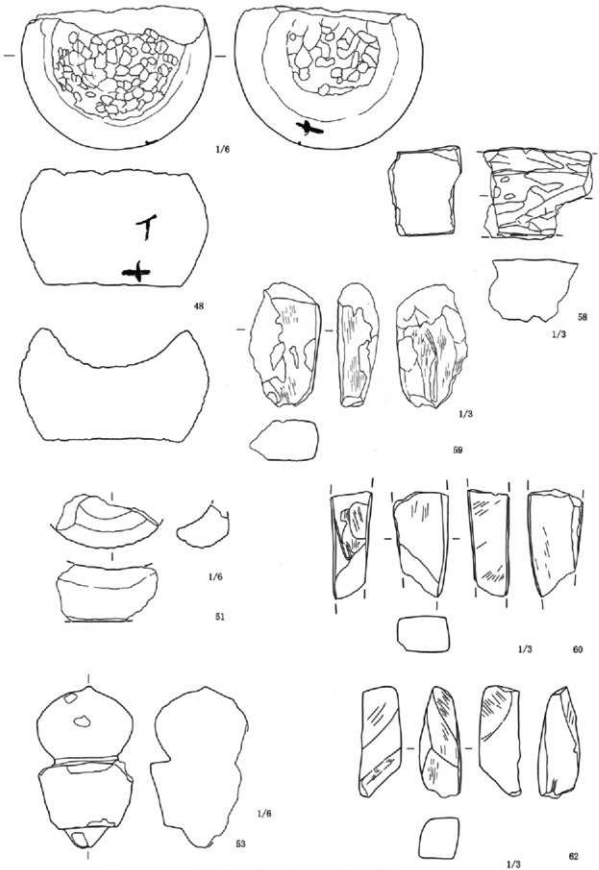
〔周堀（北堀東部）覆土〕
1：褐色砂質土：小礫含む
　1'：やや酸化鉄含む　　1"：やや砂質土含む。レンズ状堆積
2：〔北西部（前質）2層に同じ〕　2'：褐色砂質土
3：〔注記不備〕
4：〔北西部（前質）4層に同じ〕
　4'：灰褐色土：ローム粒一部に含む。粘性大
5：〔北西部（前質）5層に同じ〕
6：〔北西部（前質）6層に同じ〕
　6'：一部泥炭含む。暗褐色土　　6"：ローム粒含む。褐色土
　6"'：暗褐色土：下層ほど暗い。中部に泥炭。下部にローム含む
　黄色ローム：二次堆積

第58図の2　屋敷周堀と出土遺物（その3－北堀）

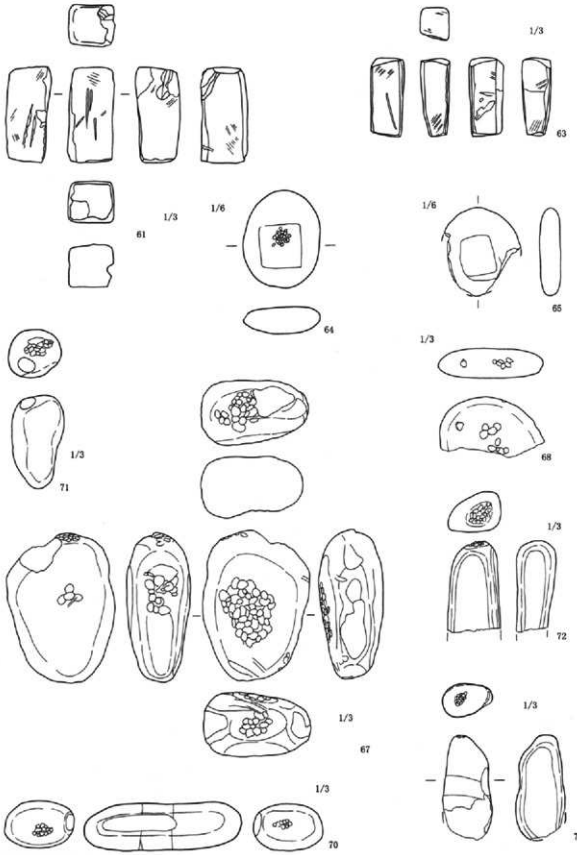
第59図の1　屋敷周堀と出土遺物（その4－西堀）



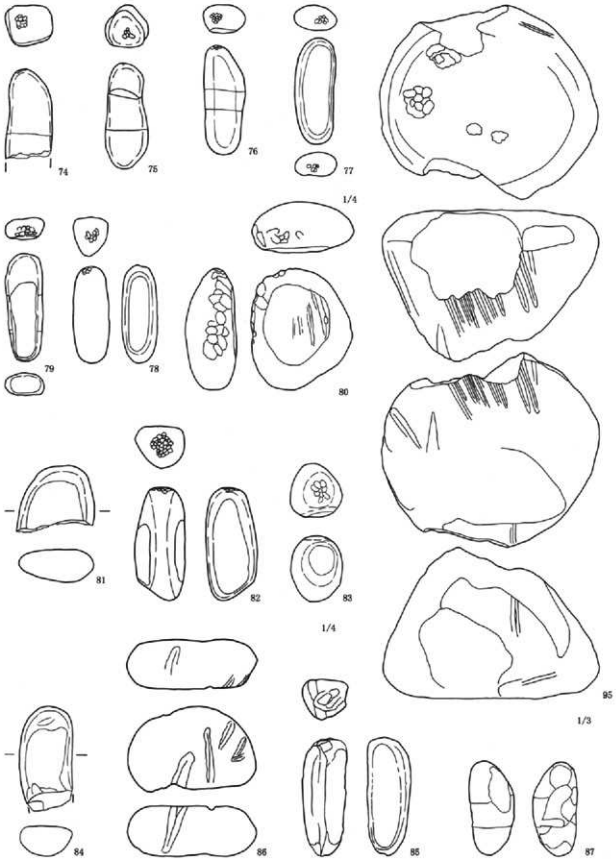
第59図の2　屋敷周堀と出土遺物（その4―西堀）



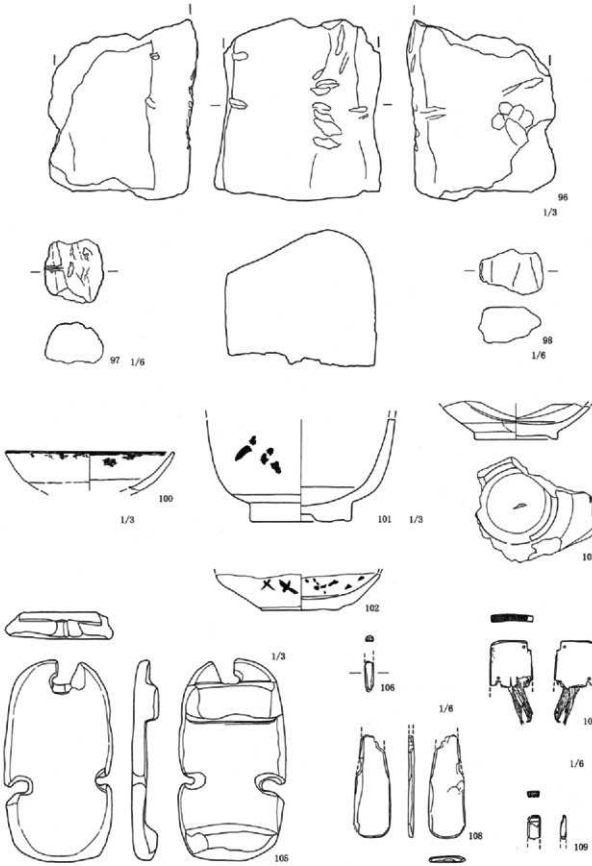
第60図　屋敷周堀の出土遺物（その5）



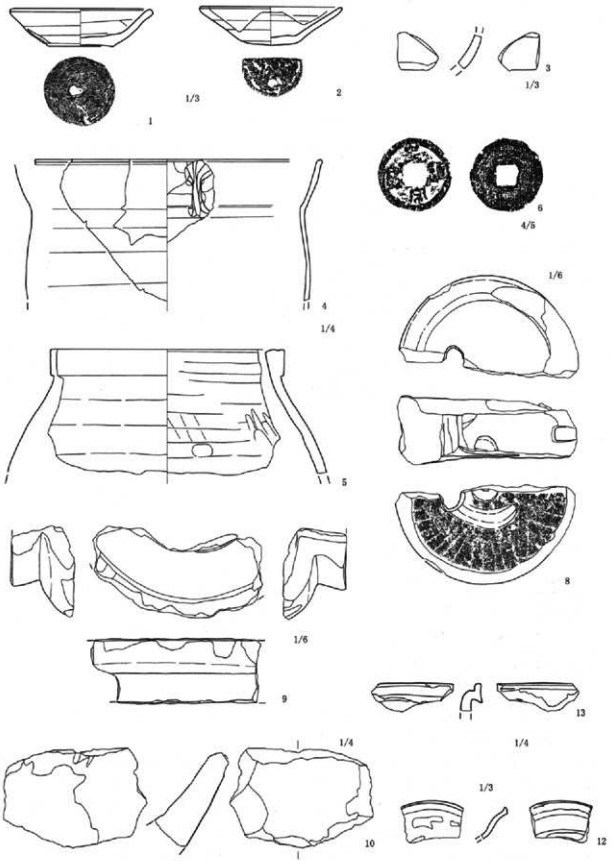
第61図　屋敷周堀の出土遺物（その６）



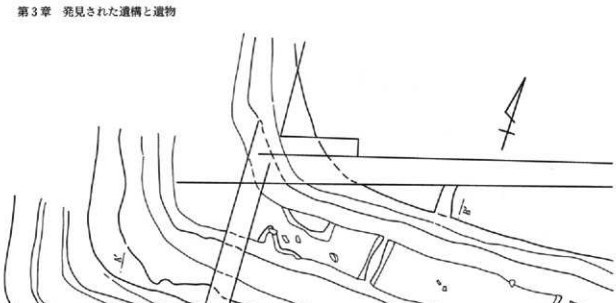
第62図　屋敷周囲の出土遺物（その7）



第63図　屋敷周堀の出土遺物（その８）



第64図　屋敷周堀の出土遺物（その9）



S=1/100

〔２－７号溝覆土〕
１：暗茶褐色細砂質土：わずかに白色軽石含む
２：暗茶褐色土：黒色土含む。粘性なく堅く締まる
３：暗茶褐色細砂質土：やや粘性あり
４：暗茶褐色土と黒色土、暗黄茶褐色土の混土
５：灰褐色細砂質土：鉄分塊含む
６：黒茶褐色土：粘性あり。きめ細かい
７：灰褐色粘質土
８：灰褐色土：粘性強かあり。きめ細かくよく締まる
９：灰褐色土：粘性強かあり。きめ細かい
10：暗灰褐色土：粘性ありきめ細かい。締まりあり
11：暗灰褐色土：粘性かなりあり

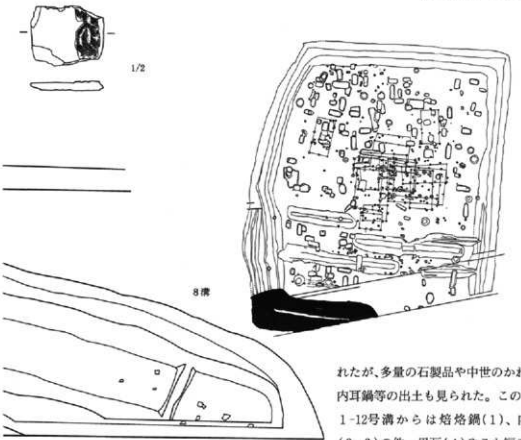
〔２－８号溝覆土〕
１：暗褐色土：黒色土・白色粒子・黄色粒子・小礫含む
２：暗褐色土し灰褐色土の混土：白色粒子含む
３：灰色土：砂粒・白色粒子・鉄分含み、やや粘性あり
４：砂層
５：灰色粘質土：白色粒子・砂粒・鉄分含む
６：灰褐色土：白色粒子と褐色粘質土含む
７：暗灰色粘土：鉄分含む
８：暗灰色粘土：黒色土と砂粒含む
９：黒灰色粘質土：ローム含む
10：暗灰色土：黒色土・黄色粒子・砂粒・ローム含む
11：黒褐色土：ローム・黒色土含む

第65図の１　屋敷周堀（その10―南堀）

(2)　堀（第56～69図、PL25～27・29・38～46）

概要　本屋敷の堀は周堀(濠、以下「周堀」と表記する)、Ｂ１-12～15・18号溝、BW１－１号溝、２－５～８溝がこれに該当する。このうち周堀と２－５・８号溝は同一の遺構(以下「周堀」とする)であり、Ｂ１-14号溝と２－６号溝(以下「６号堀」とする)、BW１－１号溝と２－７溝（以下「７号堀」とする）もそれぞれ同一の堀である。またＢ１-13号溝とＢ１-18号溝対を成し、２－６・Ｂ１-14号溝とＢ１-15号溝も対を成すものと判断される。(以下Ｂ１-12・13・15・18号溝もそれぞれ「12号堀」、「13号堀」、「15号堀」、「18号堀」と表記することとする。)

これらの堀遺構のうち、周堀は12号堀及び６・７号堀より新しいことが確認されているが、一方13・



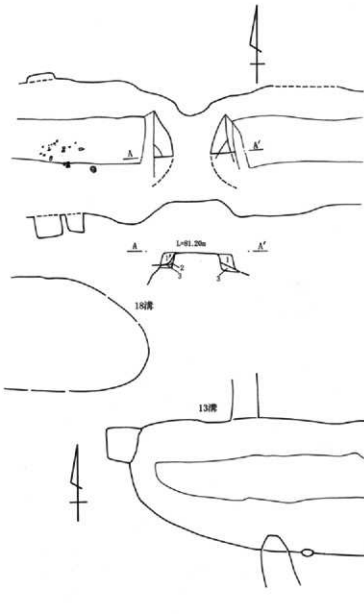
第65図の2　屋敷周堀（その10—南堀）（S＝1/100）

18号堀は周堀に連しないよう、即ち周堀を意識して掘削されている点からこの2条の堀とは同時期のものと認識される。こうした点を勘案すると堀の時期は大きく3期に分けられ、12号堀は1期、6・15号堀は2期、7号溝は3前期、その他は3後期の堀と大きく分けることができる。

また13号堀の中程には土橋が在るが、この土橋は一回掘削された後、最終的に褐灰色土等（第66図の1上の2・3層）で埋め戻されて再度作り直されている。一方、周堀の2-8号溝部分には堀障子が見られた。しかしこの堀障子は軍事的な機能を果たすには小規模であり、寧ろ滞水を目的としていたものと認識される。

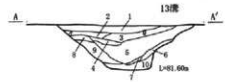
尚、東と北側の周堀は昆虫遺体及び花粉種子の分析及び付編から常時滞水し、草の繁茂していたことが確認されたが、少なくも畝堀の遺存から南側の堀も同様の状態であったものと判断される。

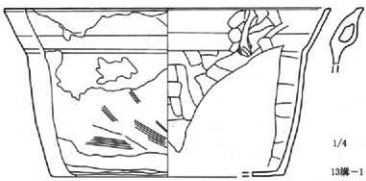
遺物　各堀からは土師器・須恵器片等の出土も見られたが、多量の石製品や中世のかわらけ、内耳鍋等の出土も見られた。この中でB1-12号溝からは焙烙鍋(1)、内耳鍋(2・3)の他、男瓦(4)やこも編み石(5～8)の出土が見られ、B1-13号溝からは内耳鍋(1)、B1-14号溝からは焼締陶器甕(1、2-8溝-5と接合)や砥石と思われる石製品(2)、B1—15号溝からはこも編み石(1)や鉄滓(2)、B1-18号溝からは内耳鍋(1)や模鋳銭らしき咸平元寶(2)、不明石製品(3)、磨石(4)、2-5号溝からは内耳鍋(1・2)、礎石(3)、杭(4・5)、割材(6～8)、2-6号溝からは内耳鍋(1)、2-8号溝からはかわらけ(1～3)、内耳鍋(4)、焼締陶器甕(5、B1-14溝-1と接合)、模鋳銭(6、皇宋通寶)、石白の上白(7)、茶白の下白(8)、石鉢(9)、こも編み石(10)の他、緑釉陶器碗(12)、須恵器甕(13)などの出土も見られた。一方、周堀では東堀と北堀に多く出土し、特に北東及び南西隅部には集石箇所が見られた。出土遺物にはかわらけ(1～13)、白磁皿片(14)、施釉陶器皿(15)、内耳鍋(16～20)、知多半島系のものを含む焼締陶器甕片(21)の他、漆椀(100～104)、下駄(105)、丸棒(106)、薪材(107)、箆(108)、小木片(109)、石臼の上白(30～38)や下白(39～47)、石鉢(48～52)、



（左図）
［Ｂ１-13号溝覆土］
１：灰黄橙色土：細砂と酸化鉄含む
1'：灰黄橙色土：細砂とローム粒若干混入
［改修土橋構築層］
２：褐灰色土：黄橙色ロームや黒色粘質土含む
３：黄灰色粘質土：黄橙色ロームや黒色粘質土混入

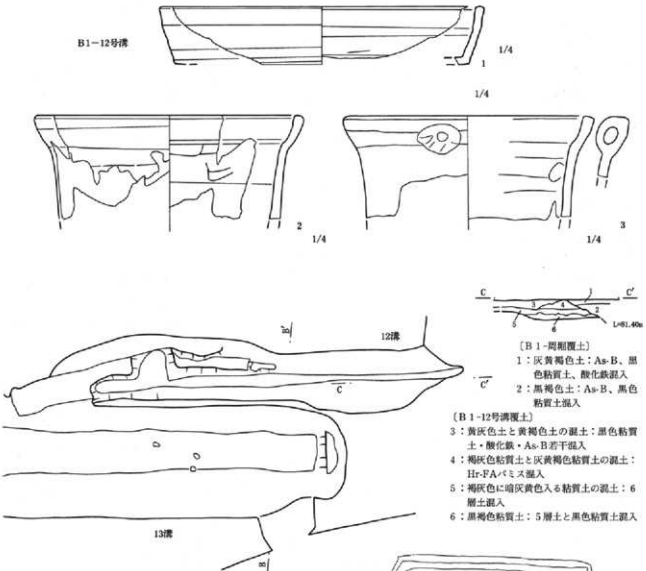
（下図）
［Ｂ１-13号溝覆土］
１：にぶい黄褐色土：As-Ｃと２・３層土混入
２：褐灰色粘質土：As-Ｃ・酸化鉄若干混入
３：褐灰色粘質土と灰黄色ロームの混土：As-Ｃと炭化物含む
４：灰黄褐色粘質土：５層土入る
５：褐灰色土、にぶい黄色砂質土、灰黄褐・黒・黄橙・黄褐・浅黄橙色粘質土の混土：As-Ｃ・Hr-FA多く含む
６：灰黄褐色土：若干のAs-Ｃ等混入
７：褐灰色粘質土：多くの細砂・酸化鉄と若干の酸化マンガン混入
８：７層に似るが明黄褐色土混入
９：７・８・10層土ベースとする酸化鉄凝縮層
10：黒褐色粘質ヘドロ層：黒・暗灰黄色粘質土と酸化鉄、昆虫混入





［Ｂ１-13号溝覆土］
１：鈍い黄褐色土：褐灰色土・黒色粘質土等混入
２：１層に似るが黒褐色土混入
３：黒色粘質土と灰黄褐色土の混土：As-Ｃ混入
４：灰黄褐色土：黒色粘質土混入
５：暗褐色土：黒褐色粘質土多く、As-Ｃ等含む
６：黒褐色土：黒色粘質土と酸化鉄等混入
７：黒色粘質土と暗褐色土の混土：ローム等混入
８：黒色粘質土と黄褐色土、暗褐色土の混土
９：灰黄褐色土：黒色粘質土、ローム等若干混入
10：褐灰色土、黒色粘質土と黄橙色ロームの混土
11：暗灰黄色粘質土と褐灰色土の混土：黒色粘質土・明黄褐色ローム多量に混入
12：黒褐色土：細砂・黒色粘質土等混入
13：褐灰色粘質土：黒色粘質土粒等僅かに混入
14：黄灰色土：黒色粘質土、As-Ｃ少量混入（ノ）

第66図の１　屋敷内堀と出土遺物（その１）



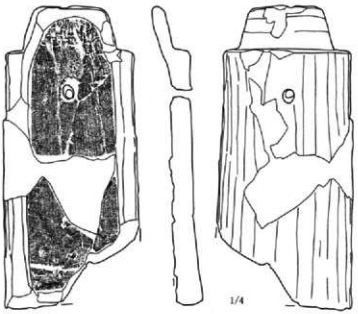
〔B１-周囲覆土〕
1：灰黄褐色土：As-B、黒色粘質土、酸化鉄混入
2：黒褐色土：As-B、黒色粘質土混入

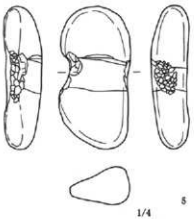
〔B１-12号溝覆土〕
3：黄灰色土と黄褐色土の混土：黒色粘質土・酸化鉄・As-B若干混入
4：褐灰色粘質土と灰黄褐色粘質土の混土：Hr-FAパミス混入
5：褐灰色に暗灰黄色入る粘質土の混土：6層土混入
6：黒褐色粘質土：5層土と黒色粘質土混入

15：黒褐色土：黒色粘質土、As-C少量混入
16：灰黄褐色土：川砂含み、黒色粘質土粒・黄橙色ローム粒少量含む
17：暗灰黄色土：川砂含み、黒色粘質土粒・黄橙色ローム粒少量含む
18：黒褐色土：細砂含み、若干黒色粘質土と酸化鉄含む。ヘドロか
19：黄灰色土：粘性あるが細砂と僅かな黄褐色ローム含む。グライ化
20：黒褐色粘質土：細砂と若干の黒色粘質土と黄褐色ローム含む

〔B１-12号溝覆土〕
21：灰黄色土と褐灰色土の混土：As-C混入
22：褐灰色土に鈍い黄褐色土入る混土層：黒色・鈍い黄橙色粘質土混入
23：褐灰色粘質土に黒褐色粘質土入る混土層：鈍い黄橙色土若干混入

第66図の２　屋敷内堀と出土遺物（その１）





第66図の３　屋敷内堀の出土遺物（その１）

五輪塔の空風輪(53)、板碑片(54～57)、軸受けかと思われる不明石製品(58)、砥石(59～66)、敲石(67～79)、磨石(80～85)、削痕跡のある礫(86)、加工痕のある石材(87)、こも編み石(88～93)、台石(95～99)、酸化焔焼成を含む須恵器坏(25～28)、女瓦(29)も見られた。またピート(泥炭)層からは植物遺体に昆虫遺体の出土も見られた。

時期　本屋敷の時期は、出土遺物から見た堀の変遷に基づく１期が15世紀前半、２期が凡そ15世紀中葉、３後期が15世紀後半と判断される。

規模　(周堀)　長さ：159.0m　幅：456cm　深さ：138cm

(12号堀)　長さ：10.9m　幅：130cm　深さ：71cm

(13号堀)　長さ：22.2m　幅：285cm　深さ：107cm

(15号堀)　長さ：24.2m　幅：285cm　深さ：84cm

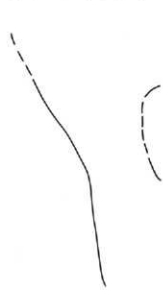
(18号堀)　長さ：13.9m　幅：294cm　深さ：94cm

(６号堀)　長さ：11.4m　幅：230cm　深さ：102cm

(７号堀)　長さ：42.4m　幅：236cm　深さ：82cm

構造　１期の堀である12号堀は概ね東西方向に走行し、直線的なプランを呈している。12号堀は堀底が浅いので失われたものと解釈しているが、東・北・西側は周堀の位置に掘削されていたものと想定される。そして南側については12号溝の西寄りが13号堀に切られているため詳らかではないが、13号堀のラインを通って西に延び、18号堀の南辺りで西堀に達していたのではないかと想定している。

２期の堀である６・15号堀は東西方向に直線的に走行しているが、前者ではそのラインが西側で少し南に下がっている。両堀は4.1m程の間隔を以て隔たっており、ここが虎口と認識されるが、両溝の中心線は虎口中央で40cm程６号堀が南に下がって若干喰違い虎口のような状況を見せている。両溝とも端部が周堀内に突き出しており、２期の堀も東・北・西側は周堀の位置に掘削されていたものと想定される。尚、15号堀の西端は若干終息する傾向があり、南西隅部に虎口のあった可能性も考慮される。

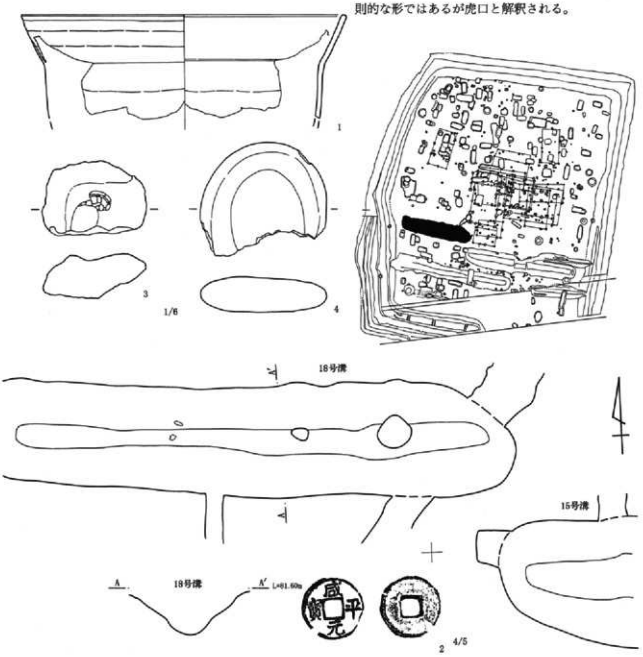


第67図の１　屋敷内堀(その２)

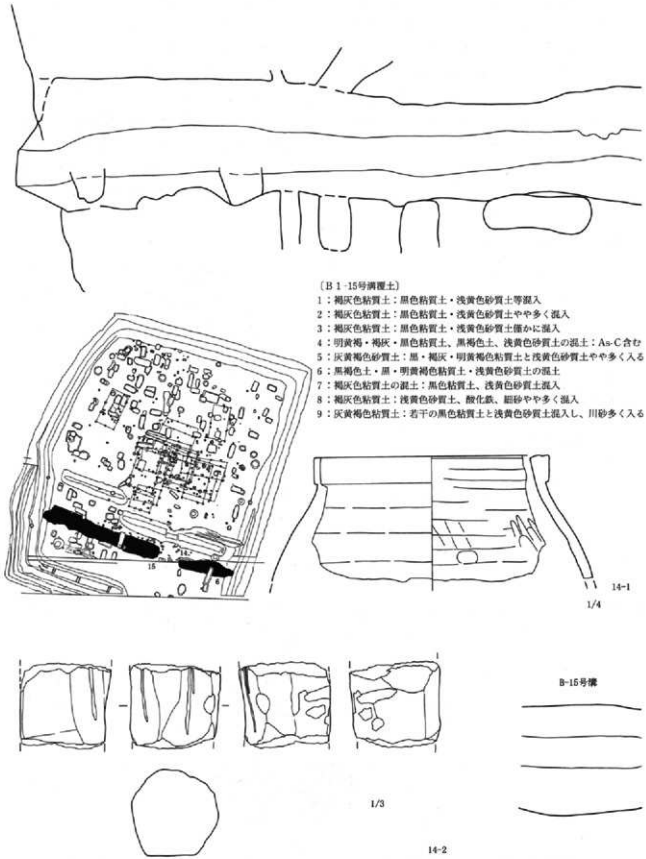
３期の堀である周堀は上述のようにその南西部が路線外に出るため全容は詳らかでないが、概ね縦横

比の小さい縦長の方形で西縁が若干張り出した逆D字形のプランで掘削されていたものと判断される。また東部が路線外に出ているため明瞭ではないが、想定される堀の位置から虎口は南縁東寄りに開口部を持つ順の喰違い虎口であったものと想定される。3区の周堀は南西部で新旧関係を持つ2条に分かれる。即ち7号堀が古く周堀が新しいのであるが、両堀共に走行プランは余り変化が無いものの後者のほうが一回り内側を走っている。

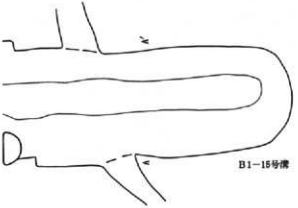
3期の主郭と二郭を画する13・18号堀は、共に東西方向に直線的なプランを以って掘削されている。13・18号堀は東西に連続するように在るが、13号堀が南、18号堀が北に位置し、13号堀の西端と18号堀の東端は50cm程の重なりを持ち、1m程隔たった平行な位置関係に掘削されている。両者の間はやや変則的な形ではあるが虎口と解釈される。



第67図の2　屋敷内堀と出土遺物(その2)

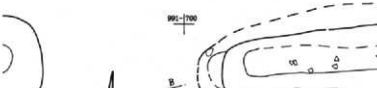


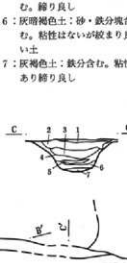
第68図の１　屋敷内堀（S＝１/100）と出土遺物（その３）

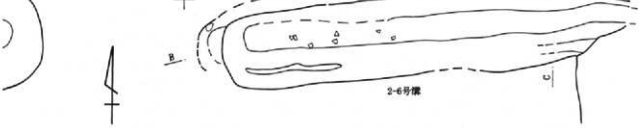


〔土坑覆土〕
1：にぶい黄褐色粘質土：Hr-FA入るにぶい黄褐色土・黒色粘質土・灰白色粘質土混入
2：にぶい黄褐色粘質土：黒色・灰黄褐色・浅黄色粘質土混入
〔Ｂ１-14号溝覆土〕
3：浅黄色粘質土：川砂、灰黄褐・浅黄・灰白・黒褐・黒色粘質土、As-C混黒色砂質土入る
4：浅黄色粘質土：灰白色粘質土・黄橙色ローム入る
5：浅黄・灰白色粘質土・黄橙色ロームの混土
6：黒色粘質土：灰白色粘質土・黄橙色ローム入る
7：As-C混黒色砂質土と黒色・褐色・にぶい黄褐色粘質土の混土：５層土若干混入
8：褐色粘質土：若干のAs-C混黒色砂質土、黒色・灰黄褐・浅黄色粘質土、川砂入る
9：褐色粘質土：As-Cと黒・灰黄褐・浅黄色粘質土、川砂混入
10：黒褐色粘質土：黒・灰白色・浅黄色粘質土、黄橙色ローム多く入る
11：褐色粘質土：黒・浅黄色粘質土、川砂混入の灰黄褐色粘質土混入
11'：11層土に同じだが混入物少ない
12：川砂混入の灰黄褐色土：As-Aと、若干の黒褐・黒色粘質土、黄橙色ローム混入
13：にぶい黄褐色粘質土：褐・灰白色粘質土、黄橙色ローム若干混入
14：黒・褐・にぶい黄褐・灰白・浅黄色粘質土、川砂混入の灰黄褐色土・灰黄褐色粘質土、浅黄褐色土の混土
15：褐色粘質土：川砂混入の灰黄褐色土入る
16：褐色粘質土ブロック
17：褐灰色砂質土：酸化鉄・As-C多く含む。川砂混入の灰黄褐色土ベースに若干のAs-C混黒色砂質土入る
18：褐灰色砂質土：細砂と若干の黒・灰白色粘質土混入
19：にぶい黄橙色ローム質土：As-C混黒色砂質土・黒色粘質土若干混入
20：褐・にぶい黄褐色粘質土、川砂混入の灰黄褐色土・灰黄褐色粘質土と浅黄褐色土の混土

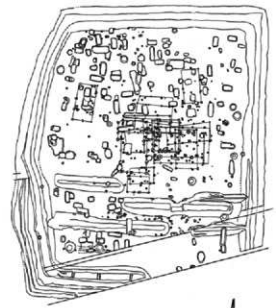
〔２-６号溝覆土〕
1：灰茶褐色土：白粒、黒色土混入。締りよく堅い
2：灰黄褐色土：白色経石と黒色土多量に混入。締まりよく堅い
3：灰褐色土：白色経石、砂含む。締り良し。粘性にないさらさらな土
4：灰褐色土：白色経石わずかに含む。砂・鉄分塊含む。締り良し、粘性なし
5：灰黄茶褐色粘土：鉄分塊含む。締り良し
6：灰暗褐色土：砂・鉄分塊含む。粘性はないが絞まり良い土
7：灰褐色土：鉄分含む。粘性あり締り良し

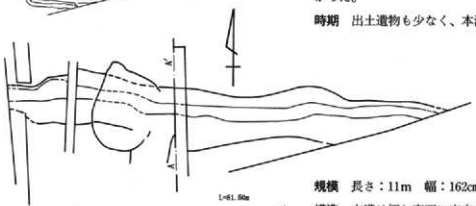






第68図の２　屋敷内溝（Ｓ＝１/100）と出土遺物（その３）





［Ｂ１-１号溝覆土］
１：黒褐色細砂：小礫少量含む
２：暗褐色土：細礫混入
３：小礫層
４：暗褐色細砂層
５：黒褐色土シルト

第69図　屋敷内堀（その４）

掘削形態は12号堀が薬研堀状を呈する以外は箱堀状を呈するものであった。また壁面は全体的に内郭側の傾斜が外郭側に対して鋭角になる傾向が見られた。また周堀のうち南西の２-８号溝底部には堀障子が見られた。当該区域の底幅は1.2m程で堀障子の形状かつて畝堀と呼ばれたタイプの１列の障子堀で、障壁は幅40～60cm、高さ11～18cmと小規模なもので３ケ所確認された。障壁と障壁の間隔は５～6.4mであった。

(3)　Ｂ１-19号溝（第69図、PL21）

概要　本溝はＢ区南西部に在り、15号堀と周堀の間に位置しているが、遺存状態は良好とは言い難く一部が確認されたに過ぎない。

本溝は幾つかのＢ１-140号土坑など幾つかの土坑と重複しているが、本溝の方が新しい。

本溝は周堀である可能性は有し、或いは郭内を画する可能性を有するが、堀とするには形態的に整っておらず、位置的に本溝と周堀の間には３mの隔たりがあるため、土塁の内郭側の溝であるものと思慮される。

遺物　本溝では土師器甕片５片が出土したに過ぎなかった。

時期　出土遺物も少なく、本溝の時期は特定することはできなかったが、周堀の土塁に伴うものである場合は15世紀後半という年代感が与えられる。

規模　長さ：11m　幅：162cm　深さ：27cm

構造　本溝は概ね東西に方向を取るが、若干の蛇行を見せている。

掘削形態は箱堀状を呈している。

(4)　掘立柱建物（第70～75図）

概要　屋敷遺構では主郭中央から南東寄りを中心に柱穴群が確認されており調査時点でも何棟かの建物の抽出を試みていたのであるが、これらの抽出建物については現在の中世掘立柱建物の研究水準に照らして問題があったため、整理作業段階で東北芸術工科大学の宮本長二郎先生に再抽出を依頼した。その結果Ｂ１-SB01～17号建物の17棟の掘立柱建物を抽出戴いたのである。これらの建物の細かい所見ついては第４章第１項に先生の鑑定所見を掲載したので繰り返さないが、ここではその概要を述べることとする。尚、新しい抽出建物については発掘調査時点でのものと識別するため、建物番号に「SB」番号を

付すこととする。

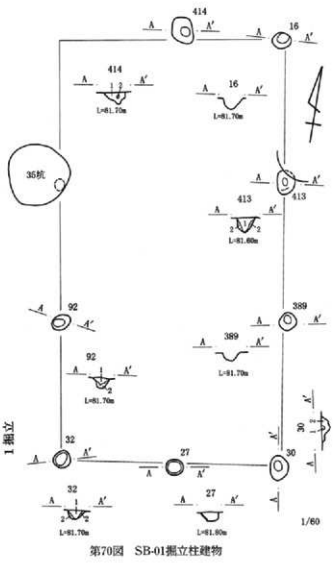
建物の大半は主郭中央から南東寄りの居住域に分布しているが、SB01号建物が北東、SB10号建物が北西の土坑・井戸の集中域に分布が見られた。

またSB2・5・9・13・16号建物等の主屋建物が確認され、建物の分析から建物群は7期に亘ることが想定されている。

遺物　本建物群では出土遺物を認めることはできなかった。

時期　本建物の時期は特定できなかったが、建物構造の解析から中世後期の所産と認識され、屋敷遺構の時期である15世紀という時期に整合している。

規模　(SB01)　東西：390cm　南北：726cm
(SB02)　東西：356cm　南北：720cm
(SB03)　東西：810cm　南北：462cm
(SB04)　東西：597cm　南北：645cm
(SB05)　東西：612cm　南北：1062cm
(SB06)　東西：393cm　南北：957cm
(SB07)　東西：684cm　南北：432cm
(SB08)　東西：687cm　南北：453cm
(SB09)　東西：684cm　南北：1131cm
(SB10)　東西：426cm　南北：756cm
(SB11)　東西：582cm　南北：312cm
(SB12)　東西：711cm　南北：369cm
(SB13)　東西：990cm　南北：540cm
(SB14)　東西：531cm　南北：351cm
(SB15)　東西：474cm　南北：348cm
(SB16)　東西：1116cm　南北：390cm



第70図　SB-01掘立柱建物

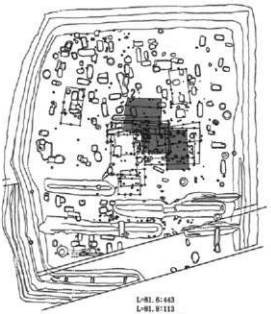
遺構埋土類型（埋土類型）
b：黒褐色土：黒色土か褐色土、少量の白色粒子含む
b′：bだが混入物ないか非常に少ない
c：暗褐色土：白色粒子微量に含む。
基本土層類型（地山類型）
γ：暗褐色土

〔B1-SB01号掘建柱建物柱穴覆土〕
（太字はピット番号）
27：b　**30**：1＝c（黒褐色）｜2＝c（暗褐色）　**32**：1-白色物少なく炭化物入るc｜2＝白色粒少ないc　**92**：1＝b′｜2＝b　**413**：1＝b（黒褐色）｜2＝b（暗褐色）　**414**：1＝b｜2＝γ

(SB17) 東西：438cm　南北：1113cm

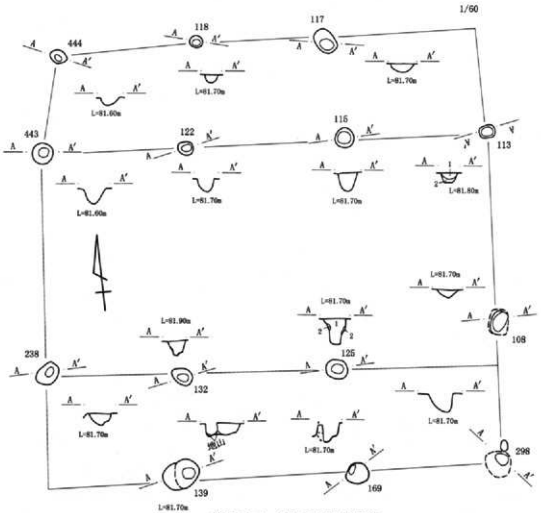
（各柱穴の規模は巻末ピット一覧、柱間は第　４章第１節参照）

構造　SB01号建物は２×３間建物であり、SB02号建物は身舎が１×３間の南北庇付き建物。SB03号建物は２×３間の建物で、SB04号建物は北側１間と南側２間の柱間の異なる４×３間の建物である。

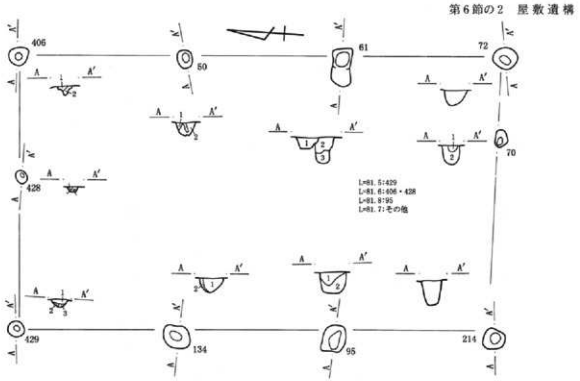


遺構埋土類型（埋土類型）
b：黒褐色土：黒色土か褐色土、少量の白色粒子含む
b'：bだが混入物ないか非常に少ない
c：暗褐色土：白色粒子微量に含む。
基本土層類型（地山類型）
α：黒褐色土：白色粒子やや多い
β：黒色土

〔B１-SB02号掘建柱建物柱穴覆土〕(太字はピット番号)
108：c　**113**：1＝b'｜2＝b　**115・118・238**：b'
117・298：b　**125**：1＝b'｜2＝β多いb　**132**：βない
139：明黄褐色土含む b'

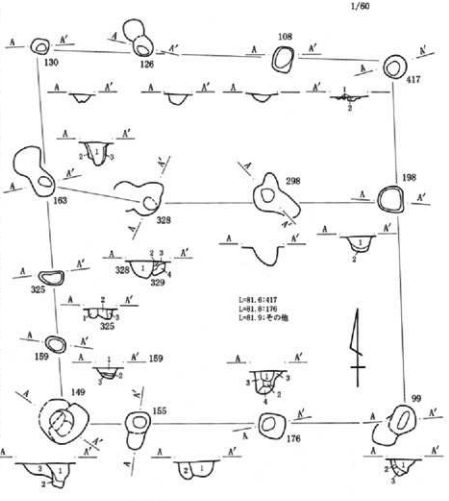


第71図の１　SB-02号掘立柱建物



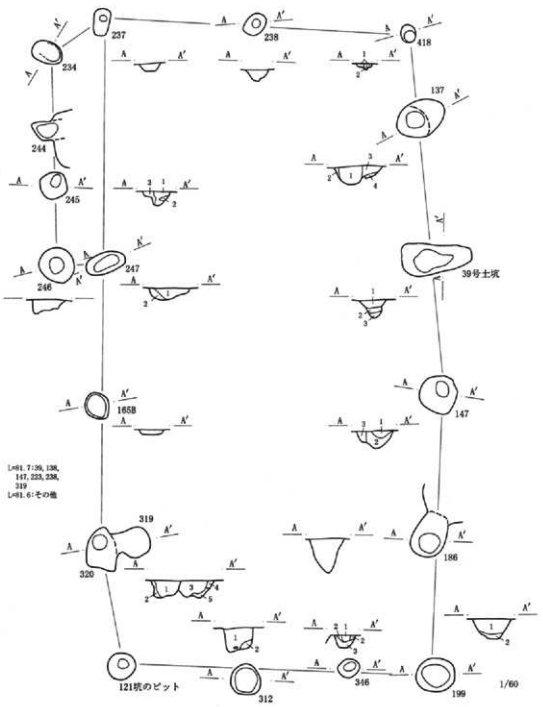
〔B1-SB03号掘建柱建物柱穴覆土〕(太字はピット番号)
50・428：1=β塊｜2=b　**60**：1=b｜**61**：2=c｜3=b　**70**：1=白色粒少ないc｜2=白色粒少ないc　**72**：ブロック少ないb　**95**：1=b′｜2=b　**214**：c　**134**：c　**406**：1=混入物少ないb｜2=βなくα入るb′　**429**：1=b′(10YR2/2)｜2=b′(10YR2/3)｜3=α入るb

〔B1-SB04号掘建柱建物柱穴覆土〕(太字はピット番号)
99：1=c｜2=βないb｜3=b　**178**：1=b′｜2=β多いb　**150**：1=β多いb｜2=b｜3=　**149**：b′　**155**：1=黒褐色土少ないb｜**156**：=c　**176**：1=b′(柱痕)｜2=白色粒少ないb′(柱痕)｜3=白色粒覆いb′｜4=混入物僅かなb′　**130**：B′　**163**：1=b′｜2=b｜3=β多いb　**325**：1=α・白色粒・酸化鉄含む黒褐色土｜2=酸化鉄含まない1層土　**159**：1=α+As-C｜2=1層よりAs-C多し｜3=β+As-C(地山か)　**328**：1=b′｜**329**：2=α塊｜3=ブロックないb′｜4=ブロック多いb′　**126**：b′　**108**：c　**417**：1=b｜2=d植物痕



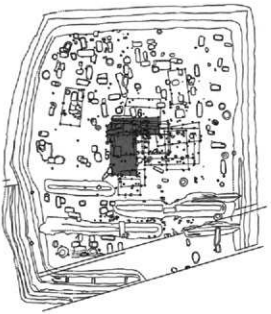
第71図の2　SB-03・04号掘立柱建物

５号掘立



〔Ｂ１-SB05号掘建柱建物柱穴覆土〕（太字はピット番号）
138：１＝b′｜２＝α埃｜**137**：３＝b｜４＝β多いｂ　**418**：１＝b｜２＝植物痕　**147**：１＝b｜２＝白色粒少ないｂ｜３＝α　**165**：ｂ　**186**：ｂ　**39坑**：１＝酸化鉄入る(10YR3/2)｜２＝酸化鉄入る(10YR2.5/2)｜３＝酸化鉄入る(10YR3/3)　**199**：１＝b′｜２＝ｂ　**234**：ｂ　**245**：１＝b′｜２＝α｜３＝β多いｂ　**238・246**：b′　**247**：１＝β少ないb′｜２＝ｂ　**312**：１＝b′：２＝保水性あるｂ′　**320**：１＝白色粒多いｂ′｜２＝β多いｂ｜**319**：３＝b′｜４＝ｂ｜５＝βなくγ含むｂ　**346**：１＝α多いｂ′｜２＝ブロックないｂ′｜３＝ｂ

第72図の１　SB-05号掘立柱建物



〔B 1 -SB06号掘建柱建物柱穴覆土〕(太字はピット番号)
109：1＝βないB′｜2＝b′　124・233：b′　141：1＝黒褐色土(柱痕)｜2＝β少量含む黒褐色b｜3＝β少量含む暗褐色b　182：1＝b｜2＝α　231・330：1＝大きいブロック入るb′｜2＝ブロック極大のb′　235：1＝ブロックないb｜2＝α　253：1＝α｜2＝開覆土　259・260：b

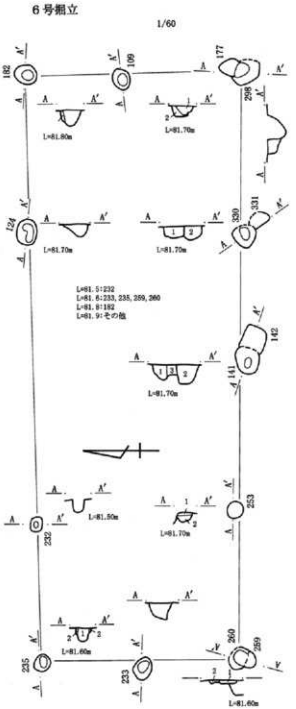
遺構埋土類型（埋土類型）
a：暗褐色土：鉄分混入
b：黒褐色土：黒色土か褐色土、少量の白色粒子含む
b′：bだが混入物ないか非常に少ない
基本土層概型（地山類型）
α：黒褐色土：白色粒子やや多い
β：黒色土
γ：暗褐色土

SB05号建物は西側北寄りに下屋の付く2×5間の建物で、SB06号建物は2×4間の建物であり、SB07とSB08号建物は1×3間の建物。SB09号建物は身舎が1×4間で四囲に庇の回る建物で、SB10号建物は2×4間、SB11・SB12号建物は2×3間の建物。SB13号建物は身舎が1×4間で北側に庇の設けられる建物で、SB14号建物は2×2、SBS15号建物は1×2間、BS16号建物は2×4間の建物。BS17号建物は1×5間の建物である。

棟方向はSB01・05・06・10・17号建物は南北に向いているが、他の12棟は東西を向いている。

(5)　井戸（第76～82図　PL26～28・48～53）

概要　本屋敷では主邸の外周部にB 1-1～4・5

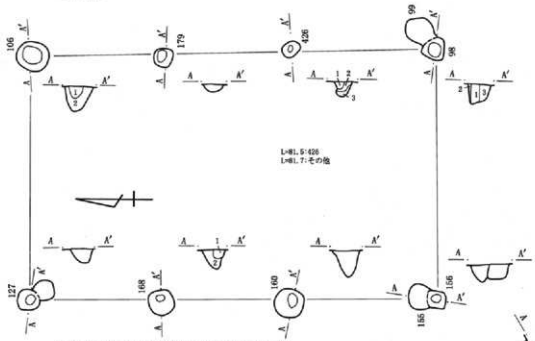


第72図の2　SB-06号掘立柱建物

A・5B・6A・7～10・14・15・17A・17B・18・20・21(旧210ピット)号井戸の18基の井戸を確認、調査した。

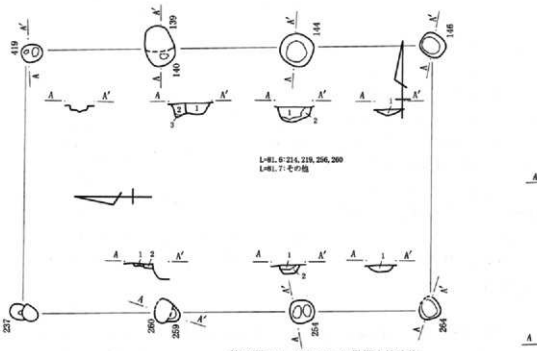
このうち東部には1～4・14号井戸、南側に6A・7・9・21号井戸、西側に10・15・17A・17B・18・20号井戸、北側に5A・5B・8号井(116頁へ)戸が

７号掘立

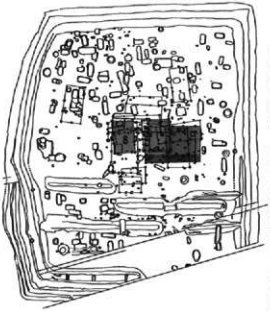


〔Ｂ１-SB07号掘建柱建物柱穴覆土〕（太字はピット番号）
98：１=b′｜２=β多いｂ　139・140：１=明黄褐色土混ｂ′｜２=ｂ′｜３=β(地山か)　146：ｂ
254：１=ｂ′｜２=β+As-C混黒褐色土　260：１=ｂ｜２=ｂ　264：ｂ′

８号掘立



第73図の１　SB-07・08号掘立柱建物



〔B 1-SB09号掘建柱建物柱穴覆土〕

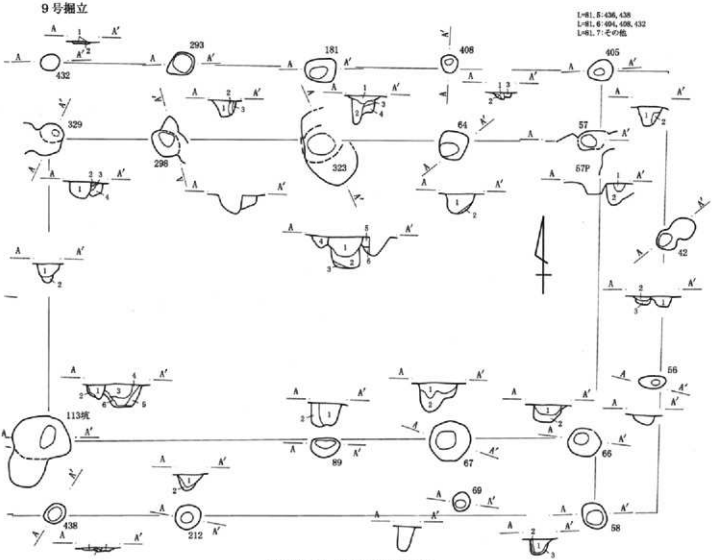
（太字はピット番号）

42：1=c｜2=c｜3=白色粒子混黒褐色土　**56**・69・436：b　**57**：1=c｜2=b'　**58**：1=b｜2=β少ないb｜3=β+Aβ・C　**65**：1=ブロック少ないb｜2=ブロック少なくα多いb　**67**：1=b｜2=白色粒子ないb　**89**：1=b｜2=β(地山か)　**113**・198：1=βないb｜2=b｜3=b'｜4=β少ないb｜5=b　**158**：1=微・炭化物少量含むc｜2=c　**162**：1=c｜2=b　**164**(・165)：1=b｜2=α(地山か)｜3=軽いし多いα(地山か)　**181**：1=c｜2=b｜3=β多いb｜4=b'　**206**：1=黒褐色土(植物板)｜2=c｜3=b(柱痕か)　**212**：1=b'｜2=b　**293**：1=b｜2=黒色土(植物板)　**298**・436：b　**323**(・48・324)：1b'｜2=ブロックないb｜3=鉄分混b｜4=白色粒子多いb'｜5=β少ないb'｜6=b　**328**・329：1=b'｜2=α｜3=ブロックないb'｜4=ブロック多いb　**404**：1=b'｜2=ガンマ多いb　**408**：1=ブロックないb'｜2=白色粒子少ないb｜3=白色粒子多いb　**432**：1=b｜2=β・438：1=b｜2=β・白色粒子混入の黒褐色土粗砂

遺構埋土類型
（埋土類型）
a：暗褐色土：鉄分混入
b：黒褐色土：黒色土か褐色土、少量の白色粒子含む
b'：bだが混入物ないか非常に少ない。
c：暗褐色土：白色粒子微量に含む。

基本土層類型
（地山類型）
α：黒褐色土：白色粒子やや多い
β：黒色土

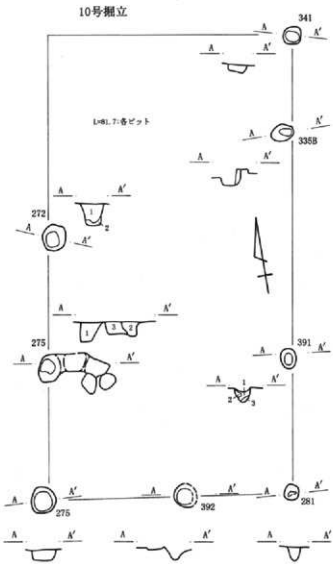
9号掘立

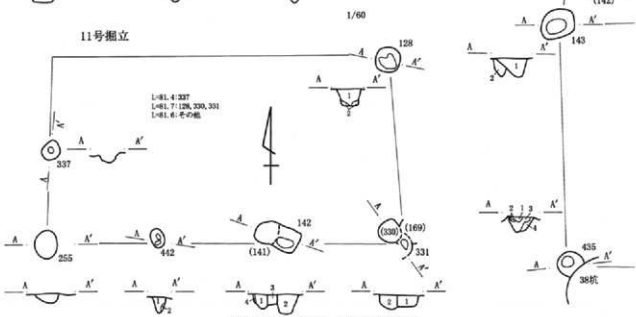


第73図の2　SB-09号掘立柱建物

〔Ｂ１-SB10号掘建柱建物柱穴覆土〕（太字はピット番号）
272：1＝ブロック少ないb′｜2＝α(地山か)　275(・274・347)：1＝b｜2＝白色粒子多いb｜3＝β多いb　278・281：b　335：b′
341：ブロック小さいb　391：1＝βないb′｜2・3＝γ

〔Ｂ１-SB11号掘建柱建物柱穴覆土〕（太字はピット番号）128：1＝b′｜2＝b｜3＝β(地山か)　142(・141)：1＝黒褐色土(柱痕)｜2・3＝鉄分・β少量のb｜4＝α(地山か)　255：βないb　331：1＝大ブロック混b′｜2＝小ブロック混b′　442：1＝b′｜2＝b



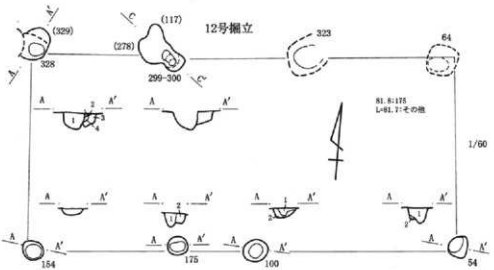


第74図の１　SB-10・11号掘立柱建物

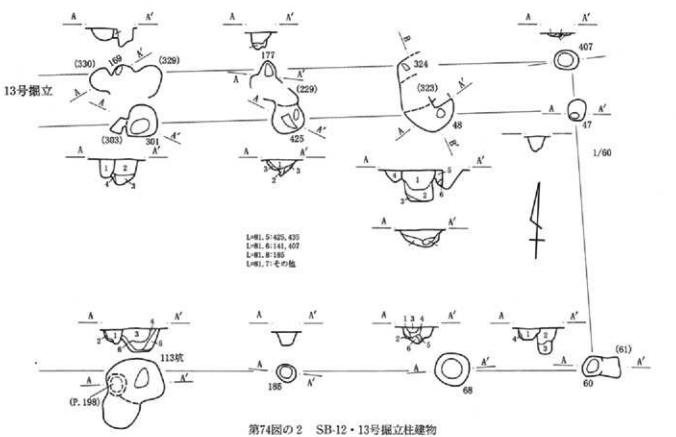
遺構埋土類型（埋土類型）
a：暗褐色土：鉄分混入
b：黒褐色土：黒色土か褐色土、少量の白色粒子含む
b′：bだが混入物微量か無い
c：暗褐色土：白色粒子微量に含む
α：黒褐色土：白色粒子やや多い
β：黒色土
d：黒褐色土：細砂主体。白色粒子微量に含む

基本土層類型（地山類型）
γ：暗褐色土

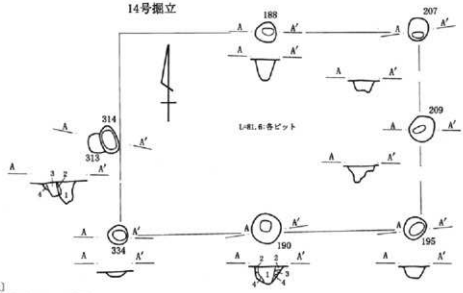
〔B 1-SB12号掘建柱建物柱穴覆土〕
（太字はピット番号）
54：1＝β少ないb｜2＝β(地山か)　**100**：1＝c｜2＝b　**154**：c　**175**：1＝にぶい黄褐色土混入のb′｜2＝b′　**299**(・300)：b　**328**(・329)：1＝b′｜2＝α｜3＝ブロックないb′｜4＝ブロック多いb′



〔B 1-SB13号掘建柱建物柱穴覆土〕（太字はピット番号）
47：b　**48**：1＝b′｜2＝βないb′｜3＝βないb　**60**(・61)：1＝b｜2＝c｜3＝b｜4＝白色粒子混α　**68**：1＝βないb′｜2＝褐色粒子含むb′｜3＝b′｜4＝ブロック少ないb′｜5＝黒褐色土(植物腐跡)｜6・7＝b′　**113**(・193)：1＝βないb｜2＝b｜3＝b′｜4＝β少ないb｜5＝b｜6＝β多いb　**141**(・142)：1＝黒褐色土含む黒褐色シルト(柱痕跡)｜2・3＝鉄分・β少量含むb｜4＝α(地山か)　**143**(・298)：1＝c｜2＝b　**141**(・142)：1＝黒褐色土混黒褐色シルト　**169**(・330)：1＝大ブロック入るb′｜2＝b′　**177**：1＝c｜2＝b　**185**：b′　**301**(・303)：1＝b′｜2＝b｜3＝1層よりブロック多いb′｜4＝b｜5＝黒褐色粘質土　**324**(・48・323)：1＝b′｜2＝ブロックないb｜3＝鉄分混b｜4＝白色粒子多いb′｜5＝β少ないb′｜6＝b　**407**：1＝b′｜2・3＝α(地山・植物腐か)　**425**：1＝b′｜2＝b′(植物腐か)｜3＝β多いb　**435**：1＝b｜2＝β｜3＝b′｜4＝α多いb



第74図の2　SB-12・13号掘立柱建物

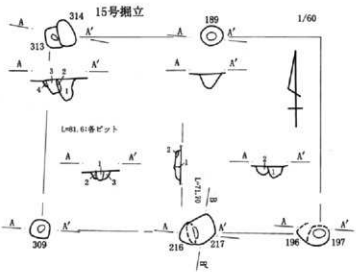


〔Ｂ１-SB14号掘建柱建物柱穴覆土〕

（太字はピット番号）

188：b　207：b′　209：b′　195：b　190：1＝β ない b′｜2＝α｜3＝As-C混β｜4＝β　334：b′　313(＝314)：1＝b｜2＝b′か｜3＝b′｜4＝暗褐色土(溝覆土)

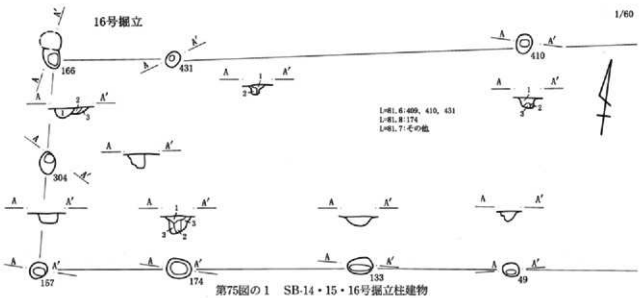
遺構埋土類型（埋土類型）
b：黒褐色土：黒色土か褐色土と少量の白色粒子含む
b′：bだが混入物ないか非常に少ない
c：暗褐色土：白色粒子微量に含む
基本土層類型（地山類型）
α：黒褐色土：白色粒子やや多い
β：黒色土
γ：暗褐色土



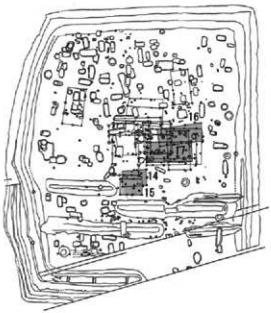
〔Ｂ１-SB15号掘建柱建物柱穴覆土〕

（太字はピット番号）

189：b　197(＝196)：1＝b｜2＝b′　217：1＝炭化物含 ℓ′b｜2＝暗褐色粒石塊　309：1＝b′｜2＝b　314(＝313)：1＝b′｜2＝b′か｜3＝b′｜4＝暗褐色砂(溝覆土)

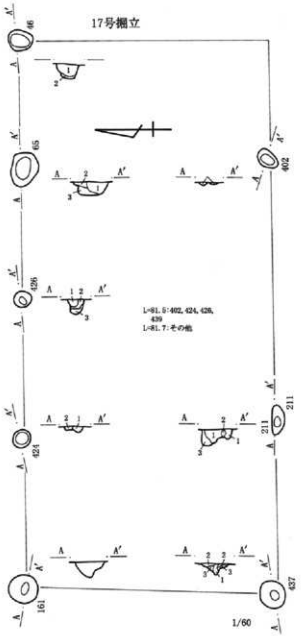


第75図の１　SB-14・15・16号掘立柱建物

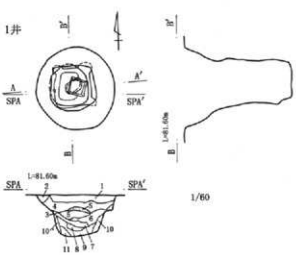


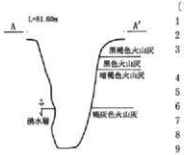
〔B 1-SB16号掘建柱建物柱穴覆土〕（太字はビット番号）
46：1＝b′｜2＝β　65：1＝鉄分混c｜2＝c｜3＝β　161：1＝b　211：1＝ブロックないb′｜2＝α｜3＝b　402：α混b　426：1＝ブロックないb′｜2＝β少量含むb′｜3＝γ混b　424：1＝ブロックないb′｜2＝b　437：1＝黒褐色土（植物痕）｜2＝b′｜3＝γ＋b

〔B 1-SB17号掘建柱建物柱穴覆土〕
（太字はビット番号）
41（・42）：1＝c｜2＝c｜3＝白色粒子混黒褐色土
49：b　133：b　157：ブロック少ないb　166（・165）：1＝b′｜2＝βいるb｜3＝b　174：1＝炭化物混c｜2＝c｜b′　304：ブロックないbか
431：1＝b′｜2＝γ多いb　409：ブロックないb′
410：1＝b′｜2＝ゆるいb｜3＝植物痕　437：1＝植物痕｜2＝b′｜3＝γ＋b



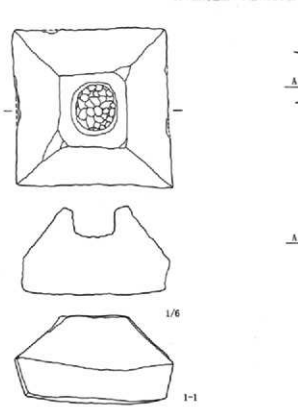
第75図の2　SB-16・17号掘立柱建物

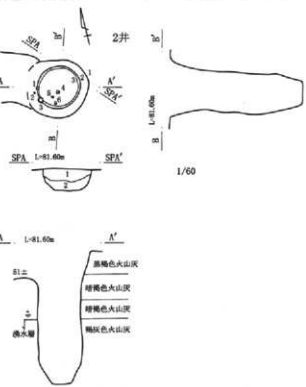




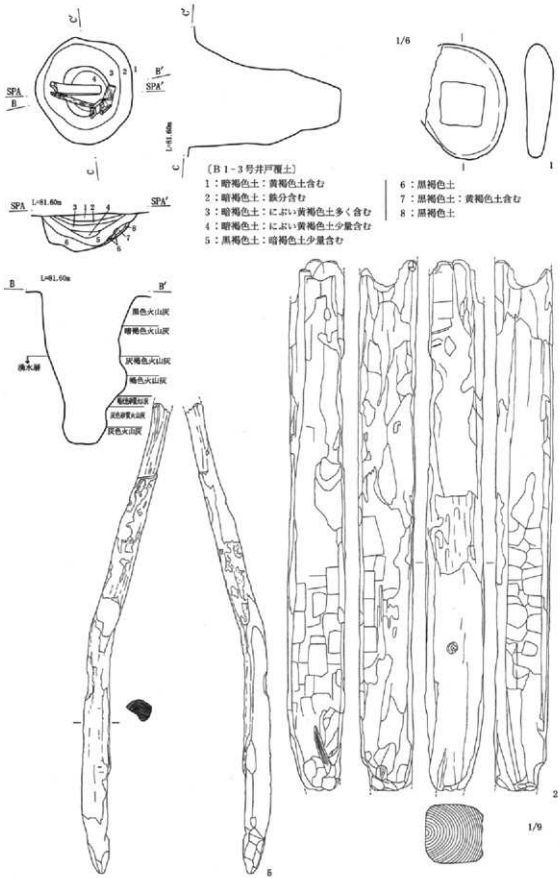
〔Ｂ１－１号井戸覆土　他〕
１：暗褐色土：白色粒子少量混入
２：暗褐色土：黒褐色土混入
３：暗褐色土：１層に比しやや暗い。
　　白色粒子少量混入
４：黒色土：地山層
５：黒褐色土：２層に比しやや暗い
６：黒褐色土：５層と同じだが、やや粘性低い
７：黒褐色土：５層と同じだが、粘性高い
８：黒褐色土：３層と同じだが、やや粘性高く、粒子細かい
９：黒褐色土：５層に比し濃い
10：黒褐色土：５層と同じだが、粘性あり堅い
11：黒褐色土：９層に比し粒子細かく水分含む

〔Ｂ１－２号井戸覆土〕
１：暗褐色土：１号井戸－２層に同じ。黒褐色土と黒色ブロック一つづつ混入
２：暗褐色土：１層に比し暗い

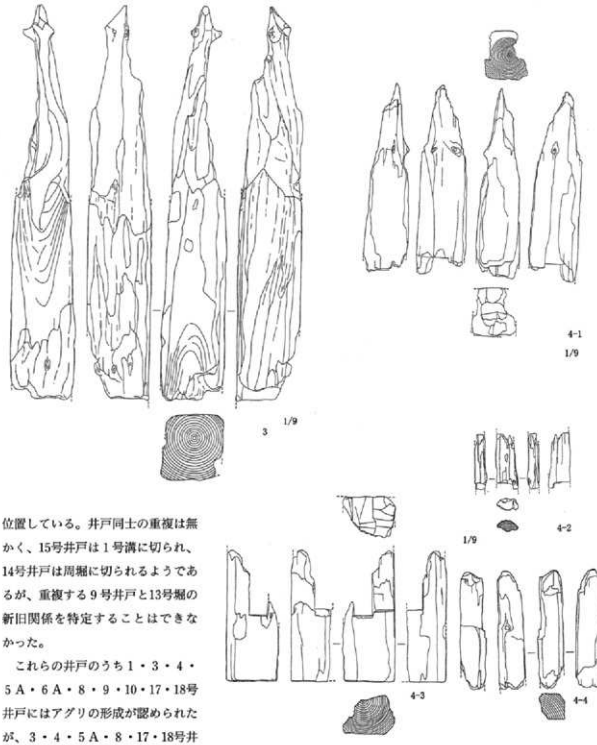




第76図の１　Ｂ１－１・２号井戸と出土遺物



第76図の2　B 1-3号井戸と出土遺物（その1）



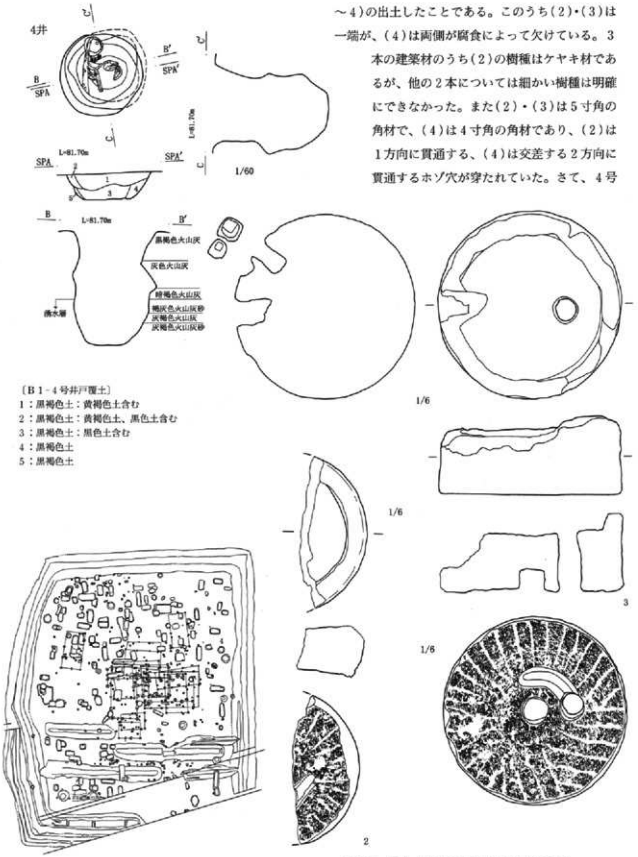
第77図　B1-3号井戸の出土遺物（その2）

位置している。井戸同士の重複は無かく、15号井戸は1号溝に切られ、14号井戸は周堀に切られるようであるが、重複する9号井戸と13号堀の新旧関係を特定することはできなかった。

これらの井戸のうち1・3・4・5A・6A・8・9・10・17・18号井戸にはアグリの形成が認められたが、3・4・5A・8・17・18号井戸は長期の使用が窺われるものであった。その形成も大きくはなく、屋敷内の井戸は全体として短期間の使用であったことが窺われる。

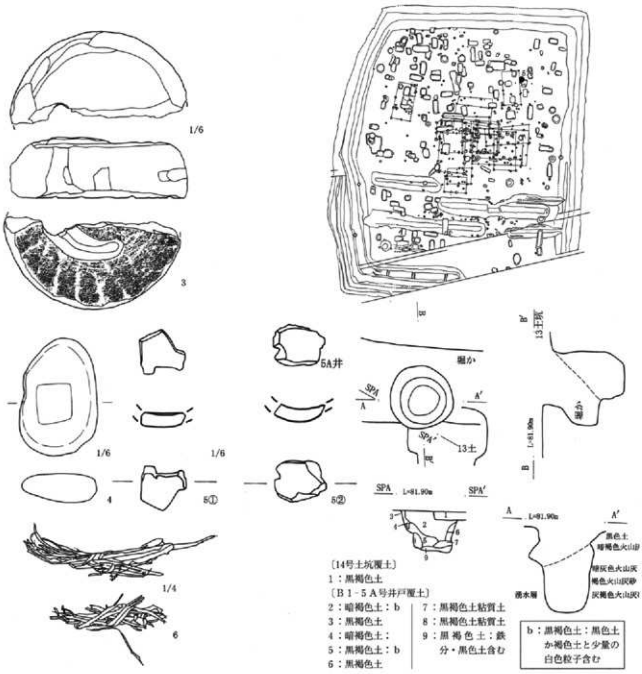
遺物　9・20・21号井戸からの遺物の出土は見られなかったが、これ以外の各井戸からは古代～中世に到る時期の遺物が出土してきている。このうち1号井戸からは火鉢(1)・2号井戸からは刀子(2)と鎌(3)が出土した。また3号井戸からは礎石(1)、杭(5)、切断痕の見られる木材(6)の出土が見られた

のであるが、特に注目されるのは3本の建築材(2～4)の出土したことである。このうち(2)・(3)は一端が、(4)は両側が腐食によって欠けている。3本の建築材のうち(2)の樹種はケヤキ材であるが、他の2本については細かい樹種は明確にできなかった。また(2)・(3)は5寸角の角材で、(4)は4寸角の角材であり、(2)は1方向に貫通する、(4)は交差する2方向に貫通するホゾ穴が穿たれていた。さて、4号



〔B1-4号井戸覆土〕
1：黒褐色土：黄褐色土含む
2：黒褐色土：黄褐色土、黒色土含む
3：黒褐色土：黒色土含む
4：黒褐色土
5：黒褐色土

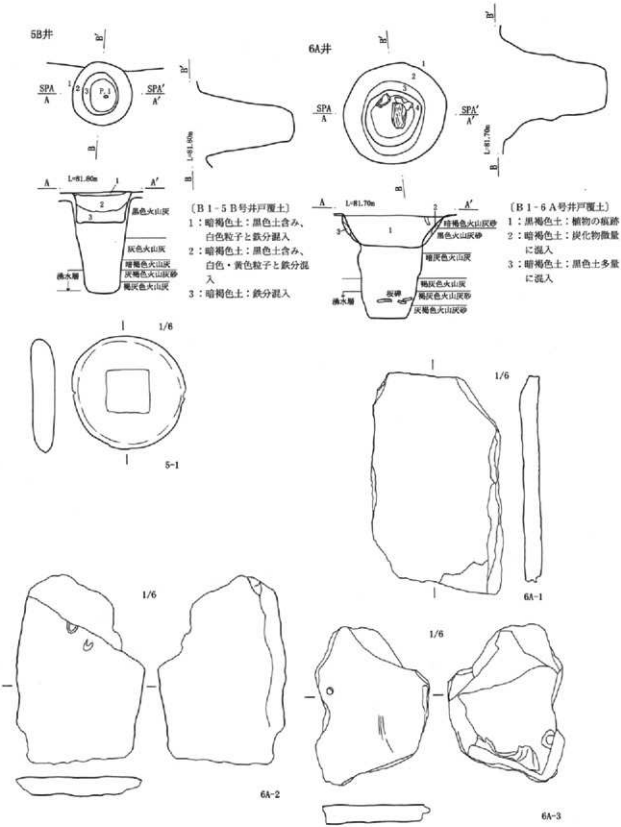
第78図　B1-4号井戸と出土遺物（その1）



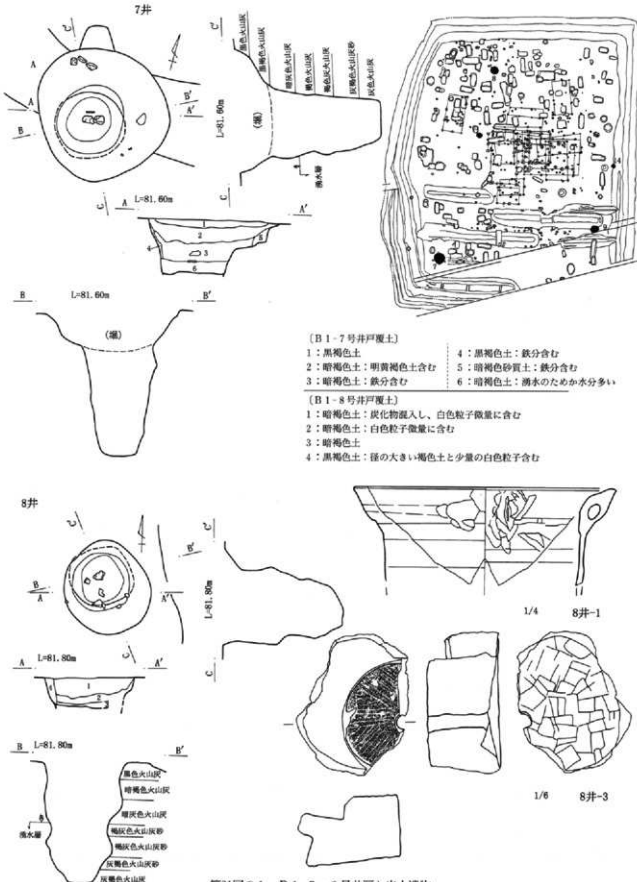
第79図　Ｂ１－４号井戸の出土遺物（その２）

第80図の１　Ｂ１－５Ａ号井戸

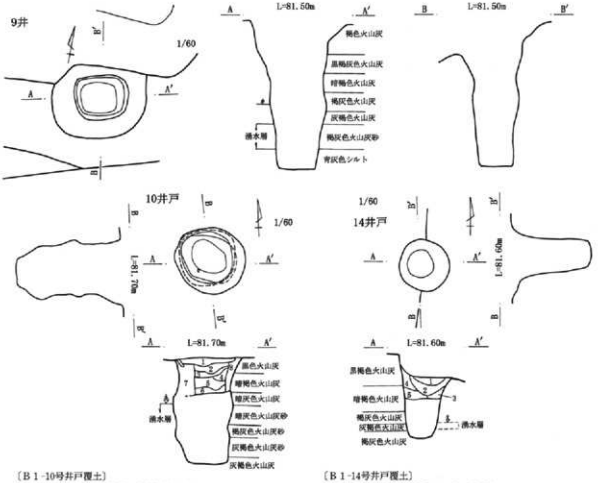
井戸からは石臼の上臼(１～３)、礎石(４)、漆碗(５)、竹籠の断片(６)、切断の痕跡のある木材(７)の出土が見られた。また５Ａ号井戸、５Ｂ号井戸の何れからの出土かは特定できなかったが礎石(１)の出土が見られている。一方、６Ａ号井戸からは板碑(１～３)片、８号井戸からは内耳鍋、茶臼の下臼(２)、敲石(３～５)が、10号井戸からは水輪と思われるもの(１)、15号井戸からは陶器合子(１)、礎石(１・２)、可能性のあるものを含む鉄製鏃(４・５)の出土が見られ、17Ａ号井戸、17Ｂ井戸の何れからの出土かは特定できなかったが軟質陶器鉢(１)、木製角棒(２)、18号井戸からは焼締陶器甕(１)や杭(２～８)、杭と思われるもの(９・10)、切断痕のある木材(11～13)の出土も見られた。



第80図の2　B1-5B・6A号井戸と出土遺物

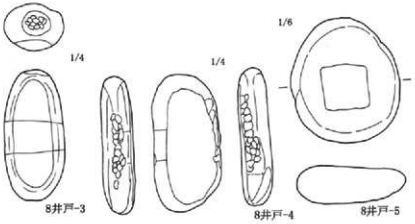


第81図の１　Ｂ１-７・８号井戸と出土遺物



〔Ｂ１-10号井戸覆土〕
１：暗褐色土：鉄分と微量の黄褐色粒子混入
２：暗褐色土：鉄分混入
３：暗褐色土：鉄分混入
４：暗褐色土：鉄分混入
５：暗褐色土：鉄分混入
６：暗褐色土：鉄分混入
７：暗褐色土：鉄分と微量の黒色土混入
８：暗褐色土：黒色土、鉄分混入
　暗褐色土：８層に比し径の小さい黒色土、鉄分混入

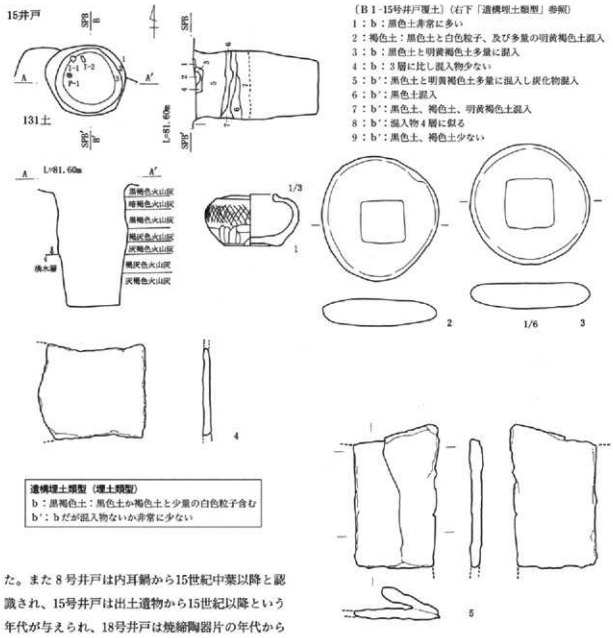
〔Ｂ１-14号井戸覆土〕
１：暗褐色土：鉄分少量含み、As-C混入
２：黒褐色土：鉄分少量含み、As-C若干混入
３：灰黄褐色粘質土：やや締まりに欠ける
４：黒褐色土：３層に比し色調明るく締まりあり。As-C混入
５：黒褐色粘質土



第81図の２　Ｂ１-８号井戸出土遺物とＢ１-10・14号井戸

尚、18号井戸には礫が充塡するように投棄されていた。

時期　出土遺物のないものもあるため屋敷内所在井戸の時期は明瞭にできなかったものが殆どであるが、多くは出土遺物から推して中世の所産と判断される。３号井戸は出土木材を14Ｃ年代測定にかけた結果、平安期～中世という年代が与えられたが、最も新しい15世紀前半という年代が３号井戸の時期として与えられるものと判断し



第82図　Ｂ１-15号井戸と出土遺物

た。また８号井戸は内耳鍋から15世紀中葉以降と認識され、15号井戸は出土遺物から15世紀以降という年代が与えられ、18号井戸は焼締陶器片の年代から14世紀中葉以降という年代が与えられる。

規模　（１号井戸）径：126×130cm 深さ：171cm
（２号井戸）径：(85)×91cm 深さ：209cm
（３号井戸）径：154×170cm 深さ：236cm
（４号井戸）径：132×128cm 深さ：181cm
（５Ａ号井戸）径：100×91cm 深さ：131cm
（５Ｂ号井戸）径：93×99cm 深さ：148cm
（６Ａ号井戸）径：160×162cm 深さ：164cm
（７号井戸）径：198×210cm 深さ：229cm
（８号井戸）径：132×144cm 深さ：192cm
（９号井戸）径：150×(116)cm 深さ：232cm
（10号井戸）径：114×108cm 深さ：169cm
（14号井戸）径：80×78cm 深さ：135cm
（15号井戸）径：128×112cm 深さ：198cm
（17Ａ号井戸）径：97×100cm 深さ：174cm
（17Ｂ号井戸）径：(86)×89cm 深さ：127cm
（18号井戸）径：153×170cm 深さ：180cm
（20号井戸）径：101×118cm 深さ：163cm

(21号井戸) 径：68×62cm 深さ：134cm

構造　屋敷内の井戸のプランは1～4・5A・5B・6A・8・14・15・17A・17B号井戸が円形を呈し、7・10・21号井戸が楕円形、9・18・20号井戸は方形を呈するものであった。

その形態は1・3・4・7・8・9・15・18号井戸は井筒朝顔型に分類され、2・5A・5B・6A・10・17・20・21号井戸は井筒円筒形に分類される。尚、1号井戸の下部は粗染巻き井戸の可能性があり、4・17号井戸はアグリが深く筒部分は丸底フラスコ状を呈している。また9号井戸の下部は隅丸方形と思慮されるものであり、5B・6A号井戸はやや鉢状を呈するものであった。

掘削深度は何れも2m前後と深くなく、本遺跡付近の推移の高かったことが窺われるが、湧水層は、1号井戸は底面から0～60cm、2号井戸は底面から0～90cm、3号井戸は底面から0～45cm、4号井戸は底面から0～70cm、5A号井戸は底面から0～20cm、5B号井戸は底面から0～60cm、6A号井戸は底面から0～45cm、7号井戸は底面から0～140cm、8号井戸は底面から0～90cm、9号井戸は底面から30～70cm、10号井戸は底面から0～100cm、14号井戸は底面から25～35cm、15号井戸は底面から0～90cm、17A号井戸は底面から20～60cm、17B号井戸は底面から0～20cm、18号井戸は底面から0～30cm程と判断される。尚、20・21号井戸は想定することはできなかった。

アグリは1・3・4・5A・6A・8・9・10・17・18号井戸で確認されたが、その形成には強弱があり、1号井戸では底面から25～35cm程の位置に高さ30cm、奥行き5cm以下の弱いアグリが、3号井戸では底面から1m程の位置に高さ80cm、奥行き18cm以下の比較的深いものが、また4号井戸では底面から1m程の位置に高さ45cm、奥行き14cm以下のものが確認された。5A号井戸では底面から90cm程の位置に高さ40cm、奥行き20cm以下と比較的深いものが、6A号井戸では底面から85cm程の位置に高さ30cm、奥行き5cm以下と浅いものが認められている。一方、8号井戸では底面から50cm程と130cm程の二箇所にアグリが確認され、前者は高さ40cm、奥行き12cm以下、後者は高さ60cm、奥行き12cm以下であった。また9号井戸では底面から1m程の位置に高さ50cm、奥行き5cm以下、10井戸では底面から40～50cm程の位置に高さ25cm、奥行き7cm以下の何れも浅いものが確認されているが、17号井戸では底面から50cm程の位置に高さ50cm、奥行き14cm以下と比較的はっきりしたものが、18号井戸で底面から85cm程の位置に高さ50cm、奥行き10cm以下のものが認められている。

尚、10号井戸は断面観察から、少なくも上位には桶状のものが据えられているものと判断され、18号井戸に於いては井戸底面の北東寄りの一角に杭が10本余り、直径75cmの円形になるよう打設されていた。

(6)　土壙墓（第85・86図　PL28・29・53・54）

概要　屋敷内に於いてはB1・1・2・4・5号墓壙の4基の土壙墓を確認、調査した。

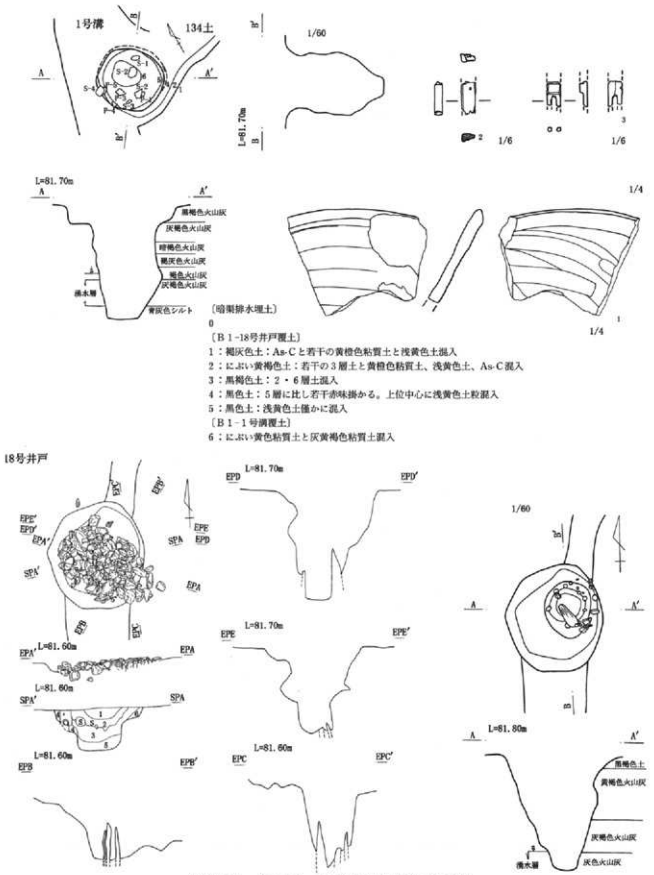
これらの分布についてみると1号墓壙が南西隅、2号墓壙が中東部東寄り、4号墓壙が中北部やや南寄り、5号墓壙が中南部南寄り、即ち主郭外周の土坑・井戸の多い区域に散在している。

何れの土壙墓からは全て人骨が出土しているが、4号墓壙の遺体は土坑の北西寄りに埋葬され、5号墓壙は中世の土壙墓に典型的な北頭位西向横臥屈葬であった。またB1－2号墓壙は北頭位東向横臥屈葬であった。

これらは屋敷内に在るため考古学的な（民俗学の概念によるものではない）屋敷墓である可能性が考慮され、特に1・2号墓壙の年代感は屋敷のそれと齟齬は無いのであるが、後述する出土遺物との関係から4・5号墓壙は屋敷廃絶後に掘削された可能性が高いため、屋敷地が廃絶後に墓地になっていた可能性も有する。従って1・2号墓についても単純に屋敷墓とするには検討を要する。

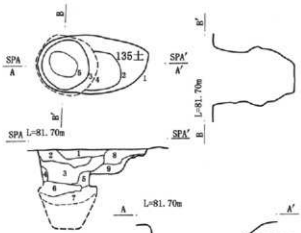
遺物　2号墓壙から1枚、6号墓壙から1枚、7号墓壙から2枚のかわらけ（2壙-1、6壙-7、7壙

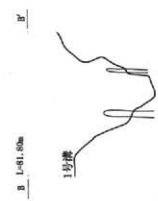
17A号井戸



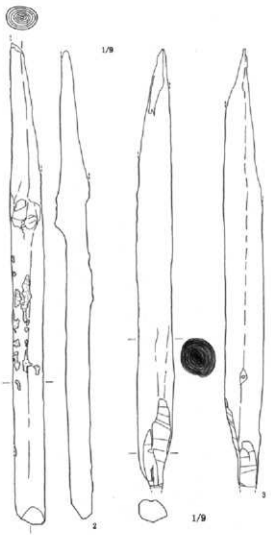
第83図の１　Ｂ１-17Ａ・18号井戸と出土遺物（その１）

〔Ｂ１-17ｂ号井戸覆土〕（下「遺構埋土類型」参照）
１：ｂ′：黄褐色土混入し、白色粒子多い
２：ｂ：白色粒子やや多い
３：ｂ′：混入物非常に少ない
４：ｂ′：混入物殆ど無い
５：ｂ′：ブロック径大きく、暗褐色土混入
６：ｂ′：ブロック径大きく、暗褐色土混入し、砂のブロック含む
７：ｂ′：水分含む
〔Ｂ１-135号土坑覆土〕
８：ｂ：径の小さい黄褐色土含む
９：８層に似るが混入物少ない

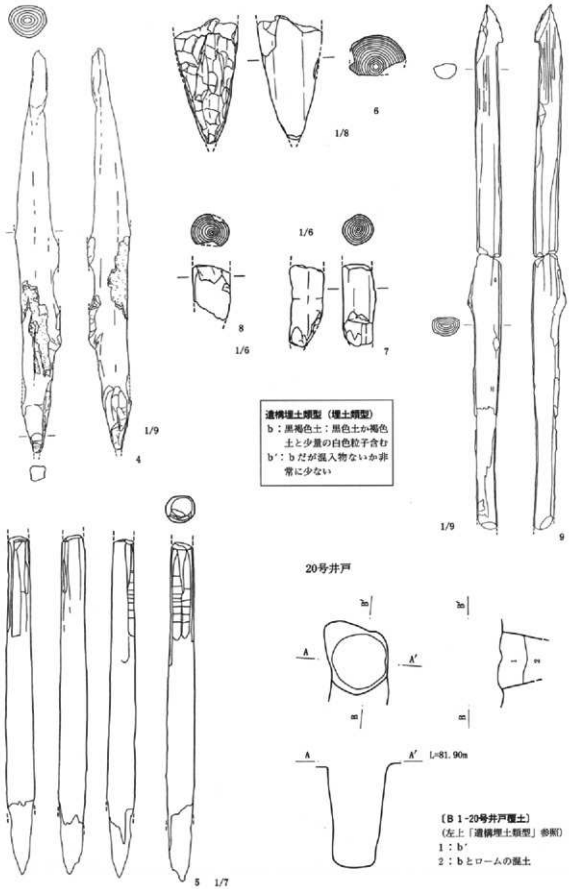




遺構埋土類型
（埋土類型）
ｂ：黒褐色土：黒色土か褐色土と少量の白色粒子含む
ｂ′：ｂだが混入物ないか非常に少ない



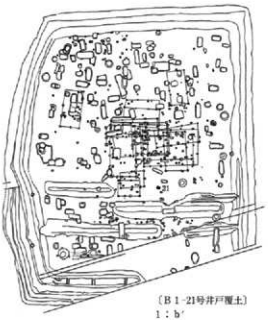
第83図の２　Ｂ１-17Ｂ・18号井戸出土遺物（その１）



第84図の１　Ｂ１-18号井戸出土遺物（その２）とＢ１-20号井戸

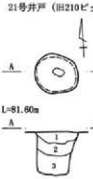
-1・2）の出土があり、模鋳銭を中心とする渡来銭がB1-1号墓壙から8枚、4号墓壙から10枚、5号墓壙から12枚の出土があり、4・5号墓壙からは永楽銭の出土もあった。4号墓壙からは棺の残欠と認識される木質の出土も見られた。尚、かわらけは、2号墓壙では下肢の部分に出土し、銭は全体的に胸部或いは腹部附近に出土する傾向が見られた。

時期　これらの墓壙の葬法は中世に属する可能性が高いものであるが、副装品から共に中世の所産と断定される。このうち4～7号墓壙は概ね16世紀の所産と判断される。



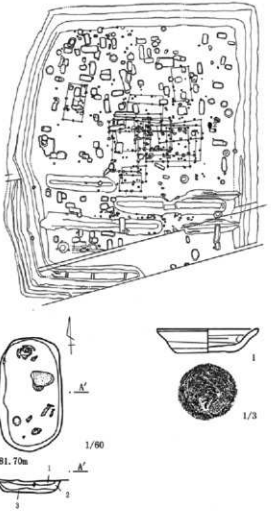
〔B1-21号井戸覆土〕
1：b′
2：b：ブロック多い
3：b

21号井戸（旧210ピット）



遺構埋土類型（埋土類型）
b：黒褐色土：黒色土か褐色土と少量の白色粒子含む
b′：bだが混入物ないか非常に少ない

第84図の2　B1-21号井戸

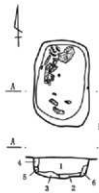


〔B1-2号墓壙覆土〕
1：黒褐色土(10YR2/3)：aか。白色粒子少量含む
2：暗褐色土(10YR3/3)
3：暗褐色土(10YR3/3)：微量の炭化物含む

第85図　B1-2号墓壙と出土遺物

規模　（B1-1号墓壙）径：91×158cm　深さ21cm
（B1-2号墓壙）径：70×120cm　深さ13cm
（B1-4号墓壙）径：86×134cm　深さ32cm
（B1-5号墓壙）径：101×131cm　深さ38cm

構造　1号墓壙は隅丸長方形、2・5号墓壙は楕円形、4号墓壙は長方形のプランを呈する。
掘削形態は箱形で底面は平底を呈する。



〔Ｂ１－１号墓壙棺部分覆土〕
１：黒褐色細砂（7.5YR3/2）：，β・ローム粒含むが、共に非常に少ない
〔Ｂ１－１号墓壙覆土〕
２：黒褐色シルト（10YR2/3）：骨含む
３：黒褐色シルト（10YR2/3）：暗褐色土　（10YR3/3）と骨含む
４：暗褐色シルト（7.5YR3/3）：白色粒子、明黄褐色ローム粒子（10YR6/8）含む
５：黒色シルト（7.5YR2/1）
６：黒褐色シルト（7.5YR3/2）

1-1

1-2

1-5

1-8

4/5

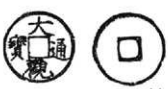
1-3

1-4

4/5

1-6

1-7


4-1

4-2

4-3

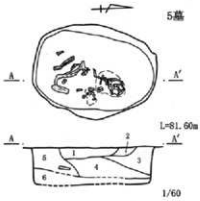
4-4

4/5

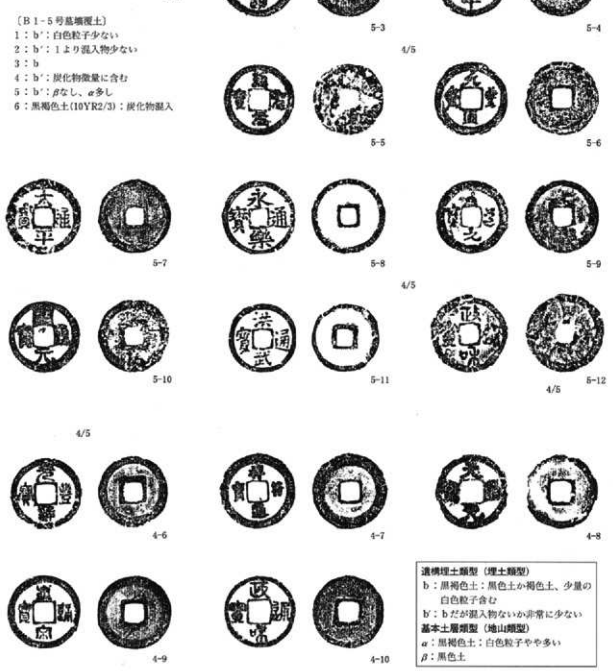
4-5

〔Ｂ１－４号墓壙覆土〕
１：b（10YR2/3）：２cm大
２：b（10YR3/3）：α多い
３：b（10YR2/3）：α２層に比し多い
４：b（10YR2/2）：α３層に比し多い

第86図の１　Ｂ１－１・４号墓壙と出土遺物

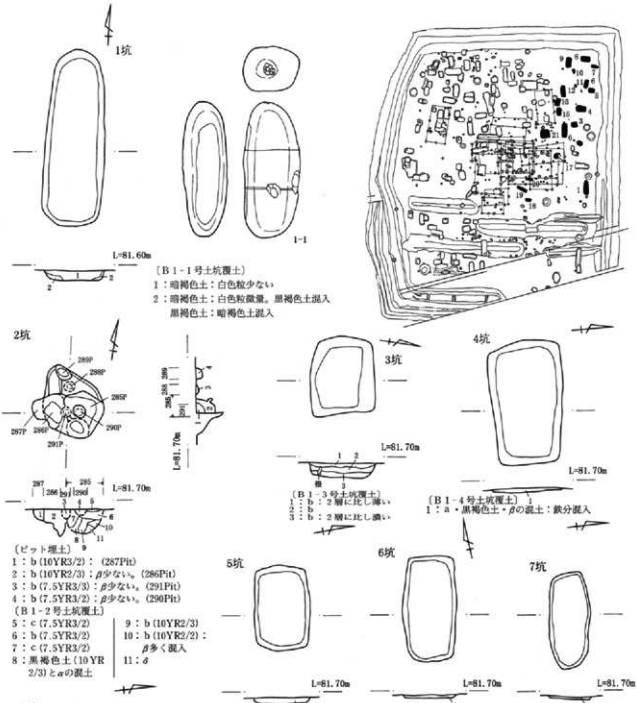


〔B1-5号墓壙覆土〕
1：b'：白色粒子少ない
2：b'：1より混入物少ない
3：b
4：b'：炭化物微量に含む
5：b'：βなし、αなし
6：黒褐色土(10YR2/3)：炭化物混入

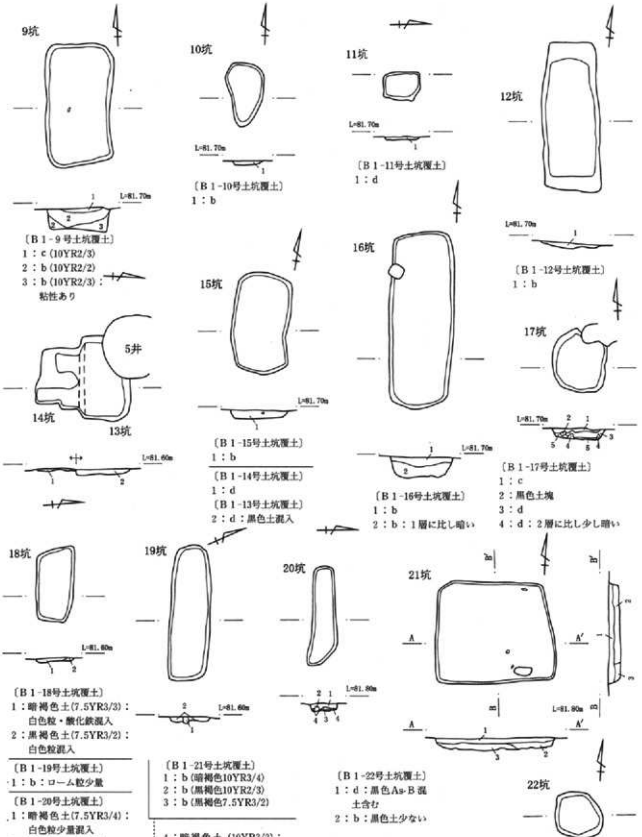


遺構埋土類型（埋土類型）
b：黒褐色土：黒色土か褐色土、少量の白色粒子含む
b'：bだが混入物ないか非常に少ない
基本土層類型（地山類型）
α：黒褐色土：白色粒子やや多い
β：黒色土

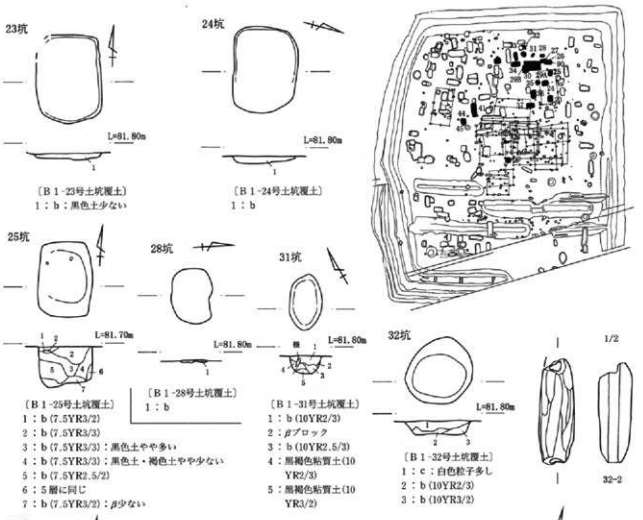
第86図の2　B1-1・5号墓壙と出土遺物



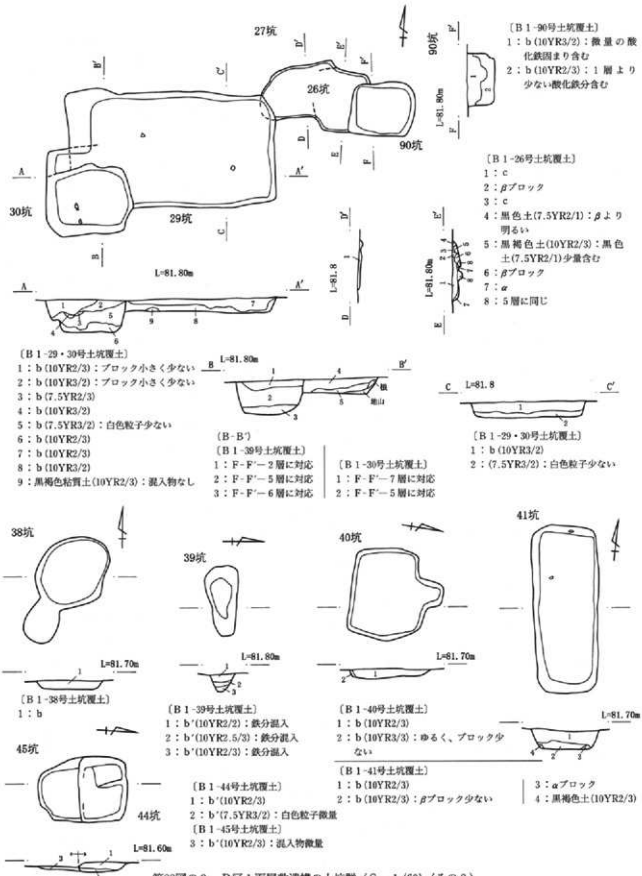
第87図の１　Ｂ区１面屋敷遺構の土坑群と出土遺物（Ｓ＝１/60）（その１）



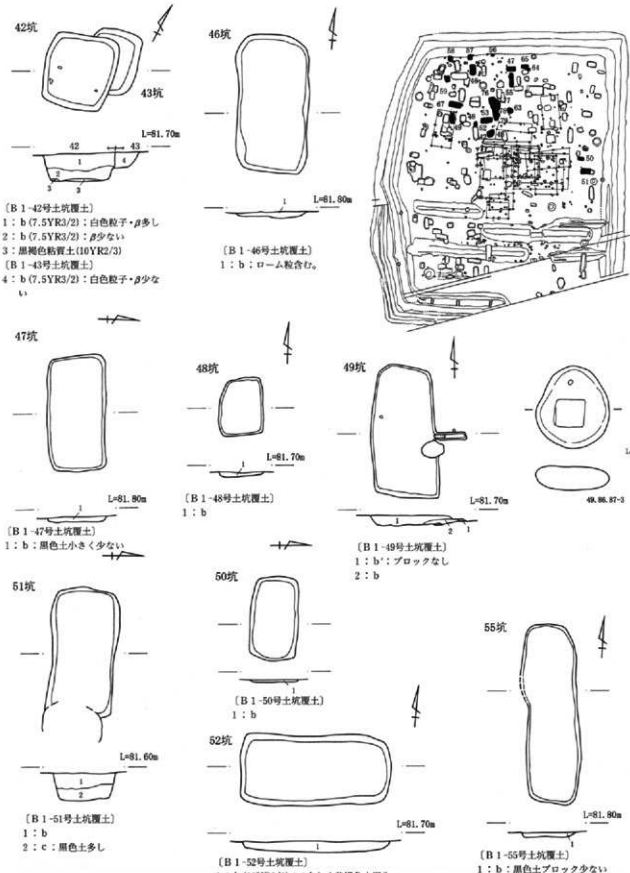
第87図の2　B区1面屋敷遺構の土坑群（S＝1/60）（その1）



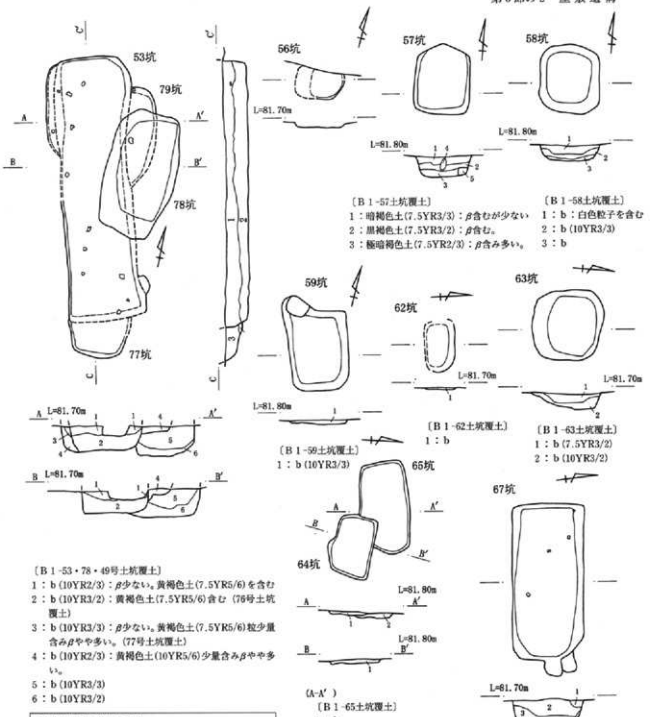
第88図の１　Ｂ区１面屋敷遺構の土坑群（Ｓ＝１/60）と出土遺物（その２）



第88図の2　B区1面屋敷遺構の土坑群（S＝1/60）（その2）



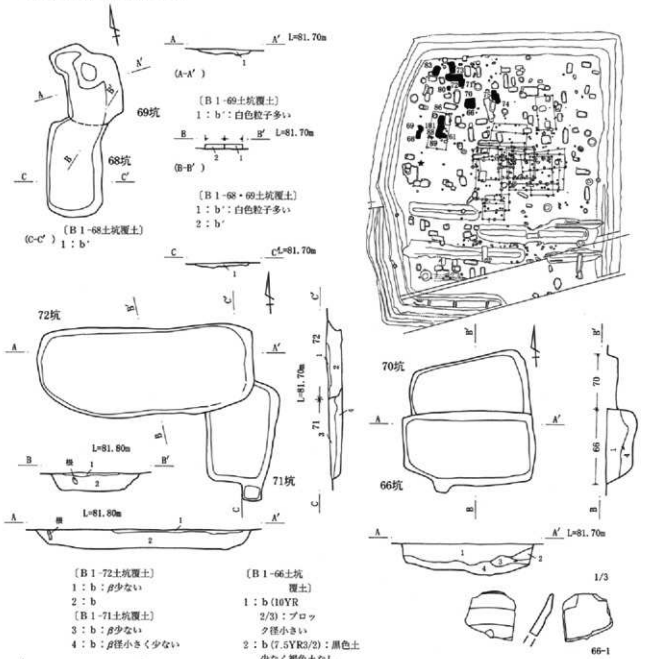
第89図の１　Ｂ区１面屋敷遺構の土坑群（Ｓ＝１/60）と出土遺物（その３）



第89図の2　B区1面屋敷遺構の土坑群（S＝1/60）（その3）

(7)　土坑（第87～93図　PL33～35・54・55）

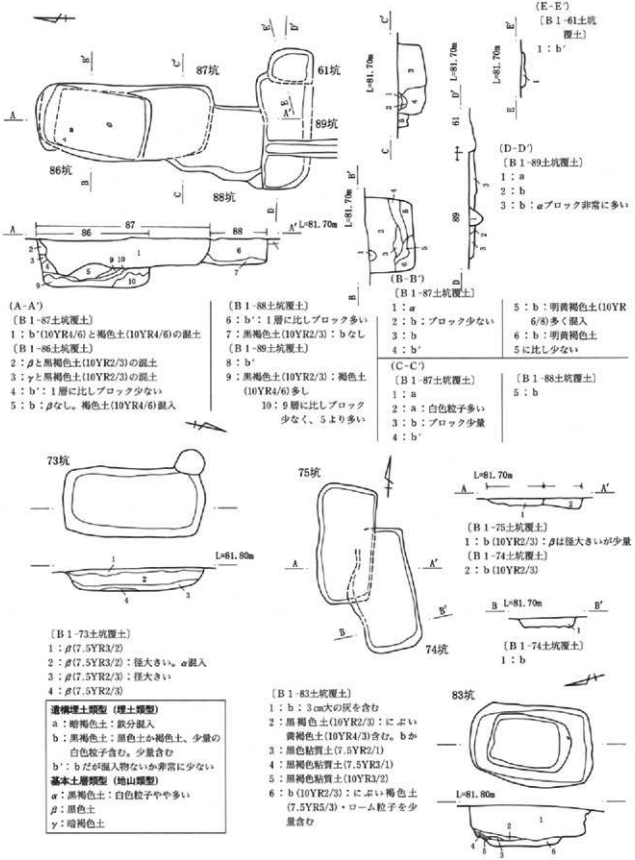
概要　外周部を中心にB区で137基、2区で6基の合わせて143基の土坑を確認、調査し、重複するもののうち41基で新旧関係を特定した。



第90図の１　Ｂ区１面屋敷遺構の土坑群（Ｓ＝１/60）と出土遺物（その４）

各土坑の掘削意図は特定できなかった。

遺物　54基で遺物が出土し、殿石（１坑－１）、土錘（32坑－２）、礎石（49・86・87坑－３）、陶器碗（66坑-11）、茶臼（94坑－５）、石臼（137坑－５）、かわらけ（147坑－６）、永楽通寶（147坑－７～９、坑-10）も見られた。（145頁に続く）



(A-A')
〔B 1-87土坑覆土〕
1：b'(10YR4/6)と褐色土(10YR4/6)の混土
〔B 1-86土坑覆土〕
2：βと黒褐色土(10YR2/3)の混土
3：γと黒褐色土(10YR2/3)の混土
4：b'：1層に比しブロック少ない
5：b：βなし。褐色土(10YR4/6)混入

〔B 1-88土坑覆土〕
6：b'：1層に比しブロック多い
7：黒褐色土(10YR2/3)：bなし
〔B 1-89土坑覆土〕
8：b'
9：黒褐色土(10YR2/3)：褐色土(10YR4/6)多し
10：9層に比しブロック少なく、5より多い

(B-B')
〔B 1-87土坑覆土〕
1：α
2：b：ブロック少ない
3：b
4：b'

(C-C')
〔B 1-87土坑覆土〕
1：a
2：a：白色粒子多い
3：b：ブロック少量
4：b'

5：b：明黄褐色土(10YR 6/8)多く混入
6：b：明黄褐色土5に比し少ない

〔B 1-88土坑覆土〕
5：b

(E-E')
〔B 1-61土坑覆土〕
1：b'

(D-D')
〔B 1-89土坑覆土〕
1：a
2：b
3：b：αブロック非常に多い

〔B 1-75土坑覆土〕
1：b(10YR2/3)：βは径大きいが少量
〔B 1-74土坑覆土〕
2：b(10YR2/3)

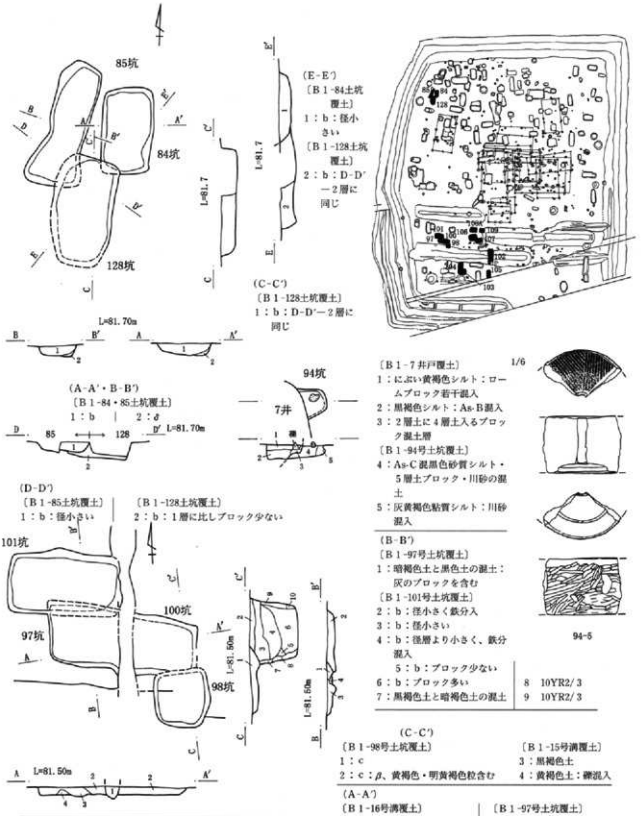
〔B 1-74土坑覆土〕
1：b

〔B 1-73土坑覆土〕
1：β(7.5YR3/2)
2：β(7.5YR3/2)：径大きい。α混入
3：β(7.5YR2/3)：径大きい
4：β(7.5YR2/3)

遺構埋土類型（埋土類型）
a：暗褐色土：鉄分混入
b：黒褐色土：黒色土か褐色土、少量の白色粒子含む。少量含む
b'：bだが混入物ないか非常に少ない
基本土層類型（地山類型）
α：黒褐色土：白色粒子やや多い
β：黒色土
γ：暗褐色土

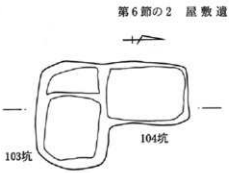
〔B 1-83土坑覆土〕
1：b：3cm大の炭を含む
2：黒褐色土(10YR2/3)：にぶい黄褐色土(10YR4/3)含む。bか
3：黒色粘質土(7.5YR2/1)
4：黒褐色粘質土(7.5YR3/1)
5：黒褐色粘質土(10YR3/2)
6：b(10YR2/3)：にぶい褐色土(7.5YR5/3)・ローム粒子を少量含む

第90図の2　B区1面屋敷遺構の土坑群（S＝1/60）（その4）

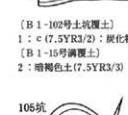


第91図の１　B区１面掘数遺構の土坑群（S＝1/60）と出土遺物（その５）

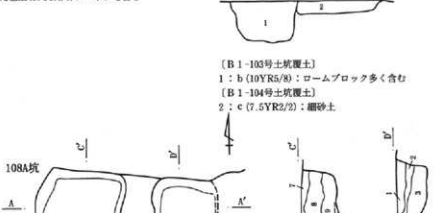
〔B 1-102号土坑覆土〕
1：c (7.5YR3/2)：炭化物及び褐色土(10YR4/6)ブロックを含む
〔B 1-15号溝覆土〕
2：暗褐色土(7.5YR3/3)



〔B 1-103号土坑覆土〕
1：b (10YR5/8)：ロームブロック多く含む
〔B 1-104号土坑覆土〕
2：c (7.5YR2/2)：細砂土



〔B 1-105号土坑覆土〕
1：c (7.5YR3/2)：赤褐色土
(5YR4/8)・鉄分粒子及びαブロックを含む



(A-A')
〔B 1-13号溝覆土〕
1：黒褐色土(7.5YR3/2)：白色粒子少な
〔B 1-109号土坑覆土〕
2：b (10YR4/6)：ブロック含む
3：b：β・α多いが、小さい
4：b：ブロックは僅か
5：黒褐色土(10YR2/3)
6：5層土に鉄分沈着か
〔B 1-108号土坑覆土〕
7：b (10YR3/4)：白色粒子・β多い
8：b (10YR3/3)：β多し
9：b (10YR2/3)：褐色土(10YR 4/6)含む
10：b (10YR2/3)：9層に比し混入物少量

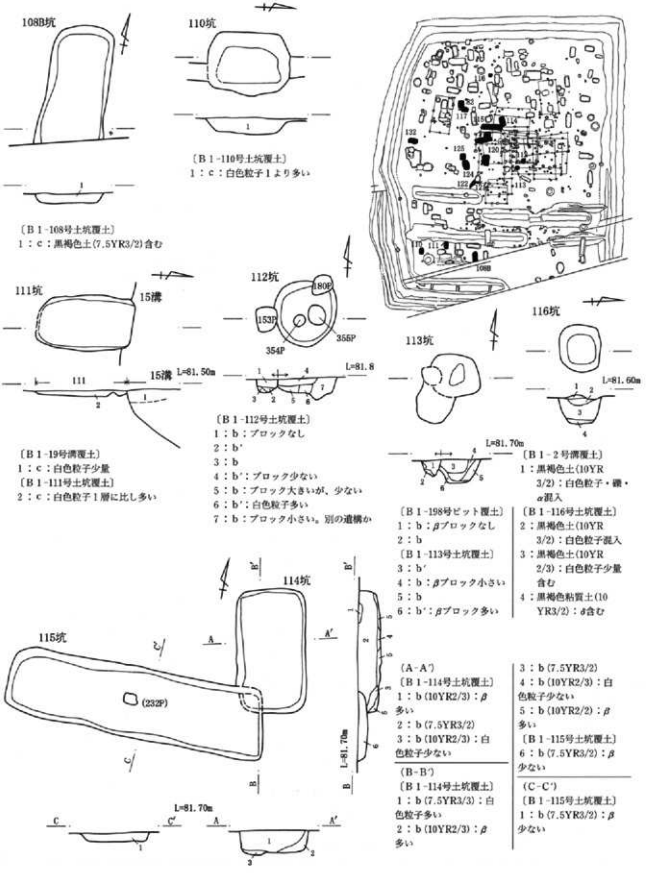
(B-B')
〔B 1-107号土坑覆土〕
1：b (10YR2/3)：βが少ない
2：b：1層よりβ多し
〔B 1-13溝覆土〕
3：暗褐色土(7.5YR3/3)：cか。白色粒含む
4：暗褐色土(7.5YR3/3)：cか。白色粒6に比し少なく、黒褐色土(10YR2/3)含む
〔B 1-106号土坑覆土〕
5：b (7.5YR3/3)：混入物少なく鉄分含む
6：b (7.5YR3/2)：混入物少ない
7：b (10YR3/2)：径大きいが非常に少なく、白色粒子なし
8：b (10YR3/3)：混入物多く、鉄分を含む
9：b (10YR3/2)：ブロック少ない
10：b (10YR3/2)
11：b (10YR2/3)
12：b (10YR2/3)：ブロック少ない

(C-C')
〔B 1-106号土坑覆土〕
1：b (7.5YR3/3)：混入物少なく鉄分含む
2：b (7.5YR3/2)：混入物少ない
3：b (10YR3/3)：混入物多く、鉄分を含む
4：b (10YR3/2)：ブロック少ない
5：b (10YR3/2)
6：b (10YR2/3)
〔B 1-108号土坑覆土〕

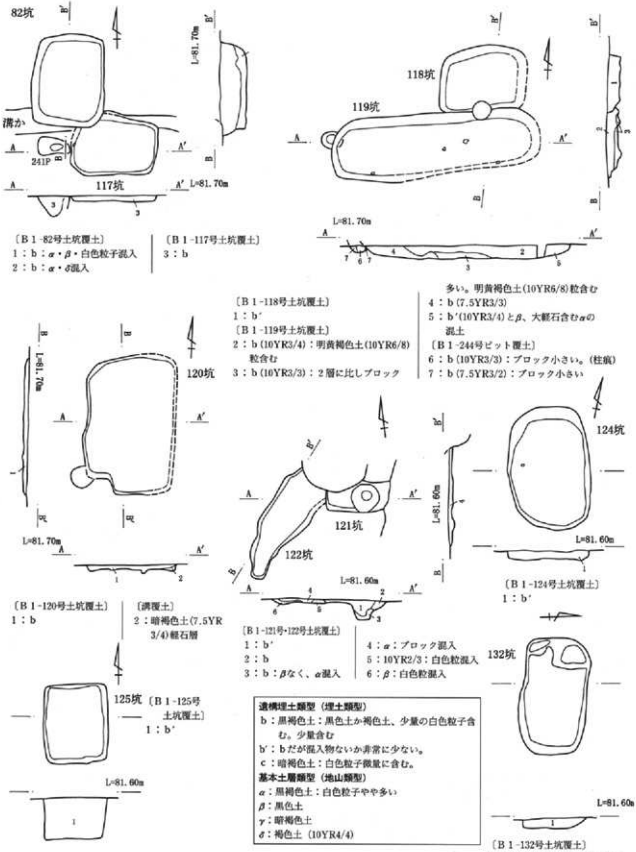
7：cか	9：γ
8：β	10：δ

(D-D')
〔B 1-109号土坑覆土〕
1：b (10YR2/3)：褐色土(10YR4/6)含む
2：b (10YR3/3)：混入物多く、鉄分含む
3：b (10YR3/2)：ブロック少ない
〔B 1-107号土坑覆土〕
4：b (10YR3/2)：ブロック少ない
5：b (10YR3/2)

第91図の2　B区1面屋敷遺構の土坑群（S＝1/60）（その5）



第92図の１　Ｂ区１面屋敷遺構の土坑群（Ｓ＝１/60）（その６）



〔B 1-82号土坑覆土〕
1：b：α・β・白色粒子混入
2：b：α・δ混入

〔B 1-117号土坑覆土〕
3：b

〔B 1-118号土坑覆土〕
1：b'
〔B 1-119号土坑覆土〕
2：b（10YR3/4）：明黄褐色土（10YR6/8）粒含む
3：b（10YR3/3）：2層に比しブロック多い。明黄褐色土（10YR6/8）粒含む
4：b（7.5YR3/3）
5：b'（10YR3/4）とβ、大軽石含むαの混土
〔B 1-244号ピット覆土〕
6：b（10YR3/3）：ブロック小さい。（柱痕）
7：b（7.5YR3/2）：ブロック小さい

〔B 1-120号土坑覆土〕
1：b

〔溝覆土〕
2：暗褐色土（7.5YR 3/4）軽石層

〔B 1-121号・122号土坑覆土〕
1：b'
2：b
3：b：βなく、α混入
4：α：ブロック混入
5：10YR2/3：白色粒混入
6：β：白色粒混入

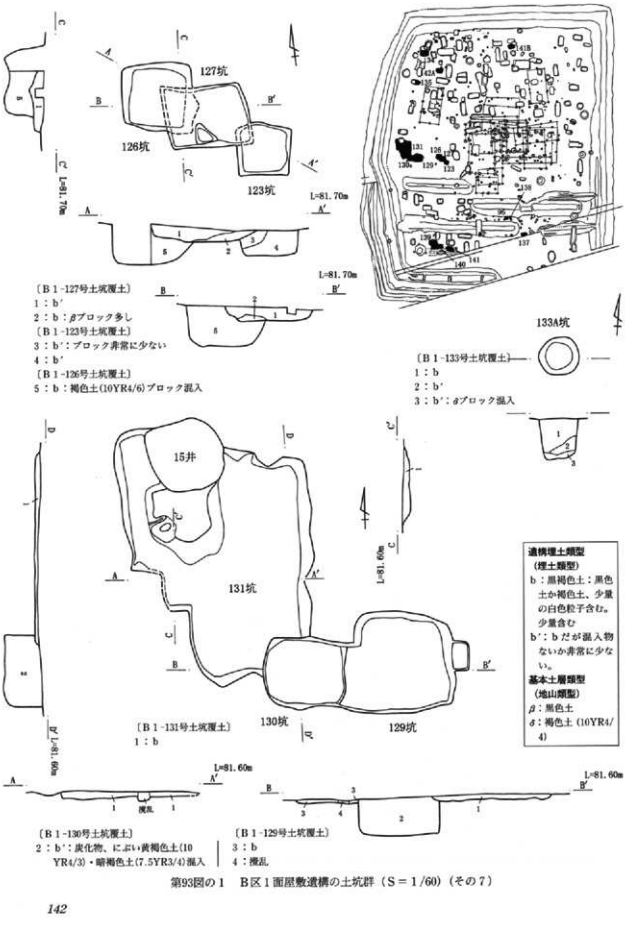
〔B 1-124号土坑覆土〕
1：b'

〔B 1-125号土坑覆土〕
1：b'

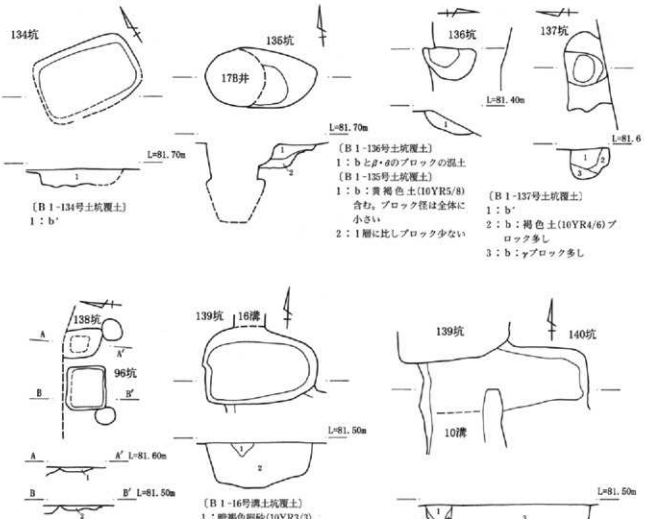
〔B 1-132号土坑覆土〕
1：b：炭化物混りブロック小

遺構埋土類型（埋土類型）
b：黒褐色土：黒色土か褐色土、少量の白色粒子含む。少量含む
b'：bだが混入物ないか非常に少ない。
c：暗褐色土：白色粒子微量に含む。
基本土層類型（地山類型）
α：黒褐色土：白色粒子やや多い
β：黒色土
γ：暗褐色土
δ：褐色土（10YR4/4）

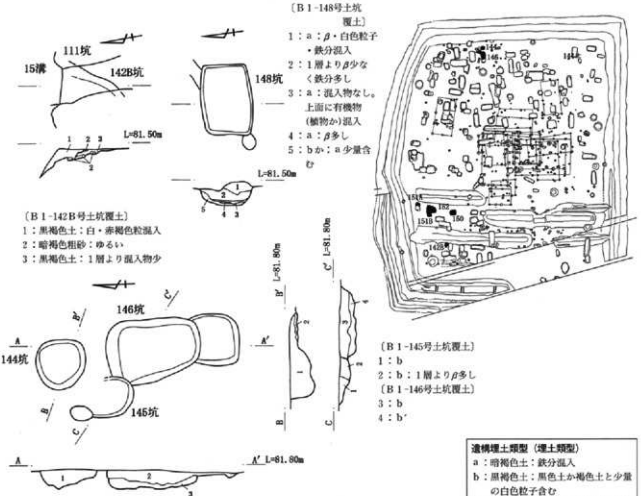
第92図の2　B区1面屋敷遺構の土坑群（S＝1/60）（その6）

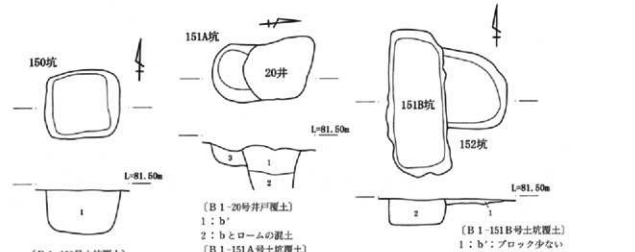


第93図の１　Ｂ区１面屋敷遺構の土坑群（Ｓ＝１/60）（その７）

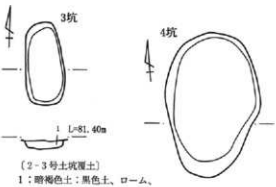


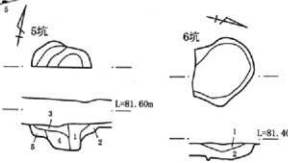
第93図の２　Ｂ区１面屋敷遺構の土坑群（Ｓ＝１/60）（その７）

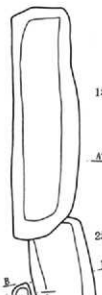




第94図の１　Ｂ区１面屋敷遺構の土坑群（Ｓ＝１/60）（その８）

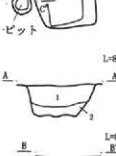






〔地山層〕
1：灰褐色土
〔2-5号土坑覆土〕
2：暗褐色土：黒色土多く含み、白色粒子含む
3：暗褐色土：白色粒子含む
4：暗褐色土：小礫含み締まる
5：暗灰褐色土：少量の黒色土含む

〔2-1号土坑覆土〕
1：暗褐色土：ローム、黒色土含む
2：暗褐色粘質土：ローム、黒色土
〔2-2号土坑覆土〕
3：暗褐色土：黒色土とローム粒含む
〔2-1号ピット覆土〕
4：褐色土：ローム粒、黒色土含む
5：黒色粘質土：暗褐色土含む



第94図の2　B区1面屋敷遺構の土坑群（S＝1/60）（その8）

時期　147号土坑が16世紀と認識できる以外の各土坑は、概ね中世の所産と認識されに過ぎなかった。

規模　巻末土坑・ピット一覧参照

構造　プランは短冊形を呈するもの12基、長方形91基、方形21基、楕円形12基、円形8基、その他1基で、方形を基調とするものが多かった。

掘削形態は箱形を呈するものが多かった。　(8)　ピット（第87～93図　PL35～36・55）

概要　屋敷外周部を中心に多数のピット（柱穴）を確認したが、掘立柱建物以外で259基があった。

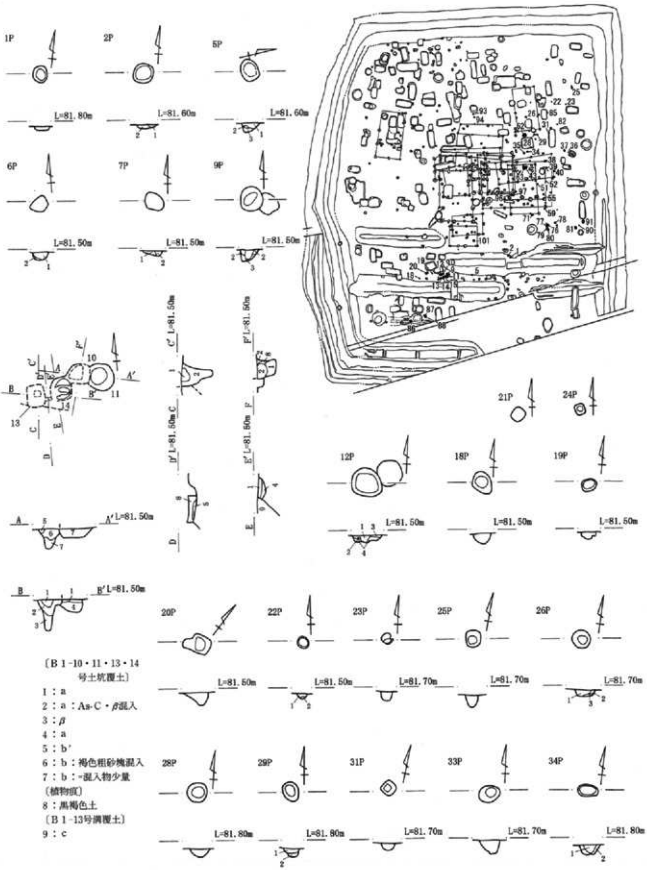
これらの多くは建物や柵の柱穴と認識される。

遺物　このうち10基から土師器片を中心とする出土遺物を得たが、図示すべきものは特になかった。

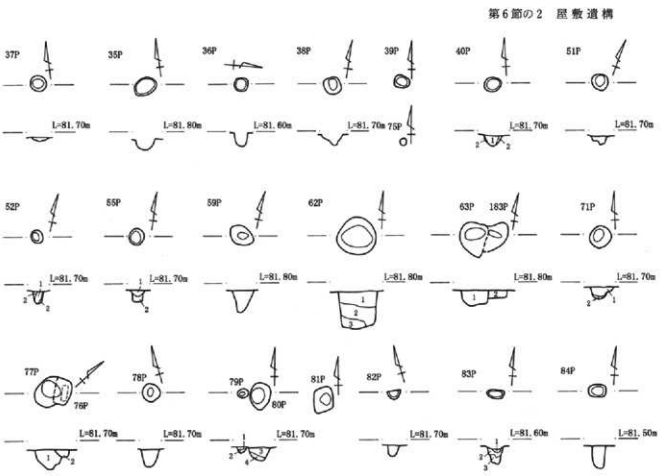
時期　ピットは何れも概ね中世の所産と認識されるが、時期は特定できなかった。

規模　巻末土坑・ピット一覧参照

構造　方形或は円形プランのものが(153頁に続く)



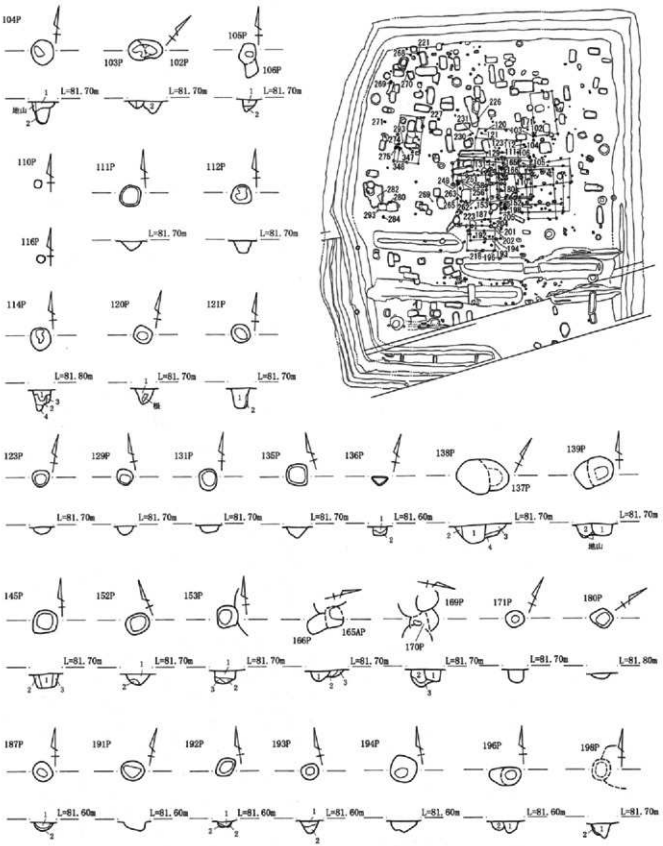
第95図の１　B区１面屋敷遺構のピット群（S＝1/60）（その１）



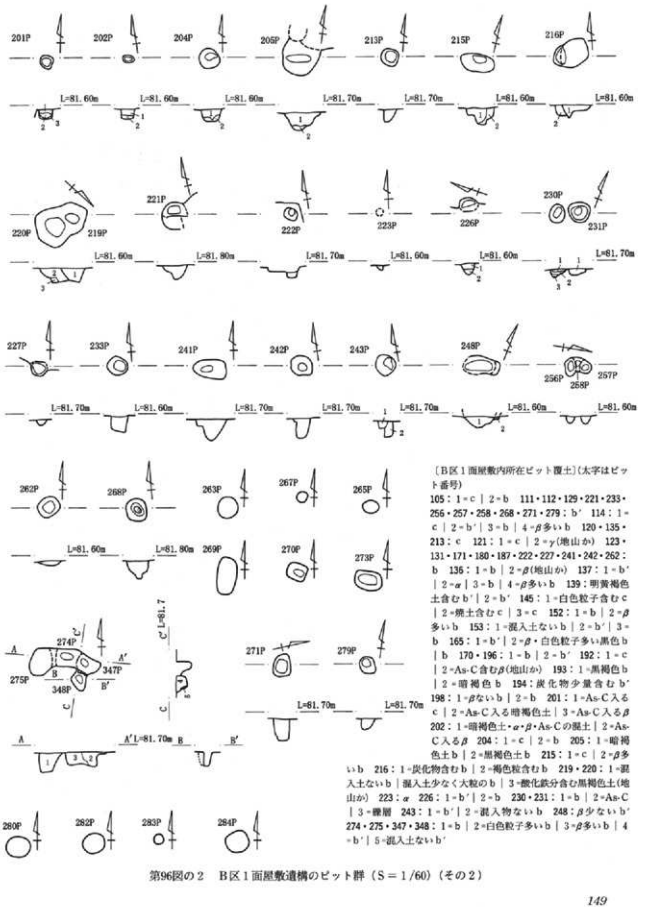
遺構埋土類型（埋土類型）
a：暗褐色土：鉄分混入
b：黒褐色土：黒色土か褐色土、少量の白色粒子含む。少量含むb′：bだが混入物ないか非常に少ない。
c：暗褐色土：白色粒子微量に含む。
基本土層類型（地山類型）
α：黒褐色土：白色粒子やや多い
β：黒色土

〔B区1面屋敷内所在ピット覆土〕（太字はピット番号）
1：黒褐色土：aか。ローム微量　2：1＝酸化鉄踏むa｜2＝白色粒やや多く、β多く、暗褐色土少量含む　5：1=白色粒少量含む暗褐色土、aか｜2=白色粒混入の｜3=黒褐色土　6：1=b｜2=As-C入るb　7：1=a｜2=β多く含むa（周層とも13溝上位層か）　9：1=b、柱痕か｜2=a｜3=b　12：1=a｜2=As-C混土｜3=α｜4=As-C混β　18・19：白色粒微量の黒褐色土　20・23・25・82・91：b　22：1=b｜2=黒褐色粘質土　26：1=c｜2=As-C混β｜3=β　28：β少量のb　29：1=βなく炭化物入るいb｜2=βないb　31：βないc　32：aとαの混土　34：1=黒褐色土｜2=白色粒入るcとαの混土　40：1=c｜2=β入るc　51・85：c　52：1=β少ないb｜2=黒色シルト　55：1=b｜2=β多いb　59・90：b′　62：1=b′｜2=b（7.5YR3/2）｜3=混入物少ないb　63・183：1=c｜2=酸化鉄分混入のc　71：1=b′｜2=As-C混入のβ　76・77：1・2=c　78：混入物ないc　79・80：1=c｜2=混入土ないb′｜3・4=β少ないb　83：1=b｜2=βないb｜3=b　84：黒褐色土　86：洪水層土混入の黒褐色土　87：1=β・にぶい黄褐色土含む黒褐色土｜2=黄褐色土・黒色土・灰褐色暗褐色土　91：1=b　93：c　94：β・褐色土含むc　96・97：1・4=白色粒少ないc｜2=白色粒ないc｜3・6=c｜5=As-C入るβ｜6：5層土入るb　101：酸化鉄分混入のb′　102・103：1=黄褐色土混入のb′｜2=b　104：1=b′｜2=b

第95図の2　B区1面屋敷遺構のピット群（S＝1/60）（その1）



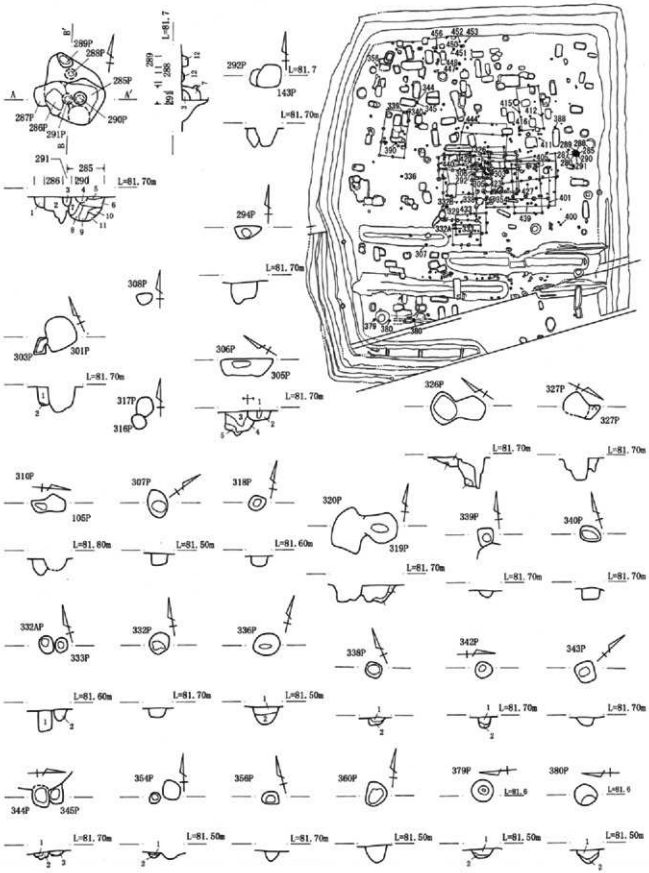
第96図の１　Ｂ区１面屋敷遺構のピット群（Ｓ＝１/60）（その２）



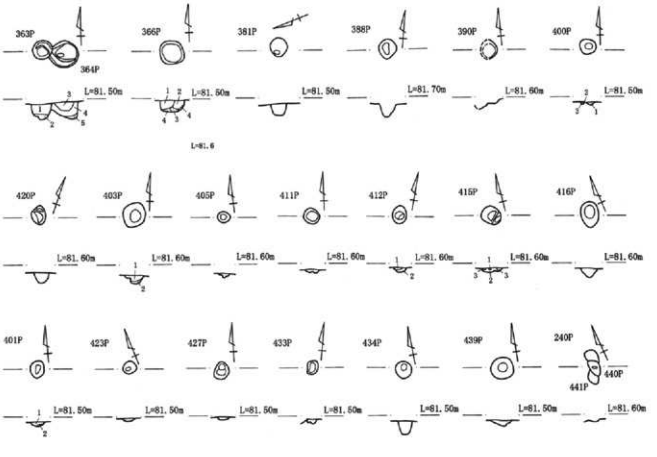
〔B区1面屋敷内所在ピット覆土〕(太字はピット番号)

105：1＝c｜2＝b　111・112・129・221・233・256・257・258・268・271・279：b′　114：1＝c｜2＝b′｜3＝b｜4＝β多いb　120・135・213：c　121：1＝c｜2＝γ(地山か)　123・131・171・180・187・222・227・241・242・262：b　136：1＝b｜2＝β(地山か)　137：1＝b′｜2＝α｜3＝b｜4＝β多いb　139：明黄褐色土含むb′｜2＝b′　145：1＝白色粒子含むc｜2＝焼土含むc｜3＝c　152：1＝b｜2＝β多いb　153：1＝混入土ないb｜2＝b′｜3＝b　165：1＝b′｜2＝β・白色粒子多いb黒色b｜b　170・196：1＝b｜2＝b′　192：1＝c｜2＝As-C含むβ(地山か)　193：1＝黒褐色b｜2＝暗褐色b　194：炭化物少量含むb′　198：1＝βないb｜2＝b　201：1＝As-C入るc｜2＝As-C入る暗褐色土｜3＝As-C入るβ　202：1＝暗褐色土・α・β・As-Cの混土｜2＝As-C入るβ　204：1＝c｜2＝b　205：1＝暗褐色土b｜2＝黒褐色土b　215：1＝c｜2＝β多いb　216：1＝炭化物含むb｜2＝褐色粒含むb　219・220：1＝混入土ないb｜混入土少なく大粒のb｜3＝酸化鉄分含む黒褐色土(地山か)　223：α　226：1＝b′｜2＝b　230・231：1＝b｜2＝As-C｜3＝層層　243：1＝b′｜2＝混入物ないb　248：β少ないb′　274・275・347・348：1＝b｜2＝白色粒子多いb｜3＝β多いb｜4＝b′｜5＝混入土ないb′

第96図の2　B区1面屋敷遺構のピット群（S＝1/60）（その2）



第97図の1　B区1面屋敷遺構のピット群（S＝1/60）（その3）

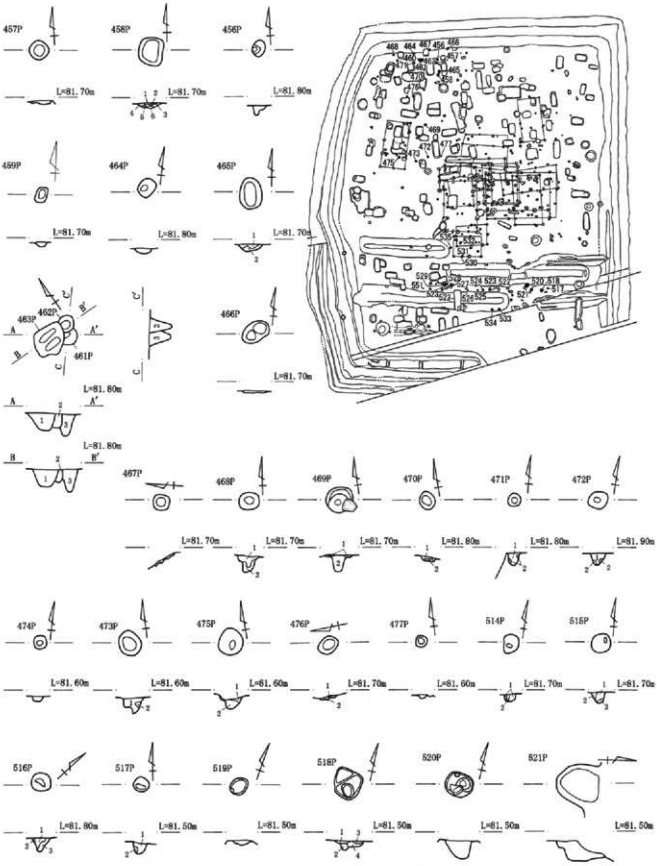


〔B区1面屋敷内所在ピット覆土〕〔太字はピット番号〕
292・**327**・**332**・**339**・**405**・**411**・**416**・**427**・**439**・**447**・**449**・**452**・**459**・**460**：b　**303**：1＝b′｜2＝b　**305**・**306**：1＝炭化物少量含むc｜2＝1より軽石多いc｜3＝2より軽石少ないc｜4＝b｜5＝黒褐色細砂　**307**：β＝暗褐色砂質土混入の黒褐色土(bか)　**310**・**332**・**333**・**340**・**343**・**360**・**423**・**433**・**434**・**457**：b′　**318**：αのみ入るb′　**319**：1＝b′｜2＝b｜3＝βないb　**326**：1＝β大きいb′｜2＝α入るb｜3＝b′｜4＝にぶい黄褐色土　**336**：1＝b′｜2＝α大きいb′　**338**：1＝α・小礫・炭化物の混土｜2＝小礫層　**342**：1＝白色粒多いb′｜βないb　**344**・**345**：1＝b′｜2＝混入土ないb｜3＝b′　**354**：1＝α＝β｜2＝b　**355**：βないb　**363**・**364**：1＝混入土ないb′｜2＝鉄分入り固いb｜3＝b′｜4＝b｜5＝β多いb　**396**：1＝混入物微量のb′｜2＝ややβ多いb′｜3＝2層土＋白色粒子｜4＝3＋β　**379**：1＝黄褐色粒入る黒褐色粗砂＋α｜2＝礫少量含む黄褐色土砂＋α　**380**：1＝2に黄褐色粒混入｜2＝α混入の黒褐色土　**381**：炭化物・α混入のb′　**400**：1＝b′｜2＝β　**401**：1＝白色粒ないb′｜2＝γ入るb′　**403**：1＝b′｜2＝γのみ入るb　**412**：1＝b(暗褐色)｜2＝b(黒褐色)　**415**：1＝b｜2＝α｜3＝β＝As-C　**420**：炭化物入るb′　**445**・**446**：1＝b｜2＝β(地山か)　**448**：1＝b′｜2＝γ　**450**・**454**：1＝b′｜2＝b｜3＝β｜4＝2より暗いb｜5＝混入物微量のb｜6＝b′｜7＝2｜8＝6より混入物γより粘性少なく暗い黒褐色土　**451**：炭化物入るb　**453**：1＝b｜2＝β　**455**・**456**：1＝b｜2＝β｜3＝混入物微量のb｜4＝βなくα入るb｜5＝b｜6＝β粒混入のb　**458**：1＝a｜2＝暗褐色粒(テフラか)｜3＝γ多いb｜4＝2＋3｜5＝b｜6＝β多い3

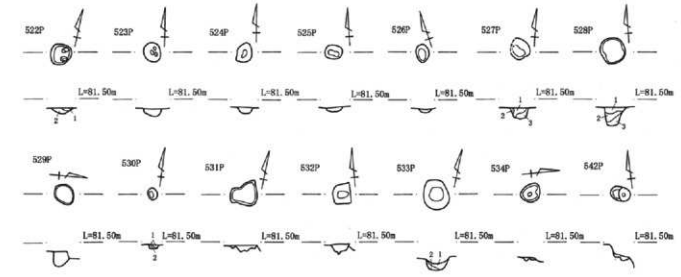
遺構埋土類型（埋土類型）
a：暗褐色土：鉄分混入
b：黒褐色土：黒色か褐色、白色粒子少量
b′：bだが混入物ないか僅か
c：暗褐色土：白色粒子微量

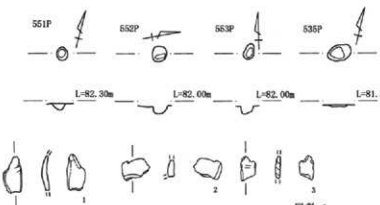
基本土層類型（地山類型）
α：黒褐色土：白色粒子やや多い
β：黒色土
γ：暗褐色土

第97図の2　B区1面屋敷遺構のピット群（S＝1/60）（その3）



第98図の１　Ｂ区１面屋敷遺構のピット群（Ｓ＝１/60）（その４）

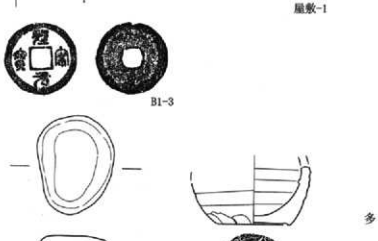




屋敷-1

〔B区1面屋敷内所在ピット覆土〕(太字はピット番号)
451・462・463：1＝β少ないb｜2＝β大きいb｜3＝黒褐色b
454・456・474・477・514・520・524・526・532・534・542：b
465：1＝b｜2＝b′　**467**・519・521・523・529・531：b′
468：1＝混入土ないb′｜2＝γ多いb　**469**：1＝b｜2＝混入物ないb　**470**・517：1＝b｜2＝β　**471**：1＝b′｜2＝γ
472：1＝b′｜2＝混入土ないb　**473**・530：1＝b′｜2＝β
475：1＝b′｜2＝暗褐色のb′　**476**：1＝β塊｜2＝b　**515**：1＝b｜2＝β多く黒褐色粘質のb｜3＝2よりβ多し　**516**：1＝βないb′｜2＝α(焼山か)｜3＝β多く粘質のb：　**518**：1＝暗赤褐色細砂｜2＝β＋薄層｜3＝酸化鉄分混入の小礫・粗砂層｜4＝酸化鉄分混入の粗砂　**522**：1＝γ｜2＝b　**525**：混入土小径のb　**257**：1＝βないb′｜2＝β・γ非常に多いb
258：1＝混入土小径のb｜2＝1より混入土多いb｜3＝白色粒子のみのb′　**533**：1＝b′｜2＝γ＋β　**535**：白色粒子混入のαか　**551**：径小さいb

遺構埋土類型（埋土類型）
b：黒褐色土：黒色土か褐色土、少量の白色粒子含む
b′：bだが混入物ないか非常に少ない
基本土層類型（地山類型）
α：黒褐色土：白色粒子やや多い
β：黒色土
γ：暗褐色土



第98図の2　B区1面屋敷遺構のピット群（S＝1/60）（その4）及びB区1面の出土遺物

多く、底面は丸底を呈するものが多かった。

(9)　B区1面遺構外の遺物(第99図　PL55・56)

この他屋敷からは漆碗(1)が出土している。

また、土師器片等に混じり似1面の以降外の遺物としてはB区の施釉陶器碗(1)、焼締陶器甕(2)、聖宋元寶(3)、角釘(4・8)、敲石(5)、磨石(6)、同銭(7)、BW区の須恵器瓶(1)、焙烙鍋(2)、磁器皿(3)などが見られた。

第７節　Ｂ区２面

(1)　Ｂ区２面

Ｂ区２面に於いてはＢ区中南部と東部及び２区の東寄りの一部にかけての区域で畠（サク状遺構）が確認され、その北側外周域に９軒の竪穴住居が調査された。そして東西両側には合わせて７条以上の溝が確認され、このうち１～２条の溝には谷状の遺構が鈎形に接続しており、この接続部を中心に多量の杭等の木質の出土が見られた。

この他、水田面としては認識されなかったもののAs-Bの面的堆積（第100図の網部分）が西部の溝や谷の位置に於いて３ケ所で確認された。また２面に於いては幾つかの土坑及びピットを確認したのであるが、その多くが１面の掘り残しと判断されたため、これらのうちBE区の４基と、Ｂ区の１基の合わせて４基の土坑について記載することとする。

尚、遺構外から土師器坏（BW-1）等の出土遺物が得られた。

(2)　畠（サク状遺構）（第100図、PL67）

概要　畠遺構はＢ区南東半部に確認された。サクは116条以上が確認され、10面余りを特定できた。

このうち北部の人字状に切り合うものは北東-南東方向に走行する一群が、東部の格子状に重複するものは南北方向に走行するものの方が新しい。また

第99図の１　Ｂ区２面全体図（S＝1/400）

西部の何れも西北西-東南東に走行する2面の畠については新旧を特定することはできなかった。

遺物　畠のサクからは平安時代を中心とする時期の土師器坏片等が出土したが、特に図示すべきものは認められなかった。

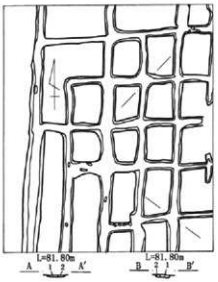
時期　畠の時期は出土遺物と覆土から概ね平安時代と認識されるが、B2-1号との関係からAs-B降下後の可能性も有する。

規模　範囲：52×56m　各畠規模：14×32m以下

サク　幅：30cm程度
深さ：12cm以下

構造　サクは概ね南北或は東西かそれに近い方向に、直線的な走行を取るものが多いが、中南部のものは弱く屈曲する。

掘削形態は箱堀状を呈するが、横断面形は箱形とU字形のものがある。



〔サク状遺構覆土〕
1：黒褐色土：白色粒子やや多く酸化鉄含む
2：褐色土：白色粒子と黒色土、細砂含む。ゆるい

第99図の2　B区2面全体図（S=1/400）と畠（S=1/100）

(3)　Ｂ２－１号住居（第100図の１、PL61・68）

概要　本住居はＢ区中北部に在り、南西部を中世の土坑に切られるが、２面の他遺構との重複はない。

南半は削平が深く掘形でその範囲を認識するほどで、北半もまた床面をかろうじて検出した。

遺物　本住居からは甕（１）等の土師器、台石（２）、敲石（３）などの出土が見られた。

時期　本住居の時期は特定できなかったが、出土遺物から推して概ね平安時代の所産と認識される。

規模　径：314×252cm　深さ：０cm

竈　幅：118cm　奥行き：88cm

（左袖）幅：19cm　奥行き：32cm

（右袖）幅：36cm　奥行き：32cm

貯蔵穴　径：41×47cm

深さ：10cm

掘り方貯蔵穴　径：(45)×(36)cm　深さ：７cm

床下土坑１　径：(30)×62cm

深さ：４cm

床下土坑２　径：54×65cm

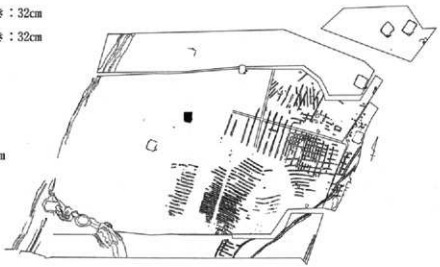
深さ：３cm

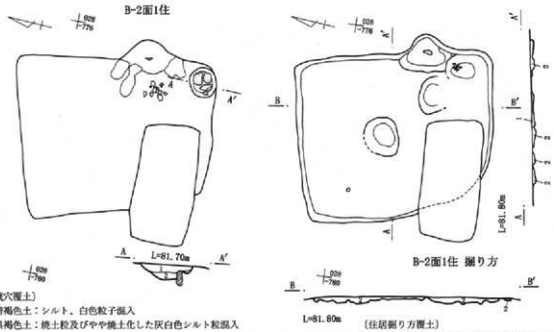
構造　プランは南北に長軸を持つ方形を呈する。

床下土坑を伴う掘り方を有し、これを黒褐色埋め戻して床を造る。

竈は東壁南寄りに設けられ、壁面を30cmほど凸出隅丸三角形の浅い掘り方を掘削し、これを焼土を含む灰黄褐色土等で埋め戻して燃焼面を造る。その両側に灰黄褐色土を使用する短い袖が造られる。

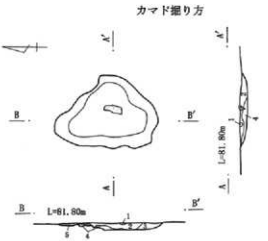
床面に柱穴は認められなかったが、竈右側に楕円形プランの貯蔵穴が掘削される。





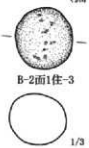
第100図の１　Ｂ２－１号住居

カマド掘り方

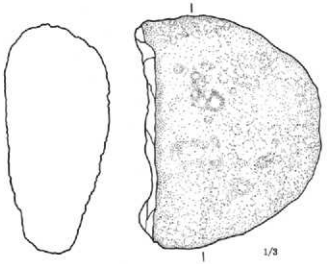


〔竈掘方覆土〕
1：暗色焼土
2：灰黄褐色土：焼土粒、炭化物、灰白色シルト粒混入
3：灰黄褐色土：灰白色土粒若干混入
4：褐灰色土：灰白色土小ブロック・粒混入
5：灰黄褐色土：焼土粒及びやや焼土化した灰白色土粒混入。

B-2面1住-1



B-2面1住-3



B-2面1住-2

第100図の2　B2-1号住居と出土遺物

(4)　B2-2号住居(第101図の1・2、PL61・68)

概要　本住居はB区中部西寄りに在り、北東部を中世の土坑に切られるが、2面に在る他の遺構との重複は見られない。

本住居は所謂焼失家屋で、炭化材の状態から南風の時に東側竈付近に着火したものと思慮される。

遺物　本住居からは須恵器高台付碗(1)・碗(2)・甕(5)、土師器甕(3)・台付甕(4)などの出土が見られた。

また、住居南側を中心に垂木中心の炭化材が遺存していたが、北側では桟と思わしきものも見られた。柱や梁、桁、棟材は確認できなかった。

時期　本住居は出土遺物から推して10世紀前半期の所産と判断される。

規模　径：314×266cm　深さ：15cm

竈　幅：90cm　奥行き：70cm

(左袖) 幅：(15)cm　奥行き：(6)cm

(掘り方) 径：93×40cm　深さ：6cm

貯蔵穴　径：34×28cm　深さ：9cm

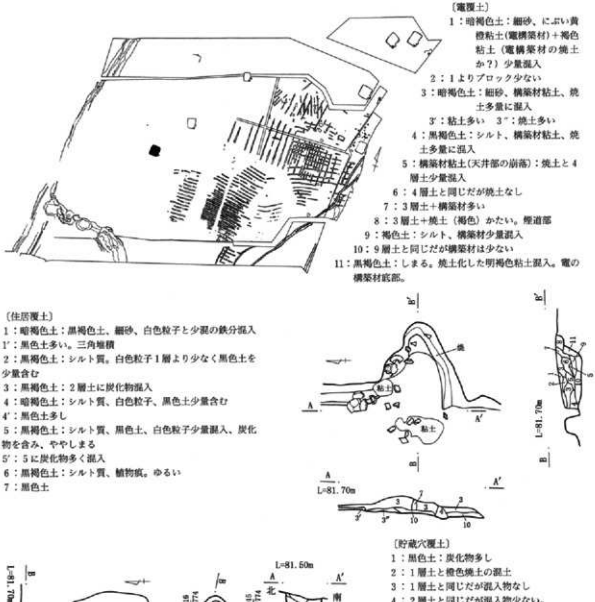
構造　プランは隅丸方形を呈する。

幅広の不整形な周溝状の掘り込みを伴う掘り方を有し、これを暗褐色土等で埋め戻し、黒褐色シルト質土等で貼り床を設けていた。

竈は東壁南寄りに造られ、壁に接して楕円形様プランの浅い掘り方を掘削し、これを焼土を含む黒褐色土等で埋め戻して燃焼面を作る。袖は右側に地山掘り残しのものが残るのみだが、袖や天井ににぶい黄橙粘土や褐色粘土で作っている。

床面に柱穴は確認されなかったが、竈右側に小型の浅い掘り込みの貯蔵穴が確認された。

尚、上屋構造は把握できなかったが、屋根は垂木に細かく桟を添えていたことが確認された。また南西部に焼土の面的分布が認められたことから土葺き屋根であったものと認識される。



第101図の1　B2-2号住居

(5)　B2-3号住居（第102図、PL62・68）

概要　本住居はB区中部北端に在り、2面に在る他の遺構との重複は見られなかった。

本住居は上位が削平されていて遺存状態は不良であり、一部を欠失する状態の床面より下をかろうじて調査できたに過ぎなかった。

遺物　本住居からは図示すべきものはなかったが土師器坏・甕片13点、須恵器碗片3点を出土した。また天井石が出土している。

時期　概ね平安時代の所産として把握できるだけで、細かい時期は特定できなかった。

規模　径：280×199cm　深さ：0cm

竈　幅：74cm　奥行き：69cm

（左袖）幅：19cm　奥行き：37cm

（右袖）幅：19cm　奥行き：7cm

貯蔵穴　径：40×47cm　深さ：20cm

床下土坑　径：76×128cm　深さ：26cm

構造　本住居は横長の長方形プランを呈する。

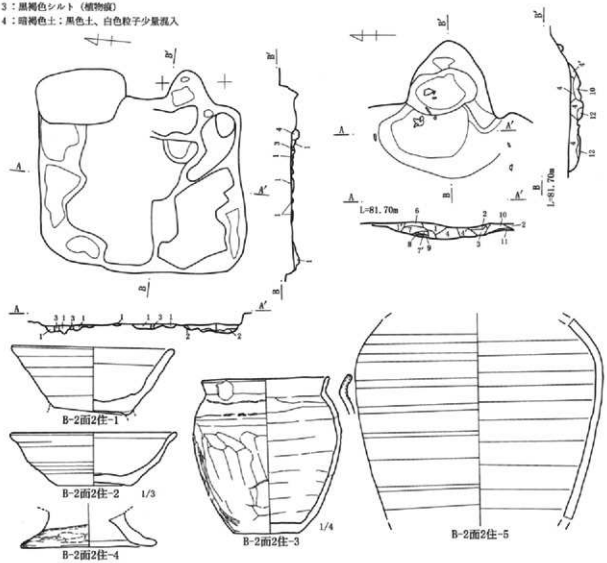
大型の床下土坑を伴う掘り方を有し、これを黒褐色土等で埋め戻して床を造っている。

竈は東壁南寄りに設け、壁を跨いで楕円形プランの浅い掘り込みの掘り方を掘削し、これを焼土粒を含む褐灰色土で埋め戻して燃焼部を造り、その両側に円礫を据えて袖石としている。上位構造は不詳。

竈右側に貯蔵穴を確認している。柱穴はなかった。

〔貼り床構築材〕
1：黒褐色シルト質土：黒色土と白色粒子（As-CまたはHr-FPか）多く混入
2：1層土に比し黒色土多く、パミス少ない
〔住居掘り方覆土〕
3：黒褐色シルト（植物痕）
4：暗褐色土：黒色土、白色粒子少量混入

〔竈掘り方覆土〕
1：黒褐色土：粘性あり、白色粒子を少量含む
1′：焼土粒子混入
2：1′層土ににぶい橙色粘土多く混入。ゆるい
3：黒褐色土：やや粘性あり、粘土（にぶい橙）、炭化物混入
4：黒褐色土：白色粒子、焼土、黒褐色、黒色土混入
4′：4層土に比し混入物少ない
5：黒褐色土：やや粘性あり、白色粒子少量混入
6：黒褐色土：砂粒、焼土ブロック（にぶい橙）混入
7：6層土＋白色粒子。混入物少ない
7′：炭化物混入
8：黒褐色土：炭化物混入
9：黒褐色土：白色粒子混入
10：黒褐色土：粘土ブロック、βブロック非常に多い
11：黒褐色土：粘質、シルト
12：10層土より混入物少ない



第101図の2　B2-2号住居と出土遺物

(6)　B 2－4 号住居（第103図、PL62・69）

概要　本住居はBE区北部に在る。他の竪穴住居との重複はなかった。攪乱で西側中央と北側の一部を壊されている。

本住居は焼失家屋であり、東部中程と北東、南西に面的な焼土の分布域を確認している。しかし、攪乱もあって点火位置等は推定できなかった。

遺物　本住居からは土師器片を中心に須恵器高台付碗（1）等の出土が見られた。

炭化材は状態が良くないが、板状かと思われる。

時期　本住居の時期は出土遺物から推して概ね10世紀前半頃の所産と認識される。

規模　径：348×270cm　深さ：0cm

竈　幅：85cm　奥行き：83cm

（左袖）幅：25cm　奥行き：17cm

（右袖）幅：18cm　奥行き：19cm

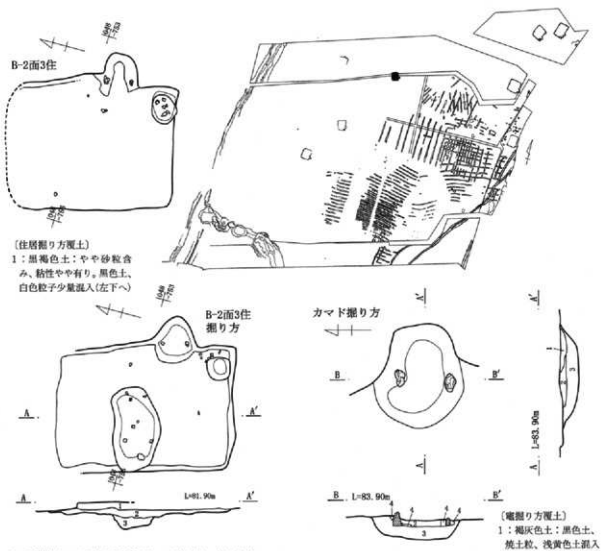
貯蔵穴　径：25×41cm

深さ：12cm

床下土坑　径：113×(126)cm

深さ：21cm

構造　本住居は西壁から北壁にかけての壁沿いに、整ったプランを有する幅60～80cm、深さ3～4cmの周溝状の掘り込みを掘削し、また竈前には円形プラ



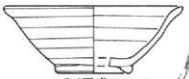
第102図　B 2－3 号住居

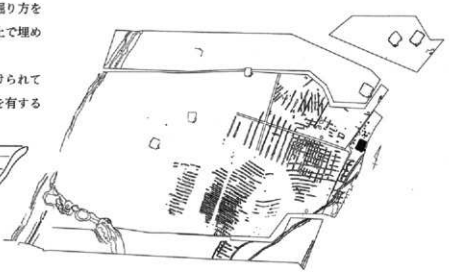
ンの大型の床下土坑を伴う掘り方を有しており、これを黒褐色土で埋め戻して床を造っている。

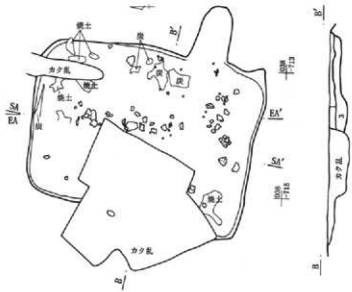
竈は住居東壁南寄りに設けられている。左右両側に袖の残欠を有するが、記録化が不十分で掘り方、或は上位の構造を含め竈の構造を明らかにすることはできなかった。

床面に於いては柱穴、貯蔵穴共に確認されなかったが、掘り方面に於いて竈右側の南壁際に貯蔵穴の掘削されているのを確認した。

また、上位の構造は詳らかでなかったが、覆土中の炭化材の状態から板屋根を葺いていた可能性が考慮される。また同じく焼土の分布状況から、土葺き屋根であったものと認識される。

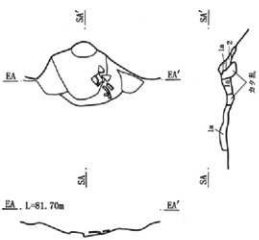




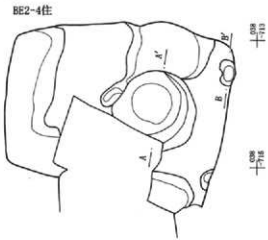


〔住居・住居掘り方覆土〕
1：暗褐色土：軽石・炭・焼土混入し、黒褐色粘質土含む
1'：焼土・炭粒1層土より多く含む
2：暗褐色土：軽石粒、炭粒、炭化物混入じる
3：黒褐色土：As-C混黒色土、黒褐色粘質土入り混じる。上層に薄く炭層あり。(貼床)
4：焼土

〔竈覆土〕
1：暗褐色土：焼土、炭粒入混じり、黒褐色粘質土混入
2：黒褐色粘質土と焼土の混土：炭含む
3：暗橙色土：焼土主体。炭、灰含む

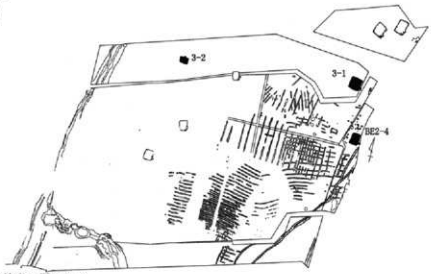


第103図　B2-4号住居と出土遺物



〔A-A'〕
〔床下土坑覆土〕
1：暗褐色土：As-C混入土。明暗褐色土に白色パミス粒含む。粘性の高い土がブロック状に入り混じっている。焼土粒少量含む

〔B-B'〕
〔貯蔵穴〕
1：暗褐色土：軽石粒僅かに含む。焼土粒あるが量は少ない



(7)　3－1号住居（第104図 PL62・63・69）

概要　本住居は、3区東端部に位置する。

遺存状態は良好でない。

遺物　本住居では竈右側を中心に土師器甕（4）・坏（1・2・3）、須恵器坏（5・6）、刀子（7）などの出土を見た。

時期　出土遺物から推して9世紀前半と思われる。

規模　径：385×351cm　深さ：13cm

竈　幅：96cm　奥行き：117cm

（左袖）幅：24cm　奥行き：30cm

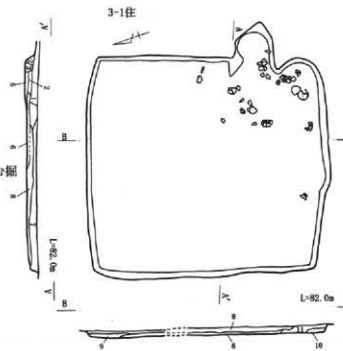
（右袖）幅：30cm　奥行き：25cm

構造　本住居はやや横長の長方形プランを呈し、南壁東半部が23cm程南に突き出している。

外周が70～80cm、深さ10cm程緩やかに落ち込む掘り方を埋め戻して床を造り出している。

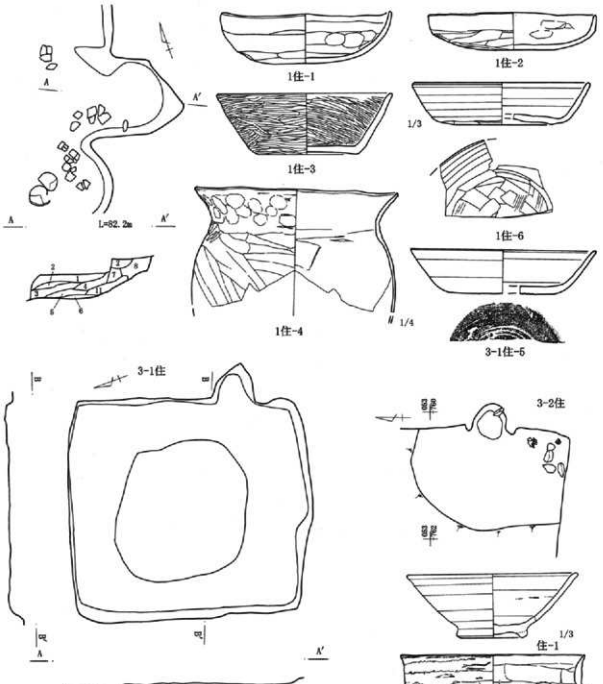
竈は東壁右寄りで上位構造は詳らかでない。

尚、柱穴、貯蔵穴等は確認できなかった。



〔住居覆土〕
1：灰褐色土：多量の焼土、褐色土、白色粒子含む
2：褐色土：焼土含む
3：黒褐色土：焼土、灰、褐色土含む
4：灰褐色土：1層上より褐色土多く含む
5：褐色土：焼土、灰の混土層
6：黒褐色粘質土：焼土多く含む
7：黒褐色土：白色粒子含む
8：黒褐色土：やや粘性あり。白色粒子、少量の焼土含む
9：黒褐色粘質土：少量の焼土含む
10：黒褐色粘質土：白色粒子、褐色土含む
11：黒褐色土：白色粒子多く含む

第104図の1　B2－4・3－1号住居



第104図の2　3-1・2号住居と出土遺物

(8)　3-2号住居（第104図、PL.63・69）

概要　本住居は3区の西部に単独で位置する。

本住居は大きく削平されており、住居北東部の掘り片面を確認できたに過ぎなかった。

遺物　調査範囲は狭かったが、須恵器高台付碗(1)や土師器甕(2)などが見られた。

時期　本住居の時期は、出土遺物から推して10世紀前半期と認識される。

規模　残径：243×168cm　深さ：－0cm

竈　幅：80cm　奥行き：44cm

（左袖）幅：19cm　奥行き：12cm

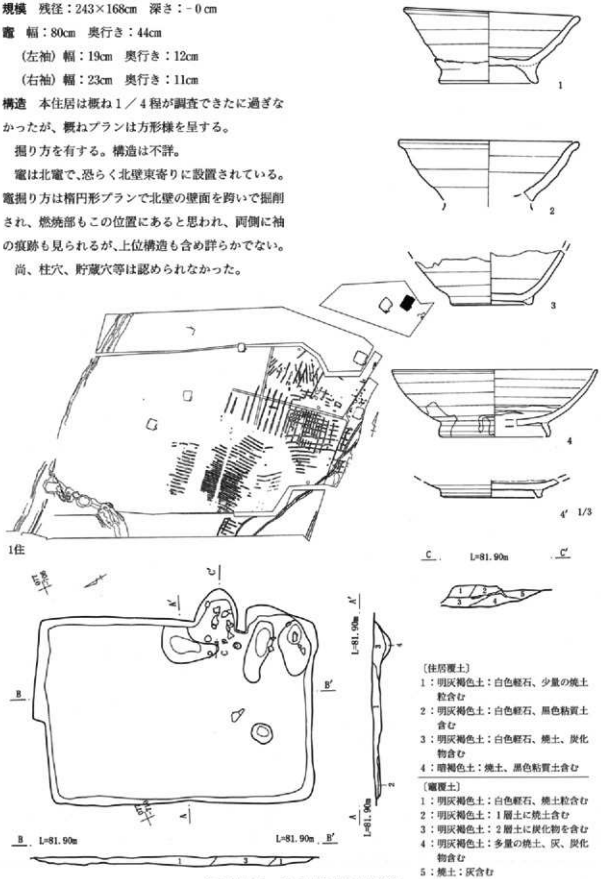
（右袖）幅：23cm　奥行き：11cm

構造　本住居は概ね１／４程が調査できたに過ぎなかったが、概ねプランは方形様を呈する。

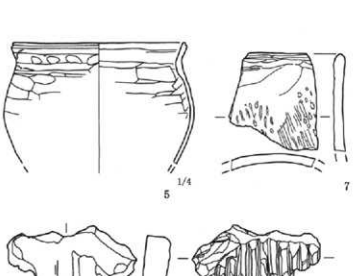
掘り方を有する。構造は不詳。

竈は北竈で、恐らく北壁東寄りに設置されている。竈掘り方は楕円形プランで北壁の壁面を跨いで掘削され、燃焼部もこの位置にあると思われ、両側に袖の痕跡も見られるが、上位構造も含め詳らかでない。

尚、柱穴、貯蔵穴等は認められなかった。



第105図の１　D－１号住居と出土遺物



第105図の2　D-1号住居出土遺物

(9)　D-1号住居

(第105・106図、PL63・69・70)

概要　本住居はD区の北東部に単独で位置する。

本住居の遺存状態も良好とは言い難かった。

遺物　本住居からは土師器甕(6)を中心とする遺物の出土があったが、この中には須恵器高台付碗(1～3)、灰釉陶器高台付碗(4)、砥石(5)、古墳時代前期の土師器甕片(7)などが見られた。

時期　本住居は出土遺物から推して、概ね10世紀後半期の所産と判断される。

規模　径：444×296cm　深さ：9cm

竈　幅：93cm　奥行き：120cm

(右袖) 幅：21cm　奥行き：(12)cm

貯蔵穴（左）径：34×98cm　深さ：11cm

（右）径：46×48cm　深さ：16cm

ピット　径：36×30cm　深さ：9cm

構造　本住居は横長の長方形プランを呈するが、掘り方の有無は詳らかでない。

竈は東壁南寄りに、壁面を跨いで設置されている。上位構造は明瞭ではないが、左袖の下面には浅い掘り込みがあり、右袖の残存部先端に袖材らしい粘土が確認されている。

床面南東寄りに小ピットが在るが、位置的に柱穴とは認められない。また貯蔵穴は明瞭ではないが、竈右側の落ち込み部分に求められよう。尚、この部分には左右にハ字状に配置する掘り込みが見られる。

(10)　D-2号住居

(第107図、PL63・70)

概要　本住居はD区中部に単独で位置する。

新旧関係は不明だが住居東壁北部と住居中西部に土坑が重複するように在り、或は本住居に伴う可能性も有する。

遺物　本住居からは平安時代のものを一定量の出土遺物が得られたのであるが、この中には須恵器高台付碗(1～3)、土師器甕(4)、砥石(5)などが見られた。

時期　出土遺物から推して本住居は概ね10世紀前半期の所産として把握される。

規模　径：371×316cm　深さ：10cm

竈　幅：84cm　奥行き：87cm

（右袖）幅：23cm　奥行き：38cm

貯蔵穴　径：68×59cm　深さ：8cm

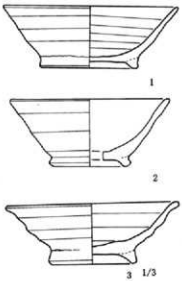
土坑　径：90×65cm　深さ：22cm

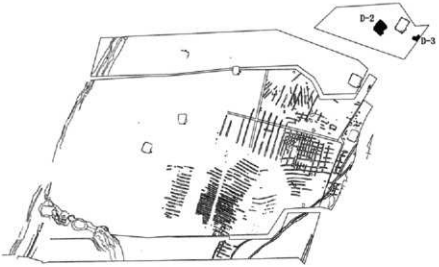
構造　本住居はやや菱形に近い隅丸方形を呈し、南東部が25cm程東側に突出している。

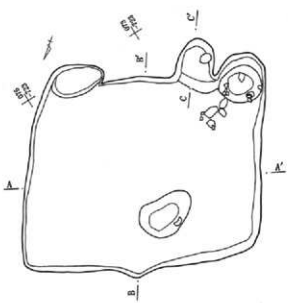
本住居は掘り方を有するものと思慮され、3・4層土は床土の可能性を有している。

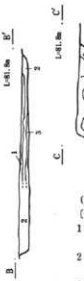
竈は東壁南寄りに設定され、燃焼部は東壁面を跨ぐように設置されている。上位構造は不明だが、東壁南端部が東に突出することによって、燃焼部右側壁面部が掘り残しの袖としての機能を有している。

柱穴は確認されなかったが、竈右側の突出部に浅い貯蔵穴が掘削されている。貯蔵穴は南北両側は住居壁面に接しているが、奥側（東）は壁面との間に10cm前後の余裕が持たれている。



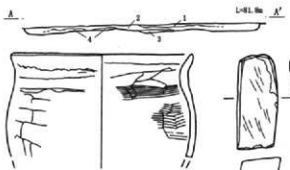


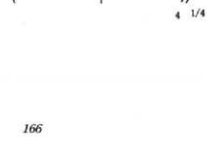


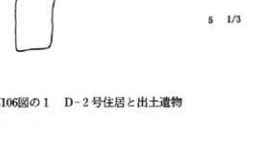


（C－C'）
（竈覆土）
1：明灰褐色砂質土：焼土粒多く含む
2：明灰褐色砂質土：1層に比し焼土粒多し
3：黒色粘質土：白色軽石含む
4：明灰褐色砂質土：焼土塊、炭化物含む
5：焼土塊、灰

（A－A'・B－B'）
（住居覆土）
1：明灰褐色砂質土：少量の白色軽石、黒色粘質土含む
2：明灰褐色砂質土：白色軽石、暗灰色土、黄灰色砂質土含む
3：黒色土：As-C軽石含む
4：黒色土：As-C軽石、灰色砂質土含む
5：暗褐色土







第106図の1　D－2号住居と出土遺物

第106図の2　D－3号住居と出土遺物

(11)　D－3号住居（第107図、PL64・70）

概要　本住居はD区東端部、D－1号住居の東に単独で位置している。

遺存状態は悪く、東側は調査区域外に、また西側の大半は攪乱等の削平で失われているが、埋土などの状態から竪穴住居跡の掘り方の一部と判断した。

遺物　僅かに須恵器碗（1）が出土したに過ぎない。

時期　出土遺物からすると9世紀後半という時期が与えられるが、出土遺物が僅か1点であるためその特定は難しい。

規模　残径：201×180cm　深さ：0cm

竈　幅：(58)cm

構造　本住居は大きく壊されているため全容は不明で、プランも確認することはできなかった。

本住居は掘り方を有しているが、これを黒色粘質土で埋め戻して床を作り出している。

竈に断面に見えるだけで、プランや上位構造は不明であるが、東竈で浅い掘り方を焼土を含む黒褐色土や暗褐色土で埋め戻していることが確認された。

柱穴、貯蔵穴を確認することもできなかった。

(12)　3-16・17・BW2-4・5号溝と谷

（第108～110図、PL59・64～66・71～77）

概要　本遺構は南側に流下する3-16・17号溝とBW2-4・5号溝、及びこれと鈎状に連なる谷状遺構（B区では「谷」、2区では「旧河道」と呼称したが以下「谷」とする）から成っている。

このうち16・17号溝は完全に重なるが、16号溝の方が古い。また本線部分では2条以上の溝を認識したものの新旧の把握ができなかったため、3区側の溝との接続状況は明らかにできなかった。

本遺構群には流水の痕跡が見られ、水路と認識され、屈曲部には水流を制御したと思しき簡易施設も見られた。また谷部分には幾つかの大型の竪穴が掘削されていたが、粘土採掘坑の可能性や流水を利用した何らかの施設の可能性が考えられる。

遺物　溝遺構からの遺物の出土は3-16号溝から須恵器甕（1）片が出土のみであった。しかし、溝と谷の接合部から谷にかけては土師器坏（1～7）、須恵器の坏（8・9）・高台付碗（10～12）、凹石（14）、磨石（108）、敲石（15）、薄板材（16）、疑わしいものを含め杭（17～47・69～88・107）、割材（48～60・63・89～92・106）、切断した痕跡のある材（61～67・93～105）など木質を中心に多量の遺物が出土している。杭、割材、切断痕のある材は丸木材が多く、樹皮付のものも見られた。

時期　出土遺物から推して本遺構は凡そ9世紀前半期の所産と認識される。

規模　溝　長さ：57.1m　幅：421cm　深さ：16号溝：94cm　17号溝：64cm

谷　長さ：32.7m　幅：670cm　深さ：210cm

掘り込み1　径：5.8×5.9m　深さ：128cm

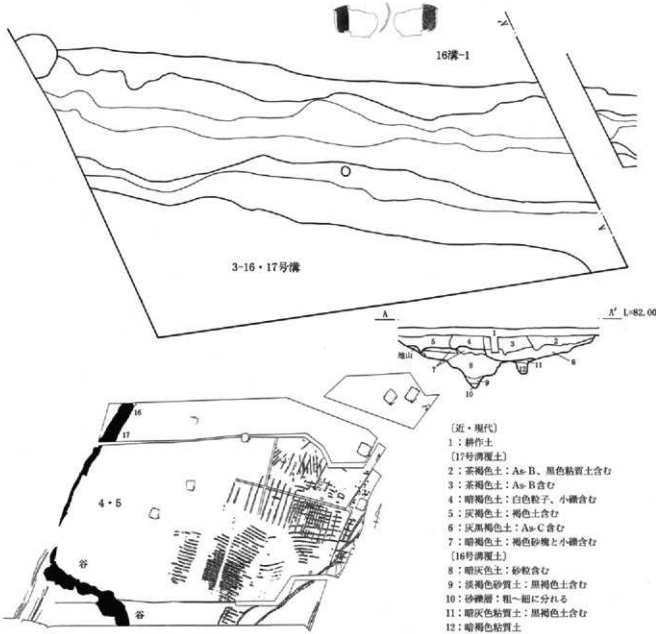
掘り込み2　径：4.8×5.7m

掘り込み3　径：3.9×7.0m　深さ：180cm

掘り込み4　径：6.7×7.4m　深さ：114cm

構造　溝群は概ね南流するが、その走行は緩やかに蛇行する。そしてその南端で東に屈曲して谷に入り、大きなカーブを描いて南に走行を変じている。

屈曲部は楕円形プランの箱形に掘削され、東西に



第107図の１　3-16・17・BW２-４・５号溝

細かく並ぶ樹皮付のものもある杭の打設があり、一方、中位層から１回で切断したものの多い粗朶が南北に並べられているのが確認され、しがらみ状の構造を持つ施設の遺存が窺われた。

溝は箱堀状を呈するが、部分的に薬研堀状を呈している。谷には大型で楕円形プランの竪穴が４箇所程確認されている。谷中央部の竪穴は袋状を呈し、上位壁面には棚落ちも見られた。底面は平らを意識しているが、流水により凹凸の多い箇所も見られる。

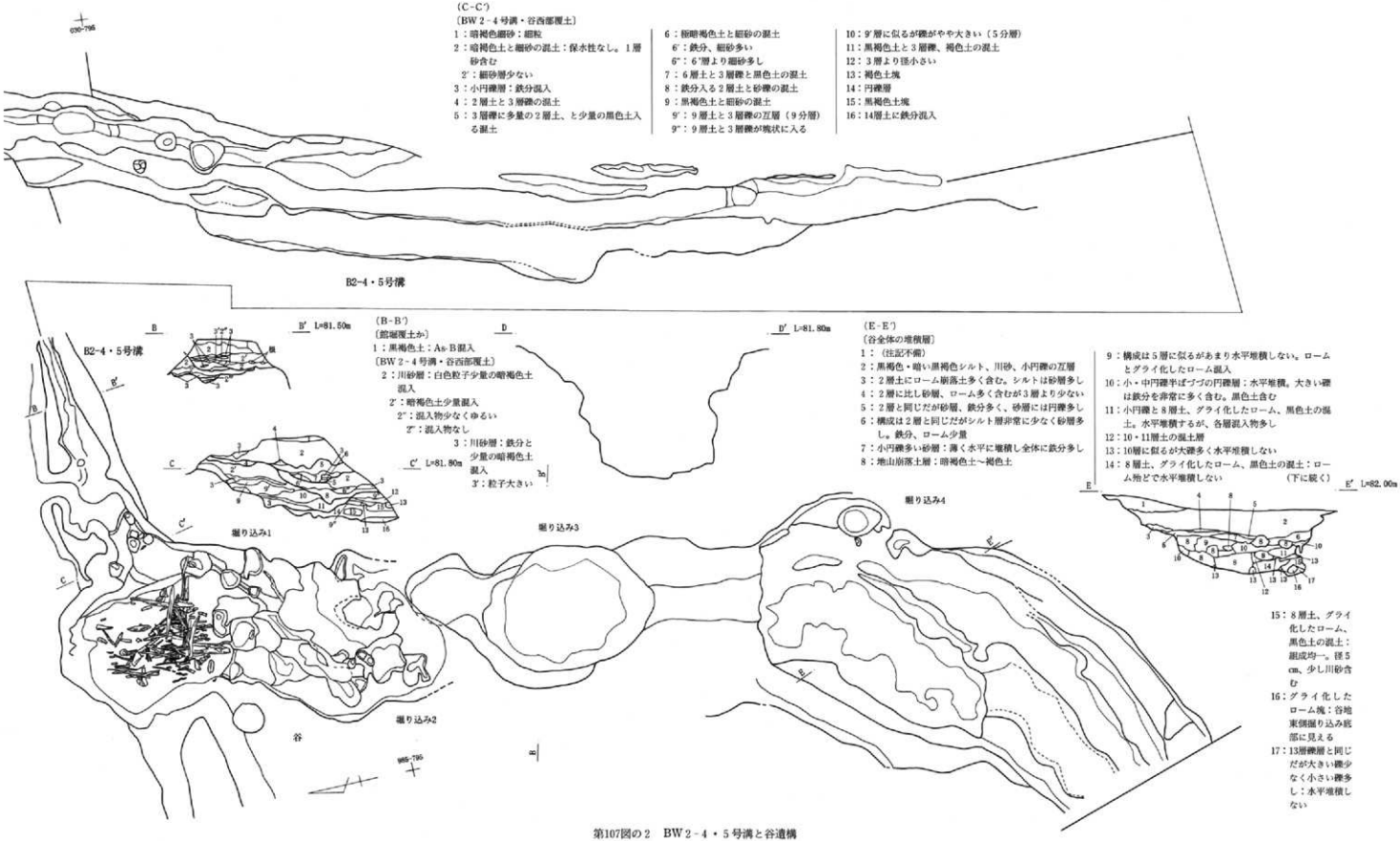
⑬　２-１～３・Ｂ２-１・BE２-１・２号溝

（第112図、PL60）

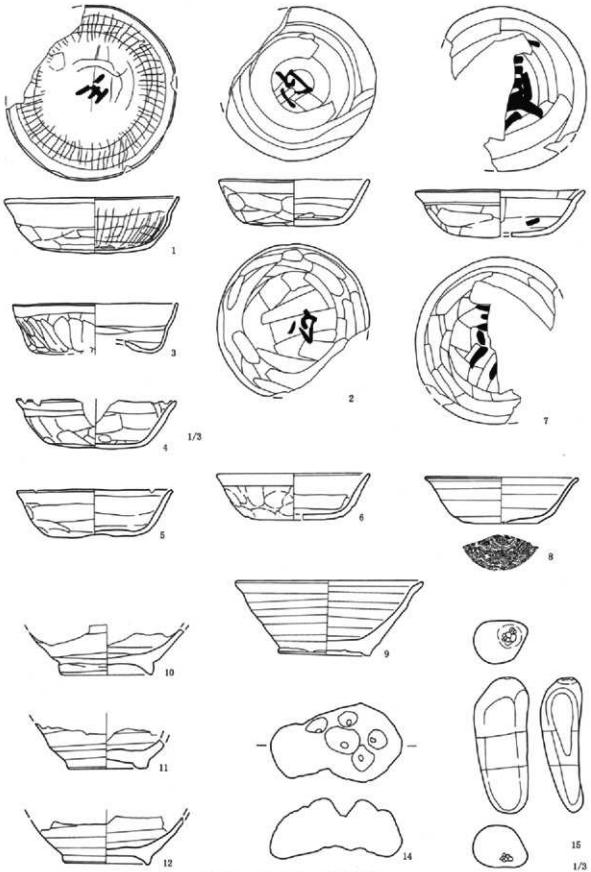
概要　本溝群はＢ区東部に位置する。溝は２-１号溝（以下「１号溝」）、２-２・Ｂ２-１・BE２-１号溝（以下「２号溝」）、２-３・Ｂ２-１・BE-２号溝（以下「３号溝」）の３条に分けられる。

本溝群は畠と重複するが、新旧関係は記録できなかった。また２号溝は３号溝を切っている。

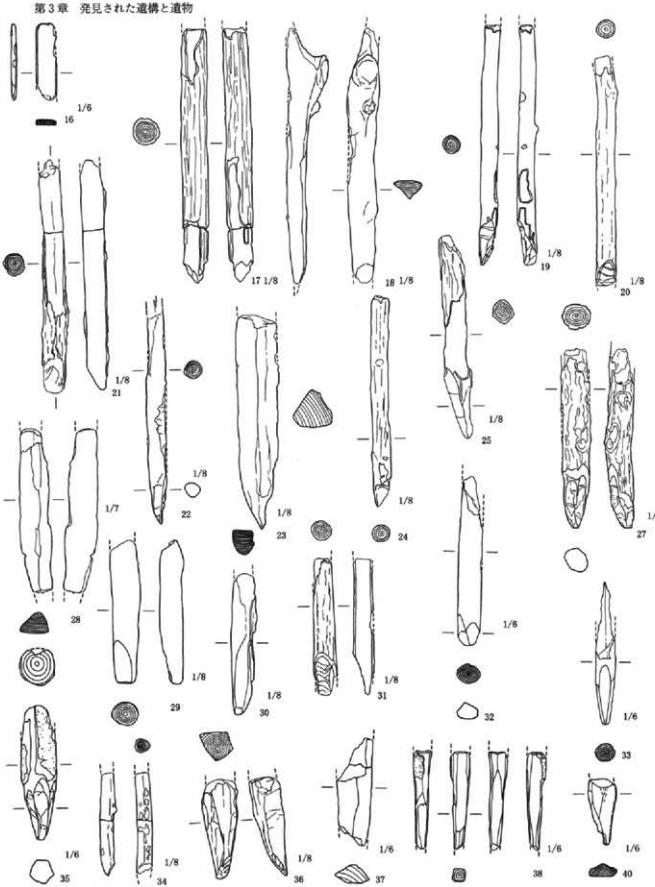
１～３号溝は流水の痕跡から、水路と認識される。



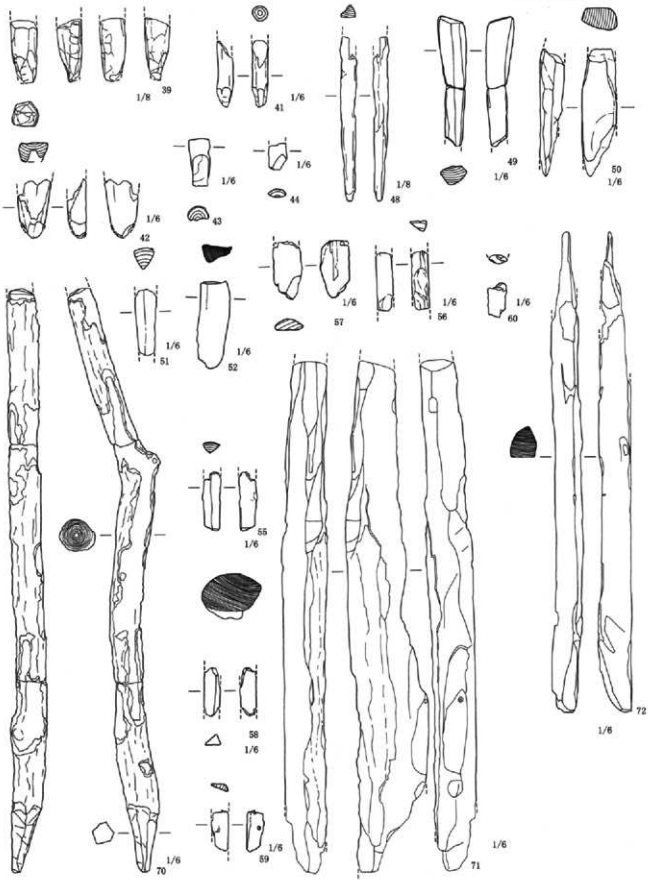
第107図の2　BW 2-4・5号溝と谷遺構



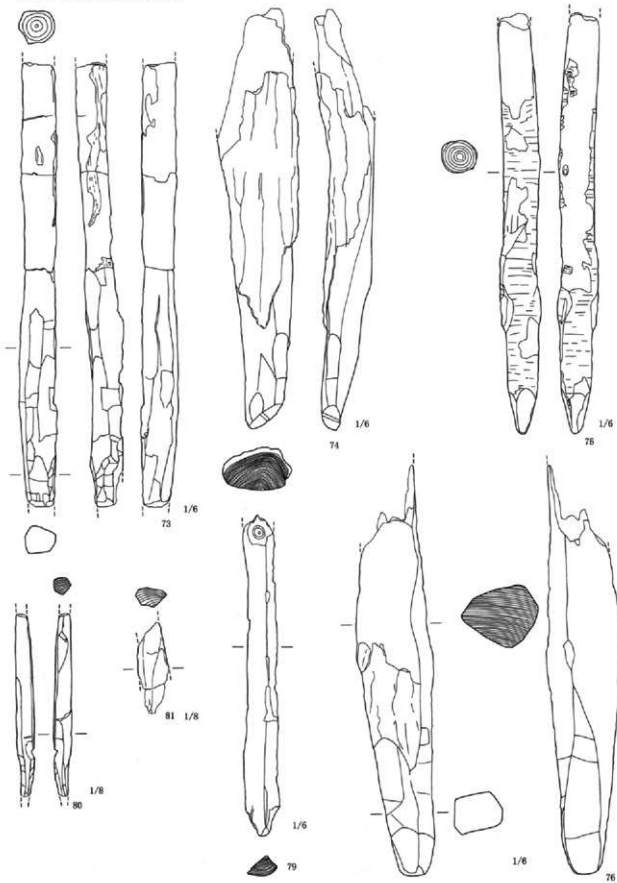
第108図　谷遺構出土遺物（その1）



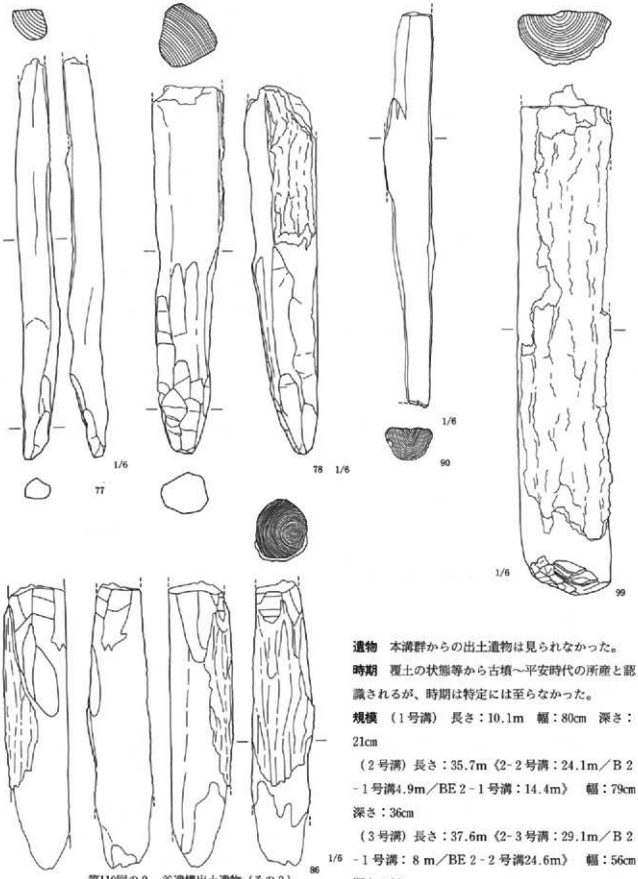
第109図の1　谷遺構出土遺物（その2）



第109図の2　谷遺構出土遺物（その2）



第110図の１　谷遺構出土遺物（その３）



第110図の2　谷遺構出土遺物（その3）

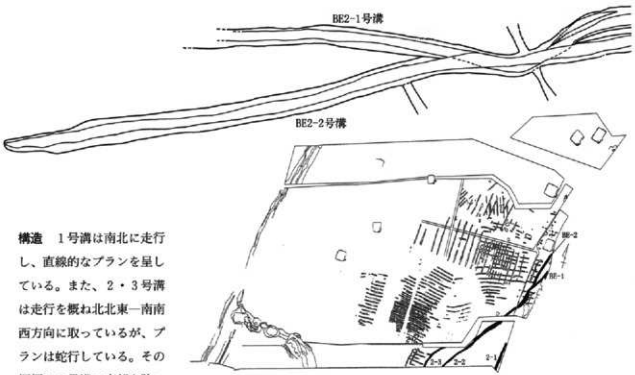
遺物　本溝群からの出土遺物は見られなかった。

時期　覆土の状態等から古墳～平安時代の所産と認識されるが、時期は特定には至らなかった。

規模　（1号溝）　長さ：10.1m　幅：80cm　深さ：21cm

（2号溝）長さ：35.7m《2-2号溝：24.1m／B2-1号溝4.9m／BE2-1号溝：14.4m》　幅：79cm　深さ：36cm

（3号溝）長さ：37.6m《2-3号溝：29.1m／B2-1号溝：8m／BE2-2号溝24.6m》　幅：56cm　深さ：28cm



第111図の1　BE2-1・2号溝

構造　1号溝は南北に走行し、直線的なプランを呈している。また、2・3号溝は走行を概ね北北東―南南西方向に取っているが、プランは蛇行している。その振幅は3号溝の南部を除いてあまり大きくない。

掘削形態は何れの溝も箱堀状を呈する。

(14)　BW2-2・3号溝（第112図、PL70）

概要　BW2-2・3号溝はBW区南部に位置し、平行するように在る。

BW2-4・5号溝や谷から分岐するように在るが、これらとの新旧を明確にすることはできなかった。一方、2号溝は位置的に前者屈曲部から分岐していた可能性が考慮される。

両溝の埋土は流水の痕跡が顕著であり、両溝は共に水路であったものと思慮される。

遺物　両溝とも出土遺物は多くなかったが、2号溝からは須恵器坏（1）、3号溝からは土師器坏（1）、須恵器坏（2～5）、と流れ込みの釉陶器壺（6）が出土している。

規模　（2号溝）長さ：12.1m　幅：240cm　深さ：79cm

（3号溝）長さ：23.9m　幅：156cm　深さ：62cm

構造　両溝共南北に走行を取るが緩やかに蛇行する。

掘削形態は箱堀状を呈するが横断面形の中央が部分的に窪んで薬研堀状を呈する箇所もある。

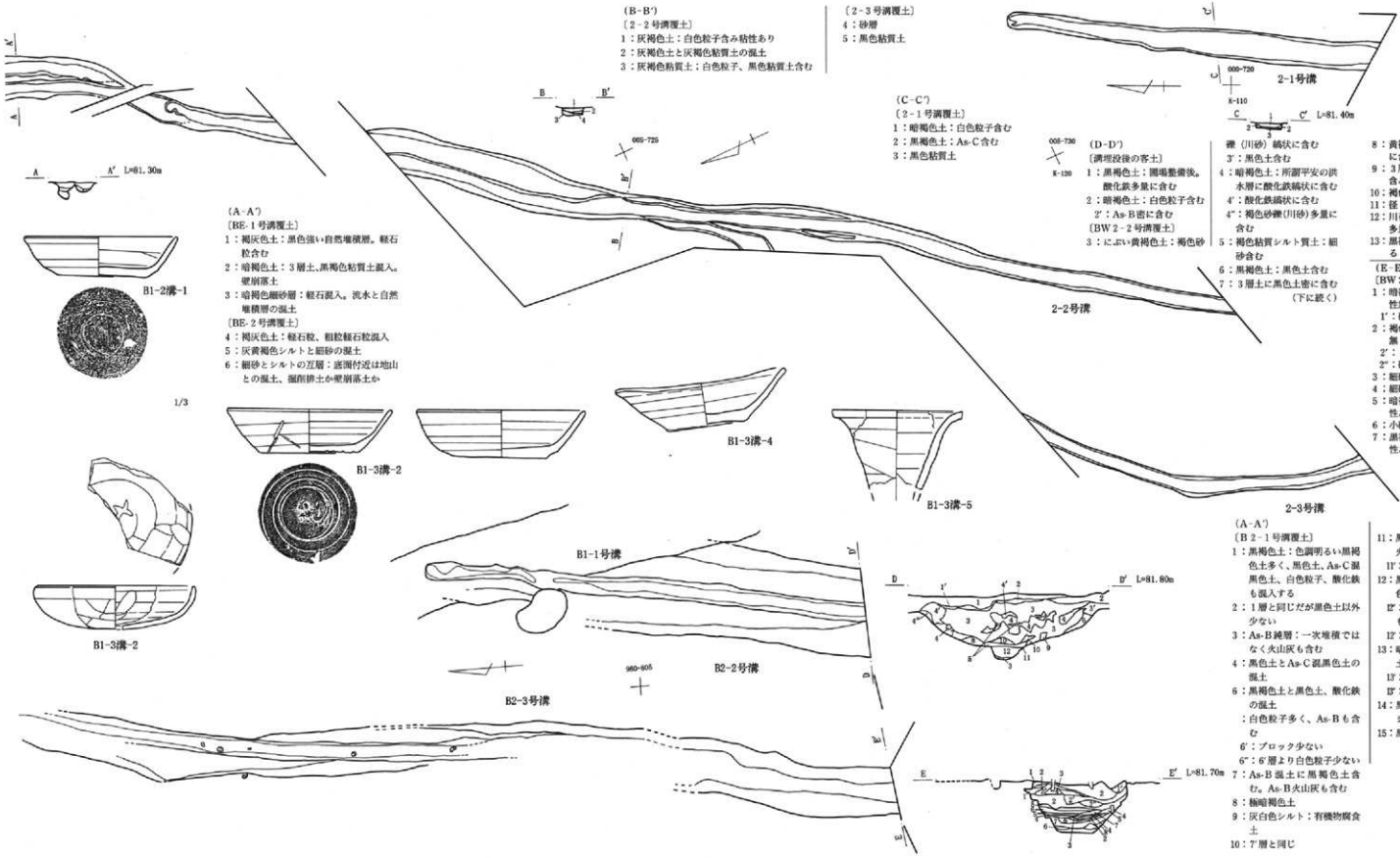
(15)　B区2面の土坑（第113図、PL66・81）

概要　B区2面では幾つかの土坑、ピットを確認したが、多くは上位面の掘り残しの可能性を持つものであった。尚、紙面の都合から全部を掲載できないため、ピットについては2基について写真を掲載するに止め、以下、4基の土坑について報告する。

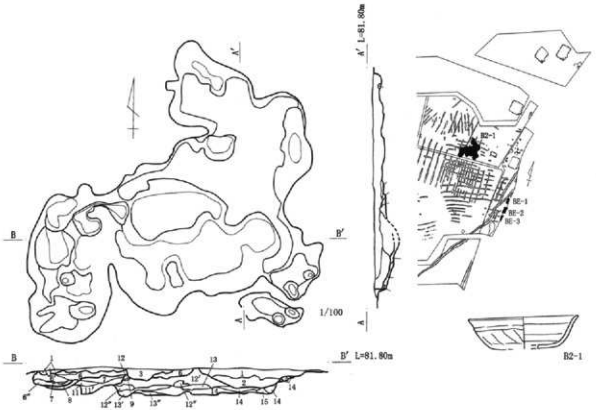
B区北東部に在るB2-1号土坑は3面の調査によって確認されたが、覆土から2面に属すると判断した。断面観察から複数の土坑の集合体と考えられるが、掘削意図等は特定できなかった。

BE区東部に確認されたBE2-1～3号土坑は区東端に南北に連なり、2・3号土坑東部は近代の溝によって壊されている。2面の遺構として扱ったが、形態的に1面に属するものである可能性も否定できない。尚、掘削意図は不明である。

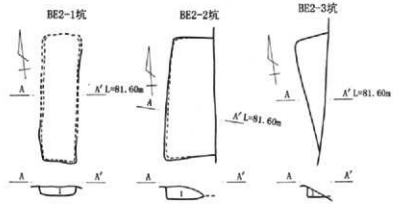
遺物　B2-1号土坑から平安時代の土師器片を中心とした若干の遺物の出土を見たが、BE2-1～4号土坑からの遺物の出土は見られなかった。



第111図の2　2-1～3・B2-1・BE2-1・2号溝及びBW2-2・3号溝と出土遺物



（B-B'）
〔B2-1号土坑覆土〕
1：黒褐色土：色調明るい黒褐色土多く、黒色土、As-C混黒色土、白色粒子、酸化鉄も混入する
2：黒褐色土：白色粒子混入
3：黒色土とAs-C混黒色土の混土
4：黒褐色土：1層土と同じだが黒色土以外は少ない
5：黒褐色土：1層と同じだが白色粒子は多く含み、それ以外の混入は少ない
6：暗褐色粘質シルト：黒色土、褐色土混入
7：黒褐色粘質シルト：黒色土多く混入
8：暗褐色粘質シルト：黒褐色土多く、白色粒子少量含む



〔BE2-1・2・3号調覆土〕
1：黒褐色土：As-B少量、焼土粒微量に含む。締まりあるが粘性低い

第112図　B2-1号土坑とBE2-1～3号土坑

時期　B2-1号土坑は上位にAs-Bが入るため平安時代末期に近い時期の所産と認識される。一方BE2-1～4号土坑の時期は特定できなかったが、形態的には中世に下る可能性も有する。

規模　巻末土坑・ピット一覧参照

構造　B2-1号土坑は複数の土坑の集合体であるが、断面で確認できるのみで、個々の土坑への分割は叶わなかった。尚、全体としてのプランは不整形で、個々の土坑の底面は平底であった。

BE2-1～4号土坑は南北方向に主軸を取る、長方形プランのものである。掘削形態は箱形を呈する。

第８節　Ｂ区３面

(1)　Ｂ区３面

Ｂ区３面に於いては広い範囲でAs-Ｃ降下後の復旧水田の所謂擬似畦畔を確認した。また、土坑ピットも確認しているが、これらの多くは上位面の掘り残しと判断されたため、ピットについては１面の項(153)頁に掲載した。ピット番号537以降のものがこれに該当する。

尚、３面では遺構外の出土遺物として土師器碗(１)・甕(２・３)等の古墳時代前期の遺物や敲石(４)が得られた。

(2)　水田址(第113図の1･2､PL78～81)

概要　Ｂ区４面に於いては２・３・Ｄ区も含めた広い範囲で216面以上の水田面を確認した。

この水田は小区画水田であり、As-Ｃを多く含む黒色土で覆われていたため、As-Ｃ降下後の復旧水田と判断した。またこの水田面は所謂擬似畦畔であった。

遺物　水田に明確に伴うような出土遺物は認められなかった。

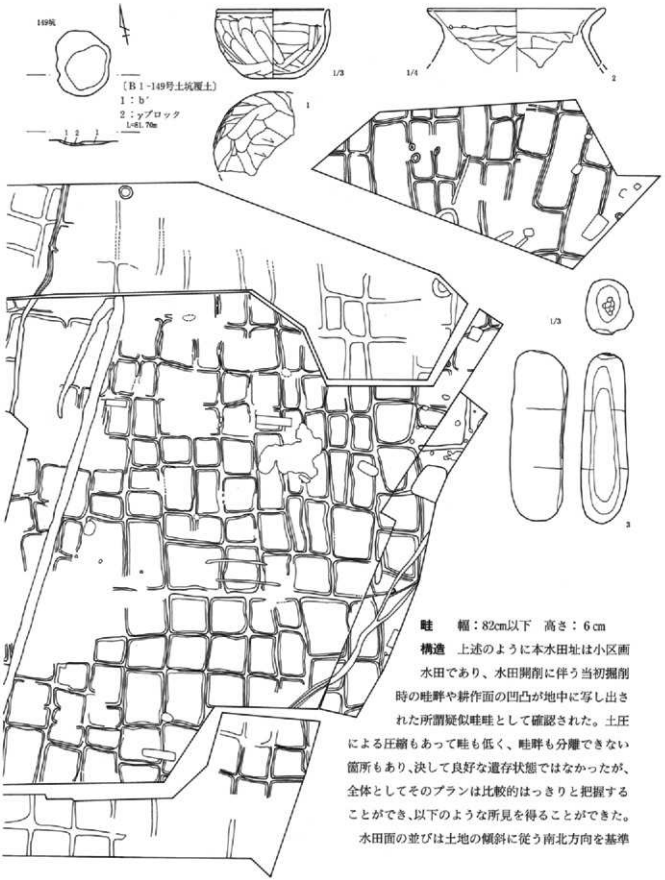
時期　覆土の状態等から概ね４世紀の所産と認識される。

規模　全体　東西：104m　南北：100m

区画　面積：4.9～23.9㎡（平均10.29）

大畦　幅：146cm以下　高さ：８cm

第113図の１　Ｂ区３面水田址（S＝1/400）



畦　幅：82cm以下　高さ：6cm

構造　上述のように本水田址は小区画水田であり、水田開削に伴う当初掘削時の畦畔や耕作面の凹凸が地中に写し出された所謂疑似畦畦として確認された。土圧による圧縮もあって畦も低く、畦畔も分離できない箇所もあり、決して良好な遺存状態ではなかったが、全体としてそのプランは比較的はっきりと把握することができ、以下のような所見を得ることができた。

水田面の並びは土地の傾斜に従う南北方向を基準

第113図の2　B区3面水田址（S＝1/400）とB3-149号土坑（S＝1/60）

としており、直線的、或いは分岐したＹ字形の配列で個々の水田区画を配置している。水田面はＢ区やや南寄りに水路を伴わない東西走行の大畔が設けられている。そしてこれを境として南北の区域それぞれに凡そ３ｍ間隔で南北方向の畦を設け、この南北方向に設けられた畦と畦の間を東西方向の畔で区切って水田区画を形成している。

また、土地は南に向かって緩傾斜しているため、水田面は高低差の少ない棚田状様相を見せている。

尚、水田に伴う水路や水口等の掘削位置を確認することはできなかった。

(3)　Ｂ３-149号土坑（第113図）

概要　本土坑はＢ区に位置している。

また、他の遺構との重複関係はなく、掘削意図を特定することもできなかった。

遺物　本土坑からの出土遺物は見られなかった。

時期　本土坑に於いては出土遺物もなく、本土坑の時期は特定でできなかった。尚、覆土から推して古墳時代以降の所産と認識されるのであるが、上位面の所産である可能性も否定できない。

規模　巻末土坑・ピット一覧参照

構造　遺存状態が良好ではないため全容は詳らかにできないが、本土坑は隅丸方形様のプランを呈している。

本土坑の掘削形態は箱状に近く、底面は平底状を呈するものと認識される。

第９節　Ｂ区４面

(1)　Ｂ区４面

Ｂ区４面ではＡ区４面東部と同様に土坑や小型のピット、或は風倒木痕を確認している。特にピットは500基を上回る多量のものを確認調査している。尚、確認範囲はＢ区に限られるが、時期を特定でき

第114図の１　Ｂ区４面の土坑・ピット群全体図（その１、中西～東部）（Ｓ＝１/400）

なかったために1面に分類した3区等で見つかったピット等に、4面に含まれるもののある可能性も否定できない。

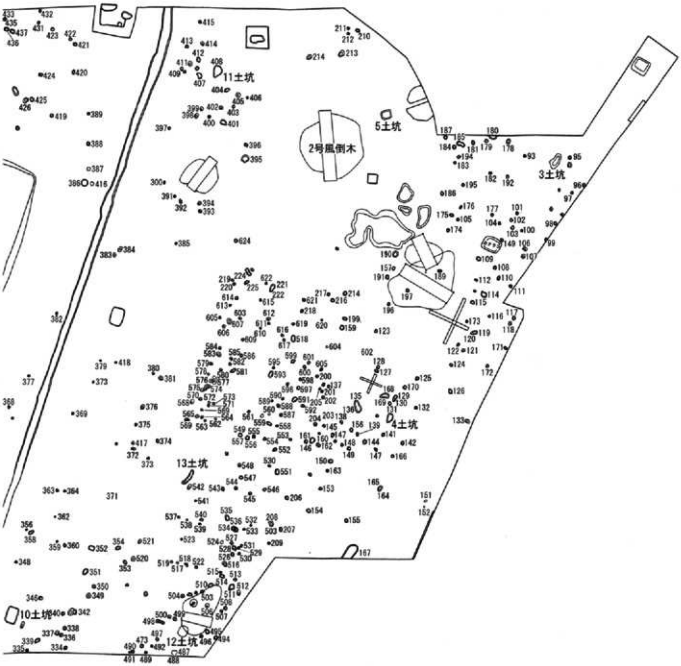
また、紙面の都合で掲載できなかったが、4面に於いては各ピット枚の断面図等を取るなど、細かいデータを記録していることを付記しておく。

尚、4面に於いては軟質陶器鉢（B4-1）のような上位層からの混ざり込みの出土遺物もあったが、壺片（B4-2）等、古墳時代前期の土師器を中心とした若干の出土遺物があった。

(2)　B区4面の土坑

（第115・116図、PL82・83）

概要　B区4面では15基の土坑を調査した。



第114図の2　B区4面の土坑・ピット群全体図（その1、中西～東部）（S＝1/400）

その分布はＢ区の北部と南部に分かれており、13号土坑がピットと重複する以外は単独で在った。また、14号土坑は下位面へのグリッド掘削時に調査されている。

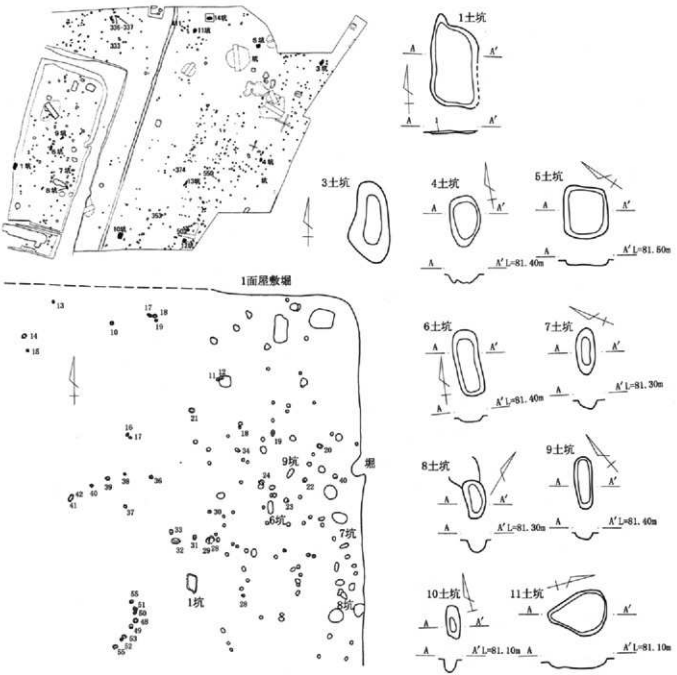
尚、これらの土坑の掘削意図を特定することはできなかった。

遺物　11号土坑から上位からの流れ込みと判断される土師器片が出土した以外、各土坑からの出土遺物は見られなかった。

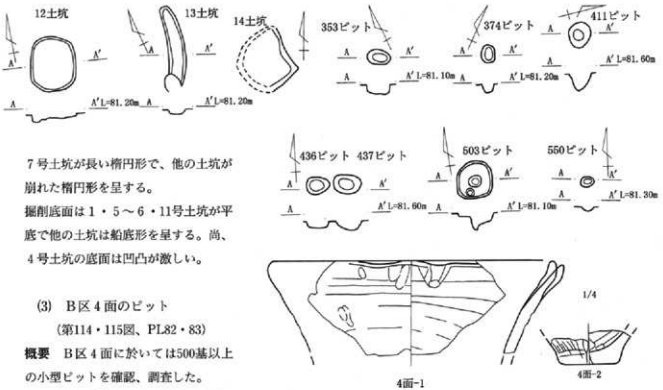
時期　本土坑群各土坑は弥生時代以前の所産とできるだけで、時期を特定することはできなかった。

規模　巻末土坑・ピット一覧参照

構造　本土坑群各土坑のプランは１号土坑が長方形、５号土坑が正方形、６・９・10号土坑が短冊形、



第115図の１　Ｂ区４面の土坑・ピット群全体図（その２、西部）（S＝1/400）と土坑・ピット（抜粋）（S＝1/60）



第115図の2　B区4面の土坑・ピット（抜粋）（S＝1/60）及びB区4面出土遺物

7号土坑が長い楕円形で、他の土坑が崩れた楕円形を呈する。
掘削底面は1・5～6・11号土坑が平底で他の土坑は船底形を呈する。尚、4号土坑の底面は凹凸が激しい。

(3)　B区4面のピット

（第114・115図、PL82・83）

概要　B区4面に於いては500基以上の小型ピットを確認、調査した。

これらは重複するものもあったが、多くは単独で位置していたが、大きくはB区の東西にその分布域は分けられる。東側の分布域では北北東一南南西に連なるもの1筋、南北に連なるもの2筋、西側では北北西に連なるもの1筋のおぼろげな分布状態が認められたが、明確に柵状を呈するもの、或は樹木の根を示すものなどは認められなかった。また、風倒木痕等の周囲には見られなかった。

一方、これらには大小があり、土坑として良いものから細杭の打設痕としか認識できないものまで種々あり、また斜めに入っていて植物の痕跡と考えられるものや、或は杭の打設痕と認識されるものなど様々で、掘削意図も断定できないものが多かった。従って群としてみた場合その性格は把握できないのであるが、杭の打設痕であるにせよ、植生の痕跡であるにせよ、上述のように風倒木痕周辺にその分布が見られないことから、これらの掘削或は形成時に風倒木痕となる樹木が有ってこれを意識していたことが分かる。また、おぼろげに4筋のピットの集中する分布域が認められることから、意図的な土地使用が窺われるのである。

遺物　各ピットからの出土遺物は認められなかった。

時期　時期については4面の土坑と同様に弥生時代以前の所産とできるだけで、特定することはできなかった。

規模　巻末土坑・ピット一覧参照

構造　本ピット群各ピットのプランは様々であり一定しないが、楕円形、円形を呈するものが多く、隅丸方形を呈するものもあった。

その規模も一定しておらず、統一性は認められなかった。また、掘削（形成）の方向は多くは垂直であるが、稀に明らかに樹木の根の痕跡と分る斜めに入るものも見られた。

遺構の遺存状態が決して良好とは言い難いものが多いため明確ではないが、掘削底面は平底のものや、丸底のもの、尖底のものなどがあってこれも一定していない。尚、プランと底面形態との間に関連性は認められなかった。

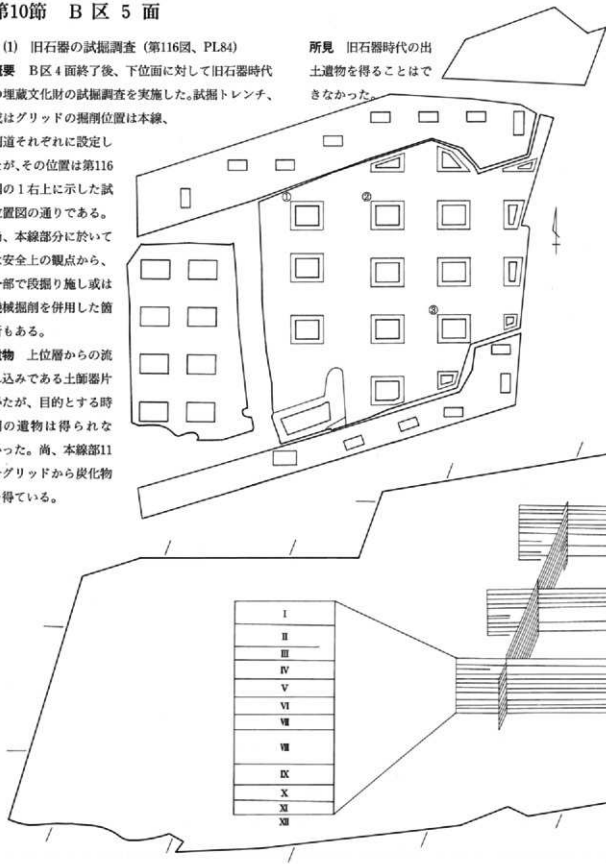
第10節　Ｂ区５面

(1)　旧石器の試掘調査（第116図、PL84）

概要　Ｂ区４面終了後、下位面に対して旧石器時代の埋蔵文化財の試掘調査を実施した。試掘トレンチ、或はグリッドの掘削位置は本線、側道それぞれに設定したが、その位置は第116図の１右上に示した試位置図の通りである。尚、本線部分に於いては安全上の観点から、一部で段掘り施し或は機械掘削を併用した箇所もある。

遺物　上位層からの流れ込みである土師器片得たが、目的とする時期の遺物は得られなかった。尚、本線部11号グリッドから炭化物を得ている。

所見　旧石器時代の出土遺物を得ることはできなかった。



第116図の１　Ｂ区５面試掘トレンチ・グリッド設定位置図（Ｓ＝１/800）と土層堆積概念図（左右Ｓ＝１/400、上下Ｓ＝１/600）

また第116図の中に①・②・③とした3箇所の抽出図を掲載したが、B区中・東部では4箇所で、南方流下する流水の痕跡と判断される谷地形が確認された。少なくもAs-BP降下以前にはB区が不安定な土地であったことが認識される。

出土遺物の出なかった点、本遺跡が東の中屋敷遺跡、西の岡屋敷遺跡の間に在る谷地部である点、及び上述のように小河川の流路が形成されていたことなどから推して、旧石器時代の埋蔵文化財はなかったものと判断した。

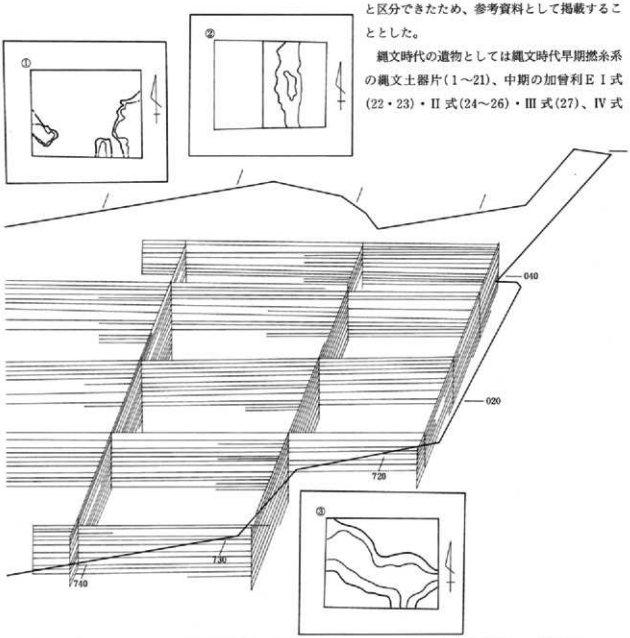
第11節　遺構外の出土遺物

(1)　縄文時代の出土遺物

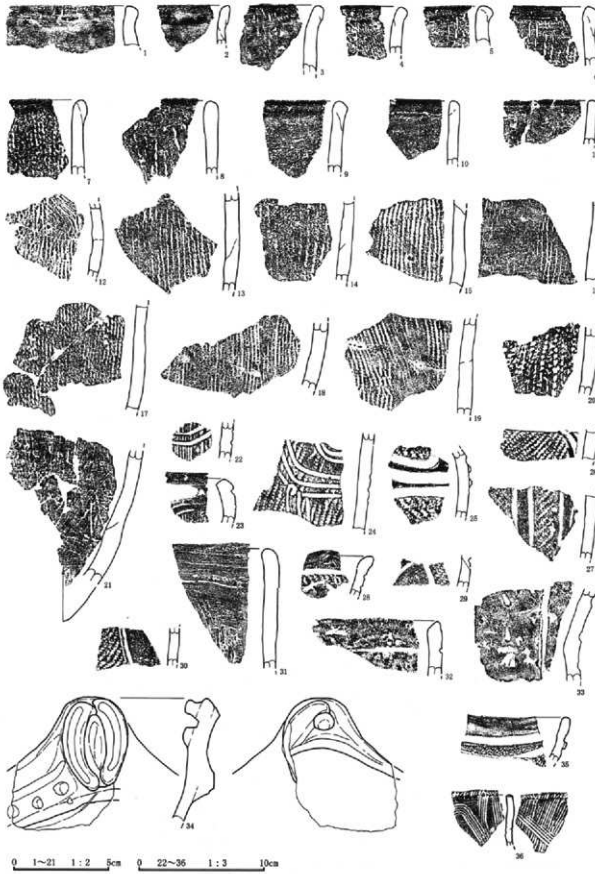
(第117～119・121図、PL85～88)

本遺跡に於いては4面を中心に縄文時代の遺物を得ている。以下その一部を報告するが、同一遺跡名で処理された側道側の1区を誤って取り込んだため、本項には1区（中屋敷遺跡）の遺物も併せて処理し、掲載した。本来であれば分離すべきであったが、中屋敷遺跡が縄文時代早期、本遺跡が中・後期と区分できたため、参考資料として掲載することとした。

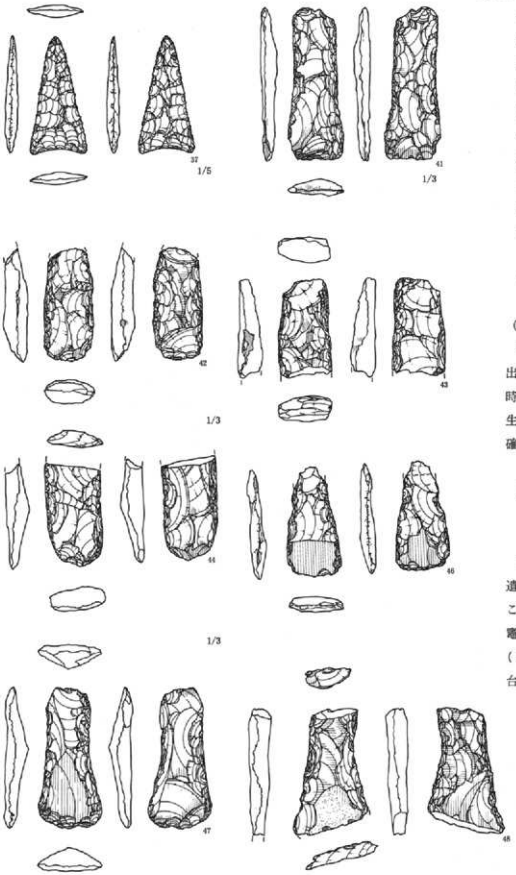
縄文時代の遺物としては縄文時代早期撚糸系の縄文土器片(1～21)、中期の加曽利E Ⅰ式(22・23)・Ⅱ式(24～26)・Ⅲ式(27)、Ⅳ式



第116図の2　B区5面土層堆積概念図（左右S＝1/400、上下S＝1/600）及び一部グリッド抽出図



第117図　A・B区及び1区出土縄文土器



第118図　A・B区出土石器（その1）

(28～32)、称名寺式(33・34)、中期(38)があった他、石鏃(40～40)、打製石斧(41～54)、スクレーパー(55)、敲石(56・57)、石皿(58)、多孔石(59～63)、凹石(64～69)などがあった。

(2)　弥生時代の出土遺物

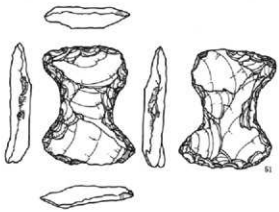
(第118図、PL86)

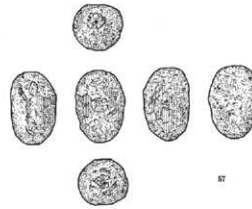
本遺跡の弥生時代の出土遺物としては弥生時代中期と思われる弥生土器の甕(39)1点を確認している。

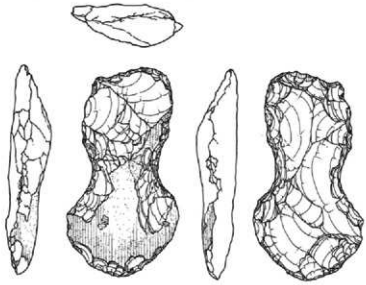
(3)　B区の遺構外出土遺物

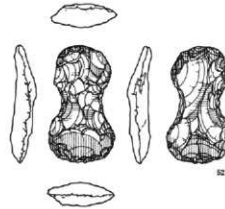
(第120、PL88)

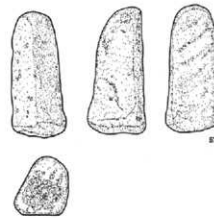
B区の遺構外の出土遺物は多岐に亘るが、この中には竪穴住居の竈に使用された天井石(1)、廊石(2・3)、台石(4)、礎石(5)、付札かと思われる薄板(6)の他、何らかの部品(7)、薄板材(8・9・13)、角棒(10～12)などがあった。

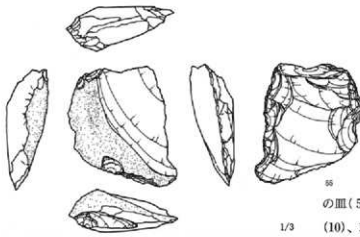












第119図　A・B区出土石器・石製品（その2）

(4)　2区の遺構外出土遺物

（第120図、PL89）

2区の遺構外出土遺物には埴輪（1・2）、焙烙鍋（3）、青磁壺（4）、施釉陶器の皿（5・6）や高台付碗（7）・鉢（8）・碗（9）・甕（10）、或は瓦(11)、磁器碗(12)等が見られた。

第120図　B区・2区遺構外出土遺物

(5)　3区の遺構外出土遺物（第121図、PL89）

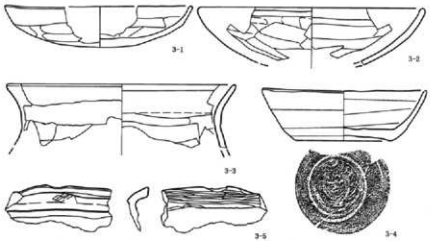
3区の遺構外出土遺物はさして多くなかったが、平安時代の土師器坏(1・2)、土師器甕(3)、須恵器坏(4)や、古墳時代前期の所産である土師器甕(5)等の遺物が見られた。

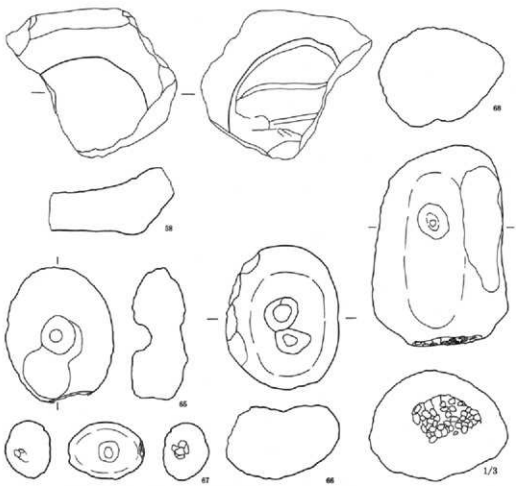
(6)　D区の遺構外出土遺物

D区に於いては土師器片を中心に若干の移行に伴わない遺物の出土を見たが、特に図示すべきものは見られなかった。

(7)　遺跡全域での遺構外出土遺物

この他、区の特定できなかった遺物として土師器片や内耳鍋片が見られたが特に図示すべきものは認められなかった。





第121図　3区遺構外出土遺物及びA・B区出土石製品（その3）

第4章　分析・考察

第1節　群馬県中世屋敷跡の建築物考察

宮　本　長二郎

1　はじめに

群馬県波志江中屋敷西遺跡B区1面の屋敷遺構は出土建築材のAMS法年代測定により15世紀前半と推定される。本稿は周濠で囲われた屋敷内の掘立柱建物柱建物について、時代的・地域的特長を明らかにしたい。

2　掘立柱建物の分布と敷地割

南北約51m、東西41mの長方形周濠内に30棟以上の掘立柱建物があり、その中央部のやや北寄りに約半数の建物が重複して集中分布し、主屋と主屋に伴う副屋がセットになって7期に亘る重複建替えが認められる。

他の付属屋の分布は主屋の北側に、中庭を囲うようにその北西部と東方、西方の3ヶ所にそれぞれ数棟ずつ重複し、主屋の南方にも小型建物が2ヶ所に分かれて分布する。これらの付属屋はそれぞれ機能を異にすると考えられる。

7期に亘る主屋域の変遷と、それに伴う付属屋の配置は、柱穴の重複する例が少ないことから、柱穴の新旧関係から判断することができず、各建物の方位と位置関係を基準に決定し、さらに、周濠の南半分を区画する東西溝SD6・12・13・15・18と主屋以下の建物群との配置関係が変遷の重要な基準となる。

SD6・15は出入口の開口部を設けた同時期の区画溝で、北周濠との間隔が周濠の東西幅と等しく、正方形の敷地区画割とする時期が想定される。

SD13・18は溝心々間3.5mの鍵形配置で、その喰違い開口部を出入口とする同時期の区画溝と考えられる。SD13・18は周濠と連結しないことから周濠を南北に2分割するための区画溝であることは明らかであり、SD12はSD13の東半部を改修して東周濠と連結したものと考えられる。

いっぽうSD6・15は東・西周濠と連結した状況からみて、屋敷地は当初正方形で、のちに南にSD7・9溝（新旧不明）を設けて敷地を拡張して、SD13・18の区画溝を設けたと考えられる。

3　建物配置の変遷

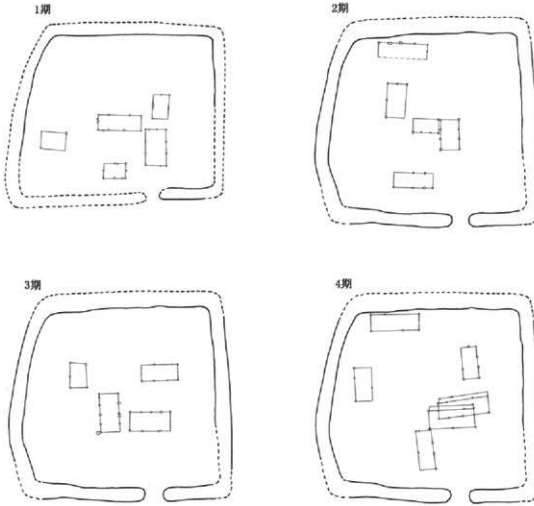
以上のような屋敷地割の変遷と、建物配置の変遷を想定して作成したのが、図1～図7である。

前項に記した南方の小建物は2ヶ所に分かれて、いずれも東西溝と重複する位置にあり、SD18と重複またはその東側にある建物は正方形周濠の時期に、SD15と重複する建物は南辺拡張後の時期に充てることができる。但し、周濠は7期の全時期に亘って存在していたかどうかは疑問で、西周濠と重複する南北溝SD2を東縁とする時期が初期に存在した可能性がある。

主屋の建築形式は、庇付きと庇のない時期に分かれて、後者を初期段階に位置付けて3期の変遷を想定し、当屋敷跡で最大の主屋SB5・9の2期は周濠拡大後として、全建物遺構を7期に配分した。

4　梁間1間型住居

関東地方の中世掘立柱建物跡の平面形式は、鎌倉幕府を中心とする神奈川県下に総柱型が分布し、他の関東地方は梁間1間型が普及して、当屋敷も梁間1間型である。全国的には総柱型が主流で、梁間1間型は関東地方と東北地方に分布する以外は、総柱型分布域では付属屋に使用されて普及する。（註1）

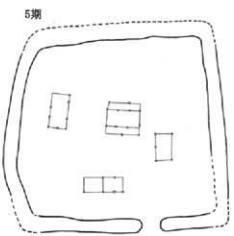


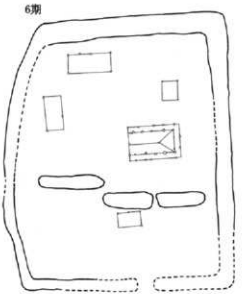
第1図　B区1面屋敷遺構建物変遷図（その1）

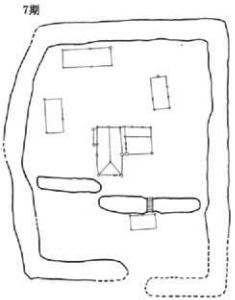
本稿はSB18の平面的特徴についての分析を進め、その結果を表記した。

SB5を除いて全て梁間1間型とみなし、妻側中央柱をもつもの6棟と（表の括弧内に2で示す）、2本の間柱をもつもの2棟（括弧内3）である。妻側中央柱は隅柱を結ぶ軸線に接して外側に立つ近接棟持柱であり、軸線上に立つ場合も壁心棟持柱として、ともに切妻屋根の棟木を直接支持する形式が想定される。

梁間1間型平屋建物に棟持柱をもつ形式は、弥生・古墳時代に存在してその系統を引くものと思われるが、中世では他に類例がない。但し、軸線上中央柱のSB10・11の2例は棟持柱ではなく間柱の可能性がある。間柱2本のSB3・4は、桁行柱穴に較べて柱径が小さく浅いために間柱としたが、SB3では両側面とも2本のうち1本が欠失、SB4では東側面に間柱がないものは、間柱穴が浅いために削平されたものと考えられる。同じ理由で梁間1間の妻側柱間に間柱や棟持柱のない場合、身舎の4面に庇を巡らすSB9を除く身舎のみのSB2・7・8・9・12・







第２図　Ｂ区１面屋敷遺構建物変遷図（その２）

13・15・17・18の９例は、梁間10～15.5尺と広いことから間柱を立てずに壁を造ることは不可能であり、間柱穴は側柱穴より小さく浅く掘立てたために後世の削平により検出されないことを示している。

5　胴張形平面と片切妻造屋根

SB５は桁行５間、梁行北２間、南３間の南北棟建物で、西側面北半に庇が付く。桁行側面を胴張形とする点で、中世に類例のない形式を示す。胴張形平面の平屋建物は古墳時代の大形建築に出現する形式で、前記の梁間１間型の近棟棟持柱と同様に古墳時代の形式を継承するものと思われる。

SB５の南側面３間、北側面２間とする形式は、北側面中央柱を近棟棟持柱とする切妻造で、南側面は梁間３間として屋内棟持柱を立て、寄棟造屋根とする片切妻造屋根であったと考えられる。

SB５と時期が前後する大形主屋SB９の庇の妻側面についても、北側面２間、南側面３間で、南側面に対応する屋内棟持柱があり、北側面中央柱を棟持柱とする片切妻屋根に復元することができる。

片切妻屋根の民家は東北地方の豪雪地帯に現存し、縄文時代の北陸・東北地方の竪穴住居にも積雪期の出入口を片切妻や片入母屋の妻壁に出入口を設けていたと思われる例があり、SB５・９はその伝統を継承した可能性がある。

6　柱間寸法と造営尺

SB１～18の柱間寸法は尺度を用いたものと仮定して、現在の尺度（１尺＝0.303cm）に近い尺度で割切れる５寸単位の柱間寸法を求めて表記した。中世社寺建築の柱間寸法は５寸間隔の蟻木支割で柱間寸法が決定される。中世住居は垂木の配列と無関係に５寸単位の柱間寸法を採用したとする仮定には無理はあるが、筆者は弥生・古墳時代の掘立柱建物に同

じ手法を用いて、弥生・古墳時代の柱間寸法が、同時代の中国尺度と軌を一にしているとの仮説(註2)を立てた分析と同じ方法を用いた結果、表記のように、各建物遺構の柱間寸法は5寸単位で決定され、しかも、弥生・古墳時代と同様に柱間寸法は等柱間ではなく、かつ相対する側面の全長が5寸または1尺の差をもつ例が多いこと、および、中世に全国的に普及する総柱型や梁間1間型の柱間寸法には6尺5寸間が多いのに対して、当遺跡では6尺～10尺に分散する点で、中世の一般的傾向とは異なり、弥生・古墳時代の柱間寸法決定法を継承しているものと考えられる。

造営尺は1尺＝30.0～30.5尺の範囲に分布するが、30.2～30.3cmの現尺に近い例が多く、これを当遺跡の造営尺とみなすことができる。造営尺値の前後の広がりは、主として柱を掘立てる際の造営誤差によるものと思われる。正確な寸法設定は柱頭部の梁・桁の木造りで行われるため、造営誤差の大きい例の柱は柱径の範囲内での傾斜をもつものと考えられる。SB5の嗣張形平面の場合は同様に、柱頭部は4隅の柱頭を直線で結ぶ方形の側桁位置での造営尺であり、桁行側面の中柱は上方で内側に傾斜する形式であったと云える。

第1表　掘立柱建物遺構分析表

SB	身舎柱間数	方位	庇	身舎規模(尺)			桁行柱間寸法(尺)	妻柱	造営尺(cm)
	桁行 × 梁行			桁行	梁行	庇			
1	3 × 1(2)	↕	—	22.5	11.5	—	8・7・7.5	棟持柱	30.22
2	3 × 1	↔	N・S	23.5	12.0	5.0 5.5	7.5・8.5・7.5	—	30.21
3	3 × 1(3)	↕	—	25.5 26.0	14.0 14.5	—	8.5・8.5・8.5 9・8.5・8.5	間柱	30.0～30.2
4	3 × 1(3)	↔	N	18.5 18.0	12.5 11.5	7.0	5.5・6・6.5 4・7・7	間柱	30.33
5	5 × 2 3	↕	W	34.0 34.5	16.0 16.5	2.5	13・7.5・7・6.5 4.5・7.5・6.5・8・7	棟持柱 間柱	30.2～30.33
6	4 × 1(2)	↔	—	30.0	10.5 11.0	—	7・15・8 7.5・7.5・6.5・8.5	棟持柱	30.5～30.6
7	3 × 1	↕	—	21.5	13.0	—	7・7・7.5	—	30.0～30.6
8	3 × 1	↕	—	21.5 21.0	13.5	—	7.5・7・7 7・7・7	—	30.19～30.6
9	4 × 1	↔	4面	28.0	15.5	4.0	6・8・7・7 14.5・6.5・7	—	30.06～30.3
10	4 × 1(2)	↕	—	24.0	13.0	—	5・12・7	?	30.17
11	3 × 1(2)	↔	—	18.5	9.5	—	6・6.5・6	(間柱)	30.0
12	3 × 1	↔	—	21.5 22.0	10.5 10.0	—	7・7.5・7 7.5・7・7.5	—	30.5
13	4 × 1	↔	N	32.5 33.0	12.0 13.0	3.0	9.5・8.5・7.5・7 9・7.5・9・7.5	—	30.27
14	2 × 1(2)	↔	—	15.5	10.0	—	7・5・8	棟持柱	30.6～30.7
15	4 × 1	↔	—	29.0	10.5	—	14.5・8・6.5	—	30.48
16	4 × 1(2)	↕	N	35.0 36.0	11.0 11.5	—	6・18.5・10.5 7.5・9.5・8・11	(間柱)	30.32～30.48
17	4 × 1	↔	—	28.5	13.0	—	8・7・7・6.5 9・13.5・6	—	30.31
18	2 × 1	↔	—	16.0	10.0	—	8・8	—	

(註)　身舎柱間数欄の梁行括弧内数値は妻側面の柱間数で、妻側中柱穴の機能を妻柱欄に示す。上下2段に設けた数値は、建物方位が南北棟の場合、上段を北側、下段を南側とし、東西棟の場合、上段を西側、下段を東側とする。柱間寸法欄の数値は、北から南、または西から東の順序で示す。造営尺は桁行総長の実測長さから算出したもので、同一建物の尺度差は桁行・梁行2側面の差を示す。

7　庇付建物

庇付建物は4面庇（SB9）、2面庇（SB2）、1面庇（SB4・5・13・16）の6例がある。庇の身舎側柱からの出は、2.5尺～5尺の狭い例（SB2・5・9・13）と7尺（SB4）の広い例があり、前者は弥生時代以来の古式を示し、後者は律令時代に出現する広庇の影響を受けたものと考えられる。

中世の総柱型・梁間1間型の庇の出は狭い例が一般的で、時代が降るに従って広庇が増える傾向にある。但し、室町時代の遺跡が少ないために、同時代の全国的な傾向は明らかではないが、当遺跡では庇出の狭い古式例が多い点で、前記の諸特徴と軌を一にするものといえる。

8　主屋建物の形式と変遷

屋敷地内中央部に集中して重複する建物群は、桁行4間規模の大型で庇付きが多いことから主屋とみなしたが、その建物形式の特徴と変遷について考察する。

庇付建物6棟のうちSB4・5は、SB5を主屋、SB4を角屋とする曲屋と考えられる。SB13・16は同規模、同形式で位置をずらせて建替え、敷地北半部の付属屋を共有する1時期とみなし、他のSB2とSB9を含めて、庇付主屋は4期の変遷が考えられる。

庇のない主屋はL字形の配置をとる副屋とのセット関係から、SB3・6、SB7・12、SB8・17の3期の変遷が考えられる。SB7・12は北側面の柱筋を揃えて近接することから、SB7を主屋、SB12を角屋とする曲屋形式に想定されるが、他の2期はほぼ同規模の建物をL字形に配置して、主屋・副屋の区別をつけ難い。

以上のように、主屋の建築形式は無庇の掘立建物、庇付独立建物、角屋付曲屋形式とそれぞれ形式を大きく異にした変化を示し、共通するのは身舎を梁間1間型とする点のみである。

曲屋主屋は東北地方の中世館跡の主殿形式として14世紀には成立している（註3）。現存古民家でも東北地方に分布する形式で、その一部は関東地方にも及んでおり、15世紀の当遺跡にも主殿形式として成立していたとみなせるが、梁間1間型の曲屋形式は中世では他に類例がなく、地方的特長を示すものであろう。

周濠と建物群配置との関係は前記のとうりであるが、東面から南面にかけての周濠には少なくとも4期の改修が認められる。7期に亘る建物郡の変遷と周濠改修との関係の詳細は明らかでないが、その改修時期の多さは、主屋形式の多用な変化と無関係ではないと思われる。

9　結　語

以上のように、当遺跡の建物形式は、弥生時代に出現する梁間1間型平屋建物を基本形とし、胴張形平面、不整方形平面、梁間寸法決定法、柱間寸法の不揃いなどの形式は古墳時代に認められる形式である。

梁間1間型住居は律令時代には衰退するようである。摂関期以後に新形式の総柱型の出現とともに復活し、関東地方では主流となるが、古墳時代の建築技法が15世紀の当遺跡に存続しているものとすれば、新たな知見であり、また、主屋建築形式の多様な変化を含めて、その歴史的な評価を新たにしなければならない。

註

註1　宮本長二郎「日本中世住居の型式と発展」『建築史の空間』中央公論美術出版、1999年

註2　宮本長二郎「弥生・古墳時代の尺度」『歴史遺産研究　2号』東北芸術工科大学編　2004年

註3　高橋与右衛門「発掘された中世の建物跡」『北の中世』日本エディタースクール出版部、1992年

第2節　群馬県波志江中屋敷西遺跡から産出した昆虫化石

森　　勇　一（愛知県立明和高等学校）

1．はじめに

遺物包含層から得られた昆虫化石（昆虫遺体ともいう）群集が、遺跡が成立していた頃の周辺環境や植生・人の居住の多寡などの様子を探る手がかりになることについては、わが国のみならず諸外国においても多くの研究例がある（Buchland et al., 1974；Kenward, 1976）。

昆虫の種数が多く棲み分けが明瞭であることや、昆虫の食性がきわめて多様であることは、環境復元の際、重要な武器となる。一方で、昆虫の種数が多いことは、種を同定するうえで困難さを伴い、現生の昆虫分類学では、目（Order）や科（Family）・属（Genus）などのレベルでそれぞれ同定者を異にすることも多い。今日、昆虫の同定にあたっては、究極的には交尾器（Genital organ）の外部形態と、DNAによる系統解析が主流となりつつある。五体満足に揃った成虫の分類においてすら同定作業は困難をきわめており、体節ごとに分離した先史～歴史時代における遺跡産昆虫や、地質時代の昆虫化石の分類・同定に取り組む研究者がなかなか生まれないことはこうした事情を考慮すればよく理解できる。

遺跡の発掘現場では、条件さえ整えば昆虫化石は必ずといってよいほど保存されている。そして、それらが同定されれば他のどんな生物化石より、古環境について雄弁に語ることができるのも事実なのである。しかるに、日本では遺跡から取りあげられる昆虫化石は年間10例にも満たないのが現状である。

2．分析試料

ここに述べる波志江中屋敷西遺跡は、赤城山南麓の群馬県中部・伊勢崎市に所在し、北関東自動車道建設に伴って、群馬県埋蔵文化財調査事業団により発掘調査されたものである。

本遺跡は、主に古墳時代後期から中近世に至る複合遺跡とされており、昆虫分析試料の大半は、中世の館に伴う外堀を埋積する堆積物下層（試料1）より採取されたものである。堆積年代は、考古遺物より15世紀前半とされている。これ以外に、14～15世紀のものとされる13号溝（試料2）、およびほぼ同時代と考えてよい7号井戸（試料2）、産出層準不明（試料4）の計4試料より産出した昆虫化石がケースに入れた状態で筆者のもとに送られてきた。

昆虫化石の同定は、筆者採集の現生標本と実体顕微鏡下で1点ずつ比較のうえ実施した。昆虫化石は、いずれも節片に分離した状態で検出されており、そのため、本論に記した産出点数は、昆虫の個体数を示したものではない。

3．分析結果

分析試料中より確認された昆虫化石は、計101点であった（表1）。水生昆虫では食植性のガムシ *Hydrophilus acuminatus* が試料1より8点、試料2より8点など、計17点産出した。このほか、ガムシより小型の水生・食植性のヒメガムシ *Sternolophus rufipes* が試料1より2点検出された。

地表性昆虫では食肉性のオオゴミムシ *Lesticus magnus* が試料1より1点、同じく食肉性のアオゴミムシ属 *Chlaenius* sp.が試料1より1点、主に食肉性であるが雑食性の種群をも含むオサムシ科 Carabidae が試料1より1点発見された。これ以外に、雑食性のトックリゴミムシ属 *Lachnocreps* sp.（試料1より1点）、ツヤヒラタゴミムシ属 *Synuchus* sp.（試料1より1点）、また食屍性昆虫として知られるオオヒラタシデムシ *Eusilpa japonica*（試料1より1点）、地表性で雑食性のアリ科 Formicidae（試料2より2点）が発見されたほかは、すべてが陸生の食植性ないし雑食性昆虫のみで占められた。

最も多く認められたのは、ヒメコガネ *Anomala*

表１　群馬県波志江中屋敷西遺跡から産出した昆虫化石

生態	食性	和名	学名	試料１	試料２	試料３	試料４	計
水生	食植	ガムシ	*Hydrophilus acuminatus* Motschulsky	E１ P１ L６	E６ H１ A１	E１		17
地表性	食肉・雑食性	ヒメガムシ	*Sternolophus rufipes* (Fabricius)	P２				2
		オオヒラタシデムシ	*Eusilpa japonica* (Motschulsky)	E１				1
		オサムシ科	Carabidae	E１				1
		アオゴミムシ属	*Chlaenius sp.*	P１				1
		オオゴミムシ	*Lesticus magnus* (Motschulsky)	E１				1
		トックリゴミムシ属	*Lachnocrepis sp.*	P１				1
		ツヤヒラタゴミムシ属	*Synuchus sp.*	E２				2
陸生・その他	食植性	コガネムシ科	Scarabaeidae	L２	E１	L３	E１	7
		サクラコガネ属	*Anomala sp.*	E１ L４	A１	L２	L１	9
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* Motschulsky	E23 P５ H１ A１ L１	E１	H１	E５	38
		ドウガネブイブイ	*Anomala cuprea* Hope	E１				1
		コガネムシ	*Mimela splendens* Gyllenhal	E８ P１				9
		ヒメカンショコガネ	*Apogonia amida* Lewis				E１	1
		マメコガネ	*Popilla japonica* Newmann	E１				1
		ハムシ科	Chrysomelidae		E２			2
		アカガネサルハムシ	*Acrothinium gaschkevitchii* Motshulsky	E１				1
		コメツキムシ科	Elateridae		E２			2
	その他	カメムシ目	Hemiptera	S１				1
		アリ科	Fomicidae		O２			2
		不明甲虫	Coleoptera		A１			1
総計				68	18	7	8	101

（検出部位凡例）H（Head）：頭部　　S（Scutellum）：小楯板　P（Prdnotum）：前胸背板
E（Elytron）：鞘翅　A（Abdomen）：腹部　L（Leg）：脚歩節　O（Others）：その他

表２　波志江中屋敷西遺跡（B区館址）出土昆虫保管一覧

シャーレ規格	遺構	水平位置	垂直位置	個体数	注記
小	外堀	西側		40	西堀
中	外堀	東側		31	東堀
小	外堀	北側	下層	40	堀北部
小	外堀		下層	15	
中	外堀		下層	2	
中	外堀		下層	3	
中	外堀		下層	3	
中	外堀		下層	9	
中	外堀		下層	12	
中	外堀		下層	17	
大	外堀		下層	19	下層
中	13号溝			5	
中	13号溝			12	
大	7号井戸			14	
中	7号井戸			8	
小	不明			5	
小	不明			10	

rufocuprea（試料１の31点をはじめ計38点）であり、これにサクラコガネ属 *Anomala* sp.（試料１の５点をはじめ計９点）、コガネムシ *Mimela splendens*（試料１より９点）、ドウガネブイブイ *Anomala cuprea*（試料１より１点）、マメコガネ *Popilla japonica*（試料１より１点）、ヒメカンショコガネ（試料４より１点）、アカガネサルハムシ *Acrothinium gaschkevitchii*（試料１より１点）などが伴われた。未分類のコガネムシ科 Scarabaeidae は、試料１の２点をはじめ、全試料から計７点確認された。これ以外に食植性のハムシ科 Chrysomelidae が試料２より２点発見された。また、主に食植性だが種によって肉食のものもあるとされるコメツキムシ科 Elateridae（試料２で２点）と、カメムシ目 Hemiptera（試料１より１点）、地表性で雑食性のアリ科 Formicidae（試料２より２点）が確認され、不明甲虫 Coleoptera とした昆虫は試料２より１点検出された。

４．推定される古環境

昆虫化石の検出点数が少なく、そこから多くの情

報を引き出すことは困難であるが、波志江中屋敷西遺跡の中世の外堀や溝などより検出された昆虫群集をもとに、遺跡周辺の古環境について述べる。なお、昆虫化石は、外堀下層（試料1）、13号溝（試料2）、7号井戸（試料3）、および産出層準不明（試料4）の計4サンプルに分けて採取されているが、試料ごとの産出組成に有意な差が認められないため、ここでは一括して考察することにする。

本遺跡の試料1～4より発見された昆虫組成は、これまで愛知県西部に位置する大毛沖遺跡（森、1996）や大毛池田遺跡（森、1997a）などをはじめ、同時代（中世）における日本各地の溝や土坑・井戸内などより得られた群集組成（森、1998、1999）と、きわめて似かよったものであるといえる（森、1998、1999）。

すなわち、成虫がマメ科植物や果樹・各種畑作物の葉を加害し、幼虫がこれらの根を食害する畑作指標昆虫としてのヒメコガネの多産は、わが国の中世（鎌倉時代～室町時代）の分析試料より産出した昆虫群集（森、1997b、1999）の特徴とよく一致している。同様の生態を有するマメコガネやドウガネブイブイ・サクラコガネ属などが本遺跡の昆虫群集に伴われたことは、こうした共通性をさらに補強するものであるといえる。

また、試料4より1点見いだされたヒメカンショコガネは、甘藷すなわちイモ類の葉を、試料1より1点検出されたアカガネサルハムシはブドウ類などをそれぞれ食害する畑作害虫として著名であり、これらの産出も遺跡の周りに畑作物が存在したことを示している。

このように、ヒメコガネ・マメコガネ・ドウガネブイブイ・ヒメカンショコガネといった畑作指標昆虫が、波志江中屋敷西遺跡の溝堆積物中より発見されたことは、遺跡周辺に畑作物が植栽されていたことを強く示唆するものであり、同時に中世の人々が日本各地の森林伐採と里山の開発を精力的に行ったことの反映でもあることは、筆者がこれまで述べてきたとおりである（森、1999）。

また、食植性の水生昆虫であるガムシやヒメガムシの産出は、外堀内に水生植物が繁茂していたことを示している。

大型の地表性昆虫であるオオゴミムシの発見は、地表にこれらのエサになるミミズや多足類などが多数生息してことを物語っている。乾燥した攪乱地表面上に多く、オオゴミムシ同様、主に各種小動物を捕食するアオゴミムシ属が検出されたことも、波志江中屋敷西遺跡一帯の地表環境の推定に有効である。また、少数ながら、エサを求めて地表面上を徘徊するオオヒラタシデムシやオサムシ科が昆虫群集に伴われたことは、当時の古環境を考えるうえで興味深い。オオゴミムシ・アオゴミムシ属・オオヒラタシデムシ・オサムシ科などの地表性昆虫の発見からは、遺跡周辺の植生が少なく、人間が植栽した畑作物や果樹などがわずかに繁茂するだけの乾燥した地表環境が展開していた可能性が指摘される。

今回の昆虫分析試料に、食糞性昆虫や汚物食の昆虫類がまったく出現しなかったことから、外堀周辺の人為的汚染はきわめて軽微であり、昆虫分析試料を産出した外堀や溝の付近は、人間生活に関わる汚染はほとんど進行していなかったと推定される。

文　献

Buckland,P.C.,J.R.A.Greig and H.K.Kenward.（1974）York：an early medieval site.*Antiquity*,48:25-33.
KenwardH. K.（1976）Reconstructing ancient ecological conditions from insect remainsgsome problems and an experimental approach.ecol.,1:7-17.
森　勇一（1996）愛知県一宮市大毛沖遺跡から得られた昆虫群集について。愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第66集）大毛沖遺跡、愛知県埋蔵文化財センター、188―194。
森　勇一（1997a）畑作農村地帯を特徴づける愛知県大毛池田遺跡（中世）の食植性昆虫について。愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第72集）大毛池田遺跡、愛知県埋蔵文化財センター、139―143。
森　勇一（1997b）虫が語る日本史一昆虫考古学の現場から―（2）。インセクタリウム、2，10―17。
森　勇一（1998）吉田城遺跡の井戸中から産出した昆虫化石群集とその意義。愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第78集）吉田城遺跡、愛知県埋蔵文化財センター、36―39。
森　勇一（1999）昆虫化石よりみた先史～歴史時代の古環境変遷史。国立歴史民俗博物館研究報告第81集、31-342。

第3節　波志江中屋敷西遺跡出土人骨

檀　崎　修一郎

はじめに

波志江中屋敷西遺跡は、群馬県伊勢崎市波志江町に所在する。北関東自動車道路建設に伴い、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が、平成10(1998)年2月～同12(2000)年3月まで行われた。波志江中屋敷西遺跡のB区1面1号墓坑・同2号墓坑・同3号墓坑・同4号墓坑・同5号墓坑・同6号墓坑・同7号墓坑・同8号墓坑の8基の墓坑より人骨が出土したので、以下に報告する。しかしながら、全体的に出土人骨の保存状態は良くないため、主に出土歯について報告せざるをえない。人骨の所属年代は、主に副葬品より、中世に比定されている。

出土人骨は、清掃後、できるかぎりの接着復元を行い、写真撮影・観察・計測を行った。

なお、歯の計測は藤田の方法(藤田、1949)に従った。また、歯の比較データの内、中近世人はMATSUMURA［松村］(1995)を用い、現代人は権田(1959)を用いた。

1．B区1面1号墓坑（1998年6月18日出土）

本墓坑は、屋敷内の南西隅に所在する。

(1) 人骨の出土状況

人骨は、長軸約90cm・短軸約60cm・深さ約20cmの隅丸方形土坑から出土している。

(2) 副葬品

副葬品は、銭貨が8点出土している。

(3) 人骨の出土部位

出土人骨の残存状態は非常に悪い。主に、歯の歯冠部のみが出土している。

(4) 被葬者の頭位・埋葬状態

人骨の出土状況から、被葬者の頭位は北である。また、埋葬状態は顔面部を西側に向けて右側を下にした横臥（側臥）屈葬であると推定される。

(5) 被葬者の個体数

出土人骨特に出土歯に、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(6) 被葬者の性別

歯冠計測値が比較的小さいため、被葬者の性別は女性であると推定される。

(7) 被葬者の死亡年齢

出土歯の咬耗度を観察すると、下顎切歯は線状に象牙質が露出している状態である。また、上下顎の犬歯及び第1大臼歯には、象牙質がわずかに点状に露出している状態である。その他の歯は、咬耗はエナメル質のみである。これらを総合して、被葬者の死亡年齢は約20歳代であると推定される。

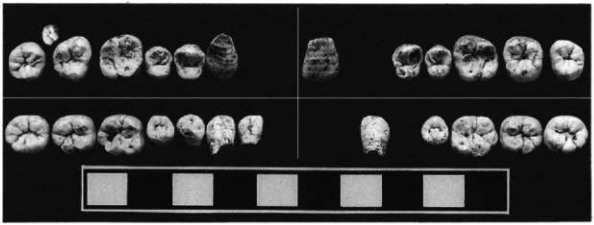
(8) 被葬者の古病理

①歯石：歯石の付着は、認められなかった。

②齲蝕(虫歯)：俗に虫歯と呼ばれる齲蝕は、認められなかった。

③臼旁歯：過剰歯の一種である、臼旁歯が1本認められた。これは、大きさが長径5㎜・短径4㎜の歯で、咬頭は4咬頭が確認された。上顎大臼歯の矮小歯の可能性もあるが、今回、遊離歯ながら幸いにも上下顎の大臼歯は12本すべてが出土しており、その可能性は低いと考えられる。ちなみに、矮小歯の出現する頻度が高い歯種は、上顎第2切歯・上下顎第3大臼歯に多いことが知られている。したがって、臼旁歯であると推定されるが、これは、通常上顎の第2あるいは第3大臼歯の近心頬側部に位置するものである。顎骨に植立している状態ではなく、遊離歯の状態であるので、部位の同定は困難であるが、形態的には上顎右大臼歯の臼旁歯であると推定される。

写真1．波志江中屋敷遺跡1号墓坑出土歯臼旁歯



右上																左上
	M3	M2	M1	P2	P1	C		I1		P1	P2	M1	M2	M3		
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2		C		P2	M1	M2	M3		
右下																左下

写真２．波志江中屋敷西遺跡１号墓坑出土人骨出土歯

註：Ｉ１(第１切歯)・Ｉ２(第２切歯)・Ｃ(犬歯)・Ｐ１(第１小臼歯)・Ｐ２(第２小臼歯)・Ｍ１(第１大臼歯)・Ｍ２(第２大臼歯)・Ｍ３(第３大臼歯)を意味する。

２．Ｂ区１面２号墓坑（1998年６月12日出土）

本墓坑は、屋敷内の中東部東に所在する。

(1)　人骨の出土状況

人骨は、長軸約120cm・短軸約70cm・深さ約15cmの隅丸方形土坑から出土している。

(2)　副葬品

副葬品は、かわらけ１点が出土している。

(3)　人骨の出土部位

出土人骨の残存状態は、非常に悪い。主に、歯の歯冠部のみが出土している。

(4)　被葬者の頭位・埋葬状態

人骨の出土状況から、被葬者の頭位は北である。また、埋葬状態は顔面部を東側に向けて左側を下にした横臥（側臥）屈葬であると推定される。

(5)　被葬者の個体数

出土人骨特に出土歯に、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は１個体であると推定される。

(6)　被葬者の性別

歯冠計測値が比較的小さいため、被葬者の性別は女性であると推定される。

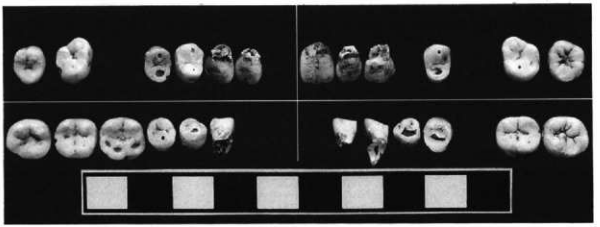
(7)　被葬者の死亡年齢

出土歯の咬耗度を観察すると、上下顎の犬歯から小臼歯は象牙質が点状に露出する状態である。また、下顎第１大臼歯は象牙質が点状に露出する状態であり、第２及び第３大臼歯の咬耗はエナメル質に限定されている。したがって、被葬者の死亡年齢は約30歳代であると推定される。

(8)　被葬者の古病理

①歯石：歯石は、ほとんどの歯に付着あるいは付着していた痕跡が認められた。

②齲蝕(虫歯)：俗に虫歯と呼ばれる齲蝕は、上顎左第２大臼歯の近心面歯頸部及び遠心面歯頸部に歯髄腔まで進行した齲蝕症第３度（Ｃ３）の状態で認められた。また、下顎左第２大臼歯の頬側面歯頸部に象牙質まで進行した齲蝕症第２度（Ｃ２）の状態で認められた。



右上																			左上
	M3	M2		P2	P1	C	I2		I1	I2	C		P2		M2	M3			
	M3	M2	M1	P2	P1	C				I2	C	P1	P2	M1	M2				
右下																			左下

写真3．波志江中屋敷西遺跡2号墓坑出土人骨出土歯

註：I 1（第1切歯）・I 2（第2切歯）・C（犬歯）・P 1（第1小臼歯）・P 2（第2小臼歯）・M 1（第1大臼歯）・M 2（第2大臼歯）・M 3（第3大臼歯）を意味する。

3．B区1面3号墓坑（1998年6月12日出土）

本墓坑は、屋敷外の周堀東肩に所在する。

(1)　人骨の出土状況

人骨は、長軸約85cm・短軸約55cm・深さ約15cmの隅丸長方形土坑から出土している。

(2)　副葬品

副葬品は、検出されていない。

(3)　人骨の出土部位

出土人骨の残存状態は悪い。主に、頭蓋骨片及び四肢骨片が出土している。

(4)　被葬者の頭位・埋葬状態

人骨の出土状況より、被葬者の頭位は北である。また、埋葬状態は屈葬であると推定される。恐らく、左側を下にした横臥（側臥）屈葬であると推定される。

(5)　被葬者の個体数

出土人骨には、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は、1個体であると推定される。

(6)　被葬者の性別

四肢骨の大きさが比較的小さいため、被葬者の性別は女性であると推定される。

(7)　被葬者の死亡年齢

歯が出土していないため、被葬者の死亡年齢は不明である。恐らく、成人であろう。また、経験則ではあるが、頭蓋骨がある程度出土しているのに、歯が出土しない場合は無歯顎の場合が多く、その点で本被葬者は老齢である可能性もある。

(8)　被葬者の古病理

出土人骨には、特に古病理は認められなかった。

４．Ｂ区１面４号墓坑（1998年７月７日出土）

本墓坑は、屋敷内の中北部南寄りに所在する。

(1)　人骨の出土状況

人骨は、長軸約135cm・短軸約90cm・深さ約35cmの長方形土坑から出土している。

(2)　副葬品

副葬品は、銭貨が10点出土している。

(3)　人骨の出土部位

人骨の保存状態は悪い。頭蓋骨片及び四肢骨片が出土している。

(4)　被葬者の頭位・埋葬状態

人骨の出土状況より、被葬者の頭位は北である。また、埋葬状態は屈葬であると推定される。

(5)　被葬者の個体数

出土人骨には、一部、重複部位が認められるため、被葬者の個体数は２個体であると推定される。このことは、本土坑の大きさが通常の土坑より大きいことからも支持される。

例えば、本遺跡の１号墓坑・２号墓坑・３号墓坑の大きさを、それぞれ長軸・短軸でみると、90cm×60cm（１号墓坑）・120cm×70cm（２号墓坑）・85cm×55cm（３号墓坑）の大きさである。

(6)　被葬者の性別

出土四肢骨の大きさより、被葬者の性別は男性１個体・女性１個体であると推定される。

(7)　被葬者の死亡年齢

被葬者の死亡年年齢推定に有用な歯が出土していないため、被葬者の死亡年齢を推定するのは困難である。しかしながら、恐らく２体とも成人であろう。

(8)　被葬者の古病理

出土人骨には、特に、古病理は認められなかった。

５．Ｂ区１面５号墓坑（1998年８月７日出土）

本墓坑は、屋敷内の中南部南寄りに所在する。

(1)　人骨の出土状況

人骨は、長軸約130cm・短軸約100cm・深さ約30cmの楕円形土坑から出土している。

(2)　副葬品

副葬品は、銭貨が12点出土している。

(3)　人骨の出土部位

人骨の残存状態は、非常に悪い。主に、歯の歯冠部のみが出土している。

(4)　被葬者の頭位・埋葬状態

人骨の出土状況より、被葬者の頭位は北である。また、埋葬状態は顔面部を西に向けて右側を下にした横臥（側臥）屈葬であると推定される。

(5)　被葬者の個体数

出土人骨特に出土歯には、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は、１個体であると推定される。

(6)　被葬者の性別

出土歯の歯冠計測値、特に上下顎犬歯が比較的大きいため、被葬者の性別は男性であると推定される。

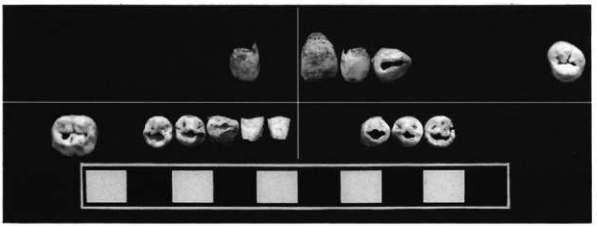
(7)　被葬者の死亡年齢

歯の咬耗度を観察すると、下顎切歯から小臼歯は象牙質が線状に露出するマルティンの２度の状態である。しかしながら、出土した上顎歯の切歯はエナメル質のみの咬耗である。これは、歯を道具として使用した異常磨耗の結果であると推定されるが、残存状態が悪いために確かなことは不明である。したがって、ここでは、被葬者の死亡年齢は約30歳代であると推定するにとどめておく。

(8)　被葬者の古病理

①歯石：出土歯のほとんどに、歯石が付着あるいは付着していた痕跡が認められた。

②齲触：出土歯には、俗に虫歯と呼ばれる齲触は認められなかった。



| 右上 | | |

複部位が認められないため、被葬者の個体数は、１

| 右上 | | |

8．B区1面8号墓坑（1998年10月26日出土）

(1) 人骨の出土状況

土坑は、西側が切られているため、大きさは不明である。

(2) 人骨の出土部位

人骨の保存状態は非常に悪く、四肢骨片が出土しているのみである。

(3) 被葬者の頭位・埋葬状態

出土人骨の残存状況が悪いため、被葬者の頭位及び埋葬状態は不明である。

(4) 被葬者の個体数

出土人骨の残存状況は悪いが、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(5) 被葬者の性別

四肢骨片の大きさから、被葬者の性別は女性であると推定される。

(6) 被葬者の死亡年齢

被葬者の死亡年齢推定に有用な歯が出土していないため、被葬者の死亡年齢は不明である。恐らく、成人であろう。

(7) 被葬者の古病理

出土人骨には、特に、古病理は認められなかった。

ま と め

波志江中屋敷西遺跡のB区1面1号墓坑から8号墓坑の8基の墓坑から中世の人骨が9体出土した。出土人骨の鑑定結果を、以下の表にまとめた。

表1．波志江中屋敷西遺跡出土人骨まとめ

波志江中屋敷西遺跡出土人骨				
墓　坑	個体数	性　別	死亡年齢	その他
1号墓坑	1個体	女性	約20歳代	臼歯
2号墓坑	1個体	女性	約30歳代	歯石・齲蝕
3号墓坑	1個体	女性	老齢個体？	
4号墓坑	2個体	男性・女性	成人（2体）	
5号墓坑	1個体	男性	約30歳代	歯石
6号墓坑	1個体	女性	約30歳代	
7号墓坑	1個体	女性	約30歳代	
8号墓坑	1個体	女性	成人	

謝　辞

本出土人骨を記載する機会を与えていただき、本出土人骨に関する考古学的情報をご提供いただいた(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の石守　晃氏に感謝いたします。

引用文献・参考文献

藤田恒太郎　1949a　歯の計測規準について、「人類学雑誌」, 61: 1-6.

藤田恒太郎　1949b　『歯の解剖学』、金原出版

樋田和良　1959　歯の大きさの性差について、「人類学雑誌」, 67: 151-163.

MATSUMURA, Hirofumi　1995　A microevolutional history of the Japanese people as viewed from dental morphology, National Science Museum monographs No.9, National Science Museum

大国　勉　2001　『身元確認』、フリープレス

表２．波志江中屋敷西遺跡出土人骨歯冠計測値及び比較表

	歯種	計測項目	波志江中屋敷西遺跡出土人骨								中世時代人 *		江戸時代人 *		現代人 **	
			1号墓坑		2号墓坑		5号墓坑		6号墓坑							
			右	左	右	左	右	左	右	左	♂	♀	♂	♀	♂	♀
上顎	I 1	MD	—	9.0	—	8.3	—	9.0	8.8	8.6	8.48	8.29	8.78	8.38	8.67	8.55
		BL	—	7.1	—	破損	—	7.6	7.3	7.0	7.29	7.60	7.52	7.06	7.35	7.28
	I 2	MD	—	—	6.6	6.3	7.3	7.5	—	—	6.98	6.85	7.16	6.97	7.13	7.05
		BL	—	—	5.9	6.2	破損	破損	—	—	6.55	6.26	6.74	6.33	6.62	6.51
	C	MD	7.8	—	7.3	7.5	—	8.3	8.2	(7.8)	7.96	7.43	8.01	7.60	7.94	7.71
		BL	8.0	—	8.4	破損	—	8.4	8.5	7.8	8.50	7.94	8.66	8.03	8.52	8.13
	P 1	MD	7.5	7.3	6.8	—	—	—	—	7.0	7.25	7.02	7.41	7.23	7.38	7.37
		BL	9.1	9.0	9.3	—	—	—	—	8.9	9.46	9.03	9.67	9.33	9.59	9.43
	P 2	MD	6.5	6.5	6.5	6.4	—	—	—	6.8	6.87	6.69	7.00	6.82	7.02	6.94
		BL	8.5	8.4	8.7	8.9	—	—	—	8.7	9.39	8.88	9.55	9.29	9.41	9.23
	M 1	MD	10.5	10.4	—	—	—	—	—	—	10.45	10.09	10.61	10.18	10.68	10.47
		BL	11.2	11.2	—	—	—	—	—	—	11.81	11.30	11.87	11.39	11.75	11.40
	M 2	MD	9.5	9.2	8.5	8.9	—	—	—	—	9.65	9.42	9.88	9.48	9.91	9.74
		BL	11.4	11.3	10.9	10.9	—	—	—	—	11.72	11.19	12.00	11.52	11.85	11.31
	M 3	MD	8.5	8.3	7.4	8.5	—	8.8	8.8	—	—	—	—	—	8.94	8.86
		BL	9.8	10.1	8.8	9.8	—	10.1	10.2	—	—	—	—	—	10.79	10.50
下顎	I 1	MD	—	—	—	—	(5.6)	—	(5.3)	—	5.42	5.22	5.45	5.32	5.48	5.47
		BL	—	—	—	—	5.9	—	5.8	—	5.78	5.61	5.78	5.65	5.88	5.77
	I 2	MD	6.3	—	—	5.9	(5.8)	—	(6.1)	(6.0)	6.04	5.78	6.09	5.97	6.20	6.11
		BL	5.8	—	—	破損	6.1	—	6.3	6.0	6.22	5.98	6.29	6.11	6.43	6.30
	C	MD	7.1	7.1	6.0	6.1	(7.8)	(7.3)	6.3	6.7	6.88	6.55	7.06	6.69	7.07	6.68
		BL	7.2	7.4	7.3	7.8	歯石	8.5	7.3	7.3	7.82	7.33	8.04	7.39	8.14	7.50
	P 1	MD	7.3	—	6.5	6.4	7.7	7.6	6.9	—	7.07	6.96	7.32	7.05	7.31	7.19
		BL	7.7	—	7.5	7.5	8.2	8.2	7.8	—	8.10	7.72	8.34	7.89	8.06	7.77
	P 2	MD	6.7	6.7	6.8	6.9	7.3	7.1	7.1	—	7.12	7.00	7.45	7.12	7.42	7.29
		BL	7.6	7.9	8.0	8.0	8.2	破損	7.7	—	8.49	8.06	8.68	8.30	8.53	8.26
	M 1	MD	11.2	11.1	10.8	—	—	—	—	11.2	11.56	11.06	11.72	11.14	11.72	11.32
		BL	10.8	10.7	10.8	—	—	—	—	破損	11.00	10.49	11.15	10.62	10.89	10.55
	M 2	MD	10.2	10.0	10.1	10.1	11.3	—	—	—	11.06	10.65	11.39	10.78	11.30	10.89
		BL	9.8	9.7	9.8	9.2	10.4	—	—	—	10.55	9.97	10.75	10.21	10.53	10.20
	M 3	MD	10.2	10.6	10.2	11.0	—	—	—	—	—	—	—	—	10.96	10.65
		BL	10.4	9.7	9.8	10.0	—	—	—	—	—	—	—	—	10.28	10.02

註１．計測値の単位は、すべて、「mm」である。
註２．歯種は、Ｉ１(第１切歯)・Ｉ２(第２切歯)・Ｃ(犬歯)・Ｐ１(第１小臼歯)・Ｐ２(第２小臼歯)・Ｍ１(第１大臼歯)・Ｍ２(第２大臼歯)・Ｍ３(第３大臼歯)を意味する。
註３．計測項目は、MD(歯冠近遠心径)・BL(歯冠唇頬舌径)を意味する
註４．「破損」は、歯冠が破損しており計測ができなかったことを示す。
註５．「歯石」は、歯石が付着しており計測ができなかったことを示す。
註６．計測値の内、（　）内は、咬耗により計測値が影響を受けていることを示す。
註７．「＊」は、MATSUMURA(1996)より引用。なお、MATSUMURA(1995)には、第３大臼歯のデータは無い。
註８．「＊＊」は、櫛田(1959)より引用。

付　編

1　群馬県、波志江中屋敷西遺跡における自然科学分析

株式会社　古環境研究所

Ⅰ．波志江中屋敷西遺跡のテフラ

1．はじめに

群馬県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、浅間、榛名、赤城など北関東地方とその周辺の火山のほか、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代の不明な土層や畠遺構が検出された中屋敷西遺跡においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、採取された試料を対象にテフラ検出分析と屈折率測定を行って示標テフラの層位を把握し、土層や畠遺構の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、B区5面15トレンチおよびB区東地点である。

2．土層の層序

(1)　B区5面15トレンチ

B区5面15トレンチでは、下位より若干青みがかった灰色砂礫層（層厚10cm以上，礫の最大径13mm）、砂混じり黄灰色土（層厚62cm）、灰色石質岩片混じり灰色砂質土（層厚17cm，石質岩片の最大径3mm）、灰色粘質土（層厚9cm）、黄灰色粘質土（層厚11cm）、黄色粘質土（層厚5cm）、黄色風化軽石層（層厚8cm）、砂混じり灰色土（層厚21cm）、黄色軽石混じり黄灰色砂質土（層厚24cm，軽石の最大径3mm）、黄色土（層厚8cm）、黄白色軽石混じり黄色土（層厚13cm，軽石の最大径1mm）、黄灰色土（層厚13cm）、白色軽石混じり黄色粗粒火山灰層（層厚12cm，軽石の最大径4mm）、灰色砂質土（層厚16cm）、黄灰色粗粒火山灰混じり暗灰色土（層厚17cm）、暗灰色土（層厚6cm）、黒色がかった暗灰色土（層厚14cm）が認められる（図1）。

これらのうち、黄灰色砂質土中に含まれる黄色軽石と黄色土中に含まれる黄白色軽石は、それらの岩相から、各々約1.9～2.2万年前*1に浅間火山から噴出したと考えられている浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group，新井，1962，早田，1996）と約1.7万年前*1に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第1軽石（As-Ok1，中沢ほか，1984，早田，1996）に由来すると考えられる。また、白色軽石混じり黄色粗粒火山灰層は、その層相から約1.3～1.4万年前＊1に浅間火山から噴出したと考えられている浅間板鼻黄色軽石（As-YP，新井，1962，町田・新井，1992）に同定される。

(2)　B区東地点

B区東地点では、下位より暗灰色土（層厚14cm以上）、黒灰色土（層厚6cm）、灰白色軽石を多く含む暗灰色土（層厚8cm，軽石の最大径4mm）、暗灰色土（層厚3cm）、灰色砂層（層厚2cm）、灰色土（層厚6cm）、灰白色砂混じり暗灰色土（層厚19cm）、暗灰色土（層厚11cm）が認められる（図2）。これらのうち、発掘調査では、灰色砂層の直下から畠遺構が検出されている。

3．テフラ検出分析

(1)　分析試料と分析方法

B区5面15トレンチおよびB区東地点において採取された試料20点を対象にテフラ検出分析を行い、示標テフラの検出同定を行うことになった。分析の手順は次の通りである。

1）試料15gを秤量。

表1　B区におけるテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石 量	軽石 色調	軽石 最大径	火山ガラス 量	火山ガラス 形態	火山ガラス 色調
5面15トレンチ	1	+	灰	1.7	+	pm	灰白
	3	−	−	−	+	pm	白
	5	−	−	−	+	b w，pm	透明，白
	7	−	−	−	+	pm	白
	9	+	白	1.3	+	pm	白
	11	−	−	−	+	pm	白
	13	−	−	−	+	pm	白
	15	+	白	3.1	+	pm	白
	17	+	白	2.1	+	pm	白
	19	+	白	3.5	+	pm	白
	21	+	白	3.1	+	pm	白
	23	−	−	−	+	pm	白
東地点	1	++	灰白>白	2.4,2.0	++	pm	灰白，白
	3	+++	白>灰白	3.5,1.7	++	pm	白，灰白
	5	+	灰白>白	2.0,1.3	++	pm	灰白，白
	6	++	灰白，白	3.0,1.2	++	pm	灰白，白
	7	+	灰白	1.5	++	pm	灰白
	9	+++	灰白	3.9	++	pm	灰白
	10	−	−	−	++	pm	白
	11	−	−	−	++	pm	白
	13	+	灰	1.2	++	pm	灰白

++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，+：少ない，−：認められない。最大径の単位は，mm。bw：バブル型。pm：軽石型。（2）分析

結果

2）超音波洗浄により泥分を除去。

3）80℃で恒温乾燥。

4）実体顕微鏡下で、テフラ粒子の量や特徴を観察。

テフラ検出分析の結果を表1に示す。5面15トレンチの試料21から15にかけては、円磨された白色の軽石（最大径3.5mm）が少量ずつ含まれている。この斑晶には、斜方輝石や角閃石が認められる。この軽石については、その特徴から約4.1～4.4万年前に榛名火山から噴出した榛名八崎軽石（Hr-HP，新井，1962，鈴木，1976，大島，1986）に由来すると考えられる。また試料9にも白色の軽石（最大径1.3mm）が含まれている。この軽石の起源に関しては、屈折率測定を行い示標テフラとの同定を試みた（後述）。試料1には、灰色軽石（最大径1.7mm）が少量認められる。この試料には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が多く含まれている。これらの特徴から、この試料にはAs-BP Groupに由来するテフラ粒子が含まれていると考えられる。

一方、火山ガラスはいずれの試料からも検出されたが、中でも試料5では平板状のいわゆるバブル型ガラスが少量認められた。色調は無色透明である。このバブル型ガラスは、その特徴から約2.4～2.5万年前[*1]に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰（AT，町田・新井，1976，1992，松本ほか，1987，池田ほか，1995）に由来すると考えられる。したがって、産状から試料5付近にATの降灰層準があると考えられる。

東地点では、とくに試料9にスポンジ状に比較的よく発泡した灰白色軽石（最大径3.9mm）が多く含まれている。この軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められ、4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石（As-C，新井，1979）に由来すると考えられる。砂層として認められた試料6には、As-Cに由来する灰白色軽石（最大径3.0mm）のほかに、あまり発泡の良くない白色軽石（最大径1.2mm）が含まれている。この白色軽石は、試料6以上の層準から検出される。

4．屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

B区5面15トレンチの試料9および東地点の試料6について、示標テフラとの同定精度を向上させるために、温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）により屈折率の測定を行った。

5．小　結

波志江中屋敷西遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、

表2　B区における屈折率測定結果

地点	試料	重鉱物	opx (γ)	ho (n2)	cm (n2)
5面15トレンチ	9	ho,cm) opx)	cpx 1.707-1.711	1.671-1.677	1.661-1.664
東地点	6	opx) cpx,ho	1.706-1.711	1.672-1.680	—

opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，ho：角閃石，cm：カミングトン閃石。屈折率の測定は，温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）による。

浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group，約1.9～2.2万年前，少なくとも2層以上)、浅間大窯沢第1軽石(As-Ok1，約1.7万年前)、浅間板鼻黄色軽石（As-YP，約1.3～1.4万年前)、浅間C軽石(As-C，4世紀中葉)、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA，6世紀初頭）などの多くの示標テフラやその粒子を検出することができた。また、東地点において認められた洪水に由来すると考えられる砂層の層位は、Hr-FAより上位で浅間Bテフラ(As-B，1108年)の下位と考えられた。そして、この砂層に覆われた畠の年代については、As-C降灰後でHr-FA降灰前と推定された。

5面15トレンチの試料9には、重鉱物として角閃石やカミングトン閃石のほか、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石（γ）、角閃石（n 2）やカミングトン閃石(n 2)の屈折率は、順に1.707-1.711、1.671-1.677、1.661-1.664である。これらの特徴から試料9に含まれるテフラは、約2.5～3万年前に榛名火山から噴出した榛名箱田テフラ（Hr-HA，早田，1996）に由来すると考えられる。

東地点の試料6には、重鉱物として斜方輝石のほか、単斜輝石や角閃石が含まれている。斜方輝石（γ）と角閃石（n 2）の屈折率は、順に1.706-1.711、1.672-1.680である。これらの特徴から試料6に含まれるテフラは、

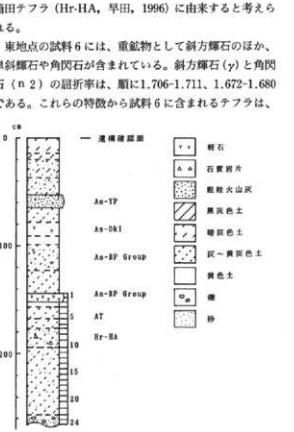


図1　B区5面15トレンチの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

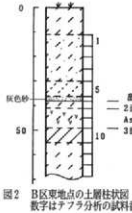


図2　B区東地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

6世紀初頭に浅間火山から噴出した榛名二ツ岳淡川テフラ(Hr-FA，新井，1979，坂口，1986，早田，1989，町田・新井，1992)に由来すると考えられる。したがって、層相から洪水に由来すると考えられる試料6の砂層は、Hr-FA堆積後に発生したと考えられる。なお今回の分析では、1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B，新井，1979）に由来するテフラ粒子は検出されなかった。このことから、この洪水の発生は、As-B降灰前と考えられる。この洪水堆積物に覆われた畠の年代については、As-C降灰後でAs-B降灰前の間で、とくに作土中に Hr-FA起源の粒子が認められなかったことからHr-FA降灰前の可能性より高いと指摘されよう。

・1　放射性炭素（14C）年代。

文　献

新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79．

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石によるテフラの同定―テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，　11，p.254-269．

新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，no.53，p.41-52．

新井房夫（1993）温度一定壓縮折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法―研究対象別分析法」，p.138-148．

荒牧重雄（1968）浅間火山の地質．地団研専報，no.14，45p.

池田晃子・馬野　元・中村俊夫・篠井正明・小林哲夫（1995）南九州．給良カルデラ起源の大隅軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による14C年代．第四紀研究，34，p.377-389．

町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰―給良Tn火山灰の発見とその意義―．科学，46，p.339-　347．

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学―考古学研究に関係するテフラのカタログ―．古文化財編集委員編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」，p.865-928．

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）給良Tn火山灰（AT）の14C年代．第四紀研究，26，p.79-　83．

中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦（1984）浅間火山．黒斑―前橋期のテフラ層序．日本第四紀学会講演要旨集，　no.14，p.69-70．

大島　治（1986）榛名火山．日本の地質「関東地方」編集委員会編「関東地方」，p.222-224．

坂口　一（1986）榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器．群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p.103-119．

早田　勉（1989）6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害．第四紀研究，27，p.297-312．

早田　勉（1996）関東地方～東北地方南部の示標テフラの識別―とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて―．名古屋大学加速器質量分析計業績報告書，7，p.256-267．

鈴木正男（1976）過去をさぐる科学，講談社，234p.（1）北関東自動車道建設計画と経過

群馬・栃木・茨城の北関東3県を結ぶ高速道路建設計画が

II．波志江中屋敷西遺跡における プラント・オパール分析（2）測定結果

1．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である（藤原・杉山，1984）。

2．試　料

試料は、B区東地点から採取された6点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3．分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

2）試料約1ｇに対し直径約40μｍのガラスビーズを約0.02ｇ添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

3）電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理

4）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

5）沈底法による20μｍ以下の微粒子除去

6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

7）検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパール出折率測定を合わせて行った。その結果、下位より榛名八崎軽石(Hr-HP，約4.1～4.4万年前)、榛名箱田テフラ（Hr-HA，約2.5～3万年前）、給良Tn火山灰（AT，約2.4～2.5万年前）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1ｇ中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}ｇ）をかけて、単位面積で層厚1ｃｍあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94、ヒエ属（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、タケ亜科0.48である。

4．分析結果

稲作跡の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

表1　群馬県、波志江中屋敷西遺跡におけるプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料	B区東地点 1	2	3	4	5	6
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)		80	22	31	7		
ヒエ属型	*Echinocloba* type		7			7		
ヨシ属	*Phragmites* (reed)		51		12		34	29
ススキ属型	*Miscanthus* type		58	44	37	81	68	29
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)		36	117	62	96	253	256

推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	2.35	0.65	0.91	0.22		
ヒエ属型	*Echinocloba* type	0.61			0.62		
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	3.22		0.78		2.16	1.84
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.72	0.55	0.46	1.01	0.85	0.36
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	0.17	0.56	0.30	0.46	1.21	1.23

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

図1　波志江中屋敷西遺跡、B区東地点におけるプラント・オパール分析結果

5．考　察

プラント・オパール分析で同定される分類群のうち、栽培植物が含まれるものには、イネをはじめオオムギ族（ムギ類が含まれる）、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）などがある。このうち、本遺跡の試料からはイネとヒエ属型が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

1）イ　ネ

イネは、現表土の下層（試料1）からAs-C混層（試料4）までの層摩から検出された。このうち、現表土の下層（試料1）では密度が8,000個/gと高い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを上回っている。これは、比較的最近の水田耕作に由来するものと考えられる。畠遺構が検出された灰色砂層直下では、密度が3,100個/gと比較的高い値である。また、同層は直上を砂層で覆われていることから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真

（倍率はすべて400倍）

No.	分類群	試料名
1	イネ	3
2	イネ（側面）	1
3	ヒエ属型	1
4	キビ族型	3
5	ヨシ属	5
7	ススキ属型	1
8	メダケ節型	5
9	ネザサ節型	6

砂層直上層（試料2）では密度が2,200個/gと比較的低い値であり、As-C混層（試料4）でも700個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、①稲作が行われていた期間が短かったこと、②土層の堆積速度が速かったこと、③採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、④稲藁が耕作地以外に持ち出されていたことなどが考えられる。

2）ヒエ属型

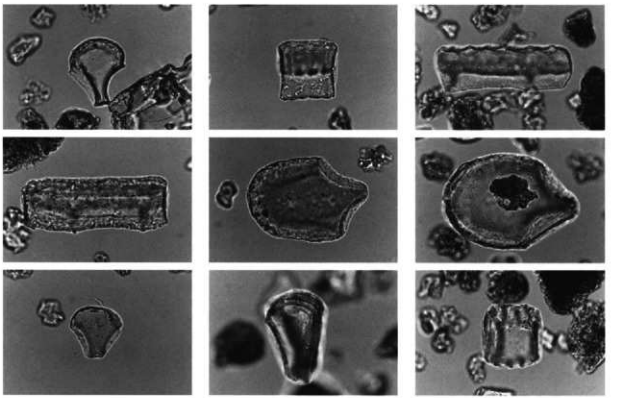
ヒエ属型は、現表土の下層（試料1）とAs-C混層（試料4）から検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、現時点ではこれらを完全に識別するには至っていない（杉山ほか，1988）。また、密度も1,000個/g未満と低い値であることから、これらの層摩でヒエが栽培されていた可能性は低いと考えられる。

6．ま と め

プラント・オパール分析の結果、畠遺構が検出された灰色砂層直下からはイネが比較的多く検出され、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。また、灰色砂層の上層や浅間C軽石（As-C，4世紀中葉）混層などでも、稲作が行われていた可能性が認められた。

文　献

杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動組織珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕遺跡のための基礎資料として－．考古学と自然科学，20，p.81-92．
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29．
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85．



2　波志江中屋敷西遺跡出土材の樹種

三村昌史（㈱パレオ・ラボ）

1．はじめに

ここでは、9世紀の谷地部、15世紀の溝・周溝・井戸、近世後期の土坑、および近現代の溝などから出土した木製品や加工材計159点についての樹種同定結果を報告する。対象とされた器種は、9世紀のもので杭・割材・切断材、15世紀のもので漆椀・箆・下駄・建築材・杭・割材・切断材など、近世後期の試料で角材・薄板材・切断材など、近現代の試料で杭・角棒・厚板材などが含まれる。これらの樹種を明らかにすることで器種別の用材傾向を明らかにし、用材選択の背景について検討を行った。

2．方　法

プレパラート試料はすでに群馬県埋蔵文化財調査事業団により作成済みのもと、出土材から直接採取して作成したものがある。いずれの場合も、横断面・放射断面・接線断面の3断面について剃刀を用いて切片をスライスし、ガムクロラール（抱水クロラール50g、アラビアゴム粉末40g、グリセリン20ml、蒸留水50mlの割合で調整した混合液）で封入したものである。検鏡は光学顕微鏡にて40～400倍で行い、所有の現生標本と対照することにより同定を行った。同定後のプレパラート試料は群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

3．結　果

樹種同定結果を付表に示す。

以下では、時代不明のものを除き、9世紀・15世紀・近世後期および近現代というように時代別にまとめ、各木製品の用材傾向と選択の背景について考察を加えていく。

(1)　9世紀の木製品・加工材

9世紀の木製品・加工材はすべてB2区の谷地部より出土したものである（表1）。

表1　9世紀の木製品・加工材の用材

樹種／器種		杭	杭か	割材	薄板材	切断材	切断か	計
針葉樹	アカマツ	1	—	—	—	—	—	1
	ヒノキ	—	—	—	1	—	—	1
	イヌガヤ	—	1	—	—	—	—	1
広葉樹	ヤナギ属	—	—	1	—	—	—	1
	クリ	19	3	8	—	10	1	41
	クヌギ節	24	4	9	—	4	4	45
	アカガシ亜属	1	—	—	—	—	—	1
	トチノキ	—	—	1	—	—	—	1
計		45	8	19	1	14	5	92

杭は杭かとされたものも含めて、アカマツ・イヌガヤ・クリ・クヌギ節・アカガシ亜属の材が見出された。一般

に杭材には特に決まった樹種が用いられるような傾向にはないが、クリ・クヌギ節の材が突出して用いられている上、すべて硬質で丈夫な材が選択されていることから、材質に関した選択性が働いていることが推察される。

切断材や切断材かとされた加工材にはクリ・クヌギ節が見出された。このように、杭材の樹種構成と共通した傾向が認められており、これらの材は杭材の樹種構成と同様に杭材を調達した際の廃材などに由来する可能性が考えられる。

(2)　15世紀の木製品・加工材

木製品のうち、椀には7点中クリが4点、トネリコ属が2点、広葉樹が1点見出された(表2)。したがって回転成形に適する硬質の樹種が用材として選択されていることが伺える。一般に、椀の用材としてはケヤキやブナ属といった硬質で均質な材やトチノキなどの軽軟で加工容易な材が用材とされることが多い。クリやトネリコ属が椀の用材として用いられているのは事例としてはあるものの、やや珍しい結果であるため、木地屋など地域的な木材供給の側面が影響していることも想定される。

箆にはヒノキが見出された。木理通直・割裂容易で薄板を割り出しやすく、また細部の加工も容易なことからヒノキが選択されたとみられる。

下駄にはクリが見出された。下駄には比較的様々な樹種が用いられる傾向にあり、使用者の嗜好性や機能性などに応じて多種な用材傾向が認められるが、この下駄は硬く丈夫なクリ材を用いて耐久性を意図したものと推測される。

建築材にはニヨウマツ類・ケヤキ・クリが見出されている。これらの樹種は高木になるので大径が得られ、その上材が丈夫で耐朽性が高いことから用いられたのであろう。

杭にはヤナギ属・クリ・エノキ属が見出され、また杭の可能性があるものにはアカマツ・クリが見出された。杭には溝から出土したものと井戸から出土したものがあるが、いずれ場合も軽軟で対朽性の低いヤナギ属と硬く対朽性の高い部類のアカマツ・クリ・エノキ属の材が分け隔てなく用いられており、材質にはあまり関係なく杭材として適度な径長の得られる材が選択されたのであろう。これらは遺跡周辺に身近にみられた樹種のひとつとして想定される。

また、注目されるのは切断痕のある材に見出されたセンダンが見出されたことである。センダンは南方系の樹種で群馬県は分布圏外であり、周囲に植栽されていたものが枯死や材の利用に際して伐採されたのであろう。センダンは種子でも検出されており、屋敷周辺に植栽されていたことは間違いないであろう。

(3)　近世後期および近現代の木製品・加工材

近世後期および近現代には、全体的に針葉樹材の利用が目立つ結果であった(表3)。対象となる器種が限られていることもあるが、このような針葉樹材の多用は近世では一般的な傾向であるといえる。特に近現代ではアカマツやニヨウマツ類の利用が顕著であるが、周辺にアカマツ林が増加しており、最も身近に入手できる材のひとつであったのであろう。

表2，15世紀の木製品・加工材の用材

樹種／器種		漆椀	箆	下駄	建築材	杭	杭か	丸棒	角棒	割材	薄板材	小木片	切断材	加工材	計
針葉樹	アカマツ	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1
	ニヨウマツ類	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
	モミ属	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1	2
	ヒノキ	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	2
広葉樹	ヤナギ属	—	—	—	—	5	—	—	—	2	—	—	3	—	10
	クリ	4	—	1	—	3	1	—	—	—	—	—	—	—	9
	ツブラジイ	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1
	コナラ節	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
	エノキ属	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1
	ケヤキ	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
	センダン	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1
	ヤマウコギ類	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	—	2
	トネリコ属	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
	広葉樹	1	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	2
計		7	1	1	3	9	2	1	2	3	1	1	5	1	39

表3，近世後期および近現代の木製品・加工材の用材

時代		近世後期				近・現代					計
樹種／器種		角材	薄板材	切断材	加工材	杭	角棒	厚板材	割材	薄板材	
針葉樹	アカマツ	—	—	—	—	1	2	1	—	—	4
	ニヨウマツ類	—	—	—	—	1	—	—	1	1	3
	スギ	—	—	1	2	—	—	2	—	1	6
	ヒノキ	—	—	1	—	—	1	—	—	—	2
	アスナロ	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1
	針葉樹	—	3	—	—	—	—	—	—	—	3
計		1	3	2	2	2	3	3	1	2	19

4．見出された樹種

見出された樹種について、同定根拠となる材組織の特徴を以下に述べ、また分布や材質等の一般についても簡潔に記す。

(1) アカマツ Pinus densiflora Sieb. et Zucc.　マツ科　写真図版１ａ－１ｃ

仮道管と放射柔組織、放射仮道管、および水平・垂直両樹脂道を取り囲む薄壁のエピセリウム細胞からなる針葉樹材。放射仮道管の水平壁は内腔側に向かって鋸歯状の突起を有し、鋸歯の先端部は鋭利なものが多く鋸歯の間隔も密、しばしば重鋸歯状となる。分野壁孔は大型の窓状。

アカマツは国内の温帯～暖温帯にかけて広く分布し、主に尾根沿いなどの明るく土壌の薄い乾性立地や湿地縁辺にみられる高木性の常緑針葉樹で、現在では各地の山野に最も身近な樹種のひとつである。材は重硬で割裂困難、樹脂分が多いため水湿には耐性がある。

(2) ニヨウマツ類 Pinus subgen. Diploxylon　マツ科

上記のアカマツと基本的な材構造は一致するが、組織の保存が悪く放射仮道管の水平壁の鋸歯がほとんど観察しえなく、ニヨウマツ類（マツ属複維管束亜属）の材であることまでしか同定が不能であったものである。ニヨウマツ類にはアカマツのほかにクロマツ等が含まれる。

(3) モミ属 Abies　マツ科　写真図版２ａ－２ｃ

仮道管と放射柔組織からなる針葉樹材。晩材部は明瞭で量多い、放射組織の末端壁はじゅず状末端壁を有する。分野壁孔はスギ型で小さく、１分野にふつう２－４個。

モミ属にはいくつかの種が含まれ、最も低標高からみられるものに温帯下部～暖温帯に分布するモミがある。材は通直でやや軽軟、強度もあり加工しやすく割裂性に優れるが、狂いは大きい。

(4) スギ Cryptomeria japonica (L.f.)D.Don　スギ科　写真図版３ａ－３ｃ

仮道管と放射柔組織、および樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部は量多く明瞭。分野壁孔はスギ型で大きく、１分野にふつう２個。

スギは高木になる常緑針葉樹で、天然分布は降水量の多い地域に限られて点在し、特に日本海側には多い。生育地は湿地周辺や谷部、尾根沿いなど幅広く、低地から比較的高標高のブナ林までみられる。材は通直で軽軟、保存性は中庸、適度な強度があり割裂性・加工性に優れる。

(5) ヒノキ Chamaecyparis obtusa (Sieb. et Zucc.) Endl.　ヒノキ科　写真図版４ａ－４ｃ

仮道管と放射柔組織、および樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部は量少ない。分野壁孔は大型のトウヒ型からヒノキ型でやや大きく、１分野にふつう２個。

ヒノキは主に暖温帯（福島県以南）に分布し山地の尾根沿いや緩斜面などに生育する、高木になる常緑針葉樹である。現在では中部地方や紀伊半島、四国南部にまとまった分布がある。材は通直でやや軽軟、加工し易く強度に優れる上、耐朽性が著しく高い。

(6) アスナロ Thujopsis dolabrata Sieb. et Zucc.　ヒノキ科　写真図版５ａ－５ｃ

仮道管と放射柔組織、および樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部はしばしば量多い。分野壁孔はヒノキ型で小さく、ふつう孔口はごく狭く、１分野に２－４個。放射組織には内容物が多い。

アスナロは主に温帯に分布する高木になる常緑針葉樹で、耐陰性が高い。材質は軽軟で割裂・加工容易。耐久性は良好で水湿に強い。

(7) イヌガヤ Cephalotaxus harringtonia (Knight) K. Koch　イヌガヤ科　写真図版６ａ－６ｃ

仮道管と放射組織、および樹脂細胞からなる針葉樹材。樹脂細胞は早材・晩材の区別なく散在する。仮道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。分野壁孔はヒノキ型で、１分野にふつう２－３個。

イヌガヤは小高木程度になる常緑針葉樹で、主に温帯下部～暖温帯に分布し、林床や谷沿いなどでみられる。材は比較的通直、緻密で硬く、強靭である。

(8) ヤナギ属 Salix　ヤナギ科　写真図版７ａ－７ｃ

小型で丸い道管が、ほとんど単独でやや密に分布する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は単列異性。

ヤナギ属には多くの種が含まれ、そのほとんどは河畔などの日当たりの良い湿潤な砂質土壌を好む種が多いが、日当たりの良い乾いた土壌を好む種もある。材は軽軟で加工容易であり、保存性は低い。

(9) クリ Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科　写真図版８ａ－８ｃ

年輪の始めに大型で丸い道管が単独で１－２列に並び、晩材部では小型でやや角張った道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性。道管と放射柔細胞との壁孔は対列状～柵状。

クリは主に温帯下部・暖温帯に広く分布する落葉広葉樹で、向陽地や明るい林内に多くみられる。材質は強硬であるが割裂性に優れ、弾性を有するほか水湿に対する耐性が高い。

(10) ツブラジイ Castanopsis cuspidata (Thunb. ex Murray) Schottky　ブナ科　写真図版９ａ－９ｃ

大型の丸い道管が、年輪の始めに単独で間隔をあけて並び、その後はやや不規則に径を減じながら分布し、晩材部では極小型の薄壁で角張った道管が火炎状に配列する環孔材。木部柔細胞は散在状～短接線状。導管の穿孔

は単一。放射組織は単列同性のものと、広放射組織からなる。

ツブラジイは高木になる常緑広葉樹で、関東以西の暖温帯の山中にみられる照葉樹林を特徴付ける樹木の一つであり、同じシイノキ属のスダジイと比較して内陸部に多い。材質はやや重硬で加工は困難ではなく、割裂性は中庸、耐朽性は低い。

(11) コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus　ブナ科　写真図版10 a -10 c

年輪の始めに大型の丸い道管が単独で1-2列に並び、晩材では小型でやや角張った道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性のものに大型の広放射組織が混在する。

いわゆるナラ類の材で、温帯下部～暖温帯に分布するコナラ、温帯に分布しコナラよりより高標高地域からみられるミズナラなどが含まれる。いずれも重硬で弾性を持つ材で、保存性は中庸、割裂・加工は困難である。

(12) コナラ属クヌギ節　Quercus sect. Cerris　ブナ科　写真図版11 a -11 c

大型の丸い道管が単独で1-数列ならび、径を除減しながら晩材部では丸く厚壁の小導管が単独で放射方向に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性のものに広放射組織を交える。

クヌギ節にはクヌギとアベマキが含まれる。いずれも暖温帯の適湿な向陽地にみられる高木になる落葉広葉樹である。現在群馬県にはクヌギが広く分布している。材質は重硬であり弾性を有し、割裂・加工は困難。

(13) コナラ属アカガシ亜属 Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　写真図版12 a -12 c

中型で丸く壁の厚い道管が単独で放射方向に帯びをなす放射孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性のものと大型の広放射組織からなる。

いわゆるカシ類の材で、アカガシ、アラカシ、ウラジロガシ、シラカシなどを含む。いずれも暖温帯を中心に分布する常緑高木である。材は日本産の木材の中で最も重硬で強靭な部類に入り、加工は困難、割裂性は中庸。

(14) エノキ属 Celtis　ニレ科　写真図版13 a -13 c

年輪始めに大型で丸く壁の厚い道管が単独ないしは1-2個複合してややまばらに配列し、晩材部では小型でやや角張った道管が多数複合して、斜上状・接線状・かたまり状に分布する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は上下端に1-2個直立細胞が連なる異性で1-7列程度。

エノキ属にはエノキやエゾエノキ等が含まれ、共に河畔などの適湿な向陽地に多い。エゾエノキはエノキよりも高所にみられ、エノキは比較的先駆的な樹種で二次林山中にも多い。材は重さが中庸でやや硬く、従曲性を持つ。

(15) ケヤキ Zelkova serrata (Thunb.)Makino　ニレ科　写真図版14 a -14 c

年輪の始めに大型の丸い道管がほぼ単独で1-2列に並び、晩材部では小型の薄壁で角張った道管が多数集合して接線方向あるいはやや斜めに帯をなす環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は主に上下端のみ直立細胞からなる異性で1-5列、しばしば大型の結晶を含む。

ケヤキは高木になる落葉広葉樹で、谷沿いや川沿いの肥沃な土壌にみられ、温帯に広く分布する。材はやや重硬だが、切賃で切削加工は容易、割裂性は中庸で保存性に優れる。

(16) クワ属 Morus　写真図版15 a -15 c

年輪のはじめに大型で丸い道管が単独あるいは1-2個複合して1-数列並び、晩材部では小型で角張った道管が数個～多数集合する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で1-5列、しばしば上下端の直立細胞は数個縦に連なる。

クワ属のうち、自生するものでは国内の温帯～暖温帯に広く分布し林縁などの向陽地や谷沿い・河畔の適湿地にみられるヤマグワ、主に中国地方以西に分布するケグワなどがあり、いずれも低木状態でみられることが多いが、大きいものは小高木程度になる。また、栽培される種では中国原産で古くから移入されているマグワがある。材はやや重硬で靱性に富み、加工はやや困難である。

(17) センダン Melia azedarach L. var. subtripinnata Miq.　センダン科　写真図版16 a -16 c

年輪の始めに丸い大型の道管がやや間隔をあけて一列に並び、その後はやや径を減じながらまばらに分布し、年輪界付近では急に径を減じて角張った薄壁の小道管が放射方向・斜上状・塊状に集合して分布する環孔材。年輪始めの大道管の間にも放射方向を中心に塊状に集合した小道管が分布する。道管の内腔には着色物質が詰まり、穿孔は単一。小道管の内腔にらせん肥厚は認められない。木部柔細胞は周囲状。放射組織は同性または異性で紡錘形をなす1-4列。

センダンは高木になる落葉広葉樹で暖温帯の林内に生育し、海岸近くに多く分布する。現在は東海地方以西に自生状態のものが分布しているが、本来の分布域は四国・九州・小笠原・琉球であるとの見解もあり、古くから各地で植栽されてきているため本来の分布域は明らかでない。

(18) トチノキ Aesculus turbinata Blume　トチノキ科　写真図版17 a -17 c

小型で丸い道管が、単独もしくは放射方向に数個複合してやや密に分布する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性、層階状に配列する。

トチノキは高木になる落葉広葉樹で、温帯の河畔や渓畔にみられる。材質は軽軟で加工・割裂は容易だが、保存性は低い。

⑲　ヤマウコギ類 Acanthopanax cf. spinosus Miq.　ウコギ科　写真図版18ａ-18ｃ

小型で角張った不定形の道管が10-15個程度集合し、接線方向・斜めに数列のまとまりをもって分布し、全体としては帯状～斜めに連なる紋様孔材。年輪の始めには一回り大きい道管が一列に配列する。道管の穿孔は単一。隔壁木繊維を有する。放射組織は異性で１-４列、鞘細胞が認められる。道管と放射組織との壁孔はやや小さなふるい状。

ウコギ属のうち高木のコシアブラを除く、ヤマウコギやオカウコギなどの低木類の材を示している。ヤマウコギやオカウコギは、藪や山地林内のやや薄暗い立地に多い落葉広葉樹である。材は重さ・硬さがやや重硬で加工は困難でないが、材の表面に刺があり、しばしば髄が発達する。

⑳　トネリコ属 Fraxinus　モクセイ科　写真図版19ａ-19ｃ

大型で丸い道管が年輪の始めに一列に並び、晩材部ではごく小型で厚壁の道管がほぼ単独に分布する環孔材。木部柔細胞は周囲状。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で、１-３列。

トネリコ属には日当たりの良い山中や林縁など乾性立地に生育する落葉小高木のマルバアオダモ、渓畔に生育する落葉高木のヤマトアオダモやショオジなどがある。材質は種によってやや異なるが、概して重さ・硬さ中庸～やや重硬、靭性があり、加工は困難でない。

付表．樹種同定結果一覧

W番号	樹　種	器種	遺　構	遺構別遺物%	遺構時期
1	クリ	割材	B２-谷地(谷地部)	68	9 世紀
2	クリ	杭	B２-谷地(谷地部)	79	9 世紀
3	クリ	割材	B２-谷地(谷地部)	90	9 世紀
4	クリ	杭	B２-谷地(西端部付近)	26	9 世紀
5	クヌギ節	割材	B２-谷地(西端部付近)	49	9 世紀
6	クリ	角棒	B区	12	
7	クヌギ節	杭か	B２-谷地(谷地部)	85	9 世紀
8	クヌギ節	杭	B２-谷地(谷地部)	83	9 世紀
9	クリ	杭	B２-谷地(西端部付近)	35	9 世紀
10	クヌギ節	杭	B２-谷地(谷地部)	70	9 世紀
11	クヌギ節	割材	B２-谷地(西端部付近)	50	9 世紀
12	クリ	杭	B２-谷地(西端部付近)	32	9 世紀
13	クヌギ節	杭	B２-谷地(西端部付近)	41	9 世紀
14	クヌギ節	杭	B２-谷地(西端部付近)	45	9 世紀
15	クリ	杭	B２-谷地(西端部付近)	37	9 世紀
16	トチノキ	割材	B２-谷地(谷地部)	91	9 世紀
17	クヌギ節	割材	B２-谷地(西端部付近)	51	9 世紀
18	クリ	割材	B２-谷地(西端部付近)	58	9 世紀
19	クヌギ節	割材	B２-谷地(西端部付近)	53	9 世紀
20	クリ	杭	B２-谷地(西端部付近)	64	9 世紀
21	クヌギ節	杭か	B２-谷地(西端部付近)	47	9 世紀
22	クリ	切断材	B２-谷地(西端部付近)	62	9 世紀
23	クリ	杭	B２-谷地(西端部付近)	33	9 世紀
24	クリ	杭	B２-谷地(西端部付近)	40	9 世紀
25	クリ	切断材	B２-谷地(谷地部)	94	9 世紀
26	クリ	切断材	B２-谷地(谷地部)	97	9 世紀
27	クリ	杭	B２-谷地(谷地部)	69	9 世紀
28	クヌギ節	割材	B２-谷地(谷地部)	106	9 世紀
29		杭	B１-３号井戸	5	15世紀
30	クリ	杭	B２-谷地(谷地部)	75	9 世紀
31	クリ	杭	B２-谷地(谷地部)	72	9 世紀
32	ヤナギ属	切断材	B１-18号井戸	11	15世紀
33	クヌギ節	杭	B２-谷地(谷地部)	71	9 世紀
34	クヌギ節	杭	B２-谷地(西端部付近)	27	9 世紀
35	クリ	杭	B１-18号井戸	4	15世紀
36	クヌギ節	杭か	B２-谷地(谷地部)	86	9 世紀
37	クリ	杭	B２-谷地(谷地部)	77	9 世紀
38	クリ	杭	B２-谷地(西端部付近)	42	9 世紀
39	クヌギ節	杭	B２-谷地(谷地部)	76	9 世紀
40	ヤナギ属	杭	B１-18号井戸	5	15世紀
41	クヌギ節	杭	B２-谷地(西端部付近)	29	9 世紀
42	クリ	切断材	B２-谷地(谷地部)	100	9 世紀
43	クヌギ節	切断材	B２-谷地(谷地部)	101	9 世紀
44	クヌギ節	杭	B２-谷地(谷地部)	78	9 世紀
45	クヌギ節	杭	B２-谷地(谷地部)	73	9 世紀
46	クリ	杭	B１-18号井戸	2	15世紀
47		杭	B１-12号井戸	2	15世紀
47	クリ	杭	B１-18号井戸	3	15世紀
48	クリ	杭	B２-谷地(谷地部)	80	9 世紀
49	クヌギ節	杭	B２-谷地(西端部付近)	30	9 世紀
50	クリ	杭	B２-谷地(西端部付近)	28	9 世紀
51	クリ	切断材	B２-谷地(谷地部)	98	9 世紀
52	クリ	切断材	B２-谷地(谷地部)	102	9 世紀
53	クリ	切断材	B２-谷地(谷地部)	93	9 世紀
54	クリ	切断材	B２-谷地(谷地部)	105	9 世紀
55	クリ	杭	B２-谷地(谷地部)	82	9 世紀
56	クリ	杭	B２-谷地(谷地部)	107	9 世紀
57	クヌギ節	割材	B２-谷地(谷地部)	92	9 世紀
58	クヌギ節	切断材	B２-谷地(谷地部)	99	9 世紀
59	クリ	割材	B２-谷地(西端部付近)	89	9 世紀
60	クリ	杭	B２-谷地(西端部付近)	23	9 世紀
61	クヌギ節	杭	B２-谷地(西端部付近)	31	9 世紀
62	アカマツ	杭	A１-１・２号溝	11	近・現代
63	クリ	杭か	B２-谷地(西端部付近)	46	9 世紀
64	クヌギ節	割材	B２-谷地(西端部付近)	52	9 世紀
65	クリ	切断材	B２-谷地(西端部付近)	61	9 世紀
66	クヌギ節	角棒	B区	11	
67	クヌギ節	杭か	B２-谷地(谷地部)	87	9 世紀
68	アカマツ	角棒	A１-１・２号溝	8	近・現代
69	クヌギ節	切断材	B２-谷地(西端部付近)		9 世紀
70	ヤナギ属	杭	B１-18号井戸	7	15世紀
71	イヌザキ	杭か	B２-谷地(谷地部)	88	9 世紀
72	エノキ属	付札か	B区	6	
73		竹	B２-谷地(谷地部)		9 世紀
74	ニヨウマツ類	割材	A１-１・２号溝		近・現代
75	アカマツ	厚板材	A１-１・２号溝	7	近・現代
76	ヒノキ	厚板材	B２-谷地(西端部付近)	16	9 世紀
77	スギ	厚板材	B区	9	
78	モミ属	角棒	B１-17号井戸	2	15世紀
79		竹	B区		
80	ヤマウコギ類		B１-13号溝		
81	ニヨウマツ類	杭	A１-１・２号溝	12	近・現代
82	ヒノキ	角棒	A１-１・２号溝	10	近・現代
83	アカマツ	角棒	A１-１・２号溝	9	近・現代

W番号	樹　種	器種	道　構	遺構内遺物No.	遺構時期
84	モミ属	不明	B 1-17号井戸		
85	ニヨウマツ類	薄板材	A 1・1・2号溝	3	近・現代
86	ヤナギ属	杭	B 1-18号井戸	8	15世紀
87	スギ	薄板材	A 1・1・2号溝	4	近・現代
88	クヌギ節	杭	B 2-谷地(谷地部)	81	9世紀
89	モミ属	加工材	B 1-17号井戸	3	15世紀
90	スギ	厚板材	A 1・1・2号溝	5	近・現代
91	スギ	厚板材	A 1・1・2号溝	6	近・現代
92	トネリコ属	漆椀	B区財敷	1	15世紀
93		竹	B区		
94	クワ属	切断材	B 2-谷地(南端)		
95	ヤナギ属	割材	B 2-谷地(西端部付近)	60	9世紀
96	ヤナギ属	切断材	B 1-18号井戸	12	15世紀
97	クヌギ節	杭	B 2-谷地(西端部付近)	17	9世紀
98	クヌギ節	杭	B 2-谷地(西端部付近)	21	9世紀
99	クヌギ節	杭	B 2-谷地(西端部付近)	25	9世紀
100	クヌギ節	切断材か	B 2-谷地(谷地部)	103	9世紀
101	クヌギ節	切断材か	B 2-谷地(西端部付近)	65	9世紀
102	モミ属	木製部品	B区	7	
103	クヌギ節	杭	B 2-谷地(西端部付近)	43	9世紀
104	クヌギ節	切断材か	B 2-谷地(西端部付近)	66	9世紀
105	針葉樹	薄板材	A 2-3号土坑	1	近世後期
106	針葉樹	薄板材	A 2-3号土坑	2	近世後期
107	クヌギ節	切断材か	B 2-谷地(谷地部)	104	9世紀
108	クリ	切断材か	B 2-谷地(西端部付近)	67	9世紀
109	ヤナギ属	切断材	B 1-18号井戸	13	15世紀
110	スギ	切断材	A 2-3号土坑	4	近世後期
111	スギ	加工材	A 2-3号土坑	6	近世後期
112	スギ	加工材	A 2-3号土坑	7	近世後期
113	トネリコ属	漆椀	B 1-周堀	100	15世紀
113	針葉樹	薄板材	A 2-3号土坑	3	近世後期
114	クリ	漆椀	B 1-周堀	101	15世紀
114	広葉樹	丸棒	B 1-周堀	106	15世紀
115	クリ	漆椀	B 1-周堀	102	15世紀
115	アスナロ	角材	A 2-3号土坑	5	近世後期
116	クリ	漆椀	B 1-周堀	103	15世紀
116	アカマツ	杭か	B 1-18号井戸	10	15世紀
117	広葉樹	漆椀	B 1-周堀	104	15世紀
117	クヌギ節	杭	B 2-谷地(西端部付近)	36	9世紀
118	クリ	下駄	B 1-周堀	105	15世紀
118	クヌギ節	割材	B 2-谷地(西端部付近)	48	9世紀
119	クヌギ節	杭	B 2-谷地(谷地部)	74	9世紀
120	クリ	杭	B 2-谷地(西端部付近)	18	9世紀
121	獣医のあみもの	竹	B 1-13号井戸	10	15世紀
122	クリ	漆椀	B 1・4号井戸	5	15世紀
123	ヒノキ	薄板材	B 1-周堀	107	15世紀
124	ヤナギ属	杭	B 1-18号井戸	6	15世紀
125	ヒノキ	箆	B 1-周堀	108	15世紀
125		切断材	B区屋敷	2	15世紀
126	針葉樹	薄板材	B区	13	
127	クヌギ節	杭	B 2-谷地(西端部付近)	20	9世紀
128	クヌギ節	杭	B 2-谷地(西端部付近)	24	9世紀
129	アカガシ亜属	杭	B 2-谷地(西端部付近)	19	9世紀
130	クヌギ節	杭	B 2-谷地(西端部付近)	39	9世紀
131	クリ	角棒	B区	10	
133	クリ	杭か	B 2-谷地(西端部付近)	34	9世紀
138	クヌギ節	杭	B 2-谷地(西端部付近)	38	9世紀
139	クヌギ節	切断材	B 2-谷地(西端部付近)	63	9世紀
141	クリ	割材	B 2-谷地(西端部付近)	56	9世紀
142	クリ	割材	B 2-谷地(西端部付近)	55	9世紀
144	クリ	割材	B 2-谷地(西端部付近)	57	9世紀
145	クリ	割材	B 2-谷地(西端部付近)	54	9世紀
146	クヌギ節	割材	B 2-谷地(西端部付近)	59	9世紀
148	クヌギ節	杭	B 2-谷地(西端部付近)	44	9世紀
149	クヌギ節	薄板材	B区	8	
151	コナラ節	小木片	B 1-周堀	109	15世紀
152	ツブラジイ	角棒	B 1-13号井戸	9	15世紀
160	クリ	杭か	B 2-谷地(谷地部)	84	9世紀
161	センダン	切断材	B 1・4号井戸	7	15世紀
162	クリ	切断材	B 2-谷地(谷地部)	96	9世紀
163	クリ	杭か	B 1-18号井戸	9	15世紀
164	ヒノキ	切断材	A 2-3号土坑	8	近世後期
165	アカマツ	杭	B 2-谷地(西端部付近)	22	9世紀
166	ヤマウコギ類	切断材	B 1-3号井戸	6	15世紀
167		切断材	B 2-谷地(谷地部)	95	9世紀
1001	ヤナギ属	割材	2-8号溝	7	15世紀
1002	ムクノキ属	杭	2-5号溝	4	15世紀
1003	ヤナギ属	杭	2-6号溝	5	15世紀
1004	ヤマウコギ類	割材	2-7号溝	6	15世紀
1005	ヤナギ属	割材	2-9号溝	8	15世紀
1006	細葉か	箆	B 1・4号井戸	6	15世紀
取1	ケヤキ	建築材	B 1-3号井戸	2	15世紀
取2	ニヨウマツ類	建築材	B 1-3号井戸	3	15世紀
取3	ニヨウマツ類	建築材	B 1-3号井戸	4	15世紀

3　波志江中屋敷西遺跡から出土した大型植物化石

新山雅広（㈱パレオ・ラボ）

1．試料と方法

大型植物化石の検討は、抽出済みでプラスチックケース（乾燥）ないしタッパー（液浸）に保存された合計5試料について行った。大型植物化石の同定・計数は肉眼および実体顕微鏡下で行った。

2．出土した大型植物化石

全試料で同定された分類群は本本がコナラ殻斗、コナラ属果実、クリ果実、センダン核の4分類群、草本がイヌビエまたはヒエ炭化穎、アワ炭化穎果、エノコログサ属またはアワ炭化穎、キビ族炭化胚乳の4分類群であり、不明炭化種実、昆虫も含まれていた（表1）。以下に、各試料の大型植物化石を記載する。

B区1面2号井戸：草本のみであり、イヌビエまたはヒエ、アワ、エノコログサ属またはアワ、キビがそれぞれ少量であった。他に、不明炭化種実、昆虫も少量含まれていた。

B区1面7号井戸：クリのみであり、完形2～3個分の破片であった。

B区1面掘種子①：センダンのみが2個であった。

B区1面掘種子②：コナラ属のみが2片であり、完形1個分位かと思われる。

表1　大型植物化石出土一覧表(＊数字は個数、(　)内は半分ないし破片の数を示す)

分類群・部位＼地区・遺構面・遺構名		KT220	KT220	KT220	KT220	KT220
		B区一調	B区1面	B区1面	B区1面	—
		2号井戸	7号井戸	堀 種子①	堀 種子②	—
コナラ	殻　斗	—	—	—	—	2
コナラ属	果　実	—	—	—	(2)	—
クリ	果　実	—	(10)	—	—	—
センダン	核	—	—	2	—	—
イヌビエまたはヒエ	炭 化 穎	(1)	—	—	—	—
アワ	炭化穎果	1	—	—	—	—
エノコログサ属またはアワ	炭 化 穎	(2)	—	—	—	—
キビ族	炭化胚乳	1	—	—	—	—
不明	炭化種実	(2)	—	—	—	—
昆虫	羽	(1)	—	—	—	—

遺構面・遺構名なし：コナラのみ2個であった。

3．主な大型植物化石の形態記載

(1)　コナラ　Quercus serrata Murray　殻斗

殻斗鱗片は覆瓦状に並び、殻斗上端はやや内側を向き、基部は鋭鮮。殻斗径は7.4㎜と7.8㎜程度。

(2)　コナラ属　Quercus　果実

乾燥により、変形・萎縮している。2片あるが、各1/2片程度か。推定の果実長は20㎜程度である。

(3)　クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　果実

いずれも破片であり、完形の推定の長さ20～25㎜、幅25～30㎜。

(4)　イヌビエまたはヒエ　Echinochloa crus-galli (Linn.) P.Beauv. and/or Echinochloa crus-galli P. Beauv. var. fumentacea Trin.　炭化穎

腹面側の破片である。微細破片のため識別困難であった。

(5)　アワ　Setaria italica Beauv.　炭化穎果

穎の表面には、アワ特有の突起があり、横方向の波状の隆起があるように見える。本標本は、カビが生えており、一度乾燥させた炭化種実を洗浄すると破損する恐れがあるので、カビが付着したまま写真撮影をした。

近似種とした。

(6)　エノコログサ属またはアワ　Setaria and/or Setaria italica Beauv.　炭化穎

腹面側の微細な破片であり、識別困難であった。

(7)　キビ族　Paniceae　炭化　胚乳形はヒエに似るが、表面磨耗しており、胚・臍は確認できない。

(8)　不明　unknown　炭化種実

非常に微細な破片である。2号井戸試料中には、イヌビエまたはヒエ、アワなどのキビ族が含まれているので、これら穎果が粉々になった破片と推定される。

4．考　察

落葉広葉樹のコナラを含むコナラ属、クリ、センダンが遺跡周辺の植物相であった。クリは栽培されていた可能性もあり、いずれも破片であることから、利用後の残滓が7号井戸内に投棄された可能性がある。草本類は、イヌビエまたはヒエ、アワ、エノコログサ属またはアワ、キビ族といった栽培種ないしその可能性があるものであるが、いずれも炭化しているので、栽培地からの流入ではなく、生活の場で投棄されたものが2号井戸内に流入した可能性が考えられる。

5．まとめ

コナラを含むコナラ属、クリ、センダンが遺跡周辺の植物相であり、クリは栽培・利用されていた可能性が考えられた。また、イヌビエまたはヒエ、アワなどのキビ族が利用されていたと考えられた。

4　放射性炭素年代測定

山形 秀樹（㈱パレオ・ラボ）

1．試料と方法

大型植物化石の検討は、抽出済みでプラスチックケース(乾燥)ないしタッパー

(1)　はじめに

波志江中最敷西遺跡の3号井戸から出土した柱材、および谷地部西端から出土した流木の2点について、遺構の年代観を得る目的で加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を実施した。

2．試料と方法

3号井戸柱材、谷地部流木ともに丸木材であり、その外側数年輪分を採取し、分析試料とした。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析計(AMS)にて測定した。測定した14C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した14C濃度を用いて14C年代を算出した。

表１　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号（測定法）	試料データ	$\delta^{13}C$（‰）	^{14}C年代（yrBP±1σ）	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2775（AMS）	最外年輪含む木片：B区１面３号井戸　柱材（樹種　クリ）	−28.0	1,160±45	calAD890	calAD810-845(22.9%) calAD855-900(35.9%) calAD920-960(34.5%)
PLD-3047（AMS）	木片 B区１面３号井戸 建築材№２	−27.0	460±35	calAD1,440	calAD1,415-1,455(100%)
PLD-2776（AMS）	最外年輪含む木片：BWE２面谷地部西端　流木（樹種　クリ）	−27.8	1,195±45	calAD785 calAD790 calAD825 calAD840 calAD860	calAD775-890(100%)

３．結　果

表１に、各試料の同位体分別効果の補正値（基準値−25.0　）、同位体分別効果による測定誤差を補正した14C年代、14C年代を暦年代に較正した年代を示す。14C年代値(yrBP)の算出は、14Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した14C年代誤差（±１σ）は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。これは、試料の14C年代が、その14C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された14C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、および半減期の違い（14Cの半減期5,730±40年）を較正し、より正確な年代を求めるために、14C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と14C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて14C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて14C年代を暦年代に較正した年代を算出する。

14C年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB4.3(CALIB 3.0のバージョンアップ版)を使用した。なお、暦年代較正値は14C年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、１σ暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその１σ暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。１σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

４．考　察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した１σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代、p.3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J.（1993）Extended 14C Database and Revised CALIB3.0 14C Age Calibration Program. Radiocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver,M., Reimer,P.J., Bard,E., Beck,J.W., Burr,G.S., Hughen,K.A., Kromer,B., McCormac,F.G., v.d. Plicht,J., and Spurk,M.（1998）INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

おわりに

詳細はくり返さないが、本遺跡では縄文時代中・後期の遺物、弥生時代以前の小ピット群、4世紀のAs-C復旧水田、古墳～平安時代にかけての溝群、平安期の竪穴住居や溝、谷状の遺構や畠、中世の屋敷や水田、そして近代以降の溝や土坑など多くの遺構を発見・調査し、出土遺物を得たのである。そしてそれらを不充分乍らも報告してきた。そして図示すべきものはなかったが、縄文土器97点、1,778g、古墳時代前期を中心とする時期の土師器片が合計1,066点、10,393g、埴輪片34点、2,192g、平安時代を中心とする時期の土師器編2,950点、16,737g、須恵器片568点、15,117g、羽釜20点、458g、灰釉陶器37点、150g、瓦10点、275g、中世の焼締陶器116点、8,275g、軟質陶器27点、1,244g、かわらけ20点、227g、内耳鍋368点、13,331g、焙烙鍋11点、336g、陶器66点、1,043g、磁器21点、76g、黒色安山岩等の剥片25点、1,082g、多孔石等の石製品6点1,551gがあり、その他少量の鉄、ガラス等の出土遺物も見られた。この他炭化物等の自然遺物サンプルも幾つか保管している。

こうした多くの調査成果があったものの、編者(石守)の能力不足から充分な報告ができなかったことは誠に慙愧に耐えない。しかし乍ら少なくも記録保存に於けるインデックスとなり得るものには本書を仕上げることができたことに多少なりともほっとしている。尚、本報告書の作製に当っては多く同僚の協力があり、そして無能な担当を盛り立ててくれた整理補助員各氏の奮闘があったことも記さなければならない。彼らの協力なくして本書の刊行はなかったのであり、心からの感謝を申し上げる次第である。また、炎天下、或は寒風吹きすさぶ中を懸命に発掘調査に取り組んで戴いた発掘作業員各位にも感謝申し上げたいと思う。

そして最後になるが発掘調査、整理事業を支えて下さった日本道路公団、群馬県教育委員会文化課、伊勢崎市教育委員会始め、関係各位に心よりの御礼を申し上げ、稿を閉じたいと思う。

〔参考文献〕
石守晃「掘立柱建物の重量に関する一試験」「研究紀要3」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986
坂口一・三浦京子『奈良・平安時代の土器の編年』「群馬県史研究24」群馬県史編さん委員会　1986
石守晃「竪穴住居と竪穴住居遺構について」「研究紀要17」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　1999
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥荒子遺跡』(中沢悟編)2000
永井久美男「新版　中世出土銭の分類PL」高志書院　2002

遺物一覧

A　区

（1面）

A 1-1・2溝

No.	資料番号	資料名称	測定値（cm）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	10-000001	磁器碗	残存7.0×4.7　残高2.1	底部～高台。青磁染付け。見込み五弁花コンニャク版。高台内方形枠に漢「施」銘。焼成不良	肥前 18世紀中～後葉	第7図	PL6
2	10-000002	須恵器横瓶か	残存7.1×5.2　厚1.1	口縁破片。折り返し口縁。	8世紀前半	第7図	PL6
3	30-000001	薄板材	径7.0×1.3　残長24.9	上下欠損。柾目材	複雑管束亜種	第7図	PL6
4	30-000002	薄板材	径6.5×1.3　残長24.0	上下欠損。側の腐食進む。板目材か	スギ	第7図	PL6
5	30-000003	厚板材	径5.3×2.2　残長17.2	上下欠損。板目材	スギ	第7図	PL6
6	30-000004	厚板材	径6.8×1.4　残長15.7	上下欠損。板目材か	スギ	第7図	PL6
7	30-000005	厚板材	径2.7×1.6　残長10.9	上下欠損。面荒れる	アカマツ	第7図	PL6
8	30-000006	角棒	径3.4×3.4　残長25.5	上下欠損。横断面形正方形。面荒れる	アカマツ	第7図	PL6
9	30-000007	角棒	径3.5×3.4　残長20.3	上下欠損。横断面形正方形か。一部面残る	アカマツ	第7図	PL6
10	30-000008	角棒	径4.5×3.7　残長15.7	上下欠損。面荒れる	ヒノキ	第7図	PL6
11	30-000009	杭	径4.6×5.2　残長44.7	上位欠損。自然木の先端外周削り先端造る	アカマツ	第7図	PL6
12	30-000010	杭	径3.9×3.7　残長25.6	上端欠損。角棒を用い、両側から削り鼎状の先端形成	複雑管束亜種	第7図	PL6

A 1-5号土坑

No.	資料番号	資料名称	測定値（cm）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	10-000003	灰釉陶器皿	残存5.1×5.5　厚0.45	口縁～体部破片。内外面施釉	10世紀以降。大窯	第9図	PL6

A区1面

No.	資料番号	資料名称	測定値（cm）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	10-000004	磁器碗	残存3.8×4.2　厚0.8	体部破片。内外面施釉。表面に染め付け。波佐見	18世紀中～後葉	第14図	PL6
2	10-000005	青磁碗	残存3.7×3.6　厚0.4	口縁破片。内外面施釉。淡青	龍泉窯系	第14図	PL6
3	20-000001	砥石	4.3×9.5×3.0	表面の剥離多し。表裏左側面に研磨面形成		第14図	PL6
4	20-000002	敲石	10.3×5.5×2.7	河床礫使用。上端に敲打痕、磨耗痕一周	こも編み石に転用	第14図	PL6

A区北トレンチ

No.	資料番号	資料名称	測定値（cm）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	10-000006	緑釉陶器碗	残存5.6×3.7　厚0.5	口縁破片。内外面施釉		—	PL6
2	10-000007	施釉陶器碗	残存2.2×1.9　厚0.4	口縁破片。内外面灰釉施釉		—	PL6
3	10-000008	磁器瓶型碗	残存2.9×2.7　厚0.3	口縁破片。内面緑掛かった灰釉、染付け	18世紀後半	—	PL6
4	40-000001	鉸か	径0.5×0.5　残長3.0	片側胴部附近破片。横断面形角形		—	PL13

（2面）

A 2-1号住居

No.	資料番号	資料名称	測定値（cm）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	10-000009	土師器坏	径14.0　器高4.3	ほぼ完形。口縁横撫で。体～底部外面篦削り、内面篦撫で	8世紀前半	第16図	PL13
2	10-000010	土師器坏	径13.0　器高4.3	4/5。口縁外面横撫で。口縁～底部内面篦撫で。体部～底部外面篦削り	8世紀前半	第16図	PL13
3	10-000011	土師器坏	径(12.6)　器高3.6	2/3。口縁横撫で。体～底部外面篦削り、内面撫で後放射状の篦磨き	8世紀前半	第16図	PL13
4	20-000003	磨石	5.3×3.8×15.1	一部欠損。片面に研磨面残る。	こも編み石に転用か	第16図	PL13

A 2-2号住居

No.	資料番号	資料名称	測定値（cm）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	10-000012	土師器甕	残存5.8×1.8　厚23.8	口縁～胴部破片。口縁横撫で体部内面撫で	平安時代前期	第18図	PL13

A 2-3号土坑

No.	資料番号	資料名称	測定値（cm）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	30-000011	薄板材	径5.8×1.8　残長23.8	先丸まり元折れる。腐食進行。柾目材	針葉樹	第27図	PL13
2	30-000012	薄板材	径4.7×1.8　残長18.1	両側欠損。片側緑割れか。腐食進行。柾目材	針葉樹	第27図	PL13
3	30-000013	薄板材	径9.3×1.9　残長36.9	両端欠損。腐食進行。節持ちの板目材	針葉樹	第27図	PL13
4	30-000014	切断材	径1.9×9.4　残長48.6	両端折れる。正目材。	スギ	—	PL13
5	30-000015	角材	径3.2×2.5　残長18.5	上下欠損。四囲整形	アスナロ	第27図	PL13
6	30-000016	薄板材	径1.1×5.5　残長34.1	両端折れる。側縁割れる。柾目材	スギ	—	PL13
7	30-000017	薄板材	径1.2×9.3　残長44.2	両端折れる。節持ちの柾目材	スギ	—	PL13
8	30-000018	切断材	径9.7×5.3　残長77	全体が暇造化する。切断痕跡残る	ヒノキ	—	PL13

A区2面

No	資料番号	資料名称	測定値 (cm)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	20-000004	こも編み石	5.6×11.5×3.1	河床礫使用。中位に4cm程の磨耗痕一周	粗粒輝石安山岩	—	PL13
2	40-000002	刀子	径1.8×0.7 残長3.4	刃柄側欠損。片刃。大型品か		—	PL13

B区

（1面）

B1-1溝

No	資料番号	資料名称	測定値 (cm)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	10-000013	土師器坏	口径(6.5) 残高2.9	口縁～底部1/4。口縁横撫で。内面体～底部荒撫で、体部外面指撫で。左捻りの底面荒削り	9世紀半	第41図	PL37
2	10-000014	土師器坏	口径(6) 残高2.8	口縁～底部1/4。器面荒れる。鉄分付着。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面荒削り	9世紀半	第41図	PL37
4	10-000016	須恵器坏	口径12.8 底径6.4 残高4.0	口縁1/4欠損。器面荒れる。鉄分付着。右回転轆轤整形。腰部～底面回転糸切整	9世紀半	第41図	PL37
5	10-000017	かわらけ	口径7.3 底径5.0 器高1.8	低部一部欠損。口縁に一部煤付着。左回転轆轤整形。底部回転糸切り		第41図	PL37
6	10-000018	内耳鍋	口径(16.0) 残高16.9	口縁～体部片。薄手で口縁屈曲。口端部平で外に引かれる	15世紀後半	第41図	PL37
7	20-000005	敲石	3.6×3.5×11.3	河床礫使用。上端に敲打痕残り、裏面に研磨面形成。中位に磨耗痕一周	雲母石英片岩 こも編み石に転用	第41図	PL37
8	20-000006	こも編み石	5.3×5.0×10.4	河床礫使用。中位に幅4cm程の磨耗痕一周		—	PL37

B1-3溝

No	資料番号	資料名称	測定値 (cm)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	10-000019	土師器坏	口径13.1 器高3.3	1/2。口縁から体部内面横撫で。体部外面指撫で。低部内面荒撫で、底面荒削り	9世紀前半	第42図	PL37

B1-8溝

No	資料番号	資料名称	測定値 (cm)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	10-000020	軟質陶器鉢	残存21.0×8.4 厚1.3	口縁～体部。内面口端部下に窪み一周し、内面全体に磨耗。内外面横位の撫で		第44図	PL37
2	10-000021	形象埴輪	残存11.3×17.8×13.0	人物埴輪脚子部分か。内外面刷毛目後撫で		第44図	PL37

B1-10溝

No	資料番号	資料名称	測定値 (cm)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	10-000022	土師器台付甕	残存18.5×10.8 厚0.4	体部破片。内外面刷毛目	古墳前期	第41図	PL38

B1-11溝

No	資料番号	資料名称	測定値 (cm)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	10-000023	土師器坏	残存18.5×10.8 厚0.4	1/4。鉄分比著。内面に擦付著の痕跡。口縁横撫で。体部から底部内面荒撫で。体部外面撫で、底面荒削り	8世紀中葉	—	—

B1-12溝

No	資料番号	資料名称	測定値 (cm)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	10-000024	熔焼鍋	口径(17.0) 残高6.2	口縁～底部片。口縁～体部やや開く。内外面横位の撫で		第66図	PL38
2	10-000025	内耳鍋	口径(14.0) 残高9.9	口縁～体部片。やや厚手で口縁の屈曲やや弱い。内外面横位の撫で	15世紀前半	第66図	PL38
3	10-000026	内耳鍋	口径26.9 残高10.7	口縁～体部1/2。やや厚手で口縁の屈曲弱い。内外面横位の撫で	15世紀前半	第66図	PL38
4	10-000027	男瓦	13.2×8.7×30.6	2/3。凸部径9.4cm。径1.1cmの目釘穴貫通。上面撫で、下面に布目痕		第66図	PL38
5	20-000008	こも編み石	7.5×15.1×4.0	河床礫使用。左右側敲打による抉れ作り、横位の磨耗痕一周	石英閃緑岩	第66図	PL38
6	20-000009	こも編み石	6.1×11.4×3.8	河床礫使用。中位に幅3.2cm程の磨耗痕一周		—	PL38
7	20-000010	こも編み石	残存5.4×10.7 厚2.9	右側抉れる河床礫使用。左側欠損。中位に幅4cm程の磨耗痕一周		—	PL38
8	20-000011	こも編み石	4.0×2.7×11.1	河床礫使用。一部欠損。中位に幅3.2cm程の磨耗痕一周		—	PL38

B1-13溝

No	資料番号	資料名称	測定値 (cm)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	10-000028	内耳鍋	口径(34.7) 底径24.7 器高18.1	1/6。外面煤付著。口縁屈曲。内外面荒撫で。底面被熱	15世紀後半	第66図	PL38

遺物一覧

B 1 -14溝（2－8溝含む）

No	資料番号	資料名称	測定値 (cm)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	10-000029	焼締陶器壺	口径(23) 残高11.9	口縁1/4を折り返し口縁。表裏面横位の撫で。内面に指撫で痕残る	2－8号溝－5と接合 15世紀前～中葉	第68図	PL39
2	20-000012	砥石か	6.2×6.8×(6.6)	脚の可能性有り。6面柱状を成す。全面研磨。一部に削痕残る	粗粒輝石安山岩	第68図	PL39

B 1 -15溝

No	資料番号	資料名称	測定値 (cm)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	20-000013	こも編み石	4.6×2.6×12.2	表裏剥離した河床礫使用。中位に幅3.3cm程の磨耗痕一周	粗粒輝石安山岩	—	PL38
2	40-000003	鉄滓	9.8×7.5×3.7	椀形鉄滓。鉄分は粗と て多くない		—	PL59

B 1 -18溝

No	資料番号	資料名称	測定値 (cm)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	10-000030	内耳鍋	残存8.2×3.7 残高4.9	腰部～底部破片。体部横位の撫で。底面被熱		第67図	PL39
2	40-000004	咸平元寶	径2.09×2.115 厚0.135	銭文、郭、輪明瞭だが、縁狭い	模鋳銭か	第67図	PL39
3	20-000014	不明石製品	22.3×(15.7)×9.8	河床礫使用。表面中央をはつり、一部を椀状に磨く	粗粒輝石安山岩	第67図	PL39
4	20-000015	磨石	13.5×(11.4)×3.8	河床礫使用。下部欠損。表面に弱い研磨痕残る		第67図	PL39

B 1 -周堀

No	資料番号	資料名称	測定値 (cm)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	10-000031	かわらけ	口径11.7 底径5.7 器高3.0	ほぼ完形。器面やや荒れる。左回転轆轤整形。底面静止糸切り	15世紀前半	第56図	PL39
2	10-000032	かわらけ	口径11.4 底径6.3 3.2器高3.1	口縁一部欠損。酸化焔調整。右回転轆轤整形。底面回転糸切り後撫調整	15世紀前半	第56図	PL39
3	10-000033	かわらけ	口径8.8 底径4.4 器高2.0	口縁一部欠損。内面煤炭。口縁外面に一部煤付着。左回転轆轤整形。底面回転糸切り	15世紀後半	第56図	PL39
4	10-000034	かわらけ	口径10.9 底径5.9 器高2.5	一部欠損。器面ひび割れ荒れる。口縁一部推される。左回転轆轤整形。底面回転糸切り	15世紀後半	第56図	PL39
5	10-000035	かわらけ	口径8.0 底径5.5 器高1.8	口縁1/2欠損。左回転轆轤整形。底面回転糸切り	15世紀後半	第56図	PL39
6	10-000036	かわらけ	口径11.7 底径6.5 器高3.5	3/4。酸化焔焼成で甘い。右回転轆轤整形。底面静止糸切り	15世紀前半	第56図	PL39
7	10-000037	かわらけ	口径8.1 底径4.9 器高1.8	2/3。片岩入る。左回転轆轤整形。底面回転糸切り後撫で	15世紀後半	第56図	PL39
8	10-000038	かわらけ	口径(11.3) 器高3.1	1/4。左回転轆轤整形。底面回転糸切り	15世紀前半	第56図	PL39
9	10-000039	かわらけ	底径5.3 器高3.2	1/4。回転轆轤整形。底面回転糸切り	15世紀前半	第56図	PL39
10	10-000040	かわらけ	口径(10.5) 器高2.7	1/4。左回転轆轤整形。底面回転糸切り。口縁に圧痕	15世紀前半	第56図	PL40
11	10-000041	かわらけ	底径6.1 器高3.2	破片。左回転轆轤整形。底面回転糸切り	15世紀前半	第56図	PL40
12	10-000042	かわらけ	底径6.4 器高2.3	破片。左回転轆轤整形。底面荒調整	15世紀後半	第56図	PL40
13	10-000043	かわらけ	口径(11) 器高3.1	破片。回転轆轤整形。底面回転糸切り	15世紀前半	第56図	PL40
14	10-000044	白磁皿	口径(9.79) 残高1.8	口縁破片。内外面施釉。外面露胎部吸炭	中国製。14世紀中～15世紀中葉	第56図	PL40
15	10-000045	陶器内耳鍋	底径5.3 器高1.8	1/4。削り出し高台。全面施釉。内面底部に円錐ピン氣	大窯期後～III前期 16世紀後～末	第56図	PL40
16	10-000046	内耳鍋	口径(36) 器高16.3	口縁～体部破片。外面煤付着。口縁屈曲。内外面横位の撫で	15世紀後半	第57図	PL40
17	10-000047	内耳鍋	口径(30) 器高16.4	口縁～体部破片。外面煤付着。口縁屈曲。内外面横位の撫で。耳貼付け後指撫で	15世紀後半	第57図	PL40
18	10-000048	内耳鍋	残存14.3×10.7 厚0.7	口縁～体部破片。外面一部に煤付着。口縁屈曲。内外面横位の撫で	15世紀後半	第57図	PL40
19	10-000049	内耳鍋	残存13.8×9.3 厚0.7	口縁～体部破片。外面煤付着。口縁屈曲。内外面横位の撫で	15世紀後半	第57図	PL40
20	10-000050	内耳鍋	残存10.9×9.7 厚0.7	口縁～体部破片。外面煤・灰付着。内面煤炭。源手で口縁屈曲。内外面横位の撫で。内耳貼り付け指撫で	北西部出土	第57図	PL41
21	10-000051	焼締陶器壺	残存11.2×10.3 厚1.1	口縁部破片。外面煤・内外面一部に自然釉。口縁部形成。雲滑	13世紀中～後期	第57図	PL41
22	10-000052	焼締陶器壺	残存10.1×9.1 厚1.8	口縁破片。口縁やや引き出され、縁得やや広し。外面に自然釉。内面頸部荒撫で他は横位の撫で		第57図	PL41
24	10-000053	焼締陶器壺	底径(16) 残高5.4	腰～底部1/3。底面荒れる。腰部内外面指撫で 荒撫で。底部内面指撫で。底面撫でか		第57図	PL41
25	10-000054	須恵器坏	口径11.5 底径6.3 器高3.6	2/3。酸化焔調整。右回転轆轤整形。底面撫で調整		第57図	PL41
26	10-000055	須恵器坏	底径5.8 残高4.2	1/3。酸化焔調整。器面荒れる。右回転轆轤整形。底面回転糸切り		第57図	PL41
27	10-000056	須恵器坏	口径(11.0) 底径5.7 器高3.2	1/3。回転轆轤整形。底面回転糸切り撫で。	東堀出土	第57図	PL41
28	10-000057	須恵器坏	口径(11.2) 底径6.0 器高2.9	1/4。右回転轆轤整形。底面回転糸切り撫で。	東堀出土	第58図	PL41